
暁の月 宵の太陽

架月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁の月 宵の太陽

【Nコード】

N2952N

【作者名】

架月

【あらすじ】

恋人と別れ、意気消沈していた篠崎未来。

不思議な声に導かれて、気がつくと他の世界から迷い込んでくる異邦人 迷い人の存在が当たり前のものとして認知されている世界に迷い込んでいた。

喚ばれた筈なのにその切っ掛けも忘れた彼女が、目を丸くしながらも少しずつ進む物語。 警告タグは保険です。一応の。

序

「じゃ、次会うときからは友達って事で」

カップに残っていたミルクティーを飲み干して、何でもないように告げた。お気に入りのアッサムの茶葉のはずなのに、ちっとも味が分からない。

その事にあれこれ思う余裕も無く篠崎^{しのさき}未來^{みく}は脇に置いていた鞆を取り、席を立った。

「ばいばい、今度会うときまでにハルよりいい男見つけてくるから、ハルもいい娘^こ見つけなよ」

「未來……」

躊躇いがちの彼の言葉に振り向きそうになる自分を振り払い、カウンターに寄って勘定を済ませ、急ぎ立てられるように小さな喫茶店を後にする。

今は、知った顔のどれとも会いたくなかった。

外は、まさに夏真っ盛り。

太陽はガンガンに元気だし、蝉は今が旬とばかりに鳴き喚いている。コンクリートのひしめくビル街だというのに。

そして極めつけ、アスファルトから立ちのぼる空気。気を抜けば視界が歪みそうなくらい熱い。

そんな中を、帽子も日傘も持たず未來は歩いてきた。飛び出した後で日傘をあのお喫茶店に忘れた事に気付いたが、戻る気にはとてもなれなかった。

全身から止めどなく吹き出す汗は鬱陶しい以外の何物でもなかったが、立ち止まっては負けだとはかりに脇目もふらない。

そんな様は、普通の精神状況から見れば尋常ではない、と取られること間違いなかったが、夏の暑さに周囲にアンテナを張る余裕が

ほとほと低下している者達に、それを気に止める余裕がある筈もない。

目の辺りに垂れてきた汗をぐいつ、と乱暴に拭って、途端に後悔する。手の甲にマスカラの黒い線。ファンデーションか何かが入ったのか、目も痛い。

(目、洗わなきゃ。メイクも……)

ぼんやりと、そんなことを思った。急に立ち止まった未来を、群衆が迷惑そうに避けていく。

目の前に上げていた手に、急にぽつりと冷たい感触。

え、と思う間もなくそれは続けて降ってきて、すぐに土砂降りの雨となった。

最近こんな雨が多い。確かスコールって言うんだっけ。熱帯地方で降るっていう。日本もホント熱帯化しつつあるなあ。

どうでもいい事を、つらつら脳裏に並べ立てる。周りの群衆は急な雨に慌てふためき、屋根を探してざあ、と散っていった。

「あめ」

どこか舌つ足らずに呟く。それが切っ掛けだったのか、堰を切ったように目から涙が溢れ、止まらなくなった。

なにがいけなかったんだろう。

そっけなくしすぎた？

つまらない女と思われた？

優しさに甘えすぎた？

……分からない、わからない、わかんない。

雨のように涙のように、止めどなくこぼれ落ちる断片的な言葉達。しゃくり上げ、雨の中誰も見ていないことを幸いに声を上げて泣き続ける。二十にもなつて自分でも情けないとは思うが、出てくるものは仕方ない。

別に、初めての恋人でも、初めて別れたわけでもない。なのに何故、今回に限つてこんなにも泣けてくるのだろう。

その理由も分からないまま、鼻を小さく鳴らす。叩きつけるような雨音に紛れて、音は自分にも聞こえなかった。

『声』がしたのは、その時だった。

『……あ、……けた』

自分が発した音さえ分からない、雨に閉ざされた空間の中で、その声だけがはつきりと聞こえる。否、その声は頭の中に直接響いているようだった。

『我が呼び声に応えよ』

先程より近く、鮮明になった声。男とも女ともつかぬ中性的なそれは、それでいてどこことなく畏怖の感情を抱かせる。

泣いてぐしゃぐしゃになった顔を上げる。勢いよく降り注いでいる雨が、その時は何故か気にならなかった。

『呼び声に応えよ。そして、忌まわしい輪廻に解放を……』

足下から、陽炎のように立ちのぼった光が未来の体をふわりと包み込む。その光が一瞬にして輝きを増し、そのまま光に吞まれるようにして未来の意識もふつつりと途切れた。

雨が上がった。まるで何かの始まりを告げるかのように。

雨が上がった。この世界から、人一人居なかった事とするように。
雨に打たれていた一人の女の痕跡も、全て流し去って。

*

急に吹き抜けていった風に水の匂いを感じて、青年は顔を上げた。
しかし、その瞳に映る空は晴れ渡っていて、雨が降りそうな気配は
無い。

少し先を行っていた連れに呼ばれて、思い直したように視線を戻
す。

その時、それは降ってきた。

「ッ?！」

そしてここから、物語は始まる。

序（後書き）

誤字脱字、文法上のミスなどありましたら遠慮無く教えて下さい。

拙い作品ですが、楽しんで頂ければ幸いです。

のどかな鳥の鳴き声が未来の覚醒を促す。泣き腫らしたせいか重い瞼をそろそろと上げると、そこには広い世界が。

……とはならなかった。

(え、白い？ なにこれあの世？ ……や、でもこの肌触りは布っぽい。ってことは……あれ？)

寝起きで反応がいつもより鈍い頭をどうにか回しつつ、未来が到った結論は。

(嫌がらせ？)

という、かなりぶっ飛んだ物だった。

その脳裏では、人の顔の上に白い布が掛けられているという光景がぐるぐる回っている。所謂、お葬式などでよく見そうなアレ。

しかもその布を被せられているのが自分という念の入れっぶり。

そんな事をぐるぐる考えていたから、目の上からその布が取り去られていることに気付くのが遅れた。

「やあ、目が覚めたみたいだね」

やんわりとかかった声に、硬直。ギギギ、と音がしそうなくらいぎこちなく未来が視線を上げれば、その先には美形が居た。

男女の性差が曖昧な頃の危うい美しさのまま大人になったような、中性的な美貌。それが、思いの外近くにあった。

首筋で束ねられている髪は見事な銀色。透けるように白い肌はきめ細やかで染み一つ無い。一見冷たくも見える、深い青をした目は優しげな色を宿して未来を見つめていた。

やはり形の整った白い手がそつと未来の目の下をなぞる。優しい仕草で、しかも並々ならぬ美形に触られて、未来はまたも硬直した。しかし、相手はまるでお構いなしに口を開く。

「大分引いてきたね。でも、もう少し冷やしておいた方がいいかな」

そう言って、手にしていた布をまた未来の目の上に乗せた。水気を帯びていて、ひんやりと冷たい。

どうやら布は、泣いて腫れていた瞼を冷やすための物だったようだ。

視界を遮られると、人は眠くなるものらしい。ついさつき起きたばかりだというのに、未来はまたとると眠りに誘われていった。

再び眠りに落ちた少女に、せめてもと被せてあったマントをかけ直し、ユリウス・クーンキューネレートは少し眉を寄せながら振り向く。ちよつとした仕草がことなく品があり、旅人らしい質素な身なりに違和感を添えていた。

最も強い違和感は、その腰に佩かれた意匠の美しい剣だったが。

「なんでそう距離を取るのさ」

その青い瞳の先には、豪華な金髪を肩で切りそろえた青年が近くの木にもたれるようにして立っている。そんな無造作な仕草でさえ様になるほど、彼もまた美しい。ただこちらは、繊細さの中に男だと一目で分かる鋭さも備えていた。

そんな顔に僅かな怒気を孕ませながら、苛々と腕を組む。

「また押し潰されてはかなわんからな」

そう、急に空から振ってきた少女は、彼を間に置く事で地面に叩きつけられる事なく難を逃れたのだ。

一方で彼 アレクシス・ヴァロパイヴァは倒れ込む、顔ごと突っ込む、地面に這いつくばるといった醜態こそ晒しはしなかったが、押し潰されて以降すっかりおかんむりなのである。

「さつさと連れて行けばいいものを」

赤い切れ長の瞳を細めながら、アレクシスは無然と言葉を切った。ユリウスが常に柔らかい表情を湛えているように、アレクシスはあまり表情を動かさないのを基本としているようだ。

瞳に浮かぶ不機嫌そうな色は端整な顔立ちと相まって迫力あるものだったが、ユリウスにはどうということもない。

「まあ、良いじゃない。急いで連れてこい、って言われてるわけでもないんだ。少しくらいのんびりしよう。そうやってせかせかしていると、女の子に嫌われるよ」

「別に好かれたくもない」

にべもない口調にやれやれと肩を竦めると、それ以上は何も言わずにユリウスは小さな寝息を立てて寝入っている少女を見下ろした。その顔には現在、化粧つ気の一つも無い。

彼等が顔を始めて見た時、その惨状に驚いたものだ。

無惨に剥げかけた化粧と、散々泣いたと思しき痛々しい目元と涙の跡。それらが混ざり合って、なんともすごいことになっていた。

見つけた池の水と持ち合わせの石鹸でどうにか化粧を落とすのは良いが、今度は目覚めない。幸い季節は夏で風邪を引く心配は低いのだが、それでも目が覚めないとなれば不安にもなる。

しかも、目が覚めたかと思ったらまた寝た。今度の眠りが自分のせいだとはと思ってもせず、ユリウスは疲れてたのかな、と呑気に考えていた。

世界を渡るのは、体力をひどく使うものらしい。

この世界は成り立ちが影響してか、他の世界と繋がりやすい性質を持っている。要因は必ずしもそればかりではないが、それが大きく関連している事には変わりない。なので、異世界から迷い込んでくる者は少なくないのだが、記録に残っている限り、やって来る者は全員疲れ果てているのが常だった。

なので、ユリウスやアレクシスも二度目の眠りも疲れからだろうと誤解したのだ。

「もつじき日が暮れるぞ」

具合を確かめようと少女の目の上に乗せていた布に手を伸ばした

ユリウスに、アレクシスが淡々と告げた。

「うん、分かってる」

布をどかし、腫れがもう引いていることを確かめる。これなら明日になつて目も開けられない、という事態にはならないだろう。

体温を吸って温くなっている布を渾身の力で絞り、水を絞れるだけ絞り出すと懐にしまい込んで少女を抱き上げようとする。しかしその手は、後ろから伸ばされた手によつて遮られた。

「俺が運ぶ」

「おや珍しい。気になるのかい？」

「馬鹿を言うな。お前がふらふらこの娘を運ぶ、無様な姿の横に立ちたくないだけだ」

そう言いつつ、アレクシスはマントもろとも少女を抱え上げる。

その動き一つ一つにキレがあつて危なげが無く、彼等がただの旅人ではない事を感じさせる。

そしてそのまま、何も言わずに歩き出した。ユリウスも少女の物らしい荷物を抱えると、その横に並んで歩を進める。

身長は、アレクシスの方が頭半分ほど高い。しかし、体型は見た目は二人とも大して変わらない。

傍から見ればどちらが少女を抱えて運ぼうが大して変わらないように思われるが、この二人の間ではがつつり色々固定化されているようだった。

「しかし珍しいね。エアとセレナが俺達直々に迎えに行つてくれるんて。かわいい子だったのは嬉しい誤算だけど。その花が、良さの分からない無粋な男に運ばれてるのは気に食わないけどさ」

「よく噂る口だな。それでよく口が痛くならないものだ」

「女性に惜しむ言葉を、俺は持たないよ。君こそ、少しは女性を褒める言葉を覚えたらどうなの。顔はまあ、悪くないんだから」

繊細な顔立ちに反して、両者とも互いに向ける言葉はかなり辛辣だ。

「お前は多情なその性をどうにかするのだな」

「多情とはご挨拶だな。俺は彼女達を、純粹に尊敬しているだけさ」
会話の内容は下世話だが、両者の間に流れている空気は到って平穩である。言葉そのものも、芯からの嫌味はない。恐らく、こんなやり取りは彼等にとって日常茶飯事なのであろう。

しばらくそんな調子で会話を繰り広げていた二人だが、森も外れに近付いてびたりと口を噤む。

森を出た、ちょうどその所に、馬が二頭首を揃えて待っている。
ユリウスとアレクシスの愛馬だ。

黒毛と赤毛という違いはあるが、まるで対のようにそっくりな二頭。事実、双子馬である。

瞳の色や大きさ、しなやかさと逞しさを感じさせる堂々とした佇まい。額に、星が光った姿を模したような白い毛がある所など判で押したようにそっくりだ。黒馬はシャーエル、赤馬はエルフィスと言う。

そこから少し離れて、男が数人息を切らせて立っていた。彼等が馬を預けた村の間達だ。

「騎士様！ 面目ありやせ……っ、急に、御馬が」

「ああ、良い。そちらこそ、このじゃじゃ馬達の世話は骨が折れるろう。こいつらは気位が高くてね、気にすることは無い」

ユリウスは不機嫌そうに鼻を鳴らしている赤馬の首筋を宥めるように撫でた。アレクシスも少女を抱えたまま、首を伸ばしてきた黒馬を器用に撫でている。

シャーエルは主の腕に抱えられた少女が気になるらしく、しきりに鼻でつついている。育ちが良いので噛みはしない。

「そちらの方が、お探しの迷い人で？」

「ああ、そうだ」

男達の視線が向けられたので、アレクシスが答える。そうして、

少女をそのままシャーエルの背へと押し上げる。ユリウスも手を貸した。

「彼女はまだ目を覚ましそうにない。悪いが、一晩宿を貸してはくれないか？」

「いえいえとんでもない！」

「ええ、陽神子様と月神子様の騎士様方をお泊めできるなど、勿体ないことさあ」

「何も無い村ですが、ゆるりとお休みになってくださいませ」

口々に歓迎する男達に頷いて、ユリウスとアレクシスは馬を引いて歩き出す。

黒馬の背に乗せられた少女

篠崎未来は、未だ自らの置か

れた状況を知らない。

ごろりと寝返りを打った拍子に、目が覚めた。頭の奥が重く、意識がぼんやりしている。寝過ぎただろうか。

なんだか似たような事があつたような、と思いながら未来は目を瞬かす。

(あれ?)

周りが暗い。どういうことだろうと身を起こそうとして、体の節々に走る痛みに思わず悶絶した。ついでに、目もぼつちり覚めた。全くもって意味が分からない。

痛みを堪え、動けるようになるまで待ちながら、未来は自分なりに事情を整理しようと試みる。が、彼女が今置かれている状況と最後に覚えている情景があまりに噛み合わないの、早々に諦めた。なので、現状に対する情報を集めることにする。

暗闇に目が慣れて、周囲がぼんやり分かるようになって観察する。どうやら、建物の中らしい。

少し視線を動かすと、小さな窓があつた。その向こうもやはり暗いが、ちかちかと何かが瞬いている。星だった。

少し身を乗り出してみて、今度は手元にある布の感触に気付き、掴んで振ってみる。布団。

今が夜で、どうやら寝かされていたらしい。と、までは分かったが、一方で謎は深まるばかりだ。

考えに沈もうとした未来の思考を遮つたのは、引き戸を開けるような音と、いきなり差し込んだ光だった。

暗闇に慣れた目が眩んで、小さく呻く。

「ああ、眩しかったかい？」

聞き覚えのある声がした。同時に光が見る見る弱くなる。完全に

消えはしなかったが、目に痛いほどの強さではなくなった。
未来がおそろのおそろ顔を上げれば灯りに照らされて、先程の美形が微笑んでいた。

未来が寝ていた寝台の脇に椅子を引いてきて腰掛けた青年は、薄明かりの中でもやはりその美しさは際立っているように見える。灯りの源は、その椅子の横に置かれたカンテラだ。

「初めまして、私はユリウス・クーンキューネレートと言った。
よろしく」

「は、初めまして。クーンキュー……？」

「ユリウスで良いよ」

舌でも噛んだような表情の未来に、ユリウスは柔らかく助け船を出す。

「う、はい。私は篠崎未来って言います」

「シノザキ・ミク……地球の日本人だね。ミクが名前で良いのかな？」

「はい、そうです……え？」

目を真ん丸にして見つめてくる少女に、ユリウスは少し申し訳なさげな表情になって彼女にとって驚愕の真実を告げる。

「ここは、君達が地球と呼んでいる世界じゃないんだよ。残念ながらね」

「……はえ？」

奇妙な声を上げて、未来が硬直する。

「いえ、だって、言葉とか、え、ええ？」

明らかに混乱している少女に、どう説明するかと考えをまとめていたユリウスの耳に、小さいが自己主張のはっきりした音がした。
「またも硬直し、今度は羞恥に頬を染める少女に、得心する。」

「お腹空いてる？」

「……はい」

「ちょっと待ってね……と」

立ち上がったユリウスが軽く動きを止めた。それにつられて未来も顔を上げると、またも美形。

金髪に、色は定かではないが明るい瞳の美丈夫だ。

浮かんでいる表情は愛想に欠けるが、童話の王子様、という形容がよく似合う。

「ああ、食事を持ってきてくれたのかい。気が回らなかった、ありがとう」

「よく言う」

近付いてくる彼の手には、王子様然とした容姿には全く相応しくない物。食事が載せられたトレイが持たれていた。それを未来に押しやり、出て行こうとする彼をユリウスが裾を掴んで引き留める。「君にもいてもらわなきゃ」

彼は表情に乏しいまま、柔らかい微笑を浮かべたままのユリウスを見下ろしていたが、やがて小さなため息と共に裾を掴む手を外して向き直った。そこで彼の瞳が赤い事に気付く。

「あの、初めまして。篠崎未来です」

穏やかに接されるとどうも緊張するが、愛想がないと張り合おうとして逆に冷静になる質の未来は真っ直ぐ青年と顔を合わせて挨拶する。

「アレクシス・ヴァロパイヴァだ」

口だけが動いているような印象の喋り方だ。表情筋に液体窒素を吹っつけたみたい、とかなり失礼なことを考える。

「アレクシスさんですね、よろしく」

更に舌を噛みそうな姓が出てきたので早々に覚えるのを放棄し、名を呼んでにつこり笑いかければ、赤い目がゆっくりと瞬いた。

「……変な女だな」

ビシッ、と笑顔のまま未来が固まる。

「もう用は済んだらう、俺はもう行く。シノザキ、今夜は精々休むことだ」

言いたいことだけ言って、アレクシスは今度こそ部屋を出て行った。

「いきなりでびっくりしただろう。あれで悪気はないんだよ」

「はあ、そうですか」

「あ、その顔は信じてないね。本当だよ。あいつが最初から本音を見せる人間は貴重なんだ。嫌いな人間にはすぐ外面良いからね」

外面が良いのか、となるとあの液体窒素で固めたような顔がお上品に笑うのだろうか、それはそれで見てみたい。怖い物見たさ的な意味で。

内心絶賛毒舌期間になりつつ、未来はカンテラの明かりを強めているユリウスの横顔を見るとも無しに見ていた。

楽しげな顔はやはり繊細に整っていて、文句の付け所がない。同じ美形でも表情一つでえらい違いだ。

強くなった明かりに照らされた食事は、野菜らしき物が入ったスープと固そうな黒パン。

内心うわあ、と思いつながらいただきます、と手を合わせる。長年培ってきた習慣というのは、環境が変わっても自然と出る。

パンに手を伸ばせば、思ったより柔らかい。ちよっと拍子抜けしながら未来はそれを千切って口に入れた。

今度はスープを口に運ぶ。こつてりした味付けに慣れた舌にはあっさりしすぎているが、スープにもしみ出している野菜の旨みは驚くべき発見だった。

未来が食事に専念している間、ユリウスは黙って立ち上がって窓に寄り、外を眺めていた。

食事を終えてごちそうさま、と手を合わせ、感じた視線に顔を上げると、青い瞳が興味深そうに未来を見ていた。

「なんだい？ その、変わった仕草は」

「え？」

「ほら、手を合わせて何かごいごいよ」と

パチツ、と手を合わせてみせた青年に、ああ、と頷く。

「食べる前に手を合わせたのがいただきます、食べた後がごちそうさま、って意味なんです。食べ物や、作ってくれた人に対しての感謝の気持ちなんですよ」

「いただきます、ごちそうさま……ああ、そういうことが」

思い出したように合わせていた手を叩いて頷いた。

「ありがとう、一つ疑問が解消されたよ。眠くはないかい？」

「はい、全然」

「じゃあ、話の続きと行こうか」

窓から離れて、元の椅子に戻ってくる。別に空気が変わったわけではないが、未来は緊張して背筋をピンと伸ばした。

「えっと、この世界が地球じゃないってことは話したね」

「……はい」

その言葉に未来の表情が沈む。それを知ってか知らずか、ユリウスは静かに言葉を続けた。

「この世界は、名をレファレンディア。そして、この国はエルドラドと言う。このエルドラドという地名だけどね、地球にも同じ言葉があるんだそう。そちらの意味は黄金郷を意味するそうだけど。知ってるかい？」

「いいえ」

「そうか」

別段がっかりした様子もなく、青年は言葉を続ける。

「この世界はね、異世界から迷い込んだ人々によって創造されたとされている。そのせいか、未だに他の世界から迷い込んでくる人が多いんだ。君もその一人、って事」

「うん」

「でね、君にとって慰めになるかは分からないけど、君のいた地球からの迷い人もいるよ。会う機会もあると思う」

黙って頷いた彼女に、少し口調を変えた。言い聞かせるような、それでいて拒否も否定も許されない冷徹な響き。

「この世界は、気紛れのように他の世界と繋がってはまた閉じる。いつどこかで、どんな世界と繋がるかも分からない。君は……恐らく帰れない」

俯いたままの彼女の肩がびくりと震え、その手がきつく布団を握りしめる。

「……今日は、これでお終いにしよう。ごめんね、君を元の世界に帰す手段を、俺達は知らない」

その言葉に未来は答えなかった。布団を握りしめた手が、微かに震えている。数回、肩で大きく息をした。

「ごめんなさい、ちょっと冷静になれそうにないので、一人にしてください」

「……分かった」

ユリウスは再び立ち上がってカンテラを取り上げると、椅子の上に置いた。そしてまた窓に寄って、そっと閉める。そのまま戸口に向かって、戸に手をかけたとき、ほんの少し振り向いた。

「お休み、ミクさん」

未来は何も言わなかった。ユリウスが静かに部屋を出て行く。

戸が閉まって、未来はまた一人になった。

ぼんやりと室内を照らす灯りの中、未来は布団を巻き込んで膝を抱えていた。

君を元の世界に帰す手段を、俺達は知らない。

ユリウスに言われた言葉が、延々と頭の中で渦巻いている。知らず知らずの内に唇を咬み、二の腕を掴む指が肌に食い込んでいたが、気付いた様子もなく彼女はどこか遠くをずっと見ていた。

ここが、日本ではないことは分かっていた。

何しろ最初に目にした相手が相手だ。

一瞬コスプレと思わなかったわけではないが、それにしても色も容貌もじっくり馴染みすぎていた。

日本語が通じるのも、無意識の内に誤魔化していた。聞こえている言葉と口の動きが全く違っている事にも気付かない振りをしていった。

異世界だと告げられたときは、まだ耐えられた。無意識の内に理解していたから。

しかし……………。

帰れない。と言われて、限界だった。

恋人と、ハルと別れて、確かにいつになく傷心してはいたが、だからと言ってそれまでの生活を捨てたいなど思ったわけではない。馬鹿をした時は叱るが、それ以外の時はいつも明るい母、その母の影に隠れて、家庭内権力は無いに等しいが優しい父、少し年が離

れているせいで子供扱いがいつまでも抜けないが、よく自分を気に掛けてくれる兄。

ごく普通の、否、十分幸せな家庭で育った。十分すぎるほど家族に恵まれた。

友人も、多いと言えるほどではないが、それなりにいる。ある話題については家族以上に率直に言い合える親友だっている。

その家族に、友人に、会えない。

その事が、ただただ痛かった。

地球に帰れない、という事実以上に。

少ししか会話をしていないが、あのユリウスと名乗った青年が嘘を吐いているとは思えなかった。人を見る目はあるつもりだ。

最後の言葉には、確かに自分への労りが感じられた。

だからこそ。

「なんで？」

ぼつりと呟いた言葉は、震えてこそはいなかったが掠れて小さかった。

なんでなんでなんでよ！

なんで急に異世界なのよ！

なんで私なのよ！

もうやだ……帰りたい。

家に帰りたい。

家に帰って……、

まとまらない心。ガチガチと歯が鳴る。寒い。

まさに不安に押し潰されそうになったとき、部屋の空気が変わった。優しく、温かい。

『すまない』

誰も居ないはずの部屋に突然その声が広がった。同時に、未来の頭をそつと撫でる感覚。全く違うのに、どこか父を思わせる。

『ごめんなさい』

また違う声。柔らかく抱きしめられている、優しい感触。自分の知るそれより壊れ物に触れるようだが、母を彷彿とさせる。

『我等ではお前を元いた世界には帰してやれぬ』

『あの方の気紛れで連れてこられたあなたを、あなた達を、私達は助けてあげられない』

あの時のように、頭に響いているような声。

でも、あの時とは違う声。

もっと親しげで、もっと私に近いような。

あの時？

あの時って、どの時だっけ？

忘れてはいけけないような気がするのに、思い出せない。

…………… なんて、なんだろう？

朦朧とする意識の中で、未来はただ肉親を思い出させる温もりに縋る。それしか、頼るものが無いとでも言うかのように。

「今だけ。明日からは、元気、なるから……………」

それだけうわごとのように呟いて、ことりと眠りに落ちた。

次に目が覚めた時には、もう、今の事は覚えていないだろう。姿なき者は、彼等は、そういった存在だった。

『良いのだろうか』

『分からない。でも、女というのは存外強かなものよ。それに』

娘をそつと寝台に寝かせて、彼女は意味ありげに笑った。そんな様子に、彼は諦め混じりにため息を吐く。

『お前と一緒にされてはこの娘が気の毒に思えるが。……………まあ、良

い。折れそうなときは』

『ええ。分かっているわ、愛しき片割れ。それが私達が、すでに亡き者がせめて出来る事ですもの』

続きを促すように留められた言葉に滑らかに答えて、彼女はまた小さく笑った。カンテラの中で揺れる、炎とは違う明かりが奇妙に揺らぐ。

『それしか出来ないのが、口惜しくもあるけれど』

『任せるしかあるまいよ、あれらに。不安ではあるがな』

『……ええ』

そして彼等の気配は、現れた時と同じように唐突に立ち消える。

光も落とされて、再び闇に溶けた室内。その中で、聞き落としそうなほど小さな寝息だけが響いていた。

部屋を用意する、と申し出た村人達の好意を丁寧に断り、村長の家の広間の隅に一夜の寝床を確保した二人の騎士は、思い思いの体勢を取っていた。明かりはない。未来の所へ置いてきたからだ。

それでも、人並み以上に夜目が利く彼等は物にぶつからず動く事が出来た。

「では、一刻も早く王都に帰った方が良い、という事だね」

ユリウスが声も低く尋ねる。それに答えたのはアレクシスではなく、高く澄んだ女性の声。

>ええ。出来るだけ早く保護を、と仰ってらしたそうよ。理由は、教えて下さらなかつたそうだけど<

「エアは？」

さりげなさを装った問いには、微かだが焦燥が感じられる。

>それだけ告げて、また眠ってしまったわ。無理もないけど<

「そう……」

片膝を抱えて黙り込んでしまったユリウスに、アレクシスが億劫

げに口を開いた。

「明日村を発つてメスサに向かう。王都到着は、明後日で良いな？」
> ええ、迷い人が女の子である以上、それが時間的な最善ね。じゃあ、二人ともよろしく。私は、エアの看病に戻るわく

「ああ……、頼んだ」

一言で終わらせようしたが、俯いているらしいユリウスに視線をやり、一言付け加える。それでもそっけない事には変わらないのだが、アレクシスにしては上出来だ。

声は少しおかしそうな笑いを残して、プツリと途切れる。

携帯毛布を広げ、アレクシスは寝る準備を黙々と整えていたが体勢の変わらないユリウスに、無感動に声を掛ける。

「気を揉んだところで、エアの肩代わりはしてやれないぞ」

「ツ、分かってる」

大きくなりそうだった声は咄嗟に抑えて小さくなったが、興奮しているのかいつもより声が高い。

「分かってるよ、初めから。そんな事……」

再び黙ったユリウスに、アレクシスはその横に置かれていた毛布をバサリと頭から被せた。

「……さっさと寝ろ」

青年は自分用の毛布を被って横になる。小さく耳朵を叩いた、ごめん、の言葉は聞こえなかった振りをして、目を閉じた。

未来が再び気がつく、ほんの少し開いている窓から明かりが差し込んでいた。

「……なんか、寝過ぎな気がする」

指折り数えてみて、がっくり肩を落とす。寝汚い子だと思われるらどうしよう。

「あれ、そういえば」

最後に折った指を戻してぴこぴこさせながら、首を傾げた。

「良い夢見たような気がするんだけど、あれ？ なんだっけ？」

家族の夢だったのかも知れない。とても、温かかった。そのせいか、昨夜はとても不安定だった自覚があるのに今朝は驚くほど気分爽快だ。

「ま、いつか」

深く考えることはせず窓に近付いて、作りを確かめる。窓を覆っている木の板を押し上げて、備え付けの棒で固定する仕組みのようだ。窓ガラスはなかった。

恐る恐る板を押しを見ると、筋程度だった光が勢いよく入り込んでくる。光を見ないようにしつつ、つかい棒をすると未来は一息ついた。

また次第に目が慣れてきて、開いている窓から少し外を覗いてみる。しかし、ざっと見た限りではめばしい物はない。少し乗り出して見てみようとした未来の背に、声が掛けられたのはその時だった。「そもも乗り出すと、落ちてしまうよ」

ふわりと肩に乗せられた手。驚いて顔を上げると、弾みで木の板に頭をぶつけてしまった。

「大丈夫？」

「あ……平気です」

頭を押さえつつ、そろそろと首を引っ込め、未来は再びユリウス

と顔を合わせる。

「おはようございます、ユリウスさん。……あの、昨日はすみませんでした」

「おはよう、ミクさん。こちらこそ、配慮が足らなかったね。もう少し慎重に行くべきだった。ごめんね」

「いいえ、どうせ分かることです。遅いか早いかの違いしかないなら、早くて良かった」

誠実に見つめてくる美貌になんだか照れてしまって俯く。そこで、腕にはめられている飾りに気付いた。

金色と銀色の金属が薄い輪を作り、ゆるく交差した状態で固定されている腕輪。交差している二箇所には、時おかず色を変える不思議な石がはめ込まれており、更にその周りには何かの模様が刻まれていた。

未来の視線の先にある物に気付いて、ユリウスが説明する。

「それは言葉が通じるために必要な物なんだ。えっと、なんて言ったらかな。君達の言葉だと」

「翻訳機？」

「そう、それ。ホンヤクキ。外したらお互いに言葉分からなくなるから、気を付けてね」

実際に体験するのが一番と外される。

全く言葉の通じない外国の気分を味わった。

再び腕輪を腕に通して、会話が通じることに明らかに安堵した未来に、ユリウスが慰めるように頭を撫でる。

「そつだ、忘れるところだった。朝ご飯持ってきたんだよ、食べよう」

寝台の上には二人分のトレイに載せられた朝食が置かれていた。

昨日と同じ黒パンを半分に割って溶けかけのチーズを乗せた物、やはり昨日と同じ野菜のスープ、その脇に木製の小皿があつて、ベークンのような薄切り肉が数枚。スモモのような色と大きさの実が

二個転がっている。

そんな食事を、二人向き合って食べる。

ユリウスがあまりに上品に食べるので未来が食事も途中で思わず見とれていると、薄切り肉を木製のスプーンで器用に切って口に入れていた青年が視線を上げた。

「美味しくない？」

「はい?! ……じゃなくて、美味しいです。えと、ユリウスさんって綺麗な食べ方するなあ、って」

「ああ」

スープの最後の一口を音もなく啜って、スモモどきの薄皮を慣れた手付きで剥ぎ始めた。上品なだけではなく、食べるのも早い。

「一応こんなでも騎士でね、礼儀作法は叩き込まれてるんだ」

「騎士……へえ、道理で」

「驚かないの？」

「ユリウスさんみたいな人は王子か騎士と相場が決まっていますからよくある小説の中では、と内心で付け加える。

「ふうん？」

納得しきっていないような顔で相槌を打って、ユリウスは食事を終えた。どこからとも無く取り出した布で手を拭いている。どうやらあの実は種なしのようだ。

食べる速さを早めて未来も朝食を終えると、片付けに行こうとユリウスが立ち上がる。ちなみにスモモどきは、イチジクに似た食感と味だった。「種なし」なわけだ。

「あの、一緒に行っても良いですか？」

驚いたように青い目が丸くなった。そうすると落ち着いた印象と違って変わって幼く見える。

(結構年上だと思ってたけど、案外年近いのかも)

「良いのかい？」

「はい、もう大丈夫です。……多分」

大分落ち着いた会話を交わしながら二人は部屋の外に出た。少し

耳を澄ますと、どこかからか活気のある声が聞こえていた。

「おや、おはようございますだ騎士様」

台所のあるらしい所から出てきた、日に焼けて恰幅の良い女性が朗らかに挨拶する。

「おはよう、先に台所を借りてしまった。すまなかつたな」

「いーええ、構いません。おんや、迷い人の方も目を覚まされたいんどすなあ。家に運び込まれてきたときゃあよお眠つとりやりした」
明け透けな物言いだ、その言葉に悪意はない。

「あ、あの、おはようございます」

「こちら親切に。おはようございます」

おずおずと頭を下げて未来が挨拶すると、女性も面白そうに礼を返した。

少し世間話をしてから彼女は用があるから、と踵を返して外へ出て行く。

二人が出たところは、未来が居た部屋の数倍は大きかった。これといって物が無いのも大きいのかも知れない。

壁には色とりどりのキルトが飾られていて、明るい雰囲気だ。

ユリウスが台所の方へと向かうので、慌てて追いかけてようとする、開いている扉の方から誰か入ってくる。

あの、アレクシスと名乗った青年だった。その腰には昨夜は持っていたいなかった長剣を二振り下げている。

未来は挨拶すべきか一瞬迷ったが、無表情でまた外へ出て行ったので声を掛ける暇もなかった。

食器を手際よく片付けて（主にユリウスが）台所を出ると、ユリウスが部屋の隅の方に置かれていた革製の鞆を取ってくる。その横には剣が一振り立て掛けられていたが、そちらの方には触れなかった。

鞆の中から折りたたまれた羊皮紙を取り出し、未来にも見えるよう床に広げる。地図、それも限定された地域の割と精密な物だった。「これはエルドラド全域の地図だ。俺達が今居るのは、この辺り」説明していきながら、未来の方からは向かって右の端っこを指す。方位表示が地球と同じものならば、西と言うことになるか。

「今日中にここから一番近い都市、メスサに着きたい。今が七時の半くらいだから十時くらいに出れば夕方には着く。そしてそこから王都・シツクザールに向けて発ちたいと思ってるんだ。急で悪いけど」

説明しながらその白い指は流れるように動き、中央の一番大きく書かれた字の所で止まった。

「それは良いですけど、この、メスサ？ ですか、ここから王都までは結構ありますよね」

「ああ、普通に行ったら半月は見なくちゃいけないね。山脈とか迂回する必要があるし」

山を現しているらしい模様があるところに指を滑らす。

「でも心配は要らないよ。メスサにまで行けば転移陣があるから魔法ですか?!」

これこそ異世界の醍醐味とばかりに未来は目をきらきらさせた。

「そうだね、魔法だ。地球人は術を持たないのにそういうのに詳しい人間が多いね。まあ、何でも簡単に出来る便利な物ではないけど」「ユリウスさんは、魔法使えるんですか?」

「まあ、少しだけ」

照れたように答えると、指先をすい、と持ち上げた。

「まずは火」

指先に小さな火の玉が現れる。赤やオレンジに瞬き、そして段々小さくなる。実際に起こっている事象から推測は出来たが、この時未来はユリウスがなんと言ったのか分かっていない。

「風」

次に生じたのは小さな竜巻。くるくる回りながら風を引き起こし

ている。

「土」

風が掻き消える瞬間に、残っていた小さな黒い実。宙に浮いたままのそれが芽を出し、白い可憐な花を咲かせる。

「水」

花が突然しおれていく。やがて花びらの奥からまた種が出てきて、ばかりと割れた。中から水が溢れて、小さな滝のように落ちていく。不思議なことにその水は、床に届く前に蒸発したように消えていった。

「まあ、簡単に出来るのはこんな感じ。この世界には大雑把に分けて十の属性があるんだけど、さっき上げた四つは魔法を使う上では基本中の基本かな」

「へええ、私も魔法使えるようになれますか？」

「んー、どうだろう。俺達の世界の人間は、誰でも蠟燭に火を点けるくらいは出来るんだけど、他の世界の人間はまちまちなんだ。故郷では強力な魔法使いでも、こっちではさっぱり、って事もあるし、逆に強くなりすぎた例もある」

俺自体はどちらとも面識はないからきちんとした事は言えないけど、と付け加えたユリウスに、未来は少し首を傾げて考えていたが、やがて問う。

「各々の素質、って事ですか？」

「少し極端だけど、そうなるかな。あと訓練と相性」

シックザールに着いたら使えるかどうか調べてみようか、と言われて、少しだけ嬉しそうに未来は頷いた。

「えれえお急ぎですな。なんもない村ですが、ゆっくりしていただくすつてもよろしいんですが」

村の主立った者が数名、三人を見送りに来ていた。その内一人は、先程未来とユリウスが出会った女性。村長の奥方だとのことだった。「事情が変わったのだ、その気持ちだけ受け取っておこう。世話になつたな」

「世話になつた。お前達の村に、陽の神と月の神が微笑むよう」
穏やかに微笑んだユリウスに続いて、相変わらず無表情だが険はない口調でアレクシスが短く祝福を述べる。

「道中お気をつけて。貴方方の旅路に、風の神の祝福がありますように」

村長らしい初老の男性が、訛りはあるが丁寧に祝福を返した。

「あの、ベツ…寝床を貸してくれてありがとうございます」

未来が礼をすると、女性が明け透けに笑った。

「良いつて事さね。気を付けてお行き」

「はい」

未来が頷くと、ユリウスとアレクシスがそれぞれ愛馬の轡を取って歩き出した。

村人に見送られて、三人は村の外まで出る。そこで彼等を帰すと、さて、とユリウスが表情を変えた。

「ミクさんにはアレクシスと一緒に乗って貰うことになる」

「……………は？」

未来はぼかんとした。

アレクシスは予測していた事なのか、表情一つ変えずに腰に下げていた剣を二振りとも外して鞍に取り付けている。かと思ったら、鞍の後ろに取り付けていた鞆の中から何故か毛布を取り出していた。

「ユリウスさんとじゃ、駄目、ですか？」

「俺は良いんだけど、こいつがねえ」

苦笑しながらユリウスが赤馬を見やる。気位の高そうな深緑色の瞳がちらり、と未来を見たかと思うと逸れていった。

まるで、路傍の石でも見るような気の無さ。一方でユリウスには愛おしげに顔を擦り寄せている。扱いの差が丸分かりだ。

「今は大人しいけど、結構な荒馬だね。俺ともう一人しか乗せてくれないんだ。それ以外は本当に振り落とされるよ。ちなみにもう一人は、アレクシスじゃない」

だから諦めて、と言われてしまったのは、あまり強く出ることを避ける日本人だ。引き下がる他なかった。

「……………よろしくお願いします」

分かりやすく嫌だとは顔に出していないが、明らかに硬い表情で未来はアレクシスと向かい合う。ユリウスとは種類が違う、冷たいとも形容できる美貌は無表情で未来を見下ろしていたが、徐に腕を伸ばして彼女を抱き上げた。

「ひゃっ！」

悲鳴も抵抗も何のその、そのまま細い体を黒馬の上に押し上げてしまう。そして、続けて自分も跨った。

「鞍の前に乗せた毛布に体を乗せる。馬の腹は蹴るな、少し力を抜け」

「む、無理……………」

「無理でもやれ。シャーエルが緊張する」

抑揚の乏しい声にさらに身を強張らせる未来を見かねたか、赤馬エルフィスを操って横についたユリウスが声をかけてくる。

「シャーエルはエルフィスよりは気性が穏やかだから、触ってもそんなに怒らないよ。触ってみたら？ 動物と触れ合って落ち着く療法もあると言うし」

そう言われて、未来は恐る恐るシャーエルの首に手を伸ばす。

黒々とした鬣はふさふさとしていて、太陽と干し草の匂いがした。その下で、筋肉が小刻みに震えているのが分かる。緊張しているのか、それは今の未来では到底推し量れないことだった。どちらにせよ、ぎゅっ、と抱きついても大きな動きは見せなかったため、取りあえずは許容してくれたのだろう。

やがて、驚くほど安定した心地で身を起こすと、アレクシスがあやすようにシャーエルの首筋を軽く叩いて、歩かせ始める。ユリウスも待ちかねたようにエルフィスを歩かせた。

メスサまでへの、短く長い旅が始まった。

「……、……、……」

最初の方はどうともなかったが、生まれて初めての乗馬体験で未来は次第に体、特に腰が痛くなってきた。

しかもその痛みに徐々に麻痺も混ざってきて、今度は動けなくなる。

意地を張って伸ばしていた背も、我慢しきれなくなってアレクシスの胸にもたれかかる結果となっていた。恥ずかしいとかそういった事を言っけいられる余裕も無い。

「ちよつと、休みた……」

「駄目だ」

「うん、こればかりはね。今休んだら、日が暮れる前にメスサに着けない」

それらの言葉に、半泣きになりつつ未来は堪え忍ぶ事となった。

体をふるふるさせている未来を見下ろしていたアレクシスが、不意に手綱を放す。自分を制している力が無くなっても、シャーエル

は少し早めの並足を崩さない。

取り付けられている鞆の一方を器用に漁り、小さな革の袋を取り出した。そしてそれを、未来に押し付ける。

「え？」

アレクシスは再び手綱を取って、疑問の声には答えなかった。

しきりに首を傾げながら未来は袋を開ける。すると、指先にひんやりした空気が触れた。

「ひゃっ！」

一瞬腰の痛みを忘れて悲鳴を上げると、やや神経質な動きでシャーエルとエルフィスが耳を動かし、ユリウスがおかしそうに笑う。

「ああ、氷水晶だね」

またも馬を寄せてきて身を乗り出すと、未来の手にある袋の中から小さな球体を取り出して口に入れた。

「ひょうずいしょう？」

「そこにあるだけで冷気を発する水晶だよ。まんまの名称だよね。一つだけ形が違うはずだから、それは口に入れちゃ駄目だよ。凍傷なるよ。……また変わった物作ったなあ」

後半は完全に独り言で、ユリウスがまた離れていく。

おっかなびつくり袋に再び手を差し入れ、中から丸い物を取り出した。濃い琥珀色をしているそれを、しばらく胡散臭そうに見ていたが、やがて決意したように口に放り込む。

冷たいそれを少し舐めてみると、どうやら飴のようだった。しかも、口の中で転がしていると味がどんどん変わっていく。

最初は蜂蜜、次はレモン、葡萄、苺……。夢中でなめている内に、腰の痛みの事はすっかり頭から抜けていた。

太陽が天頂を少し過ぎた頃、昼食と休憩を取るのにちょうど良さそうな木陰を見つけて、二人は馬の足をそちらに向ける。

歩みが止まると、アレクシスが先にシャーエルから降りて、今に

も転げ落ちそうだった未来を降ろした。

「あ、ありがとう」

礼にも何も言わないまま、彼は無言で木陰の方に行くよう手を払う。

そっけない仕草ではあるが、決して怒っているわけではない事は、長いようで短い乗馬中に分かっていた。

未来の体をさり気なく支えたり、ずり落ちそうになる前に体勢を立て直させたり。

乗馬で腰が痛くなってきた彼女に目敏く気付いて、もたれ掛かっても良い、と切り出したのはアレクシスだった。

あまり表情が動かないし、口数も少ないので誤解されやすいのだろうが、面倒見の良い性格らしい。飴のおかげで、乗馬中は結構腰の痛みも忘れていた。

顔を合わせた直後の悪印象は驚くほどあっさり溶けて、良い人だと思い始めている。現金だとは思うが、あながち間違っている気もしない。

(こういうのを、ギャップ萌えとか言うのかな)

そんな事を考えつつ、ガクガクゴワゴワになっている腰を押さえよるよるしながら未来は生い茂った草の中に倒れ込む。

草の汁で服が汚れる、と思いはしたがそれを行動にする気力も残っていない。

(そっいえば、着てた服はどうなったんだろう)

今朝起きたときには、もう見知らぬ寝着らしき服を着ていた。

そして朝食と、簡単な地理の説明の後差し出されたのが、今の服だ。袖も裾も長いが、動きやすそうな男装。ユリウスの持ち服だそうだ。

肩より長い、数日前に染めたばかりで茶色い髪も、邪魔っけなので貰った紐でまとめている。

「腰が痛いならさするうか？ それとも、湿布薬の方が良い？」

「……湿布」

いくら紳士的とは言え、昨日会ったばかりの男に腰をさすられるのは勘弁してもらいたい。

「分かった」

そうして、ユリウスが持ってきた湿布は、当然ながら未来の想像と違っていた。

真ん中辺りにベトツとした緑色の液体が塗りがたくられた、細長い布。それを手にニコニコと近付いてくる笑顔がやけに恐い。

「い、良いです！ 自分でやります！」

腰を出して、と言われてうっかり出しそうになり、我に返って慌てる彼女に、青年は少しばかり残念そうにしていたが、素直に布を差し出す。

「見ないでくださいね！」

顔を赤くしてムキになるので、あまりからかうのも気の毒だと思ったのか、ユリウスは同意して、エルフィスの元へと戻った。

木の陰で人に見られていないことを確かめてから、未来は色々試行錯誤し、どうにか一番痛む所に湿布薬の塗られた部分を貼りつける。感触は彼女のよく知る湿布そのものだったので少し安心した。

余った布をずり落ちないようにぎゅっ、と体の前で結んで具合を確かめ、服装を整える。

首筋で束ねた髪を確かめ、二人の所へ戻ると、昼食の準備が整っていた。

甘くないビスケットに、世話になった村で貰ったというチーズと干し果物。アルコール度数の低い果実酒の水割り。

食事自体はすぐに済んだが、腰の痛い未来を気遣ってか、それなりに長い休憩が取られる。

その間にも飴をなめてみた。一個一個少しずつ味が違うので、なめる度に新しい発見がある。ユリウスとアレクシスにも勧めてみたら、ユリウスは笑顔で、アレクシスは無表情で受け取った。

太陽が天の最も高い所から西に進路を変えようとする頃、三人も再び馬上の人となり、少し速度を速めてメスサを目指した。

メスサに到着したのは、陽がもう少しで地平線の向こうに消えようとしている時だった。

ユリウスもアレクシスも目深くフードを下ろして街に入り、騎乗したまま人の多い通りを進んでいく。未来も鞆の中から取り出された帽子を被らされた。乗馬する時のような、前にひさしがついている物だ。季節は夏だが、日本ほど高温でも多湿でもないので、被り物が無くても結構どうにかなるようだった。

人を引っかける事もなく悠然と歩を進める二頭の馬。

それだけでも目を引くのに、乗っている人間が全員顔を隠すような形をしているので余計に目立つ。

それを気にも止めず彼等は敷石で舗装された道を進み、ある建物の前で止まった。

石造りの建物が建ち並ぶ街の中でも特に重々しい雰囲気だ。

大きなその扉の前には二人、人を威圧しない程度の鎧を着た男が立っている。

彼等の前で馬を下りると、ユリウスが顔が見える程度にフードを上げた。

「今夜泊まりたいのだけど」

その言葉は絶大だった。

叫び出しこそはしなかったが、男は二人とも子供のように目を輝かせて、一人が扉を開けて中に入っていく。

やがて別の男が顔を出し、シャーエルとエルフィスをユリウス達より預かってどこかへ連れて行った。

そうしている内に、先程扉を開けた男が顔を出して、三人を招き入れる。

建物の中は、華美ではないがよく掃除されていて綺麗だった。入ってすぐに広大なホールがあり、奥に二階へ続く大階段が見える。ホールのそこかしこに体格のしっかりした男達が居て、ユリウス達の方を見て色めき立ちながら敬礼をしていた。

フードを外し、二人が目立つ容貌を晒すとその波はますます大きくなる。

先導する男も頬を上気させていて、興奮していることが知れた。

ホールを通り抜けて作りのしつかりした廊下を進み、やがてある扉の前まで来ると、男は少し上ずった声で言う。

「隊長はこちらでお待ちです。では、私は持ち場に戻ります」

「ご苦労」

男が去ると、ユリウスが扉を軽く叩く。すぐにその向こうから、「入れ」と声が返った。

三人が入室すると部屋の奥に、男が一人立っているのが見える。年の頃は五十に届くか届かないか。濃い茶色の髪の毛の所々に白い物が混じっているが、その体軀は堂々として隙がない。

来ているオリーブ色の服は、何らかの制服のように見えた。恐らく軍服だろう。入ってきたとき敬礼をしていた男達が着ていた物に似ている。

「ご無沙汰しています、教官」

ユリウスが微笑んだ。驚くことに、アレクシスの表情も明らかにいつもより柔らかい。否、表情は僅かに全体がゆるめられているかと感じられる程度だが、雰囲気がそう感じさせるのか。

「もう教官は止してくれ」

男は苦笑しながら礼を施した。そういう表情をしていると、厳つい顔が打って変わって柔らかい印象になる。

「そうは言われましても、教官は教官ですから」

笑みを浮かべてはいるが、頑と譲る様子はないようだ。いかにも親しげな言葉を交わしていたが、やがて教官と呼ばれた男が未来の

方を見る。

「そちらが、迷い人のお嬢さんか」

「はい、ミク・シノザキ。地球からの人ですね」

「ミクさんか。私は、このネスサを守っているアロン・ベックマンと言う。この二人が騎士見習いだった時、教官をしていた者だ」

「あ、初めまして」

ペコリと礼をすると、彼はますます相好を崩す。

「むさ苦しい所だが、まあ一晩ゆっくり休んでいって欲しい」

「はい、ありがとうございます……いたた」

「ああ、気が利かないで。馬は不慣れかな？ ブルーノ、このお嬢さんを部屋に」

「はい」

脇に控えていた少年が明るく答えて、未来を連れて部屋を出て行く。

二人が出て行くと、三人の表情は親しさはそのまま、公的な色を帯びた。

「連絡はこちらにも飛んでいるでしょうが、明日転移陣で王都に発ちます。使用許可を」

「許可する。後で書類に認めて持たせよう」

その言葉に肯いてから、ユリウスは少し俯いた。

「何もかも急ですみません」

「構わんさ、少しくらいは忙しい方が良い」

そうやって豪快に笑い、アロンはずっと沈黙していたアレクシスに視線をやる。その瞳には不肖の、しかし愛すべき弟子を見るような柔らかい光が浮かんでいた。

「しばらく会わない内にまた口が減ったな」

「そうでもないです」

言葉少なに否定してから、また口を開く。

「それでも、ましにはなったのです。お分かりでしょうに」

「……ああ、そうだな」

少し痛みを含んだ声でアーロンは答え、目線一つ分ほど背の高いアレクシスの頭を乱暴に撫でる。かつての日々と同じように。

「お前達を選んだことだ。あれこれ言う気は無いが、あまり無理はしすぎんようにな」

ユリウスにも手を伸ばし、くしゃりと掻き回す。

照れたようにはにかむ彼等に笑い返して、アーロンは最も優秀でありながら最も手を焼かせた二人の平安を、この国の守護神である陽の神と月の神に祈った。

「今日はこちらでお休みください」

二階に上がって、左右に広がる廊下を左に曲がり、突き当たりで足を止めたブルースはドアを示した。

「食事は、先程の階段を下りて左に行けば食堂があります」

その物言いや動作にはどことなく品があつて、良いところのお坊ちゃんなのかもしれない。

「どうなさいますか？ 少し早いですが、夕食になさいますか？」

「うーん……少し休んでからにする」

そろそろ腰とか限界だ。

「分かりました。クーンキューネレート卿とヴァロパイヴァ卿にお伝えしておきますね」

記憶に薄い単語が出てきて未来は面食らったが、曖昧に頷く。頷いてから、それらがユリウスとアレクシスの姓であることを思い出した。

「あら、坊やも隅に置けないわね。女の子連れなんて」

部屋に入ろうとしたところで、色っぽい女性の声があった。ブルースが小さく嫌そうな声を上げる。

足早に近付いてきた彼女は、魅惑的な女性らしい体付きに反して男性的で颯爽とした所作をしていた。

この建物内にいる人物達が纏うオリーブ色ではなく濡れたようにしっとりとした光る漆黒の軍服を着ている事から、この所属ではないのだろう。立襟や袖の先、裾に銀糸で何らかの刺繍が縫い取られている。意匠も見事だ。

「違いますよ、こちらの方は客人で」

「初めまして、異世界の方。ティシア・ヘッジです」

少年の言葉を遮って、女性にはこやかに挨拶した。そしてその表情のまま、ブルースの額を軽く弾く。

「私を誰だと思っていて？ 坊や」

からかわれたことに気付いたらしい少年は顔を赤くして未来に向き直ると、わなわなと口を開いた。

「この人は絶対！ 絶対信頼しちゃ駄目ですよ！ 人を玩具にするのを生き甲斐にしてるような人なんですから！」

玩具にされた過去があるのか、顔を赤くしながら青ざめるという器用な顔色でまくしたてる。それに未来が反応するより早く、ティシアと名乗った女性が獲物を見つけた肉食獣さながらに口を歪めた。「そんな悲しいことを言わないで。泣いちゃうわよ、叔母さん」

「恥ずかしがりもしないで泣いちゃうとか言わないでください、叔母上！」

二人の語尾に付いた言葉に、思わず未来は両者を見比べる。

髪も目の色も全く違うが、ゆるく癖のある髪、意志の強さを現すようにきりりとした眉、やや大きめだが形の良い鼻、少しぽってりとした唇……。

そんな細かいところが、他人の空似にしてはよく似ていた。

叔母と甥、の関係に密かに納得していたら、いつの間にかじつ、と見つめていた宵闇の瞳にびっくりするほど狼狽える。

「……あの？」

おろおろとする未来を映したまま、先程までの明朗さが嘘のように静謐な光を宿した夜の瞳が、一度だけゆっくりと瞬いた。

「あなたを、歓迎します」

落ち着いた色の紅が刷かれた唇が静かに言葉を紡いだかと思うと、未来の目に黄色がかった赤が広がる。ゆっくりと収まっていくそれが、あまりに近い距離だったので目の前の女性の髪である事に最初は気付かなかった。

香水だろうか、仄かな良い匂いが未来の鼻腔をくすぐる。軽く回された腕が、一瞬縋るように強くなった。

何が何だか分からないままポカンとしている彼女から身を離すと、ティシアはなんと愉しそうに笑った。

「そんな可愛い顔してたら、食べちゃうわよ」
わざと音を立ててその頬に口付け一つ。

硬直した未来。

おかしそうに笑うティシア。

ブルースの絶叫。

いっぺんに騒がしくなった。

騒ぎを聞きつけてやって来たユリウスも巻き込んで大きくなった騒ぎが収束する頃には、原因が何だったのか、すっかりうやむやになっっていた。

そして同時に、未来の体から乗馬による疲労や痛みがすっかり消えている不思議も、見事に失念された。

「ティシア、なんで君がここにいるの」

葡萄茶色に染め上げられた上着の汚れを払いながら問うたユリウスにティシアは、月神殿騎士団副隊長と名乗った彼女はにこやかに答える。

「私の方が暇だったからですよ、隊長。太陽神殿の副隊長殿の方が暇なら、そちらが来たでしょう」

全く悪びれない様子に、呆れ混じりでユリウスはため息を吐いた。「ミクさん、俺の部下が迷惑かけたね。これからも迷惑かけてくと思うけど、まあ、よろしくしてあげて」

「あら、ひどい物言い」

からから笑いながら気安くティシアはユリウスの首に腕を回した。回されている方も、邪魔そうにはしているが積極的に振り払う事もない。自然体で会話を続けていた。

日本人女性としては平均レベルの未来より拳一つ分は背の高い彼女とユリウスは、似合いの恋人同士にも見える。

(……あれ?)

胸に何か引つかかったように思った。うっかり見落としそうなほど、微かな感覚。

地球ではそれなりにその方面での経験もこなした未来なので、原因に心当たりはあった。ありすぎた。

(いや、ないないない。あつたとしても気のせい。そう、気のせい) 厄介事の臭いが、そこはかとなくどこか思いつきりしそうな相手は真つ平御免だ。ハルと別れたときの痛手も、未だきちんと向き合わないまま放置されているのに。

小説等では異世界召喚物に限らず、主人公とイイ感じになる相手は大抵特大級の厄介事を抱えているものだ。別にイイ感じになるとは限らないが、厄介事はできれば避けたいのが、未来の偽らざる本心だった。

本人から明言されてこそいないが、ティシアに隊長と呼ばれている以上、ユリウスは月神殿騎士団という部隊の隊長で間違いないだろう。名前からして仰々しい。

ということ、同等の雰囲気醸し出しているアレクシスは太陽神殿騎士団隊長という事になるのか。金と銀、なんともぴつたりとはまったものだ。

「改めて紹介を。月神殿騎士団を預かっているユリウス・クーンキ
ユーネレート。月神子の騎士とも呼ばれている。まあ、俺は月神子
直属の護衛も兼ねているね」

「ツキミコ？ 護衛？」

鸚鵡返した彼女に、青年は穏やかに説明する。

「この国を守護する二柱の神、陽の神と月の神の力を宿す者の事だ
よ。俺の主は月の力を宿すから、月神子。月の神子とも言っね。そ
の者と神殿を護りその意志を全うするのが、神殿騎士団の使命。そ
の辺りはおいおい説明していくよ」

駄目押しのように未来には意味不明の単語と、ユリウスの身上に
厄介事が上乘せされた。

アレクシスは自分に用意された部屋で一息いれてから、夕食を取ろうと廊下に出た。隣に宛がわれたユリウスの部屋の戸の前に立つて、常人より鋭敏な感覚で室内に誰も居ない事を悟る。

表情を動かさないまま向き直った彼は、ふと何か聞こえたように顔を上げた。数秒そうしていたが直ぐに歩き出すと外へ繋がる扉のある、最初に通ったホールに出る。

そしてそのまま階段を上って、左右に伸びる廊下から足を一度も止めずに左側を選んだ。

廊下を折れると同時に見えた、見覚えのある姿が四つ一番奥でたむろしているのに密かに眉を寄せてから、ほとんど気配もなく歩み寄る。

「騒がしい」

よく通る声に、四人はお喋りを止めた。彼が来るのを分かっていたユリウスとティシアは笑って、気付かなかつたらしい未来とブルースは驚いて、アレクシスを迎える。

「やけに精素が落ち着きないと思えば、お前達か」

独り言めいた呟きをもらして、その赤い瞳が血色の良いティシアの顔を見据えた。

「王都は平和で何よりだな。息災で結構な事だ」

「有難うございます」

明らかに皮肉と分かる言葉を投げられて、それを意に介さず笑む。掴み所のない相手を、やはり感情の読めない顔で一撫ですると、アレクシスは視線を他の三人に向けた。

「夕食にしようと思うがどうする？」

ブルースが口火を切る。

「私はまだ仕事が残っていますので、失礼いたします」

四人に敬礼をし、未来には同胞を見つけたような親しみが滲んだ

笑みを浮かべると、少年は踵を巡らせて歩き去っていった。

「じゃあ、俺も食事にしようかな。ミクさんはどうする？ 腰痛いだろう。部屋で休んでるかい？ 良ければ持つて行くけど」

「へっ？ うん、じゃあ……あれ？」

言いかけて、自分の体の異変に気付く。腰をさすってみて、目を瞬かす。

「……痛くない」

呆然と呟いた彼女に、青と赤の瞳が何も知らぬげに笑っている朝と夜の色彩を纏った女に向かった。人差し指を唇に寄せたその姿に、説明する気は無いらしい、と諦め混じりで意識を切り替える。

「まあ、痛くないならそれは良いけど。で、どうしようか夕食」

「あ、行きます」

「了解」

未来を連れ、ユリウスとアレクシスは廊下を歩き出した。ティシアも、当たり前前の顔をしてついて来る。

そんな状態で彼等は階段を下りて、食堂に入った。

食堂は結構な人数がこった返していたが、未来達が入室すると途端にしん、と静まり返る。ほぼ全ての視線が食い入るように彼等を見つめていた。

「ああ、食事を続けて」

上品で洗練された笑みを浮かべてユリウスが言う。たったそれだけで、ばらばらとしたさざめきと共に視線は外れていき、次第に元の賑やかさを取り戻していく。

彼等の立場が、ますます未来には不明だ。

「アレクシス、席を確保しておいて。ティシア、食事を取りに行くよ」

そう言って、ユリウスはティシアを連れて、長テーブルの間を颯爽と歩いていった。

離れていく彼等を見送りもせず、アレクシスが開いている席を求めて歩き出したので、未来も慌ててその後を追う。

部屋の隅の、他より人が少ないテーブルの前で足を止めると、アレクシスは未来を一番端に座らせて、自身はその隣にすべり込んだ。乗馬の時とはまた違う距離の近さに思わず挙動不審になったが、ちつとも動揺していない相手に頭が冷えてくる。

彼女が落ち着きを取り戻したのを感じたか、姿勢良く座ったままアレクシスが小声で話しかけてきた。

「あの女の前ではあまり無防備になるな。毒が強いぞ」

「苦手、なんですか？」

「苦手ではない。気に食わないだけだ」

そう答えたアレクシスの声は、不貞腐れているようだった。表情も心なしに忌々しげである。

未来と顔を合わせてこの方、表情にも声にもほとんど感情というもの露わにできなかった彼が初めて見せた、「生きた」顔。アークンを前にして見せた柔らかい色は対象外だ。

すぐに元の無表情に戻ってしまったが、感情を表に出した事で今までとは違う心境でじつ、と未来は観察してしまう。表情を変えないまま彼がその顔を背けさせるまで、そう時間は掛からなかった。

「……何やってるの、君達」

片や必死、片や鉄面皮。必死に手を伸ばそうとしている未来と、それを表情一つ動かさず封じ込めているアレクシス。

何がどうしてそうなった、と突っ込みたくなるような光景の前に、ユリウスが呆れた。斜め後ろに立っているティシアは肩を震わせて笑いを堪えている。

周りの者達は、見てはいけないものを見てしまったとばかりに、一度見たきり不自然なほど食事から顔を上げない。

「……あ」

未来の全身から力が抜ける。するとアレクシスも押さえていた手

を下ろして、何事もなかったように二人を見上げた。

「違う表情の俺を見たかったそうだ」

「あらまあ、仲の良い事」

「本当、いつの間になんか仲良くなったの？」

「なつてないです！」

テイシアに調子を合わせながら、さり気なくユリウスは未来の向かいの席を取る。冗談じゃない、とでも言いたげな彼女をまあまあと宥めながら、両手に持っていたトレイの片方をその前に置いた。

「ほらほら、早く食べないと冷めるよ。このパンはスープに浸して食べるのが良いかもね」

まるきり子供扱いだ。それを少し不服に思いつつ、「いただきます」と手を合わせて食事に手を付ける。

夕食は、村で食べた物と大差ないと思われる黒パンにチーズ、野菜がゴロゴロ入っているクリームスープと、魚を丸ごと一匹バター焼きにした物。そして昼に口にした果実酒の水割りが隅に置かれている。

四人はしばらく無言で食事と向き合っていたが、全員が大体半分ほどを胃に収めたところで、ユリウスが話を切り出した。

「明日、転移陣で王都に発つけど、その前に言つとかなきゃいけない事がある」

少し硬い物言いに、知らず未来の背筋が伸びる。

「この国は王と神殿の力がほぼ等しい。百年くらい前までは王の権力の方が強かったんだけど、色々あって神殿の力が増した。で、それが今に続いている」

そこまで言うてから水割りを一口飲んで、言葉が続ける。

「一応王と神殿の仲は友好に保たれてるけど、いつ決裂してもおかしくない危ない一面もあるんだ。これだけは覚えていて欲しい。王都に居て、どちらかの陣営に身を置くことになる以上、避けられない問題だからね」

少しだけ言いにくそうだった。寂しげで悲しげな瞳が、食堂にい

る人々を一瞥する。アレクシスも、常の無表情に陰りがかったようだった。

「私みたいに異世界から来た人たちはみんな神殿側に所属してるんですか？」

「いや、王側の騎士団に保護された人も多いよ。割合的にはこっちの方が上だけど」

「そうですか……」

ユリウスが黙り込んでパンを千切ったので、ティシアが言葉を引き継いだ。

「貴女には、王都に着いたら神子様方と陛下に会ってもらうことになるわ」

「……はえっ?!」

素っ頓狂な声を上げた彼女に、張り詰めていた空気が堪えきれず、といった風に緩む。

「そうだ、まずはあの方達に会わなければね。全てはそこからだ」
おかしそうに笑いながら、ユリウスがクリームスープを掬った。

「神子様と陛下……って、偉い人じゃないですか！ 無理無理無理、絶対へましちゃいます！」

「そうは言ってもねえ、それが決まりだから。例外はないのよ」
大人が子供に言い含めるような言葉に反してその手は行儀悪く、

白く濁った魚の目をほじくり出している。そのまま放置されるのかと思いきや、ぱくりと飲み込んでしまった。

なんだか見てはいけないものを見てしまった気分になって視線を泳がすと、ユリウスが水割りの入っていた器をトレイに戻しているところだった。

「今代はどちらの良い人だから、心配ないよ。陛下の周辺には、注意した方が良くかもしれないけど」

「前半と後半に温度差があるぞ」

やはりもう食べ終わっていたアレクシスがユリウスからトレイを受け取って、同じ食器を重ねる。

「まあ個人としては悪い人じゃないのよ。その点は断言して良いわ。それよりねえ、一緒にお風呂入らない？ お姉さんが色々教えてあげる」

「ッ?!」

婀娜あなっぽい目付きで誘うティシアに身の危険を感じた未来だが、即座に助け船が出された。

「却下。君と一緒に入ったら、ミクさんが減る」

「あらでも、色々教えてあげなければならぬこともあるでしょう?」

「君の場合はその教えるが度を過ぎるんだよ。それくらいなら入浴前に二人で服を着たまま入って説明した方が色々安全だ。ミクさん、ちよつと早いけど案内するよ。今ならまだ誰も居ないはずだ。入浴自体は後になるけどね」

早口に言つて、ユリウスが立ち上がる。未来はチーズの残りを水割りでちまちま食べていたが、青年が急に立つて珍しく急かすのでそれらを残し、席を立った。

食堂を後にする二人を楽しげに見送りながら、ティシアは二人分の食器を手に立とうとしたアレクシスに話しかける。

「もたもたしてたら、取られてしまふかもしれませんよ?」

赤い瞳はガラスのように無機質な光を宿したまま夜の瞳を見下ろした。

「何が言いたいかわ目見当がつかんな」

いつもと同じ無表情、いつもと同じ抑揚の無さ。しかし、トレイを持つ手に一瞬力がこもったことを、ティシアの瞳は見逃しはしなかった。

けれど真実を映した瞳を瞼の奥に隠し、何食わぬ顔で礼をする。

喧噪の中で、流れ離れていく微かな気配。それを感じながら、女は笑った。ひどく哀しい笑いだった。

「へえ、じゃあこの風呂の造りは君達の世界で言うセントウという風呂屋に似てるんだね」

「はい」

心中で多分、と語尾に付ける。何しろ現代日本では、普通に生活する上で銭湯に頼る機会自体が少ない。風呂が狭いアパート等ならまだしも、郊外の一戸建て住宅に住んでいる人間なら、尚更その機会は減るだろう。

そんな未来なので、銭湯に関しての知識はテレビで見て得た以上の物はない。しかも旅行先で泊まった温泉ともごっちゃになっていて、その記憶は甚だ怪しい。

言葉少なな彼女にユリウスは入浴時の注意を手際よく説明して、記憶にあるものところか違つか、と尋ねた。

湯気で少し煙っている屋内を見渡して、伏せて置かれている桶や小さな椅子の横にある柄付きブラシが目止まる。掃除道具にしては小さいし、緩く弧を描いている柄は掃除には向かないだろう。

「あれは？」

「ああ、体を洗うときに使うブラシだよ」

その側に寄って、石鹸らしい薄茶色の塊を取り上げる。

「これを泡立てて、擦るんだ。それが嫌なら布を使っても良い。確か部屋に、おあつらえ向きの布が常備されてるはずだ」

折っていた膝を上げると、ユリウスは落ちかけていた袖をまくり上げた。

「他に何か気になることは？」

「取りあえずは無いです」

「そう」

まくり上げたばかりの袖を戻しつつ青年は脱衣所に繋がる籐製の扉の前に立つ。手を伸ばそうとして、その動きが不自然に止まった。不思議に思っただけで未来が声を掛けようとする素早く振り返って、

唇に人差し指を当ててちらつ、と扉の方を見やった。どうやら、招かれざる客が脱衣所に潜んでいるらしい。

こういった仕草は世界が違っても共通しているのか、と妙な感慨を抱きつつ彼女が頷くのを見ると、ユリウスは扉を一気に押し開いた。

激しく揺れる扉の向こうで、男達の悲鳴と鈍い音が続け様に聞こえる。扉の揺れが収まった後もしばらくそれは続いたが、やがて急に静かになった。

「もう良いよ」

いつもの落ち着いた声だったので、少し警戒しつつ未来も扉を押し脱衣所に入る。

そこには

「死屍累々」

まさにそんな形容が相応しい惨状が広がっていた。

思わず呟いてしまった未来の言葉は聞こえなかったのか、やけに爽やかな笑顔でユリウスは顔を上げる。

脱衣所自体にはほとんど損害を出さないという離れ業の成れの果てを披露しながら、青年は廊下へ通じる扉へ向かった。そこら中に倒れているオリーブ色の軍服を、情け容赦なく踏みつけにしながら、せめてもの幸いは素足だったことだが、靴を履いていたとしても、きつと容赦なく踏んだことだろう。下手したら流血沙汰だ。

律儀に軍服を避けているため未来が手間取っていると、最短距離で扉に到っていたユリウスは既に靴入れから取り出したブーツを履いている。

「踏んでも良いよ。覗きをした奴なんて」

「え、ええっ?!」

結局、行く先に転がる全員を踏むことなく未来が靴を履けた頃に

は、外で気まずそうな顔をした男が数人おり、バツの悪い顔同士付
き合わすことと相成った（約一名除外）

浴場を後にすると、未来はユリウスに連れられて廊下を進んでいく。目の前に行く背がやがてある部屋の前で止まって、中に入った。

やがて掌に収まる程度の大きさの箱を持って出てくると、その蓋を開ける。出てきたのはカードの束。

「見てみて」

渡されて、扇形に広げてみる。小さく彼女は息を呑んだ。

「見覚えがあると思うのだけど。遊戯用の札プレイングカードだったっけ？」

「している……遊んでいるカード？ 私達の国ではトランプって言うんです。でも、うん。大体同じですね。スート……絵柄のマークはちょっと違いますけど」

手の中で広げていたカードを一つに戻し、返した。

「良かった。これからしばらくこれで遊戯しようかと思うんだけど、どう？ 暇つぶしに」

「そうですね。部屋に居ても多分暇ですし」

「よし、そうと決まれば」

嬉しそうに顔を綻ばせて、ユリウスが隣の部屋の扉を叩く。

出てきたのはアレクシスだ。

「風呂が空くまで結構時間あるからさ、ちょっと付き合ってよ。どうせまだ入らないだろう？」

柔らかいが、どこことなく有無を言わせない言葉に、アレクシスは軽く眉を顰めるも少し待っている、と言い置いて一旦首を引き込めた。さして間を置かずに出てきた彼の手には、緑色の瓶が握られている。

それに貼られた装飾的な札に、ユリウスが目を輝かせた。

「気が利くじゃないか」

「少し冷えが足りないが、文句は言うなよ」

そう言い捨てて廊下を足早に歩く彼を二人も追いかけて、そのまま食堂へ入った。

食堂は、先程より人が減って、閑散としている。点々と何人かで集まって雑談をしたりしているようだ。

扉から少し離れた席に陣取ると、アレクシスが瓶を置いてどこかに行く。机の上に置かれた緑色は少し汗をかいていた。

やがて戻ってきた彼の手には、ゴブレットが三つ持たれている。一つだけ別に持っていたゴブレットが未来の前に置かれた。それは、ほんのり茶色がかった透明な液体で満たされている。

明らかに怪しい物を見る目つきな未来に、瓶のコルクを小型のナイフで器用に抜いたアレクシスが淡々と言った。

「林檎だ」

「へ？」

顔を上げた彼女に、それ以上言う気は無いのか無視しつつ瓶の中身を残り二つのゴブレットに注ぎ入れる。そしてその一方をユリウスの方に押しやった。

未来は、恐る恐るその液体を口に含む。そして、アレクシスの言葉に偽りがなかったことを確かめた。

「……美味しいデス」

疑った自分を恥じ入るようにその声は小さい。

「さて、何しようか」

やや微妙になった空気を払拭するように、ユリウスはいつもより少し明るい声を上げた。

「いつもの良いだろう」

「了解。取りあえず一回やってみるから、知らない遊戯だったら教えてね。説明するから」

「はい」

カードの束から一枚を抜いて箱の上に置く。道化師を模したらし

い絵が描かれている。ジョーカーのようだ。

残ったカードを切り混ぜ、五枚ずつ配るとテーブルの真ん中に残りを置いた。アレクシスが銅貨を一枚取り出し、弾いて手の甲と掌で受け止める。

「表」

「裏」

ゆっくりと手を上げた。何かの建物が浮き上がっている面　裏だ。

「俺が先手」

笑みを浮かべたまま、ユリウスが二枚カードを捨てて二枚引いた。アレクシスは無表情で三枚を捨て、山札から同数取る。

それをしばらく続けて、ユリウスがカードを晒した。

「剣と薔薇の十を二枚、女王を三枚」

続けてアレクシスがカードを出す。キングが三枚とジョーカーが一枚、赤い宝石を模した四が一枚だけ仲間はずれた。

「俺の勝ちだな」

「あーあ」

ユリウスはがっかりするでもなくカードを寄せ集め、揃えた。

役の呼び方は違うが、どうやらポーカーのようだ。

「どの組み合わせが最強なの？」

「ん？　ちよつと待って」

揃えたカードの中から五枚選んで、未来の前に広げた。十から一の連番が、黒い剣の模様で揃えられて並んでいる。

そして今度はAを三枚とジョーカーを一枚出して、その上に置く。剣の一を元ある場所から少し持ち上げて、二つの組の中間に位置する所で止めた。

「これが最強。道化を含まない場合は、最初に作った方だけね」

「最弱が、役無し？」

「そうなるね。知っている遊戯かな？」

「多分ね」

答えて、カードの残りを受け取ると、どンドン組み合わせを作っていく。

やがて手を止め、顔を上げた。

軽く説明するとユリウスが頷いたので、どうやら地球でやるポーカーとルールは大体同じようだ。

「なら、大丈夫」

そう言っただカードを掻き集めると、ユリウスに戻した。

ゴブレットに何杯めかのお代わりを注ぎ終えてから、青年はまたカードを切って今度は三人に配った。

しばらくは、平穩だった。ゆるーく、勝った負けたを繰り返して三回戦が終わる。

発端は、林檎ジュースを飲み終えた未来だった。

「その瓶の中身なんですか？」

それが、火種。

「赤ワインだよ。ミクさんにはまだちよつと早いかな」

「え？ 私もう成人してますけど。あ、でもこっちの世界に成人と
かって概念あるのかな？」

「……………」

その言葉に、二人の動きが止まった。

「……………年、聞いてもいい？」

「二十歳ですけど」

「えっ?!」

火種暴発。声を上げたのはユリウスだけだが、アレクシスも目を丸くして驚いていることが分かる。

もつと下に思われていたことが明らかかな反応。

東洋人は幼く見られる。

その定義は、異世界でもバツチリ真理らしかった。

幾つに見られていたのかは恐くて聞けず、今度は未来の方から切り出す。

「ユリウスさんとアレクシスさんは、幾つなんですか？」

それが、暴発の第二波を招くとは思ってもよらずに。

「十九だよ」

「二十一」

「……………え？」

今度は未来が硬直する番だった。硬直が解けた後も、水揚げされた魚よろしく口をぱくぱくさせている。

今、なんと言ったのか。

聞いた言葉を、いやになるくらい緩慢に咀嚼し、理解する。

人を指さしちゃいけません、という母の教えもその時は記憶の彼方に吹き飛ばして、びしいっ、と指を突きつけた。

「年下!？」

色んな感情がまぜこぜになった絶叫に、指さされたユリウスが、肩をすくめて苦笑する。先程の動揺も綺麗に隠したその姿は、やはり年下には見えなかった。

8 (後書き)

まさかの年下でしたよ、っていう(笑)

次から次章に入りますが、リアルがバタバタしているのだからちょっと今までより更新が遅れます。

部屋の中に侵入してきたティシアに心臓に悪い起こされ方をされ、服を渡されたのが六時頃。

夏なのでもう外は明るいのだが、眠いものは眠い。全くもって寝た気がしない重い頭を肩の上に危うく乗つけたまま、未来は渡された服に袖を通した。

フリルあしらいのブラウスト、薄紅色の裾が足首の上まで来る長いスカート。その上から丈の長いガウンのような上着を着て、ウエストを帯のような物でしめる。少し時間が要るが、一人で着られる物だった。薄手で、想像していたよりは暑くない。

胸の辺りが緩いのが、女としてコンプレックスを刺激される。

着替え終わって一息ついたところで、扉がノックされた。

長い裾に少し手間取りながら未来が扉を開けると、ティシアが立っている。

昨日は簡単にくくる程度だった髪を丁寧にまとめ上げ、鈍い輝きを宿す簪で留めていた。挨拶した後で帯を締め直し、満足そうに笑う。

「うん、女の子らしくなったわね。本当はお化粧もしたいんだけど、私の今の手持ちだと違和感バリバリだから、王都まではすっぴんで我慢して」

そう言う唇は、昨日と同じ色の紅が乗せられている。女性らしい匂い立つような容貌に落ち着きを添える上品な色は、確かに未来が塗るには少し早いように思われた。

「さてじゃあ、下に行くわよ」

慣れない衣装に戸惑っている未来に合わせて歩調を緩め、階段のところは手を貸してくれる。

エスコートするには頼りなげに見える、手入れの行き届いた手は、

思いの外しつかりとしていた。むしろ、女性らしいきめ細やかさでさり気なくフォローしてくれる。

昨日とつい先程感じた危険がまるで嘘のように、ティシアは物静かだった。

手を引かれて階段を降りると、手すりにもたれかかっていたユリウスとアレクシスが出迎える。ホールは、やけに静かだった。

「お、おはよう」

「おはよう、その服よく似合ってるよ」

昨日、年下という衝撃の事実が明らかになったユリウスだが、これと言つて態度を変える事はなかった。お互いに今さらという気もしていたし、彼に敬語を使われるとむず痒くなったのだ。

その代わり、未来もユリウスに敬語を使うことは無しとされた。

実年齢はどうあれ、未来より落ち着いて見えるユリウスなので最初は断つたのだが、宥めすかさず、最後には言質まで取られて押し通され、砕けた物言いをするのと約束させられたのだ。

アレクシスは無言だったが、軽く視線を寄越したので無視したわけではないらしい。

「なんだか静かだね」

「ああ、大部分は朝練に出ているからね。しばらく帰ってこないよ」
そんな彼等は、始めて見る服装をしていた。

ユリウスはティシアが着ている物とほとんど同じ漆黒の軍装。ただ、銀刺繍の量が明らかに多く裾が少し長い。

アレクシスは、対のように純白の軍服をまとっていた。鮮やかな天の色を映したような襟、裾、袖を金色に近い色合いの縁飾りが飾っている。

まるで昼と夜が人の形を模して現れたような、浮世離れして見える姿だった。際立った彼等の容貌と、軍服とは思えない意匠の美しさが示し合わせたように馴染んでいるせいかも知れない。

よく面倒を見てくれた相手が刹那、ひどく遠い存在に思える。
その時だった。

黒衣をまとう腕が、手すり越しにしなやかに伸ばされる。少し古傷の残る白い指が、束ねられていない茶色く染められた髪の一房を掬った。

「髪、結ってあげようか。と言っても、難しいことは今は出来ないけど」

変わらない柔らかな響きの声が、未来の耳をくすぐる。見上げてくる青い瞳が、最初に目にしたときと全く変わらないことを認めて、彼女はその言葉に頷く代わりに目を伏せて階段を降りきった。

鼻歌交じりで未来の前髪を後ろの髪と一緒に器用に編み込み、結い上げていくユリウスの手付きは、見事の一言に尽きる。

取り出した革紐で編み込んだ髪を一つにまとめると、それを頭の上の方でくるくると丸め、まずお団子の形状にする。髪が編み込みであるので、ただのお団子よりも綺麗な感じだ。そしてそのまとめ髪を、完全には結んでいなかった革紐の余りで固定し、乱れない事を確かめる。

そしてユリウスは、懐から飾り紐を取り出した。青い両端に紐で精密な花の模様を作り、美しい光沢の真珠で留めている、見事な物だ。

それをひどく感情の入り組んだ瞳で見下ろしてから、青年は一瞬にしてその情動を振り落とす。自分がまとめた髪を崩さないよう、無骨な革紐を覆い隠すようにしてお団子髪にゆるく巻き付け、その頂で結んだ。

「はい出来た。うん、やっぱりよく似合う」

衣擦れの音と共に立ち上がると、ユリウスは未来の隣をすり抜けて微笑みかける。

「ありがとう」

照れたように笑った彼女にユリウスは小さな包みを差し出された。開けて見ると、薄く切った黒パンに薄切りの玉葱と胡瓜、ハムを挟んだサンドイッチだ。少し酸味がある匂いのバターが塗られている。驚いて顔を上げた未来に、悪戯っぽくユリウスが笑う。

「お腹空くだる。王都でもきちんとした朝食は出るだろうけど、ちよつと歩くからね」

そう言われて、事実小腹も空いていたので有り難くもらう事にす。ちよつとカラシが利きすぎていて涙目になった。

そうしている所に、きつちりと軍服を身につけたアーロンがやってくる。そのすぐ後ろには、穏やかそうな容貌のゆつたりとしたロブを着た男性が従っていた。

互いに挨拶を交わして、早々にアーロンが本題を切り出す。

「向こうも準備は整っている。後は貴殿らが出向くだけだ」

「では、すぐにでもお願いします。よろしく頼みます、トゥーリス殿」

「はい」

トゥーリスと呼ばれた男性がやはり穏やかな声で答えて、彼等は外に進路を取った。

扉を開けて外に出ると、街はまだ静かである。どこかで朝市をやっているらしく、遠くで人々のざわめきが聞こえる以外はまるで生き物という生き物が死に絶えたようだ。

石段を下りると、馬丁らしき男が二人、シャーエルとエルフィスを連れてやって来る。

二頭の主人である二人に手綱を渡すと、彼等は扉の守りに就いている男達と共に礼をして、彼等が去りゆくまで下げた頭を上げずにいた。

人に出くわすこともなく一行は角を幾度か曲がり、やがてちよつ

とした広場に出た。その広場の向こうには高い塀がそびえていて、そこがこの街の端であることを無言の内に知らしめる。

その広場の中央には、四阿あすまやに似た建物が建っていた。ただ、四阿にしては背が高く、座れそうな椅子もなく、数人の男達が周囲に立つてどこことなく物々しい雰囲気であったが。

彼等が近付くと、男達は最敬礼して出迎える。

ユリウスが進み出た。何か紙のような物を取り出す。

「太陽神殿騎士団隊長及び月神殿騎士団隊長、並びに副隊長が迷い人を連れ王都に帰還する。これが許可証だ」

紙を男達が全員確認した。

続いてトゥーリスが歩み出る。

すると建物の中からまだ年若い、というよりも幼い少年が出てきて何か話していたが、やがて会釈してトゥーリスを通す。その後、ユリウス達も続いた。

顔が映りそうなほど磨き上げられた黒い床には、白い線で精緻で且つ複雑な陣が描かれている。その大きさはかなりのもので、床をほぼ埋め尽くしていた。トゥーリスは僅かな隙間に立っている。

「では皆様、よろしいですか？」

彼が問うと、いくつもの肯定といなきが上がった。トゥーリスそれにこりと笑うと、手を宙に掲げた。

ふわりと唐突に風が吹き、陣が光を放つ。一番外側に位置する円から強い光が立ち上って、中に居る者と外の者を隔てた。

ぼやけた中で、ユリウスとアレクシスがアーロンに向かって手を振ると、メスサの街を守護する騎士を束ねる男は力強く笑い返す。

陣が一際強い光を放って周りの目を眩ます。そして光が収まると、陣の中にはもう誰もいなかった。

「行ってしまわれましたね」

転移陣から離れ戻ってきた腹心に、アーロンは生返事を返す。

「いかなさいました？」

「あの娘……」

言いかけて、いや、と頭を振った。

「気にしていても我等にはどうとも出来ぬ事だ」

ほろ苦い笑みで唇をつり上げて、男は年を感じさせぬ拳措で歩き出す。

「隊長は本当に、要らぬ心労を背負い込みたがる方ですね。そう言った方は、長生きできますまい」

穏やかで丁寧な口調の割に、言ってる内容は上官に対するものにしては遠慮という字がない。

「好きで背負い込んでいる。早死にされたくないのならば、精々身を粉にすることだ」

「やれやれ、とんだ上官の下に付いてしまったものだ。禿げたらどうしてくれます」

振り向かないまま通りを進んでいく上官を追いかけながら、トウリスはツルリと頭を撫でた。

そこには、ふさふさと量の多い髪が満遍なく生えている。

答えは、簡潔を極めた。

「禿げろ」

「ならば道連れにして差し上げます。ひどい禿げ方をなさって部下に影で笑われるとよろしい」

二人とも全くもって大人げない。

彼等を尊敬している部下達にはとても聞かせられない事を、さすがに声をひそめて話しながら、彼等は駐屯所に戻っていく。時刻はもうすぐ七時。

通りにはちらほら人の姿が見え始めていた。

1 (後書き)

長々とお待たせしてすみませんでした。
いよいよ新章突入です。

光で何も見えないまま強い浮遊感があって、体が少し揺れた。未来が悲鳴じみた声を上げ、慣れない服装でふらついたのを誰かの腕が引き寄せる。

その揺れはすぐに収まって、光が薄れ浮遊感も嘘のように消えて無くなった。

「お疲れさまでした」

知らない声に未来が顔を上げると、つい先ほどまでのメスサの景色はどこにも見受けられない。

自分の踏みしめている地が黒い床ではなく白い大理石に変わっている事にも気付かない様子で、未来は離れた所で佇んでいる男を見やった。トウーリスが着ていた物に似ているが、より色味の暗いワンピースを着て、暗い髪色と相まって影のような印象がある。しかし、暗色に三方を覆われた顔は驚くほど白かった。

「いつもの場所に、馬車を呼んであります」

アレクシスの無表情とはまた違う、どこか人形じみた無機質さを感じさせる能面。淡々として機械じみた声。

「ええ、ありがとうございます」

ユリウスの声が、未来のすぐ上で聞こえる。はっ、と見上げると驚くほど近くに銀と青に彩られた美貌があった。

顔に朱を上らせ、思わず離れようとする彼女を強い力で押さえ込んだまま、ユリウスは洗練された、それ故真意の掴ませない笑みを零す。

笑みを向けられた男は、髪と服装の色合いのせいか陰鬱な風情があるが、よく見れば華やかで品のある目鼻立ちをしていた。作りの上品さで言えば、ユリウスやアレクシスよりも優れているかもしれない。

ただ、本人が意図してそうしているのかは不明だが雰囲気希薄

で、存在の華麗さという点では一步譲るようだ。

しばらくユリウスと視線をぶつけていたが、やがて彼は何も言わないままローブを翻して何処へかと去る。

その気配が感じられなくなったところで、青年は未来を腕から解放した。

疲れたようにため息を吐いてからユリウスは未来達を促し、男が去った方向とは逆の方に足を踏み出す。

「……どうかした？」

場を去ろうとして、呆然と立ち竦んでいる未来にユリウスが不思議そうな顔をする。アレクシスとティシアは先に行っていた。

顔が赤いので風邪でも引きかけているのだろうか、と思いつつ額に手を伸ばす。熱はない。

「大丈夫、調子でも悪い？」

「……え？」

夢から覚めたようにどこかおぼつかない様子で未来はユリウスの顔を見た。一瞬のち、その顔に羞恥の色が広がる。

「転移魔法は人によっては酔う事もあるんだけど、酔った？」

「……大丈夫です」

情けない顔を見せないよう俯きがちに答えて、未来はさっ、とその横を抜ける。長いスカートに足をもつれさせて転けそうになるが、どうにか堪えた。

アレクシスとティシアは、少し先で待っていてくれた。

連れられて歩きながら、未来は横にそびえ立つ城壁を見上げる。

歩きながらユリウスとティシアに交互に説明され、横の城壁がエルドラド王国の王族が住まう王城を囲む物の一つだと知った。逆の方に視線を移動させれば、かなり遠くに似たような壁が見える。

「檻みたい」

ポツリと呟いてからまた前方に顔を戻そうとして、その言葉を耳

にしたらしい三人の視線に気付く。

「檻ね。珍しい事を言う」

「普通はただ圧倒されるか、驚くだけなのにねえ」

軽やかなその言葉の真意を図りかねて未来は軽く首を傾いだが、生じた疑問を聞きあぐねている内に指定された場所に辿り着いていた。

城壁に沿うようにして二頭立ての箱馬車が待っている。そして、御者らしい小ぎれいな服を着た男がその後ろに立って彼等に深々と礼をした。

ユリウスがアレクシスが引いてきた愛馬に何やら話しかけると、赤と黒の双子馬は背に誰も乗せないまま二人に背を向け。並足から速足、駆け足と順を踏んで速度を増し、そして、見る見る内に見えなくなつた。

「さ、乗ろう。時間も惜しい」

四人が乗り込むと、馬車は静かに動き始める。遠くに見えた城壁が近づき、大きく開かれた門をくぐつた。

長い長い跳ね橋を過ぎて、街路の段差が轍ごしに僅かな振動が伝つてくる。

窓の外に見える光景は、王都・シックザールの街並みは、建築物に詳しくない未来には何がどうとは言えなかつたが、昨日通つたメササよりもずっと洗練されて優美であるように思われた。

明度や濃淡の違いはあるが、白系統でまとめられた建物がひしめくように並んでいる様は、圧巻の一言。

白はエルドラドでは太陽と月、双方の光を示すと好まれており、太陽神と月神を祀るこの国では当たり前前に用いられる色なのだそうだ。

ただ、建物がこうも白ばかりなのは、多少政治的な思惑も絡んでいるらしい。しかし、それでもやはり街の美しさは本物だった。

どれほどの間外の景色に気を取られていたのか、止まった馬車に未来は現実引き戻される。

慌てたようにきよろきよろする彼女に、向かいに座っているユリウスが笑った。

「まだ降りないから、心配しなくて良いよ」

そう言い終えるのとほぼ同時に、また馬車が動き出す。

そして、見るからに神殿といった建物の前で、今度こそ停止した。扉が開かれ、まずはティシアとアレクセイが馬車から降りる。

次にユリウスが腰を上げてステップを降りると、振り仰いだ先に右手を差し伸べた。

「あ、ありがとう」

一瞬躊躇うような間をとったが未来は手を委ね、手ざわりの良さそうな石を隙間なく敷き詰めた地面に降り立つ。

乗ってきた馬車が来た道に戻っていくのを見送ると、彼等は背後に立つ白い石で造られた建造物に向き直った。

「ここがエルドラドを守護されている陽と月の神を祀りし神殿の総本山にて、陽の神子と月の神子がおわす、双神宮だよ。一応正式な名称は中央神殿だけど、そう呼ぶ人は少ないかな」

太陽の光を浴びて輝く白亜の神殿。

目を丸めて未来はそれを見上げていたが、白亜とは違う虹色の輝きが時々視界に混じるので首を傾げると、ユリウスがまるで心を読んだように答えた。

「結界だよ。もし外から攻撃されても、ちょっとやそつとじゃ双神宮には傷一つ付けられない。後、この中じゃ転移魔法も使えないようになって、中に入るときも外に出るときも徒歩だね。侵入者を防ぐ措置の一つだ」

「そうなの」

素直に感心していると、不意にユリウス達が少し向きを変え、ほ

同時に片膝をつく。それは流れるように優雅で、また自然な動きだった。

今度は何かと、彼等からずいぶん遅れてそちらを見やった未来は、階の上に佇むその人物を見つけて目を瞠きょはしった。

「おかえりなさい、私の騎士。そして、我が片割れの騎士達よ」

水晶の鈴、あるいは宝石で出来た琴　豊かでよく響く美しい声の主が、長い裾を上品に捌きながら階を降りてくる。

「御自らのお出で、痛み入ります」

ひざまずき、こうべを垂れたままアレクシスが告げた。そんな物言いが出来るのかと失礼ながら未来が思ってしまったほどに、恭しく穏やかな響き。

その言葉に、陽の光を浴びてまぶしいほどに煌めく金色の髪、それとよく似た、より濃く鮮やかな色合いの瞳の美しい娘は淡い微笑を浮かべて頷く。滑らかな白の繊手が差し出されると、アレクシスはつと顔を上げてその手を取り、その指先と手の甲へ口づけた。

(うわ、ハマるなあ)

一枚の絵の如く、完璧なまでに美しい光景。

それに思わず見惚れていると、娘がふと未来の方を見つめてきた。「彼女が、迷い人ね」

そう言った娘に、アレクシスが小さく頷いてその手を放す。するとふわりとドレスをたわませて彼女が未来に近寄ってきた。

その後ろでアレクシスが立ち上がったのが見える。それとほぼ同時にユリウスとテイシアも立ち上がった。

「シノザキ、彼女が双神宮の頂点に立つ双頭の片割れの神子だ。陽の神子姫セレスティーナ・ソレスト」

「は、はい、あの……ええと。初めまして、篠崎未来です。よ、よろしく願います、陽の神子姫様」

身長は未来とさして変わらず華奢だが、身の内から沸き出でるような輝きに満ちているせいか、実際よりも大きく見える。

そんな迫力のある美女を前に、思わずどもった。彼女はほんのわ

ずかに首をかしげた後、温かい親愛の情を滲ませて微笑む。うつすらとしか化粧を施されていないが、それで彼女の美しさが霞むことはなかった。

「エルドラドへようこそ、ミク。あなたの来訪を歓迎するわ。この国はとても良いところよ、どうぞたくさん楽しんでね。……ああ、私の事は気軽にセレナと呼んで。様なんで、つける必要はないわ」
そう言っつてやわやかに細まる瞳は、まるで星をちりばめたようにキラキラしていて、その言葉と笑顔に偽りがない事を示していた。
「嬉しいわ。この神殿には年の近い女の子が少ないのだもの。良ければお友達になってくれない？」

「えっ、え、あう、え……」

「そんな急に言っつたつて戸惑っただけだよ、セレナ。まずは朝食を摂りながら話したらどうだろう。時間はこれからたっぷりあるんだし、しるもどろになっている未来を見かねて、ユリウスが会話に割っつて入る。」

「でも……それもそうね。すぐに朝食を準備させるわ。一緒に食べましょう。アレク達も一緒にどう？ どうせ食べてないのでしょ」

最初の少し硬い印象の言葉遣いから、年相応の娘らしい物言いに自然に移行させながらセレスティーナは後ろに控えていた騎士達を振り返った。

「……わかった」

「姫君の御意のままに」

「ご相伴させていただきます」

やはり、先程までのものからそれぞれ、らしい三者三様の同意を引き出すと、陽の神子姫は満足そうに頷いた。

まさしく太陽を思わせる明るく豪華な美貌の主が、後ろから聞こえてくる複数の足音と声に大袈裟に肩をすくめるまで、二十秒。

表情は変わらないが呆れた様子のアレクシスに短い説教されるま

で、二十四秒。

駆け足でやって来た初老の女性にまた説教されるまで、一分。

その女性が説教を一段落させ、未来達に気付くまで、後
。

セレスティーナに妙齡の女性が云々、というくだりから始まった説教を一段落させ、上手く年を重ねた者の上品さを感じさせる女性は少し離れて佇んでいた未来達に気付くと、丁寧な礼をした。

「早い帰還、お喜び申し上げます」

「有難うございます。我等が留守にしている間、大事無かったようで何よりです」

女性は、メイデ・フリーユゲルと名乗った。この双神宮の女官長で、手を焼かせるセレスティーナの目付けもしているらしい。

「あなたが、此度の迷い人の方ですね？」

「はい、篠崎未来です」

少し世間話をした後だったので、未来も比較的落ち着いて言葉を返す。セレスティーナに説教している間は恐い印象が勝っていたが、平素は落ち着いた物腰の女性だと会話の端々から感じ取れた。

「シノザキミク……音韻からして、ミクが名前でもよろしゅう御座いますね？」

「あ、はい」

「ではミク様、こちらに。お腹も空いてお出ででしょう。すぐに朝食の準備をさせますので。……セレスティーナ様、後ほどお説教の続きをいたしますので、大人しくしててくださいませ」

未来に意識を割きつつ、セレスティーナに釘を刺す事も忘れない。しかもその間が絶妙だ。

「……はい」

ばら色の頬を子供っぽくむくれさせて、陽の神子姫は不承不承といった様子でおざなりに答える。その様子はまるで、母親に注意されてヘソを曲げている子供だ。

(結構かわいいところ、あるのかも)

完全無欠な美女に見えた彼女の思わぬ一面に、未来は陽の神子姫に抱いていた印象を少し軌道修正した。

食事のため案内された部屋は、中央に大きなテーブルが据え置かれた広い物だった。

両開きの扉が向かい合って二つあり、そのちょうど真ん中にテーブルがある。

床はよく磨かれているし、白と水色で清楚に統一されつつアクセントに金色を取り入れた壁は上品だ。高い所から差ししてくる陽の光に柔らかく照らし出されている。

シャンデリアは無いが、壁に幾つも銀色のランプが飾られていて、夜は明々と室内を照らすのだろう。

優美な形状をしたテーブルと十脚ほどの椅子の下には、淡く優しい色合いの絨毯。ひどく目を惹く物ではないが、咲き乱れる花々の間を蝶が舞い飛ぶという模様が見事に描き出されている。

そのテーブルの上に掛けられているテーブルクロスも、繊細な仕事ぶりが美しい。

未来達がそれぞれ席に着くと、入室した方とは逆にある扉が開いて、しずしずと一人の佳人が入ってくる。

美しくまとめられた髪は見事な銀色。

首元までぴつちりと覆われたドレスに、白いレースが施された袖から覗く手には白い手袋。

肩にはふんわりと薄紫色のケープを羽織っている。

顔以外ほとんどが露出していないその姿は、ひどく禁欲的だ。

楚々としてあまり音を立てない足取りで近付いてくると、佳人は色素の薄い面に微笑を湛えて一同に短く挨拶してから、未来をじつと見つめた。

淡い銀色の瞳が、光の当たり具合によって紫がかって見える。神秘的な印象の美しい人だった。

「ようこそエルドラドへ、ミク・シノザキ。私はエアリエル・リヒト、月の神子姫です。以後よしなに」

どちらかというと低めの、穏やかな声は耳に心地よい。ぺこり、と礼をしながらどうとも言えない違和感にミクは内心首を傾げていた。嫌な感じはしなかったのだ、そこまで気にはしなかったのだが。そうする間に、いつの間にも席を立っていたユリウスとティシアが月の神子姫へ近付く。

ティシアが椅子の背を引き、ユリウスが手を引いて席に座らせた。ティシアがユリウスから一つ離れ、セレスティーナのすぐ向かいの席を空けていた理由がそれで明らかになった。

月の神子姫が席に着くと同時に、何人も侍女が丸い蓋のされた銀盆をささげ持って入ってきて、朝食の準備を始める。彼女らが入ってきたのは、両開きの扉ではなく、目立たないように作られた小さな戸だった。

蓋の下から現れたのは、見るからに美味しそうな料理の数々。

色々な種類のパンが籐籠一杯に盛られ、バターとジャムが数種類。そしてやはり豊富な果物。

各々の席の前には赤みがかかったスクランブルエッグ、スモークサーモン、瑞々しい野菜を用いたサラダ。珧瑯^{ホロ}の大皿から野菜と豆のスープが注がれ、それもめいめい取り分けられる。飲み物には果物のジュース。

手際よく準備を済ますと、侍女達は丁寧に一礼して退室した。

その間、彼女らはユリウスがエアリエルの手を取ったままである事に言及せず、またまじまじと見つめもせず、教育が行き届いてい

る事を無言で示したのである。

「顔色が良くなっているね、良かった。心配していたんだよ」

月神子の騎士が優しく言葉をかけつつ月の神子姫の手袋に覆われた手を口元に近づけ、指先と手の甲に口付ける。その行為が、騎士が貴人に対する親愛と忠誠の情を示す仕草なのだと、既に説明は受けていた。

いつの間にかティシアは素知らぬ顔で席に戻っている。

「ええ、有難う。昨日の昼にはもうずいぶん良くなっていたのよ」

「おや、それなら昨日連絡しておけば良かったな。そうすれば言葉が聞けたかも知れないのに」

「出来もしない事を言って」

怒ったような口調で、しかし表情は柔らかくエアリエルは、ユリウスの頬を愛おしむように撫でる。

ティシアの時よりよっぽど自然で睦まじい様子は、まるで初めから決められた対の存在であるかのように美しい。

よく似た銀髪をしているが纏う雰囲気が違うため、似通った者同士に時に見られる自己陶醉じみた空気も、彼等の間には無縁の代物だった。

（あれ……？）

覚えのあるようでいて、それとはまた違うような気もする引っかかり。

知らず胸元に行こうとした手を押し留めて、未来はひどく美しい一対から何となく視線を逸らす。

なんとなく、そうしなければならぬと感じていた。自分の中で芽生えようとしている感情を、受け入れてはならぬと自分の中の見知らぬ自分が囁いていた。

（ああ、やっぱり私、ユリウスの事好きになりかけてるんだ）

当然だろう、とどこか冷静に思う。

全く見も知らぬ場所に来て、知り合いは居ない。帰り道も分からない。そんな心細くて不安な所に優しくされれば、大抵の人間はグラツと来るだろう。

そうならないのは、よほど鈍いか、恋愛にトラウマを持っているか、生きるか死ぬかの極限状態か、精神面が凄まじく強靱か……そんな感じだろうか。

そして、自分はそのどれにも当てはまらない、と思う。動揺している心のどこかが、そう分析を下す。

(でも、これはまだ憧れに近い。なら私は、まだこの感情を殺せる) お似合いの二人だと思う。恋人と言うにはどこか違和感を感じたが、それは自分の嫉妬が生み出した歪みだと己を窘め、目を伏せる。直接見るのは嫌だった。

目を伏せていた未来の耳に次に届いたのは、二人の会話ではなく綺羅らかな声。

「二人とも、再会を喜ぶのはいつこう構わないけど、私はいい加減食事がしたいわ」

唇を尖らせて抗議するセレスティーナに月の主従は苦笑を交わして、騎士は神子姫の隣、そして未来の隣に再び腰を下ろす。

その事を、深く考えないようにしながら未来は視線をパンの山に向ける。一種の逃避だったのだが、実際美味しそうだったので、気付けばまじまじと眺めていた。そうしていると、ユリウスが籠に手を伸ばし、引き寄せてくれる。

そういったさり気なさが嬉しいが、悔しい。

「……良いの？」

「客は好きなのを、好きなだけ取って良いんだよ。良いだろうか？」

その言葉に同意が返る。それは、強制されたものには有り得ない温かい情動で裏打ちされていた。

それに少し安心してから、少し迷って黒胡麻を練り込んだパンを一つ取る。

「それだけでは駄目よ。ユリウス、その厚切りのパンを」

「あら、じゃあそのねじりパンも」

エアリエルが口を挟むと、負けじとセレスティーナも声を上げた。あつという間に未来の前の皿はパンが重なり合って、混沌とする。神子姫達だけでなくティシアも面白がって嘴くちばしと手を挟んだ結果だ。

「えー、つと……」

冷や汗をかきながら目の前のパンの山を見下ろす。不幸中の幸いはどれも小さめな事だが、数の暴力の前には無力に等しい。

とても食べきれない量をどうしようと表情を強張らせた未来に、不意に影が落ちた。そして、伸ばされた白い腕が山のでっぺんに乗せられたロールパンを取っていく。

「意地の張り合いは、美しくないと思うんですがねえ」

すぐ後ろでした知らない声に、未来はギョツとした。振り向くより早くまた腕が、今度はスコーンに似た物を摘んでいく。

背後に立っていたのは一人の男性。

年の頃は二十代半ば辺り。白い軍服を着ている事から、太陽神殿騎士団に所属しているのだろう。鳶色の髪をきつく三つ編みにして背に流している。

「こんなに大量に食べられるわけないでしょう。ユリウス殿、どうして止めなかつたんです。ティシア、お前もだ。自分の嗜好を多分に詰め込んだ点、より罪は重い」

詰問じみた言葉に、ユリウスは肩をすくめた。ティシアと言うと、知らんぷりをしている。

諦め混じりに頭を振って、男はまたパンを頬張る。恐ろしい速度だ。しかも、口に入れた状態で喋るという不作法もしていない。

「少し大人げなかつたわね、気をつけるわ」

「……分かつたわよ」

素直に謝った神子姫に、男はもう幾つめかも分からないパンを手を取った。

「そうして下さい。これが続くようでしたら、私の腹が弾けます。」

まあ、その前に月の副隊長殿にノシつけて差し上げますが」

「げ」

「げ、じゃない。連帯責任だ。後、私怨」

複数のパンが皿から消えた。そしてそれは、数秒の間を置いてテイシアの皿にその姿を現す。手品のような早業を披露した男は、ついでに薄紅色の頭を軽く小突いていった。

非難の視線と言葉もどこ吹く風で、彼は未来にニコリと笑いかける。悪戯が成功した子供のような笑顔だった。

屈託のない表情が眩しくて思わず未来が視線を下に下げると、必然的に皿が目に入る。

いつの間にか、パンは四つを残して消えていた。一つは、未来が選んだ黒胡麻のパン。残りの三つはエアリエルとセレスティーナ、テイシアが選んだ物がそれぞれ一つずつ。平等な配分だった。

「姫様方の為にも、それくらいで手を打って下さいますか？ お嬢さん」

「え、はい、有難うございます。ええと……」

「フィオル・アインマール、太陽神殿騎士団副隊長を拝命しています」

挨拶した彼は、今まで未来が会った人々の中では親しみやすい印象を受けた。人好きしそうな容貌と表情のせいだろうか。青みを帯びた緑色の瞳はどこかガラスじみているが、そこに浮かぶ色は温かい。

フィオルはテーブルを迂回すると、セレスティーナの隣の何の用意もされていない席に腰掛ける。するとまた侍女が入ってきて、今度は橙色の液体で満たされたグラスだけを置いて下がった。

「じゃあ、今度こそ食事にしましょう」

その一言で、やっと朝食が始まった。

未来が手を合わせてから食べ始めるのを、陽と月の神子姫も興味

深げに見ていたが、すぐに彼女らも食事を始める。食べる前に、「いただきます」とはまた違うお祈りらしい仕草をしていた。

食事は、基本和やかに進んだ。

ティシアとフィオルが爽やかな朝にあるまじき毒舌合戦を繰り広げたり、セレスティーナがサラダからトマトを引っ張り出してフィオルやアレクシスに押し付けようとして一騒動あったが。

（結構苦勞人なのかも）

平和に美味しい朝食を噛みしめていた未来は、フィオルを観察しながら思う。彼は現在、空にしたグラスをくるくる回転させながら何やら考え込んでいる。ティシアは目の前の話し相手が思考に沈むと、途端に興味を無くしたように食事に戻っていた。

ちなみにアレクシスは、押し付けられた物を表情一つ変えずに食べている。マイペースなのか寛容なのか、判断が付け難い。

トマトが苦手と思われたセレスティーナだが、フィオルに拒否された後駄々をこねるでなくフォークに刺したそれを口に運んでいたから、そこまで嫌っているわけでもないのだろう。

ちら、とユリウスの方を見ると、視線に気付いたのか青い瞳が未来を見返す。そこに浮かぶ優しい色に、思わず心臓が跳ねた。こんな瞳で見つめられれば、誤解する人は多いのだろう。

しかしこの優しさは、一人だけに向けられるものではないのだ。

声をかけられる前に、なんでもない、という意味表示を込めて首を振り、未来はエアリエルが選んだ厚切りパンを取る。もちもちでありながらしっとりとした手触りで、仄かな甘みが嬉しい。

ティシアとセレスティーナが選んだパンもそれはそれは美味しかったが、控えめな味わいが故郷で食べていた食パンを彷彿とさせて懐かしかった。味も香りも、市販の食パンと比べるのは気の毒なほど素晴らしくはあったが。

エアリエルが選んだ物だと思うとやはりまだ引っかけたが、食

べ物に罪はないと残す事はしなかった。

やがて食事が終わり、鮮やかに食器は片付けられる。まだ結構残っていたパンの籠も。

勿体ない、と思ってしまったのは一般庶民の悲しい性か。

綺麗になった机。これで終わりかと思ったら、また侍女達が入ってきて、熱い紅茶が出された。

豊かに広がる良い香りに気持ち解れていくのを感じる。一口飲むと同時に沸き上がってくる、言いようのない懐かしさ。

高校時代から通い詰めすっかり常連さんとなった喫茶店と、美味しい紅茶やコーヒーを淹れるマスターを思い出す。

穏やかに笑う彼が淹れるお茶は、いつだってその笑顔のように優しくかった。あの店で流れるゆっくりとした時間が、大好きだった。

この世界に来る直前も、その店でお茶を飲んでいた。

最後に飲んだ、アッサムのミルクティー。もっと味わって飲むんだった。

……ああ、そうだ。彼にももう、会えないのだ。

いきなりポロポロと泣き出した未来に、慌てたのは双神宮の上層陣。

「え、どうしたの？ 口に合わなかった？」

珍しくおろおろしているユリウスに、そうじゃないと言おうとして開いた口は言葉を発せず、ただ嗚咽を漏らすだけ。しきりに首を横に振って、スカートをぎゅっと握りしめたまま俯いていた未来の体が、急に温もりに包まれる。

柔らかく温かい感触に、安心させるようなラベンダーの香り。その二つに包まれて、優しく頭も撫でられては、もう限界だった。

この世界に来て初めて、未来は声を上げて泣いた。

「ヒッ、ク……ずみませ、服……」

まだ鼻をグスグスさせながら未来が謝ると、美しい二人の神子姫は静かに首を振った。

「謝る事じゃないわ。無意識の内に溜めこみすぎてしまったのね」

胸元を濡らしながら全く気にしていない様子でセレスティーナが微笑むと、エアリエルが頷く。その肩に先程まで羽織られていたケープはなく、今は未来に貸されていた。ラベンダーの香りは、そのケープに焚きしめられている。

「この世界を、受け入れてないわけじゃないんです。でも、ちょっと、思い出しちゃって。……ごめんなさい」

「だから謝る必要なんて無いわ。普通の事だもの。故郷を大事に思えるのはとっても良い事よ。ミクは良い人達に恵まれたのね。出来ればこの世界の事も、ゆっくり好きになっていってけると嬉しいわ」

「は、はいっ」

立て板に水とばかりに力説され、未来は思わず同意していた。そして、それだけではまずかろうと必死に言葉を探す。

「私知ってる人と世界なんてほんとに一部ですけど、でも、でも、私きつとこの世界が好きになると思います！ 人は……性格とか相性とかがあるので、全員は無理だと思えますけど……」

「素直で良いわね。私はどうかしら？」

「え?! え、あの……」

楽しげに聞いてくるセレスティーナに、未来は狼狽えて離れようとするも手を取られていて動けない。しかも手を取られている事を自覚すると、柔らかく滑らかなその感触に赤面する。

「それともあれかしら。私なんか、仲良くする価値もない？」

「いや、その、あの……」

意地悪げに聞いてくる陽の神子姫にますますテンパって、あわあわする迷い人。

朝食の前は止めたユリウスも、今回は止めずに二人の様子を眺めている。

ひとしきり慌てている未来を見てから、セレスティーナは小さく笑った。

「冗談よ」

きゅ、と未来の手を握る力を強めて、そのまま自分の額に押し当てる。まるで何かに祈るかのよう。

やがて顔を上げると、金色の瞳で真っ直ぐに彼女を見据えながら、噛みしめるようにゆっくり言い聞かせる。この時ばかりは、その表情はひどく真剣だった。

「ゆっくりお互いの事を知って行って、仲良くなりたいわ」

偽りのない眼差しに少し気圧されたようだったが、自分の意志を確かに宿した顔つきで、未来は一つ、深く頷く。

「私も、そう思っています」

その答えにセレスティーナはぱつ、と破顔する。見ている方も晴れやかな気分になれそうな、鮮やかでまぶしい笑顔だった。

「部屋に行つて、目を冷やした方が良いわね」

二人の会話が一段落したところで、エアリエルが控えめに口を挟む。机の上に置かれていた小さな銀の鈴を取り上げてから、思い出したように付け加えた。

「そうだわ、瞼の腫れが無くなつたら王都に出たらどうかしら。きつと気も紛れるわ」

「あ、それ良い。ついでにお昼も外で摂つたらいいわ。この王都は美味しい物がいっぱいあるんだから。本当は私が案内したいんだけど、多分無理ね」

お説教逃げたら後が恐いし、と見るからに残念そうなセレスティ

「ナ」の形の良い額を、ユリウスが軽く指弾した。

「と言うより、君も着いてきたらお守りが増えるじゃないか。君ときたら、すぐふらつとどこか行きそうになるんだから護衛泣かせだよね」

「それは目移りする物がいっぱいあるから……って、もっつ、ばらさせないでよ！ エアも！」

顔を背けているが、小刻みに肩が震えている事で笑っていると分かる片割れに、陽の神子姫は肩と拳をぶるぶるさせた。

「いや、ごめ……っ、ごめんつく」

笑いを抑えながらエアリエルは手にした鈴を鳴らす。小さい割に大きな音がした。

鈴の音を聞いて入室してきた女性に無表情に近い微笑を取り繕うと、未来を部屋に案内するよう言いつけ、当人は物静かに椅子に座す。

女官に連れられて立ち上がった未来は、一つ礼をするとそのまま部屋を出て行く。

その後ろ姿を、彼等は無言で見送った。

「普通の、良い子ね」

少し疲れたように息を吐き、未来が出て行った扉を見ながらエアリエルがぼつりと呟いた。その顔に、つい先程までセレスティーナの言動に笑っていた様子は最早見られない。

「そうだね」

「ああ、彼女が私達より年上な事は、知ってるわよ？ 視ていたし言裏にそれでもあの子と呼ぶ、と言う意図を含ませて、月の神子姫は無垢な少女のような、人生に倦んだ老婆のような笑みを湛える。

「あの子が私の力を知ったら、さらに嫌われるかしらね」

「もう嫌われるような事、したっけ？」

不思議そうに尋ねてくる己が騎士に、神子姫は曖昧に笑う。人並

み以上に感情に聡いこの青年は、だが恋情に関しては壊滅的なまでに鈍い。あるいは、無意識の内に疎んでいるのかも知れない。

その理由に、ある意味深く関わっているからこそ、エアリエルには何も言えなかった。こればかりは、月の神子としても踏み込めない。

「私生活を覗かれるのは誰だつて嫌でしょう？　今までもだつたのに、これからも覗く事になるかも知れないって言ったら、さらに嫌がられそうじゃない？」

「まあ、それはそうだけど……」

言葉を濁されたのが分かったのだろう。曖昧な顔をする相手から視線を外して、エアリエルは膝の上に慎ましく乗せた手を軽く組み合わせる。

「あの子に、力を視たの」

月の神子が異能の一つに、あらゆる境界を越えて物事を知る越境の能力がある。

距離、時間、空間……あらゆる物を凌駕するそれは、全てを見通す風の神子の千里眼と並ぶ遠見の能力だった。

この力と、全ての神子が経験する、夢を介する事で自らの力の根源たる神との対話を併せる事で、エルドラドの神殿勢は迷い人の現れる箇所を推測出来るのだ。

そして此度も、月の神子は何かを越えてそれを「視た」のだ。

「一刻も早く守つて欲しい、“名も無きあの方”の気配が濃いつから危険だ、と言われたのも納得だね。まだ何かまでは分からないけど、あの子、相当なもの」

“名も無きあの方”とは、この世界を創造した者達の中で最も強い力を有し、彼等の王とされている存在を指す。そして、このレフアレンディアに未だ多くの異邦人を喚び寄せている、元凶。

神の名を冠せられた者達の中で、最高の地位に位置づけられながらその者はほぼ全てが秘されている。知られているのは、創造の折

にふるわれた、偉大なる御業のみ。その名前さえも分からない。
未だ異邦人達を迷い人としてこの世界に喚んでいる理由など、さ
らに分かるはずがない。

「あの気配は、見習いの魔法使いでも探索の魔法で察知出来る程度
に異様だしね」

その言葉に、驚くでもなくユリウスが頷いた。

“名も無きあの方”の残り香が強い者は、優れた何らかの才覚を
有している事が統計的にも証明されている。

魔法、武芸の上手に事は限定されない。政治に明るかったり素晴
らしい技術者、学者であったりと、世界の発展に大きく寄与する場
合も多い。そういった才を利用し、己が権勢を守り、あるいは強め
ようとする存在は、いつの時代も絶えない。逆に排除しようという輩
も同様に。

だから、迷い人の中でも残り香が強い者に対する注意はどの国で
も一線を画していた。

「一応、意思疎通の腕輪に目くらましと攪拌、分散の魔法掛けてお
いた。腕の太さに合わせて伸縮する術式は崩壊させちゃったけど」
立ったままですっかり冷めた紅茶を一口飲む。作法からは逸脱し
ているが、その動きには貴族的な品の良さがあった。

「上出来じゃない。本命の術式の方はどうともなかったし、大分制
御が上手くなったのね」

「……それ、喜んで良いのか微妙」

「ユリーのその勤勉さ、アレクに少し分けてやりたいわ。ちっとも
覚えななんだもの」

じと目でセレスティーナが彼女の騎士を睨んだ。アレクシスは素
知らぬ顔。フィオルは苦笑している。

アレクシスは別に、魔法が使えないわけではない。

ただ、生まれつき持っている魔力が大きすぎる上密度が濃く、制

御が厄介なのだ。初歩的な魔法でも、結果が災害並みになる。

この世界の魔法は、世界に満ち満ちる精素を己の魔力で操り、その特性を顕在化し、増幅させることで発現する。つまり術の効果や威力は、自身が操る魔力に比例する。アレクシスの場合、増幅の度合いが大きすぎるのだ。

火の玉を出せば、平均より大きい上に標的に当たった途端爆発を起す。

風の刃を繰り出せば、その周辺にも殺傷力のある風が渦巻いて攻撃力が数倍。

相手を眠らせるだけの筈が、強すぎて仮死状態に追い込む草を生やす。

水流で相手の体勢を崩すだけのつもりが、濁流になって半殺し。

攻撃特化にも程がある。

上級魔法など、恐ろしくて使用許可を出せようはずがない。

ユリウスも魔力量がずば抜けているから、魔法の習い始めは似たような現象を頻発させていたが、研鑽を重ねた結果、どうにかコツは掴んだ。元々要領は良い。

魔力制御に励んだユリウスの一方で、アレクシスは極力魔法に頼らない道を選んだ。代わりに彼は武芸を磨き、今やエルドラドでも一、二を争う剣の使い手である。他にも武器は一通り扱える。

「アレクシスと剣で勝負したら俺が確実に負けるから、別に魔力に拘る必要はないと思うんだけどねえ」

少し困ったように笑いながらユリウスは紅茶を机に戻した。

「でも、一人でいる時に怪我なんてしたら、自分では治せないじゃない」

アレクシスは治癒魔法の類は使えない。苦手と言うより、相性が悪いのだから。以前試してすり傷を治そうとしたが、何も起こらなかったのだから。他の魔法の攻撃特化型から鑑みて、傷が悪化しな

かつただけマシと言えるか。

少人数、あるいは単独で行動する事が多い神殿騎士団の団員は、最低限の治癒魔法は会得している者が多いのだが、アレクシスは数少ない例外だった。

心配げに顔を歪めるセレスティーナに、ユリウスは安心させるように言いかける。

「その為に治癒呪文を封じ込めた魔鉱石持たしてるんじゃないか。それとも、俺の術が信用出来ない？」

ずるい問いかけと知った様子で、それでも敢えて問いかけた相手に、セレスティーナは心持ち目を伏せる。

「そうじゃ、ないけど……」

それきり口を噤んだ彼女にアレクシスが近付いて、その頭を撫でた。どことなく不器用な動きだった。

「……誰のせいよ」

拗ねたような響きに、頭を撫でながらアレクシスはセレスティーナの顔を覗き込む。

「気をつける」

「帰ってこないなんて許さないんだから。私の片割れは、エアだけじゃないのよ」

「分かっている。陽神子の騎士として、お前の双子の片割れとして、俺は交わした誓約を違えはしない」

アレクシスは彼女の額の髪をかき上げると、そこにそつと唇を落とす。

騎士としてではなく、家族として。普通の兄弟よりもさらに近い片割れに、親愛を込めて口付ける。

そこでやっと、セレスティーナは表情を緩ませた。

「ねえ、私にもしてくれない？」

そんな二人の様子を微笑ましげに見ていたエアリエルが、ユリウスの裾を軽く引く。

かわいらしいお願いにユリウスはくすりと笑い、無造作に身を屈めてその額に口付けを落とす。エアリエルもお返しに青年の前髪を軽く払って唇を寄せた。

「あーあー、あの四人完全に二人の世界ね」

「我等の姫は女官長殿の説教が控えている事を覚えているんだか」
いつの間にか四人から離れて、副隊長二人は扉の近くの壁に背中を預けながら二組を眺める。

恋人さながらの仲睦まじさ。しかし、彼等の間に流れるのはあくまで家族に対する穏やかな愛情でしかない事を、彼等はよく知っていた。

「ま、誤解も当然だけど」

「今の仲の良さもだが、再会が劇的な上に熱烈だったからな」

「ああ、十年越しの再会だっけ。うん、あれは凄かったわ」
しみじみと頷き合う。二人とも、ユリウスとアレクシスが神殿騎士団入りした頃には既にある程度の役職に就いており、比較的近い所で再会を実際に見ていた。

王が抱える騎士団と神殿が擁する騎士団は、友好関係を衆目に認識させるため、数年に一度互いに騎士を何人か交換する習わしがある。

ユリウスもアレクシスも、その交換で神殿騎士団に入った。王が代替わりして間もない頃だったから、三年ほど前の話となるか。

そして、入団を祝う式典で四人はめでたく再会を果たして喜び合い、その様子を見ていた他の騎士達の嫉妬を見事に買ったのだ。

それから二人は嫉妬に駆られた者達に散々扱かれ、いびられる日が続いたが、いつの間にか人心を掌握して階級を上り、一年前ほぼ同時に今の地位に就いた。

若すぎる事、神子姫達と双子であるという事実反感や疑念は当

然沸いたが、二人はそれさえも手懐けて、今や名実ともに神殿騎士団の頂点である。

「あの二人には不思議な魅力がある。昔から、本当に不思議だ」
独り言のように呟いたかと思うと、フィオルは意識を切り替えたように壁を離れた。

「さて、俺はあのお嬢さんの様子を見てくるが、お前どうする？」
「服を見繕ってくる。街に出るには、あの格好は目立つもの」
ティシアも背中を壁から離す。

「あそこか」

「そうね」

「なら、彼女も行かせよう。どうせ一着や二着では済まないんだろ」
「う」

厚意から出た発言には、疑惑の視線で報いられた。

「俺の性格は知っているだろう」

その答えにティシアは鋭く肩を竦めると、身を翻してすぐ横にあった扉を開けて入っていく。フィオルも苦笑しつつその後続いた扉を抜けるとそこは待ち合い部屋で、女官と侍女が数人控えている。

彼女らに鈴が鳴らないようなら頃合いを見て各々行動するように、と言い含めると、承知したような様子で礼をした。どうやら女官長の伝令は行き届いているようだ。

先程開けた扉より小さく、簡素な扉をくぐって侍従や女官用の廊下に出た二人は少し記憶を探るような表情をした後、逆の方向に別れた。

未来が案内されたのは、居室と寝室、衣装部屋を備えた一続きだった。白い壁に深緑の絨毯、飴色で統一された家具や道具。

豪華と言うほどではないが、上品に整えられた部屋。

落ち着かなくてきよろきよろとしていると、淡い色の布張りで、同色のクッションも置かれたソファに導かれる。

未来より確実に年上と思われる女官は不安げな彼女に一度微笑みかけてから、部屋の壁に設えてある飾り棚から小さな器を持ってきた。それに手を翳し、短く何やら呟く。すると、途端に器が水で満たされた。

びっくりしたように赤くなっている目を丸くした未来に、女官は初めて口を開く。

「魔法は、初めてですか？」

「うん。でも、こうやって使われたのは始めて見たので」

その言葉にゆるく頷いて、女官はどこからともなく取り出した布を水に浸した。絞り、そつと瞼の上に乗せる。

冷たいその感触に、この世界で最初に目を覚ましたときを思い出した。そうだ、あの時も泣いた後だった。

理由は、ずいぶん違うけれど。

小さく息を吐いて、手をソファに投げ出す。するつ、と翻訳機の腕輪が抜けそうになって慌てて押さえると、拍子に布がずり落ちた。布を再び目に当てようとして、女官が少し訝しげな表情を浮かべている事に気付く。

「あの、どうかしました？」

「腕輪が……」

それだけ呟いてから、いいえ、と頭を振ると彼女は未来の手から布を取って再び水に浸す。そして未来が羽織ったままだったケーブ

を預かると、膝の上に掛けてくれた。それからまた布を絞って目に被せる。

しばらく沈黙が続く。

やがてそれに耐えかねて、未来が口火を切った。

「私は、どうなるんでしょう?」

「国王陛下と面会なさるまでは、この部屋にご滞在いただくことになります。それ以降は、私にはまだ」

「そうですね」

少し申し訳なげな言葉に短く答えて、ため息を吐きそうになるのを噛み殺す。

無意識で膝の上のケープを弄いぶいそうになって、それがエアリエルからの借り物であることを思い出し、止める。それ以上の事については、シャットアウトして考えない。考え出したらキリがない無限ループになるのは分かりきっていた。

(つて事は、しばらくこの部屋……)

敢えて布をどけないまま、ぐるりと部屋の内装を大雑把な思考で巡らす。

そう言えば、今座っているソファは驚くくらい身が沈む。絨毯も、靴越しに分かるくらい柔らかい。

深く考えず受け入れていた事象に、意識が追いついてくる。

そうして、急に気付いた。

布の下でぎよつと目を見開く。

(お、落ち着かないっ)

キラキラ豪華でないだけマシだが、冷静になって考えてみると一度だけ泊まる機会があったスイートルーム以上の高級感が漂っている部屋だ。

否、いつそ分かりやすく豪華だった方が良かったかも知れない。

最初から金がかかっている事が一目瞭然なら、逆に諦め混じりで受け入れられたかも知れない。

下手に似たような物が記憶にあるというのは、中々厄介だ。区別が付くから。

今度は堪えきれずに未来の唇からため息が洩れる。しかしその音は、扉を叩かれる音に紛れて女官の耳には届かなかった。

「陽の副隊長だが、入っても構わないだろうか？」

「アインマール様？ ええ、どうぞ」

扉が静かに開いて、フィオルが入室してくる。片目だけ空気に晒して未来が挨拶すると、彼は小さく笑い返した。そのまま女官に小声で何やら話しかけると、彼女は彼と未来にそれぞれ礼をし、退室していった。

部屋に二人きりになって、未来が言葉を探しあぐねているとすいっと急にフィオルが近付いてくる。

「まだ冷やしておいた方が良いでしょう。失礼」

少し温まっている布を取って水に浸し、再び未来の視界は覆われた。

「あの、心配のしすぎじゃ……」

「そうは行きません。明日にまで腫れが残ったら、姫様方に説教されてしまいます。どうぞ、私達を助けると思っで心配を掛けられて下さい」

「はあ」

納得行っていないような返事を尻目にフィオルは立つと、そのまま未来の座っているソファの肘掛けに腰を下ろす。腰を下ろすと言っても本当に軽くで、凭れているといった方が正しい。

編み込まれている髪から、仄かに甘い香りがした。視界が塞がれていなければ気付かないほど微かな匂い。

香水では無さそうだし、かといって花とも違う気がする。もっと身近な何か。

既視感はあるが、それがあまりに曖昧だ。

何かを思い出そうと頭を捻っていたら、未来の頭上から困ったような声がかかる。

「あの、すみませんが離していただけませんかね」

何のことだろう、と疑問を感じたところで、未来は自分の手がいつの間にか何かを握っているのに気付いた。糸のような布のようなしっとりとした滑らかな感覚。不思議に思っでぐいつ、と引っ張ってみると、痛ッ、と声がする。

えっ、と思っで布を外して見ると、やはりと言っべきか、未来の手はしっかりとフィオルの三つ編みを握りしめていた。

知らなかったとは言え、それを思いきり引っ張ってしまったのだ。痛いわけである。

「うわっ、ごめんなさい！」

手を離して、平謝り。そのまま土下座もしそうな勢いであつたが、借り物の服という意識はあつたらしい。深々と出来る限り頭を下げるに留めていた。

「なんだか甘くて良い匂いがしたので、つい、うっかり……」

言いよどむ彼女の顔をどうにか上げさせ、フィオルは苦笑する。

「いえ、良いですよ。そんなに気にしないで下さい。しかし甘い匂い、ですか」

青年は編まれた髪を引き寄せ、匂いを嗅いだ。

「確かに普段は髪にも染みついてるが、今は落ちてるはずだがな……」

…うん」

何やら独り言を言っで、軽く首を傾げる。その手が懐に伸びようとしたところで、急に聞こえたノック音。

入ってきたのは、見知らぬ色彩の山が二つと、その後ろからひよっこり覗いている見知つた顔二つ。

「ただいま戻りました」

「お待たせ、待たせちゃつたわね。……フィオルになんか嫌なこと

されていない？」

色とりどりの服を抱え、器用に入室してきたティシアが部屋を真っ直ぐに突っ切り、衣装部屋を開け放つ。

「おいおい、本人前にしてひどい言い種だな」

「ははん、居たの？」

しっし、とばかりに顎で戸の方を示すティシアに、フィオルは大袈裟に肩を竦めると軽快に立ち上がった。甘い匂いも、それで分からなくなる。

「分かった分かった。野郎は退散しますよ、っと」

「申し訳ありません、アインマール様」

「良いですよ、彼女の物言いには慣れてますので。ではお嬢さん、失礼します」

そうして彼は、さっさと部屋を後にした。

衣装部屋に持ってきた服を置いてきたティシアが、未来の顔正しくは目の上を見て頷く。その際、顔に添えられた手が少々アブナイものだったのはご愛敬か。

しかしそれ以上はしないでソファの上に落ちていた布を拾うと、器に投げ込む。

逃げるように未来が視線を衣装部屋の方に向けると、服を一着分手にした女官がやって来るのが見えた。白いシャツに黄色がかつた茶色のスカートと同色の胴着。編み上げ靴まである。

「勝手ながら、普段着に良さそうな物を幾らか選ばせていただきました。今日は街に出るとのこと、こちらを」

「街……ああ、そうでした！」

忘れかけていたことを思い出して、思わず声を上げた。それから大声を出してしまったことに目を泳がせる。

そんな姿を微笑ましそうに見ていた二人だが、急にその顔が険しくなっって彼女から外れた。

同時に高く高く響き渡る、それでいて微かな叫びに似た哭なと、食

らい尽くす勢いで続いた、背後からの空気を切り裂く甲高い音ねに身を竦ませる。

背筋を、身が凍りそうな寒気が這い上がった。

何かが、居る。後ろ 窓の方に。

寒いのではない。よく似てはいるが、違う。

これは、恐怖だ。どうしようもない、恐れ。

喉が鳴る音がやけに大きく聞こえる。見たくない、振り向くな、と叫ぶ心とは裏腹に、未来の顔はゆっくりと後ろに居るであろう何かへと動いていった。

視線の先に、人影が一つ立っていた。

窓から差し込む光を後光のように浴びているので詳しくは分からないが、どうやら男。

その足下には無数のガラスと木の破片が散らばっている。

背後からした音は、窓が割られた物らしい。

髪は淡い金色で短く切り揃えられているが、前髪だけがやけに長い。

目を完全に覆い隠すほどの前髪の下、鋭利な線を描く唇が、酷薄な形に歪んだ。

この世界に来てから、一度も向けられたことのない強い欲望が込められた笑い。否、日本にいた時でもこんな感情は向けられたことがなかった。

ぞつとして後ろに下がろうとし、ソファから落ちそうになる。それを支えたのは、思いの外力の強い腕と、場違いなほどに柔らかな感触。

「何者」

低く詰問するような言葉の主が、今自分を抱き留めている者が、一瞬未来には分からなかった。

少し視線を上げると、黄色がかった赤い髪にふんわりと包まれた横顔。

しかしその表情は、今まで見たことがないほど厳しく、鋭い。夜を思わせる瞳が今は、炎のような輝きを宿してきらついていた。明らかに敵意を映したその眼差しに、自分に向けられている物では無いのに震えが過ぎる。

空いている方の手にはどこに隠し持っていたのか抜き身のダガーが握り、瞳を写し取ったようにきらりとした輝きを放っている。

二、三步下がって未来を離し、女官の方へ押すと、ティシアはダガーを握り直した。

「何者だと、聞いている」

再度投げられた言葉に、男は答えない。代わりにす、と持ち上げられた手の小指だけが軽く弾かれる。

しゃん　微かに涼やかな音。

風音が室内を吹き抜けた。

それは刹那の出来事。

冗談のようにティシアの体が後方に吹き飛んで、壁に叩きつけられた。

そのまま体はずりりと床に落ち、背を丸めて苦しげに咳き込む。

ダガーを手放さなかったのは、意地だろうか。

「弱くなった？　なあお前、弱くなった？」

男が初めて口を聞いた。瑞々しいが少年らしさは不思議と無い声に、子供っぽい口調のアンバランスさが、今起こっていることが現実でないかのような錯覚を起こさせる。

しかし、錯覚はあくまで錯覚と知らしめるが如く、男の靴の下でガラスと床がこすれ合う不快な音がこの事態が現実だとキシキシと突きつける。

「良いけど。手間が省けて良いけど」

そして男はとん、と軽く床を蹴る。音が消えるか消えないかの内

に男の姿はその場から失せ、まるで手品でも使ったかのように別の場所に現れた。

未来の、すぐ目の前に。

しゃらしゃらと金属のこすれる音が無数、間近で聞こえる。

思わぬ出来事に未来は目を瞠った。間近に迫ると奇妙な迫力というか、圧迫感のようなものを感じる男で、拘束もされていないのに指一本動かさない。

「お前か。力は感じないけどお前だな」

男は再び先程の笑みを浮かべて、酷く愉しげな声が室内に響いた。

男の手が、ゆっくりと未来に近づく。

服の上より腕を彩る無数の飾りがしゃら、しゃりと鳴った。

彼は腕だけではなく目に見えるあらゆる箇所装身具を着けていて、それらも動きに合わせて微細な音を奏でている。

それらの音は無造作に合わさっているだけに過ぎないが、それさえも計算したかのように男を彩る色無き飾りとなっていた。

「お下がり願いますようか」

もう少して手が届くというところで、女官が未来と男の間に入った。彼女は一目で分かるほど青ざめてはいたが、引き下がるつもりはないらしい。

興を削がれたように男の唇が歪む。全ての指に指輪をはめた手が手刀の形を取った。

「待て」

女官を排そうとした手が止まり、少し横にずれる。直後そこを、鋭く輝く何か貫通して行く。

目標を見失ったそれはそのまま勢い余って床に深々と突き刺さり、不運なタイルを数枚巻き込み、止まった。

床に刃を半分ほど埋めているのは、一振りのダガー。

「女に手を上げようだなんて、男の風上にも置けないな」

テイシアがダガーを投擲したらしい腕をそのままに低く言った。

女性らしい語尾が差し引かれているのもあってか、やたら言動共に男前だ。

そして彼女はそのまま、大袈裟に肩を竦める。

「あーあー、これでまた給与から差し引かれる」

憂鬱げに言い放ってふらりと壁に凭れた。ぐしゃりと髪をかき回

し、そのまま何かを引き抜く。既に少々歪んでいたまとめ髪が堪えきれずに半分ほど崩れて、額や頬に赤い波打ちを落とした。

女性らしい柔らかさを失っていない指が数本の赤い糸　自らの髪と共に握りしめているのは、一本の鈍い金色をした簪。

敢えて輝きが抑えられているので目立たないが、小さな渦が五つほど規則正しく彫り込まれ、その中央部に小粒の紫の宝石をちりばめた、手の込んだ品だった。

「どこの誰かは知らないが、その娘を連れて行かれる訳には行かないんでね」

強打された痛みがまだ尾を引いているのか、何度か咳き込みながらそれでも足取りは確かにティシアが詰め寄ってくる。その姿に、男は未来に向けたものとは違う歡喜に満ちた表情を浮かべた。

「こうでなくちゃ。あれで終わりじゃつまらない、こうでなくちゃ」そう言つて、今度は親指と人差し指を使って宙を弾く。

先程よりも強い風が、今度は部屋全体に吹き荒れる。

水で満たされた器はひっくり返り、ソファは鈍く軋み、そこかしこに配置された小机などのさほど大きくない家具は横倒しになる。

未来や女官もその場から飛ばされて、床に倒れ伏す。

室内に吹き荒れる風の中、男とティシアだけが立っていた。

男が風の中服も揺らさず悠然と笑っているのに対して、ティシアは赤い髪を風に煽られ逆立たさせており、爛々と光る瞳と相まって鬼気迫るといふ形容が相応しい。

風に抗いながら、じわじわと確実に距離を詰めてくる彼女の姿が、ぼんやりと光を纏っていた。

朝方、あるいは夕方の空のような、赤とも青とも黄ともつかぬ曖昧な色。ばらりと広がる髪の色に、どこか似ていた。

空だった手が髪に触れて、髪に挿していたもう一本の簪を引き抜く。

もう一方の手に握られている物と全く同じ細工、同じ石。ただ、

こちらは燻したような銀色だ。

簪が抜かれたことで髪は元の形を完全になくし、さらにざんばらに広がるが彼女は気に留めた様子もなく、飾りの部分を握りしめた。その挿し口の先はただ髪に挿すだけにしては尖り、上手く扱えば息の根を止める事も出来よう。暗器の属性も備えていたわけだ。

そんな姿に、男は実に楽しそうにままた軽く跳躍した。同時に、それまで我が物顔で荒れ狂っていた風が嘘のように止む。

その変化に即座に対応し、よろめきもしなかったティシアに男はますます笑みを深め、空中から抜いたような唐突さで現れた剣で斬りかかった。

ティシアは慌てず、その斬撃から身を逃す。ただ、その動きはどこか精彩を欠く。

やはり、全身叩きつけられる衝撃は相当だったのだろう。

しかしそれでも、心臓目がけて突き出された刃を簪二本で止め、ほんの少し横へ逸らす手並みは流れるようだった。

そして剣の勢いが殺されぬ内に床を蹴り、簪を軸にその上で回転。その際簪の一本を剣に噛ませて床を蹴った勢いと重力に従う体重任せで引き、僅かに向きを変える。

男がそれに対応する微かな隙を逃さず、袖の中から取り出した短剣の一閃を不可思議な輝きを放つ石と薄く伸ばされた金物で彩られた首筋目がけて放った。その動きは読まれていたらしく避けられたが、どうしても隙だらけになる滞空時を凌ぐだけの牽制にはなる。

床に足を着けると同時にバネのしなやかさで彼女は剣をかいくぐり、男へ一気に肉薄した。

そして、茫と輝きを纏う短剣と簪を掌中で交差させた手を、男の首元へ叩きつけるように押し当てる。飾りに当たったのか、耳障りな高い音がした。

いつの間にか開けていたもう一方の手は、刃に残したままの簪の飾り部分を掴んで、刃が振り切られることを防いでいた。

あまりに素早い動きに、身を起こした未来と女官は目を瞠るばかり

りで、呆然と事の推移を見送るばかりだった。

「上手くなつたな。ちょこざい小細工は上手くなつたな」

剣の動きを妨げられ、金属を切り裂く鋭さを首に押し当てられて血を流しながらも、男は余裕というものを崩さない。

楽しげにとんとんと足先で床を叩いている。そこにも装飾品を着けているのだろう。さらさらと金属が擦れ合う音がした。

「大人しく投降しろ。目的を言えば、命までは取らない」

テイシアの言葉に答えないまま、男は人心を逆撫でるような調子で声を繋いだ。

「だが甘い。お前は相変わらず甘い」

歌うような調子で言い終えた直後、男の雰囲気さがらりと変わる。一瞬にして人が入れ替わつたかのような、劇的な変化。

嘲弄するような笑みを浮かべていた唇は生真面目そうに引き結ばれ、落ち着きなげに音を立てていた足は動きを止める。外見上の変化は、それくらい。

しかし、全体的な印象はそんな部分的な変化では済まなかった。先程までを動とするなら、今はさながら静。

周囲に対する空気さえも変えながら、男はどこか重たげに口を開いた。口調どころか声の調子さえも全く違っていて、抑揚なく淡々としている。

「躊躇せずに、俺の喉を掻き切るべきだったんだ。あんたはやはり、甘い」

間近で聞いたその声に、それまで感情を見せなかった顔が一瞬にして砕け落ちた。

その下から現れたのは、驚愕に揺れる一人の女。未来が知る、どこもなく人を食ったような態度など、どこに見出しようもない。

「まさか……」

刃を突きつける手が、刃を押さえる手が、戦慄く。震える唇からころんころんとこぼれ落ちる言葉は、無惨なほどにひび割れていた。首の傷が広がるのも構わずに男はティシアに顔を寄せて、剣を握っていない手を顔に押し当てる。

仮面を外すような仕草をしてから、その手は目の前の相手にだけ見える角度で長い前髪を掻き上げた。

それが、決定打。

「っ、どうして」

それだけをやっと呟いて絶句した彼女に、髪で再び顔を隠した彼はほんの少し唇を歪めてみせる。

泣いているように不格好で、筋肉の使い方忘れてしまったようにぎこちない、見る者に痛みを感じさせるような笑みだった。

「あなたが分からなかったのも無理はない。俺は変わった。変わらすぎた」

噛みしめるような言葉の間に一歩、二歩と下がる。先程確かに付いた傷は消え、滲んだ血だけが肌と飾りを汚していた。刃は、追っては来ない。

「あんたも、昔とは違う。あの頃のあんたではなくなった。だから、仕方がない」

寂しそうで悲しそうで、やるせなさに溢れた、それでいてどこか皮肉っぽい言葉。その皮肉を向けられているのは、ティシアかそれとも彼自身か。

男は刃を顔の前に翳す。

短剣と呼ぶには刃渡りがあり、普通の剣にしては尺が足りない、どちら付かずの中途半端な代物。

それでも鋭利な輝きは遜色ない磨き上げられた銀面には、鼻で笑おうとして失敗したような不格好な顔が映っている。

やがてその口元から表情が消え、微かに腕が上下して。

剣を握る指に嵌められた指輪が擦れ合う響きが、その時だけは鎖の軋りのようだった。

「鬱陶しい。お前に居られると鬱陶しい」

独特な言い回しに戻りながら、その手は剣を振り上げる。

「だから消える。用済みになるまで出遅れるのを笑ってやる、だから消える」

唇に笑みが戻った。

楽しげに歪みきった、どこかが壊れた感情の発露。

「悔しがれ。主の傍に在れないことを悔しがれ」

剣が、ただ目を見開くテイシアに向かって躊躇いなく振り下ろされた。

胸が痛かった。心が痛かった。

男の、テイシアの、言葉に言い尽くせないほどの痛みが分かる。

それが、何故なのかまでは分からない。

ただ痛みだけが、悲しいほどに伝わっていた。

何も考えられないまま、痛みの理由も思いつかないまま、未来は対峙する二人を見つめていた。何を話しているかまでは聞き取れない。

しかし、彼等の間に流れる空気が険悪な物で無くなったくらいは、人生経験をさして積んでいない未来にだって分かる。

そう言えば、男の方は初めからテイシアに対して何か思うところがあるようだった。そして今の状況を見るに、二人はやはり顔見知りなのだろう。

少し距離の開く二人。

その姿に、ぼんやりと他の何かが被っているような気がしたのは、その時だった。

目を瞬かせても擦ってもそれは消えず、むしろさらに濃く、鮮やかに全貌を明らかにして行く。同時に、聴覚から急激に音という音が消えていって、痛いほどの静寂が耳を支配した。

気付けば、目の前にテイシアと見知らぬ男が立っていた。穏やかならぬ表情で、何か口論をしているらしい。

らしい、というのは、全く音が聞こえないから口の動きや表情からそう推察したに過ぎない。無声映画でも見ているようだ。

ただ、普通の無声映画と違うのは彼等が鮮やかに色づいていると

いう点。自分の耳から聞く力が失せているから何も音がしない、という形容も適確かも知れない。

白と紫の美しい服を着、険しい表情をしたティシアを見上げて、未来はふと違和感を覚える。

その顔をまじまじと見つめて、理由に気付いた。顔立ちが違う。基本の造りは同じだが、柳眉と形容した方が良い眉に、高く細い鼻、やや幼い顔の輪郭……そんな細々とした要素が、未来の知るティシアと異なっていた。

髪や目の色は変わらないが、ゆるく波打っていた髪は真っ直ぐにその顔を包んでおり、背を滝のように流れ落ちている。その髪質の如き内心を隠さない表情は少し、先程の驚きに似ていた。

一方の男は、短く切り整えられた金の髪に青い瞳をしていて、目の彫りこそ深いはまだ少年の趣が強い。

白い服の上に黒い革衣を当てる、飾り気のない装い。その中で腰に下げた一振りの剣の、楚々とした美しさがよく映えた。

すんなりと伸びた手足は長くしつかりとしていて、野生の獣のようになやかな力強さに満ちている。まだ長じきらない幼さを印象に振りまきながら、決して揺らがぬ芯が既に在った。

ティシアによく似た女が一際鋭い眼光を男にくれたかと思うと、さつと身を翻し、霧に包まれるようにして消えた。

残された男は眉を寄せて、ほんの少し笑う。悲愴な覚悟を固めた貌だった。

その笑顔に既視感を感じたと同時に、未来の意識は急にぐいつ、と引つ張られ、そして何も分からなくなった。

次に意識が明確になった時、未来の目に映ったのは呆然と立ち竦むテイシアと、歪んだ笑みを浮かべて剣を振り上げる男の姿。

「悔しがれ。主の傍に在れないことを悔しがれ」

嗜虐的な響きをたつぷりと含ませた声が、無音に慣れかけていた鼓膜を強かに叩く。

「だめ……」

漏れた呟きは、とても微か。男どころか、未来のすぐ近くにいる女官にだって聞こえていない。ざわり、と胸の奥で何かが鎌首をもたげる。

彼女の声も届かぬまま無情に、勢いよく、剣は振り下ろされた。

その軌跡の先に居るのは ティシア。

何かが、堰を切ったように喉元にせり上がる。止まらない。

「ッ、だめッ！」

それは言葉。

何の力も持たない、聞く者が耳を貸さなければ虚しく宙に消えるばかりの、形無いもの。

しかしそれを引き金に、事態は一変した。

テイシアに届く、本当に僅か手前でぴたりと空中に静止した刃。

まるで良く出来た絵のように、ぴくりとも動かない。

「な、に」

男の声に、初めて狼狽が混じった。

同じ言葉を重ねる、どこか滑稽な口調を使うことも忘れて。

未来は目を男にひたと据えて逸らさないまま、立ち上がった。口から迸ったそれが、男を捕らえている事を感じる。

「彼女に手を出す事は、絶対に許さない」

ひりつく喉を無視しながら、未来はゆっくりと二人に近づく。

本当はもつと素早く近付きたかったが、綱渡りをするように細心の注意を払わなければ今を壊すと本能のどこかが理解していた。今の状況を作っているのが自分だと、彼女は解っていた。

テイシアに近付き、軽く肩を揺する。

まだここではないどこかを見ていた夜の瞳が、夢から覚めたように頼りない風情で未来の顔を捉える。二、三度瞬きしてちらりと視線を動かし、状態を把握したようで、そろりと剣の下から抜け出す。その際、一度も男の方を見なかった。

テイシアが変わって対峙しながら、未来は震えそうになる体を叱咤する。

こうして向かい合ってみると、男の放つ圧迫感をより強く感じる。今は動けないと分かっているが、それでも身が竦む。

自分でもよく分からないまま使っているこの力が、いつまで保つのかは分からない。

まだ大丈夫な気もするし、次の瞬間には前触れもなくぶつり途切れるのかも分からない。未来にとっては、そんな、得体の知れない力だった。

普段ならば絶対に縋りたくない危うい橋だが、今はこれしか頼れるものが無い。

動くな、動くな、とそれだけを念じながら震える手を握り込んだ。「驚いた。こんなにも突然力を顕現させるとは驚いた」

つい先程滲んだ驚きはもうなく、どこか面白がるように跳ねる口調。

心底楽しそうにつり上げられた口端は、背後で突如歪んだ空間の中から神速で伸びた剣を首元に突きつけられても、変わらず笑っていた。

「気を散じるな！」

突如現れた異物に意識が散ろうとした刹那叩きつけられた言葉が、

未来の意識を縫い止める。心音が乱れた。

男の手が、少し動いてまた止まる。

「早いな。これなら思っていたより早いな」

触れるか触れないかのぎりぎりの位置で止められていた刃が、肌に当てられる。男の背後で、刃のそれと似て非なる銀色が揺れた。

「それ以上無駄口叩いたら、その首落とすよ」

手袋に包まれた手が、剣の切っ先を掴んで逃がさないように輪を作る。そこで初めて銀色の主　ユリウスが、未来達に顔を見せた。

「やってみる。出来るものならやってみる」

「そう？」

挑発するような男の言葉にユリウスは表情を変えないまま、剣に込める力を強めた。指の幅二つ分ほどに金を薄くのばし、幾何学的な模様の合間に何かの石を埋め込んだ首飾り以外は何も着けていない首に、再度赤が広がった。

驚いたのは未来だ。ティシアを傷つけ、彼女を殺そうとした相手だというのは分かっている。

それでも、殺すなどという考えはほとんど頭に浮かばなかった。

また気が散りそうになる。抑える。男の手がまた動く。ほんの少しだけ意識を割く。鼓動がうるさい。剣を握った手が少し光を纏った。止めなければ！

「やめ」

何に対してなのか制止の言葉は、途中で途切れる。

心臓が、痛みを伴ってはね上がった。

意識が、千々に乱れる。もう、抑えきれない。

苦しげに胸を押さえる未来をティシアが支えると同時に、急激に力が膨れ上がった。

ユリウスが後ろに飛び退って何か叫ぶと、男の足元から氷の柱が立ち上がり、瞬く間にその身を氷の中に封じ込めてしまう。

「三人とも出来るだけ離れて。出来れば外に出て」

男を封じた氷を睨み付けながらユリウスは短く言った。その口調はいつも通りだったが、握っている剣は高熱に当てられたように無惨に溶け曲がり、手袋が焼け落ちた手はぶすぶすと煙を上げている。両手に火傷を負った手をそのままに、涼やかな声が詠唱を紡ぐ。

言葉が満ちる度に室内の気温は下がり、白銀の霧が立ちこめ、氷柱に積み重なって、男の姿を白く覆い隠す。

氷中に在ってなお封じきれない力の奔流。その熱を、僅かにでも削ぐために、氷を出来る限り早く分厚く。

しかし、相手の速度はそれを遙かに上回った。

ガラスが内側から爆ぜるに似た嫌な音を立てて、巨大な氷柱に罅ひびが入った。

「伏せて！」

その叫びに、罅が相次いで生じる硬く高い音が重なる。見る見る内にそれは全体に手を伸ばし、大きく深くなつて。

急かされて顔を伏せるその刹那。未来の瞳に、一際大きい割れ目が耐えきれずに裂けるのが、それを見据える白皙の面に玉の汗が滲むのが、鮮やかに焼きついた。

肌を焼くような、熱を帯びた突風が吹き抜ける。

ただの一陣で物という物が薙ぎ倒され、石と土とで造られて頑丈なはずの壁が軋んだ。

風が止み、やっと上げる事が出来た彼等の視線の先で、体の自由を取り戻した男が全身をうっすら発光させながら立っていた。手に握られていた剣は、もうどこにも見当たらない。

胸郭の内では暴れている心臓の痛みには耐えながら未来は、信じられないという面持ちで先程まで自分が動きを止めていた相手を見つめる。伏せるのが遅れた目が乾いて痛かったが、瞬きさえ忘れていた。

「急ぎすぎた。今日は急ぎすぎた」

自分に言い聞かせるような言葉を呟いて、前髪で上半分を隠した顔が未来に向けられる。楽しげな、やはりどこか歪んだ笑みを浮かべる唇がゆっくり言葉を紡ぐ。

「連れて行く。今度は邪魔をされても必ず連れて行く」

そこに込められた紛う事なき本気に、未来は背中を寒くする。肌に触れる空気は異様に熱いのに、背筋だけが氷のように冷たくなった。

宣言したからには、男は必ず事を遂げるだろう。そう思わせる空気があった。疼きが変わろうとしていた痛みがぶり返したように思っ
て、きつく胸元を握りしめる。

「私に、そんな価値はない」

「お前が決める事じゃない。その力をどうするかも、何に使うかも、お前が決める事じゃない」

傲慢以外の何物でもないその物言いも、目の前の男が用いれば途端に真実じみてくる。

目を見開いている彼女に嘲笑を投げつけると、男は身に纏う光を強めた。

強くなつていく光の中でほんの少し振り向き、ユリウスと何故か扉の方を見つめて、小さく笑みを零す。

歪んでいない、柔らかな感情を宿した、別人のような微笑。先程テイシアに向けていた表情に自然さを加え、無理を省いたならこういった物になるだろうか。

どこか悲しげではあるが優しい輪郭を描くその唇が意志を持って、言葉を象る。

音にはならず、口の動きだけで現されたその内容を知る者は、当人以外は誰も居なかった。

光が一際強くなって、室内にいた者全員の目を灼く。

それが収まった頃にはもう、男は部屋のどこにも居らず、ただ熱の残滓が肌を逆撫でするばかりだった。

周囲を探り、もうこの付近にあの男の気配が無い事を確認すると、ユリウスは大きく息を吐いた。剣が手から滑るように抜けて、鈍い音を立てる。

「もう使えない」

困ったように笑い頭を掻こうとして、両手が使い物にならないことを思い出したらしく腕を下ろす。その動きが、未来を打ちのめした。

未来を支えているティシアも、そこかしこに傷を作って夜空のような黒衣をぼろぼろにし、その数だけ全身を朱に近づけている。

ユリウスに駆け寄った女官も、小綺麗だった身なりがすっかり汚れていた。

我に返ったとは違うが、異様なまでに静まり返った。それも嫌な方向に。心境で、未来は室内を見渡す。

初めに割られた窓から入る風で無惨に裂けたカーテンはバタバタとはためき、壁にはそこかしこに亀裂。割れ物は尽く粉々で、家具は全てがひっくり返っている。

敷き詰められたタイルは、ダガーで割られた物の他、半数以上が壊れ、あるいは床ごと浮き上がり。嗚呼、もう最初から直した方が早そうだ。

その上に敷かれていた絨毯も見えない。男が立っていた所など絨毯自体が消失し、完全に炭化していた。

この有様を思えば、まだ命があるだけ良かったのかも知れない。未来はぼんやりとそう思いかけてユリウスをもう一度見、違う、と内心で頭を振る。行動に移すだけの気力は、もう残っていないかつ

た。

良いわけがない。

未来の方から見えるユリウスの手には、傍目にもそうと分かる無惨な火傷。自分が力を発現するのが少しでも遅れていたなら、ティシアの命も確実に無かった。

まだ名も知らない女官も、無事で済んだ保障は無い。

助かったのはあくまで結果論で、多分に幸運が働いた結果に過ぎない。次も運に助けられると期待するのは、あまりに愚かだ。

そして次はきつと相手は手加減せず、途中で止めることもしないだろう。間近で感じたあの男の気配を思い出し、心臓がまた一つ波打った。

口の中が急激に乾く。

(また、あれと対峙しなきゃいけない)

連れて行く。今度は邪魔をされても必ず連れて行く。

(わけ、分かんない)

自分が一体何だというのか。

分からない事ばかりが増えて、何が何やらさっぱりだ。

周囲の状況ばかりが目まぐるしく変化して、まるで心が置き去りにされた感覚。

人目を憚らず泣きたいような叫びたいような、ひどい気分だった。それでも身体は、心は、感情に着いてこない。疲れていた。無性に少し目を上げれば、ユリウス達が硬い表情で何か話しているのが見える。ふと声を掛けられて答えていたティシアも、微笑一つ浮かべていなかった。

緩みすらしらない顔に、不安が煽られる。

ティシアとは昨日、ユリウス達とだつて一昨日に会ったのが初めてなのに。既に彼等の笑みが、一種の精神安定剤となっていた。

(ねえ、少しでいい。笑って?)
その願いはただの我が侘と知っていたけれど。

いつもの微笑がちらとも過ぎらない端正な横顔を見ていた未来の目の前が、ふと暗く狭くなる。

「え?」

声を出す間もあらばこそ、くらりと視界が回った。全身から見る見る力が抜けて、自らを支える腕にもたれかかる形となる。

見る見る狭まる視界が驚いたように目を丸くした誰かの顔を捉えたのを最後に、未来は意識を手放した。

いきなり腕の中でくずおれた未来にテイシアは支えるのを諦めてそのまま床に降ろし、その頭を膝の上に乗せる。駆け寄った女官と手際よく脈などを確認して、気を失っただけだとひとまず安堵した。「多分、あの力を使った疲れが出たんでしょう」

少し危なっかしい足取りで近付いてくるユリウスにそう告げると張りつめていたその顔が少し緩んだ。

「なら、良いんだけど」

「それにしても、転移魔法が使えましたか」

その言葉に、うん、とユリウスが頷く。

「完全に結界が壊される感じがしたからね。まあ、今回はそれだ助かった。素早く二手に分かれられた」

「二手、ですか」

「アレクシスとフィオルがね、セレナを呼びに行ったんだよ。この神殿で怪我に一番詳しいし、それに」

そこで言葉に覆い被さるようにして、何か炸裂するような派手な音が響き渡った。

何事かと三人が扉の方を見ると、アレクシスが常の無表情で立っている。その横でフィオルが、少し困ったような顔だ。

有ったはずの扉は……無い。

開けられたわけではなく、まさしく影も形もなくなっていた。扉縁からして見るからに歪んでいたの、そもそも普通に開けられる筈がないのだが。

大方、アレクシスが魔法を放つてその威力に耐えきれず、跡形も残さないで吹き飛んでしまったのだろう。

三人がそう結論づけたところで、フィオルの背後からひよこ、とセレスティーナが顔を出した。

部屋の中をひとしきり見渡した後、うわあ、と呆れだか驚きだか判別のつかない声を漏らす。それから四人、正しくはユリウスの手を見るとその表情はさっ、と硬くなってそのまま駆け寄った。

未来の方も気遣わしげに見はしたが、安心させるように笑って振られた頭と短い説明に、ユリウスに専念する事にしたようだ。

汚れることも構わず膝を折り、火傷を負った手には触れないようにしながら診ていたその目が、見る見る厳しい物になる。

「痛むの？」

「手の甲は痛いよ」

その答えにセレスティーナは、薄紅色のそこが真っ赤に染まるほどにきつく唇を噛みしめる。

「それって、最悪よね」

「認識してるよ」

ユリウスの手は、ほぼ全体が重度の火傷の状態だった。

手の甲はまだ人間らしさが残っていたが、掌はもう、全くと言っていいほど原形を留めていない。ほぼ全体が黒く焦げ、そこからはもはや焼けた生き物の臭いさえ無い。炭の臭いだった。

そこだけ別の物にすぐ替えたような、不気味で現実味の薄い光景。

勉学全体にはさほど熱心ではないセレスティーナが、一心に関心を傾けるのが医学だ。それは、彼女が身の内に宿す陽の神子として

の力が関係している。

医学書を読み漁り、優秀な医師の話は他学の教授のそれより熱心に聞く彼女は、ユリウスが手に負った火傷がどの程度の物かも、よく理解していた。

痛みが、あるはずもない。

痛みを認識する神経自体が、残っていないのだから。

セレスティーナは小さく息を吸い、揃えて出されていた手に掌を翳す。そこからぼう、と温かな金色の光が溢れ出して、ユリウスの手を包むように広がる。

少しの間無言だったが、不意に金色の瞳が厳しさを増した。金色の光でユリウスの手を覆うことは止めないまま、強い眼差しを上げた。

「誰と……何と戦ったの？」

「俺が居合わせたのは本当に短い間だったから、なんとも言えない。ただ、人ではないようだった。ティシア、君は何か分かったかい？」

「いえ、私の方も人外存在である、と言うことくらいしか」

そう淀みなく答えた副隊長の双眸に意味ありげな光を見て取りはしたが、ユリウスはそれには触れずそっけなく頷いただけだった。他に何か知っているだろう女官は乱れた未来の髪をほどいて簡単にまとめていて、詳しく話す様子はない。

ただ、少し顔を上げて会話に割り入る非礼を詫びると、未来をどこか別の部屋に移したい旨を告げた。

「そうね。女の子をこんな所に寝かせてはおけないわね。ええと…

…部屋の選定任せても良い？ フィオル」

「……承知しました」

手袋をはめつつ進み出た彼が、ふと思い出したように一巻きの包帯を取り出す。伸縮性のある素材で、患部に当てる方にはどうやっているのか、ゼリー状の物質が固定され、潤いが保たれるようになっている。

「よろしければ使って下さい。その様子ですと完全には治らないよ

うですし、普通の包帯では剥がすとき難儀でしょう」

そう主であるセレスティーナに言うと、フィオルは横に立っているアレクシスに包帯を渡す。胡散臭げにそれを見下ろす彼に、フィオルが続けた。

「普通に包帯や脱脂綿を当てるより治りは早いです。いずれ量産出来るようになれば騎士団に支給しますから、その点は信用して下さい」

渋々うなずいた年下の上司に小声で何やら囁きかけると、彼が何か言い返すより早くフィオルは身を翻し、未来の体を軽々と抱き上げる。

女官に着いて来てくれるように頼むと、残りの面々に軽く会釈して踵を巡らせ、部屋を出て行った。

囁かれた言葉が気に食わなかったか、どことなく不機嫌な空気を発散しているアレクシスをティシアがからかい、さらに不機嫌の度合いが増す。それでも赤い瞳はユリウスとセレスティーナに据えられたままだった。

ティシアもすぐに真顔になって二人を見守る方に回り、部屋は途端に静かになる。

そんな二人の様子を見てから、ユリウスは自分の手を癒し続けているセレスティーナの顔を見下ろした。華奢な掌から溢れる光は、強さをいや増している。

普段ならば、からかいからかわれの二人のやりとりに笑みを零す事も珍しくないのに、小さな唇は綻びもしなかった。額に滲んだ汗が、その真剣さを無言の内に物語っている。

「直に触れたのは一瞬だけ。それ以上だったら両手無くしたかもね」
思い出したように落とされた呟き、そこに含まれる安堵に反論しようとかセレスティーナが顔を上げるが、血の気の失せた顔に何も言えなくなつた。感情と共にこみ上げそうになる言葉を喉元で押し留め、無言で治療に専念した。

炭化した皮膚がぼろりと落ちた所で、光が消失する。

「今日はこれが限界。明日、もう一度やるから」

肩で息をしながらセレスティーナは立ち上がり、ユリウスの目を真っ直ぐ見据えた。

華やかな美貌は変わらないが常の明朗さを欠き、冴え冴えと人を寄せ付けない空気を放っている。

「アレク、包帯巻いてあげて」

水晶のように美しい、しかし硬質な響きにも常ならぬ気配が立ちこめている。

ユリウスの手は、火傷は無くなったが、所々骨の白が覗く赤い断面を晒していた。肉もあまり再生されていない。皮膚など以ての外だ。

別物のような違和感は失せたものの、ある意味先程までより生々しく傷らしい。

「うわ、ひどいねえ」

やけに軽い調子で嘯くが、その眉間には隠しようがない痛みが刻まれていた。包帯が始めに触れた瞬間、その皺が深くなる。

アレクシスが包帯を巻いている間も、セレスティーナはユリウスから視線を逸らさない。そうしていなければ覚悟が揺らぐかのよう

に。
包帯を巻き終え手を離す一瞬、アレクシスは躊躇った。その迷いを感じた、包帯の白に指の先まで覆われた手が軽く胸を押す。青と赤が交錯し、青が先に逸れた。

「君の説明を聞きたいな。セレナ」

ユリウスの言葉に、自然セレスティーナに視線が集まる。硬い表情のまま、彼女は口を開いた。

「肉は完全に駄目になってたけど、まだ無事な手の甲から因子を持つてきて再生させたわ。骨の方は表面が焦げただけだったから、見た目ほど酷くはなかった。力の残粒子回収してて感じたんだけど、

火傷を負わせた相手、神の眷属か龍の血が混ざってるのかも知れないわね。で、ここからが本題」

感情を窺わせない声が淡々と言葉を紡ぐ。襲撃した者について推測を述べる際、一瞬言いよんだのが不可解ではあったが。

ユリウスは黙って聞いている。セレスティーナは続けた。

「その残留子ね、完全には取り除けないの。深く入り込んでいると
いうか、結合してるといとか……詳しくはまだ分からないけど、無理に除いたら今よりひどい状況になる事は確実ね」

「具体的には？」

「十中八九手が千切れ飛ぶわ。それくらい密に噛み合ってる」

短い問いに、やはり簡潔に返る答え。そこに漂う血生臭さに、室内の空気さえ幻の鉄の臭いを孕む。

幻惑のその香は、刹那の内に割れ砕かれたガラスの間を通り来た夏の風が攫っていった。さら、と風に煽られた銀の髪がその表情を隠すように揺れる。

「じゃあ、一先ずその残留子の方は対処法が見つかるまで放置で良いね？ 火傷だけ治して」

「う、ん……」

「じゃ明日、よろしくね。俺は一足先にメイデさんに謝ってくるから」

晴れない顔色で曖昧に頷いたセレスティーナにユリウスは気付いていない振りで、やはりどこか危うい足取りで部屋を出て行く。その後ろ姿を厳しい眼差しで見送ったアレクシスが軽く己が片割れの肩を叩き、白を纏ったその姿もやけに暗く見える廊下へと消えた。

二人が去った暗がり、いやに明るい部屋から眺めながら、金色の瞳が憂いを帯びて瞬く。

「やっぱり頼ってはくれないのよね」

秘やかな落胆を、部屋の状況を一つ一つ確認していたティシアが拾い上げる。掌に隠した物もろとも、そっと握りしめた。

「私達にとつては、あなた方はやはり護衛対象ですから。頼るよりは頼りたいのです。支えられるより、支える存在でありたいのですよ」

セレスティーナを見ないまま、粉々に割れた陶器の破片をつまみ上げ、頭を振る。口の中で、どれくらい給料さつ引かれるかしら、と呟いた。

「あなた方が負っているものは、私達とは比べ物にならない。代われないのですから。せめて……」

そこから先は言わないで、ようやくティシアはセレスティーナに振り向いた。

「そろそろ行きましようか」

黒衣を纏った姿が驚くほど足音無く近付く。

さり気なく出された腕に思わず手を伸ばし、途中ではっとしたように引つ込めて、陽の神子は掌で汚れを払う要領で軽く膝を叩く。

そのまま、何気なくを装い壁や物を伝いながら外へ向かう金髪に、ティシアは目を細める。負けず嫌いで弱みを見せたがらないのは、彼女も同じなのだ。

一息吐いて思い出した痛みに眉を寄せ、自分も人の事は言えないかと嗤う。戸枠に手をつき呼ぶ声に応じ、一步踏み出した。

宵闇の深さを宿した瞳が、ふと壁を一瞥する。

自らが叩きつけられた跡が残るそこを、忌ま忌ましさとは僅かな感情の揺れる眼差しで睥睨した。

かと思えば一瞬で微笑を取り繕い、足音を立ててもう一人の主君に駆け寄ると、いつもの調子で二つ三つ軽口を零して笑った。

「アインマール様、どのような部屋がよろしいと思われませんか？」
部屋を出てすぐ女官が問いかけると、未来を抱きかかえたフィオルは少し考えこんでから、条件を挙げ連ねる。

「あまり豪華すぎる部屋は除きましょう。そして、駆けつけるのに時間が掛かりすぎるのも良くない。人の入りがあまりに少ないのもいけないが、さほど制限されていない区域も避けた方が無難ですね。時を止める力でしたか、それを知られる可能性は出来る限り下げべきだ」

かなりの難題だが女官は困った顔一つせず頷くと、フィオルを先導して歩き出す。その身なりは、先程に比べてもうずいぶん整えられていた。

服の破れてしまった部分はどうにもならないが目立つ汚れは落とされているし、髪はこの短時間で見苦しくない程度にはまとめ直されている。

万一を想定し、主立った物以外は迷路のように入り組み、これと違って目印も無い廊下を迷いもせず進んで行き、やがて女官はある扉の前で歩みを止めた。

「第二図書館に知識を求めにいらっしやった方々が滞在される部屋の一つです。訳ありの方が少ないので人が通りにくい仕様となっておりますが、有事の際は駆けつけやすい構造となっていたはずですね？」

その説明に、フィオルは感嘆混じりに頷く。

「やはり優秀だな、ユードリア。私は、図書館までは頭が回らなかった」

「勿体ないお言葉です」

双神宮には、公に開かれている図書館が二つある。

一つは一定の手順を踏めば、誰にでも無償で開放されている第一図書館。

もう一つは、身分の高い者や専門的な知識を必要としている者のみが入室を許される第二図書館。こちらは書庫の性質柄、面倒くさい手続きを複数経なければ外部の人間は入れない。

前者は大抵多くの人で賑わっているが、後者は利用する者が少ないのでいつも静まり返っている。

迷い人は、この世界の事を何も知らない。

会話は特殊な術式を刻んだ腕輪で支障ないが、文字の方は一から覚えなければどうにもならないし、最低限の知識や常識も学ぶ必要がある。

知識や常識は普通に生活している間に自然と身に付いていく場合も多いが、言葉の方はそう簡単ではない。

字の形も読みも、場合によっては文法だって違うのだ。
レファレンディアには幾つも言語があるが共通語はあって、大部分の迷い人はまずそれを覚えさせられる。

普通の迷い人であれば第一図書館でも問題なく言葉を学べるが、名も無きあの方の残り香を濃く纏う者はひっそりと第二図書館でひっそりと学ぶ。それはいつの頃からか、双神宮内で定められた決まり事だった。

女官 エデナ・ユードリアが扉に手を掛けたところで、その場の空気が突如緊張感を帯びた。その緊張が最も凝った空間が、前触れ無く歪む。

その歪みは見る見る内に収縮し、そして完全に風が瞬間に、何もなかった空間から一つの人影を押し出すように出現させる。

自然の物ではない風に髪を揺らせて現れた彼は、伏せていた臉をゆっくりと開いた。

現れたのは、春の翠。

長く厳しい冬を越えた先に、競って世界を染め上げる草達の生氣に満ちた翠。

その彩が、魔法を使った名残を示す残滓光で、ほんのりと光っていた。

美しさよりは英明さと冷厳さが先に立つ線の細い顔立ちが、表情乏しく身構えた二人を見つめている。その白い面に、彼等は覚えがあった。

エデナは慌てはしないが素早く姿勢を正して深く礼をし、フィオルは未来を腕に抱いたまま頭を下げた。

「で……アンテーゼ様、お久しゅう御座います」

それだけを告げたフィオルや、黙って頭を垂れているエデナを当たり前前の様子で見下ろすと無感動に、顔を上げる、と形良く整った唇は言い捨てた。

「やはりその娘関係していたか」

魔法の残滓が消えてなお不思議な煌めきが覗く眼差しが未来に注がれている。答えを期待していない呟きだった。

黒に近い色合いの地味なローブを翻して、未来達を王都に迎えた男はフィオルに近づく。微かに身を硬くした相手など意にも介さぬ様子で、その腕の中で目を閉じている彼女を見下ろす。

「見れば見るほど普通の娘だな。だが」

それ以上は口にしないまま男は軽く腕を組んだ。その所作はゆつたりとして品があつたが、剣の鋭利さを芯に含んでいる。

鋭利さはそのまま、フィオル達に向けた警告だった。

「精々大事に困うことだ。事が神殿内で収まるなれば我等は牙は剥かぬ故な」

春の温かな色合いに反し、冷たく凍れる輝き宿した瞳に未来を映したまま男は、まだ青年と呼べるほどに年行かない若者は、言葉に不可視の毒を込める。

「全く我等はなんと不自由な身上であろうな。神の存在が近しく、その威を身を以て知っているとこのも、つまらぬ事だ」

流麗な響きで唾棄せんばかりの激情をやんわりと覆いつつ、青年は一度瞼を下ろした。

「なれど」

再び開かれた瞳は、細波一つ立たない湖面のように静まり返っている。

「我等の王に害が及ぶというのなら、我等はその娘に刃を向けよう。静かな、だからこそ本気だと知れる一言。殺意を携えた白刃の如きそれだけを残して彼はフィオル達に背を向け、歩き去った。

暗い色彩を纏った姿が見えなくなると、フィオルはやっと肩の力を抜く。

横に立つエデナが小さく息を吐くのを横目に見てから、眠っている者の無防備さで自分に身を預けている未来を抱き直した。

「まったく、厄介な相手に目を付けられましたね。お嬢さん」

その言葉が聞こえていたわけではないだろうが、フィオルの腕の中で未来が小さく声を上げて身動きする。髪を簡単にまとめている紐に通された真珠が小さく擦れ鳴った。その飾り紐に何か思うところでもあるのか、青みがかった緑の瞳が一つ瞬く。

「アインマール様」

女官の顔となった彼女の呼びかけにフィオルは意識を戻して、開かれた扉の中へ無言で足を踏み入れた。

華美ではないが、手入れが隅々まで行き届いた廊下を、アンテーズと呼ばれた青年は当たり前のように歩いていた。石造りの床の上を、驚くほど足音を立てずに進んでいく。

来た時は転移魔法がまだ辛うじて使用出来る程度の際があつたが、今はもう無理だ。

神官と魔法使い、本来相容れぬ両者の術式を組み合わせ構築されているこの神殿の結界は、神官としての素養を持たない彼が解くには複雑に過ぎるし、強力だ。

他者の協力も得て、破るための術式は完成しているが、主である王が神殿との友好を望む限り、その宝刀が抜かれる事はない。

歩を進めながらもその思考は、その結界を破つた者の正体について傾けられ続けている。

やがてあれは神の手の者だろう、と青年は結論づけた。結界を叩き割られた時、その後感じた力の流れからそう確信したのだ。

種によつては神と同列に並ぶ竜やその血が混ざつた人間の所業かとも思わないでもなかつたが、身近に一人竜の血を顕現させた人間が居る。その考えは却下した。

結界を、一瞬にして破壊した招かれざる者の事を考えていた、やはり招かれざる者の青年は、ふと足を止める。その少し先の曲がり角から姿を現したのは一人の男。侍従の身なりをしている。

これ見よがしに眉を寄せてみせたかと思つと、男はつかつかと青年に歩み寄つた。

「お送りしますので、招かれざる方は大人しくお帰り下さい」

「いつも思うが、伝達が速いな」

「素早く適確が我々の信条です」

早口にそれだけ答えて、侍従は先に立って歩き出した。どうすれば外に出られるか、アンテーゼは知っていたが大人しくその後が続く。

神殿で一般の参拝客が詣でる場所以外を、部外者が一人で歩き回る事は禁じられているからだ。誰何されて貴重な時間を浪費するのは御免被りたい。

人気のない廊下を通り抜けて、やがて侍従はとある厨房に入っていた。

女官や侍従、下位の騎士や神官が食べる食事を作っている所だ。双神宮が抱える彼等の人数分を全てそこで賄っているために、とても広い。

早くも昼食の準備を始めているらしく、あちこちから野菜を洗う音や小気味よい包丁の音が聞こえていた。

「おうジョセ、厨房に入るなんて珍しいな……と、訳ありか」
親しげに声を掛けてきた、同じくらいの年齢の男は、侍従の後ろに立つ青年を目に止めて合点したような表情になる。

「さるお方がお忍びでいらしたんでな、裏口使わせてもらっぜ」
軽く返すと、男は軽く頷いて調理に戻った。

「懐かしいな、ここも」
ほんの少し柔らかさを備えた視線が厨房を見渡す。

「ああ、ここの食堂であなたは初めて温かい食事を口にしたんでしたね。さ、行きますよ」

ジョセに連れられて、アンテーゼは忙しく立ち動いている料理人達を避けながら進んでいく。ジョセは時々声をかけられて、明るく返事をしていった。

やがて小さな扉に行き当たって、ジョセにより開けられる。

「壁沿いに右へ行き、突き当たりの辺りの防壁に抜け穴が一つあります。茂みに隠れていますので、注意なさってください。林に繋がっていますので、出る時は人目はさほど気にせずとも結構です」

「なるほど……良いのか？ 左様な事を教えて」

「ご心配なさらずとも、数日中には塞がれましょう」

その答えに青年はジョセを軽く肘で突いたと思うと、弾かれたよ

うに扉をくぐる。

振り向かない、その背中。

ただの「アンターゼ」として何の責務も負う必要がなく、一番幸福だったであろう少年時代の余韻に未練を見せない、ただ前だけを見据えた背中だった。

扉を閉め、そつと息を吐く男の耳元で、声がしたのはその時。

「知らなかったわ。そんな所に抜け穴が出来ていたなんて」

穏やかによく通る、優しい口調。それでいてどこか皮肉っぽい響きが、額面通りに受け取らすのを拒んでいる。

ジョセは僅かに身を硬くするも、すぐに恭しい動きで指を肩に差し伸べた。

そこへひよい、と留まったのは、一匹の蝙蝠こうもじ。ただ普通の蝙蝠と違い、体が白く、その毛並みは銀色がかっていた。

「あなたに隠し事は出来ませんね。降参です。一時的にその壁を別の空間とすげ替えてあるだけです。一種の召喚魔法ですね。二時間もすれば元に戻ります」

「本当に君は、ただの侍従にしておくのが惜しいわね。ああ本当に、間者でなければ側仕えに引き立てていたのに」

心底残念そうな口ぶりで蝙蝠　月の神子姫の化身は軽く羽根をばたつかせる。

「嫌ですよ。これ以上こき使われるのは。私は出来る限り平凡に生きたいんです。山あり谷ありの日々はもう十分です」

「つれないわね。まあでも、近々面白い事になるから、楽しみにしててよ。では、私は忙しいから」

小さな笑い声を残して蝙蝠は一瞬光を放つと、忽然とその場から消え去ってしまった。

一人になって、扉と向かい合っていたジョセががっくりと肩を落とす。

「面白い事って……つまりは厄介事だろ」

先が思いやられる自分のこれからに、男は深くため息を吐く。招

かれざる客は、どうやら自分の元にも来たようだ。或いは来るのか。

「退職届出して風来坊になって、どこかで野垂れ死にたい……」

後ろ向きにもほどがあるそれが、偽らざる彼の本心であった。

*

月の神子は自室の椅子に深く腰を下ろし、固くその双眸を閉じていた。

僅かに上向いたその顔の前で、何も無い空間が陽炎のように揺らぎ、真黒な穴を開ける。そしてその中から一匹の、全身を淡く輝かす蝙蝠が飛び出してきた。

完全に意識を遮断しているエアリエルの、肘掛けの上に乗せられた手にすいと蝙蝠は乗るとそのまますうつ、と吸い込まれるようにして消える。同時に、銀色の目がゆっくりと開かれた。

「テーゼは相変わらず、か」

覚醒したエアリエルはくすりと笑う。

「陛下はどう決断を下されるかしらね」

どこか笑気を含んだ声で呟いてから、エアリエルは蝙蝠が消えた手を眼前でかざした。

「……………問題は、あの子とユリウス」

吐息のように吐き出して、手を握りしめる。その拳を脛の上に押し当て表情を隠し、深く息を吸って吐く。

「……………あの子の力」

望月が陰るように笑みを打ち消し、何かを恐れているような様子で唇を震わせる。

「止めると進めるだけなら良いわ。でも……………」

拳の下で、きつく目を閉ざした。

小刻みな震えがゆっくりと全身に広がった後、不意にぴたりと止まる。

そして凜と発せられた言葉は、先だつてのそれを完全に打ち倒す強靱^{つよ}さを備えていた。

「いいえ、気に病んだところで現在までに定められた事象は決して覆らない」

手を下ろし、決意に満ちた面持ちを空に晒してエアリエルは立ち上がる。カーテンを引かれてやや薄暗い室内の中でも淡く輝いて見えるほど、その存在は際立って見えた。

「それならば私は、自分に出来る最善を尽くすだけ」

口元に笑みが戻る。そのまま指がしなやかに伸びて、目の前の机の上に置かれた盤上の駒を動かす。

盤面を黒と白に塗り分けたそれは、全体の造型は地球で言うチェスに似ているが、升目や駒の数は将棋に似ている。繊細に彫り込まれた水晶の駒は、夜になれば仄かに光る珍しい物で、さる名匠の手によって作られた代物だ。

向かい側にある銀箔を貼られた駒の一方を一つ前に進め、手前の陣には持ち駒の歩兵を一つ据え。その歩兵を軽く指で回して、月の神子は口端をゆるくもたげる。

「さあ、どのように化けるのか見せておくれ」

身を翻して廊下へと続く扉に向かいながら、銀の瞳をひどく愉しげに細めて笑った。

「お疲れですか？」

急に掛かった言葉に、未来ははっ、として顔を上げた。

白髪交じりの黒髪を丁寧に撫でつけ、アイロンがきちんと掛けられたシャツにシンプルなエプロンを身に着けた男性が、穏やかな笑みを浮かべて立っている。マスターだ。

辺りを見渡すと、よく見覚えのある間取り。

数えるのも馬鹿らしくなるくらい通った、あの喫茶店。

五つあるカウンター席の右から二番目に、未来は腰掛けていた。

茶葉とコーヒー豆の良い香りと、店内に流れる、主の趣味だというクラシックが意識にそっと触れて、馴染む。

いつもなら店内に入ると同時に、無意識にやっている過程を意識し、合点した。

「確かに、ちょっと疲れてるのかも。ごめんなさい、ぼんやりしちゃって」

「ぼんやりするのは決して悪い事ではありませんよ」

そう言いながら彼はお茶を出してくれた。甘くふくよかな香りがふわりと漂う。

「わあ、カモミールですね。久しぶり」

顔を綻ばせて口に運ぶと、香りの他にほんのり優しい甘さが口の中に広がった。

「あ、蜂蜜入り」

嬉しそうに微笑んだ彼女に、彼は満足そうに微笑む。

「ああ、だいたいいい顔になりましたね。最初はずいぶん険しい表情でしたから、少し驚きました」

「私……そんなひどい顔してました？」

「何か心配事でも？」

ぺたぺたと顔に触れる未来に単刀直入で尋ねる相手に、彼女は少し視線を上げてカップを両手で包み込む。どこを見ている訳でもない視線がしばし宙を彷徨った後、カップの中で揺れる黄金色に落ち着いた。二つ三つ瞬く。

「心配というか不安というか……」

まだ考えがまとまらないのか、カモミールティーに口を付ける。

「まだ、よく分からないんです。急に全てが変わってしまったからため息混じりに答えてから、違和感。」

顔を上げて、同じお茶をすすっているマスターを見る。柔らかなカモミールの香り。

記憶のままの、穏やかな空気。

それに浸る事を許さないとでも言うかのように、歪んだ笑みが脳裏に閃いて、灼きついた。

消えない。

薄れない。

意識を逸らせない。

悪寒が、した。

「……夢？」

どちらが、などと自分には聞けなかった。聞くというのはつまり認めるという事で、どちらが本当なのか、認めたくなかった。

俯いた彼女を見て、彼は黙ってカップを置く。

繊細で奥行きのある味わいのお茶を淹れると、俄には信じられない無骨な手が未来の髪を撫でる。整えられている髪を乱さないようにそつと、なぞるように。

ぴく、と震えた華奢な肩を横目に見ながら、そつと口を開いた。

「私はね、今の貴女とそう変わらない頃、故郷を離れる事になったんです。本当に急で、しかも帰り道なんて知りませんでしたしね。不安で押し潰されそうになった時期もありました。今の貴女のように」

頭を撫でられる毎に、未来は自分の心が落ち着いていくのを感じる。

彼は、時々こうやって頭を撫でてくれる。最初に撫でられたのは確か、高校二年の十二月だったろうか。

テストに進路、当時の恋人（同い年）と喧嘩、という流れを経て、ギスギスとした心境で来店した時だ。

お金ももう少なかったたのでその月はもう行かないと決めていたのだが、そんな状態で家族と顔を合わせたくなかった。

怒りと自己嫌悪で既にぐちゃぐちゃで、そのまま家に帰れば爆発する事は火を見るより明らかだった。帰れば、鬱陶しく構い倒されるに決まっているから。

それが自分を気にしての態度と分かっていたが、頭と心は時としてどうしようもなく乖離する。いつもなら軽く怒って済ませられるような事も、軽くて済ませられる自信がなかった。

未来だって、本当に腹に据えかねた時は本気で怒鳴る事だってある。しかし、その時は違う。完全な八つ当たりなのだ。

情けなくて恥ずかしくて、近くに居る存在だからこそ見せたくない醜態。

子供っぽい格好つけたと、頭のどこかでは分かっていた。それでも、見られたくはなかったのだ。

そんなささくれた心境で飛び込んだ店は、何時もと同じ空気で彼女を出迎えた。

特別ですよ、と無料^{ただ}でハーブのブレンドティーと試作品だというアップル・克蘭ブルを出してくれた後、初めて撫でられた。

小さな子供でもないのに、と最初は反発したが、宥めすかされ、いつの間にかその心地よさにすっかり馴らされていた。それで落ちていた事もあって恋人と仲直りし、一緒に初詣に行った。

ちなみに喧嘩の理由は、クリスマスに用事が入ってデートがキャンセルされた、とかそんなだった気がする。

出されたアップル・克蘭ブルはそれ以来気に入っていて、機会と懐が重なれば頼むようにしている。サクサクした素朴な生地に、程よく酸っぱい林檎が堪らない一品だ。バナラアイスなどが付いても良い。

マスターは不定期に、気紛れデザートと称して色んな種類のケーキやクッキー、ゼリーなどを作る。洋菓子がメインだが、たまに和菓子もある。その時は勿論日本茶だ。こちらもとても上手に淹れる。どれもこれも絶品で、常連客の間では人気のメニューである。いつ作られるかも分からない限定メニューなので、けっこう競争率も高い。

その彼とは、故郷で家業を継ぐという事で自然消滅し、今は連絡先さえ知らない。

一方で、マスターとは大学に入ってもずっと付き合いがある。実は名前も知らないのだが、それは些細な事だった。

彼は不思議だ。店に流れる空気と、お茶だけでも人の心をずいぶん和らげてしまう。

そしてその声はいつもすんなりと耳に届き、ささくれて草臥^{くたひ}れた神経をそつと癒すのだ。別に、何か特別な事を話しているわけでも

ないのに。

相手と真っ直ぐに向かい合ってくれていると思わせる真摯だが柔らかな態度が、知らず心を軟化させるのかも知れない。

魔法使いみたいだと客の誰かが言って、本当にそうなら良いですね、と笑う彼の温かく穏やかな喫茶店は、日常に疲れ果てた人々をいつも優しく誘っていた。

耳触りの良い声が続ける。

「でもねえ、人間なんて結局は慣れる生き物なんでしょうね。段々新しい土地にも慣れましたし、良さも分かるようになりました。今でも、故郷が懐かしい事には変わりないですが、死ぬほど帰りたいとは思いませんねえ。ま、あくまで私個人の意見ですが」

「故郷には……帰らないんですか？」

「今さら帰っても、誰が誰かなんてもう分らないですよ。それに、私にとってはあなた達の方がよっぽど近い人ですから」

少し寂しげに笑った所で、手が離れる。

それを少し物足りなく感じると同時に、まるで凶つたように喫茶店の扉が開いた。取り付けられた真鍮のドアベルが、クラシックと不思議と調和する澄んだ音を響かせる。

来店した人物に意識を向けたマスターに、これはしばらく相手をしてくれないか、と未来はカモミールティーを口に運ぶ。冷め始めて、当初の香りは損なわれつつあるが、それでもまだ十分に美味しい。

数口飲んでから、おかしい事に気付いた。

扉が開く音は確かにしたのに、誰も入ってくる様子がない。

マスターを見上げると、思いがけずこちらを見ていた。日本人にしては珍しい灰色の瞳が、後ろを見るよう目配せしてくる。

何だろう、と思ってカップをソーサーに置き振り向くと、光に目が眩んだ。目を細め、手でひさしを作って堪えていると、徐々に慣

れてくる。

やがて、光源である開いた扉の向こうに誰か立っているのを凝らし見るも、よく分からない。ただ、相手が一人ではなく二人だとは見て取った。

小さい方の人影が手を差し伸べる。

その空気には、覚えがあった。

嗚呼、彼等は私を待っている。

あの日、崩れ落ちそうだった私を掬い上げてくれた彼等。

父と母のような懐かしさを覚えた、二人。

思わず椅子から立ち上がって、しかし最後の段階、踏み出す一歩で踏みとどまる。

全身から汗が噴き出したような感覚。血の気が引いていく。

行ったら、醒めなければならない。

向き合わなければならない。

あの顔を隠した男と。

得体の知れない力と。

怖い。こわい。コワイ。

嗚呼……何故、忘れていたのだろう。

自分を喚んだ、声。

喚ばれたとは、即ち役割を課されたという事。

何かまでは分からない。

しかし、きつと逃げる事は赦されないのだろう。

どれほど此処に居たいと願っても、それは愚かな願い事。

「そんなにも気張る必要なんて無いじゃないですか？」

目を見開いて小刻みに震えている未来に、言葉がかけられる。何故か振り向く事は出来なかった。

だがしかし、きつと、いつものように穏やかな顔をしているのだろう。

「出来る事から一つずつやって行ければ、それで進めるんですから今、そんなに背伸びする必要は無いと思いますよ。着実に築いて昇って行ければ、自分の足元に確信が持てます。それで昇りつめた先は存外、恐れる物では無かったりするんですよ？ 一人ではないなら、尚更ね。あなたには、待っていてくれる人がいるんですから」
軽く背中を叩かれた。驚くほどあっさり一步を踏み出す。やけにふわふわする。どこか曖昧な感覚のままでもう一步を踏み出しながら、振り向いた。

灰色の瞳にちらつく、哀しい影。

息を呑んだ未来にちらと目を伏せて。その唇が、何か呟く。聞こえない。

ビリッ、と全身に痺れが走って力が抜け、立っていらなくなる。膝が折れてへたり込んだ先に、床は、無かった。

どこに引つかかる事も留まる事もなく傾いで、体が落ちる。落ちる。

床だけでなく、全てがもう無い。さっきまで確かに居たはずのマスターの姿も、どこにも見えない。

声も音も世界も。

もう全てが、分からない。

悲鳴を上げたのか、そうでないのか。それすら分からないまま闇雲に伸ばされた未来の手は、虚しく空を切った。

彼女を取り巻く空間。明るいのか暗いのか、それさえも定かでない。上も下も左も右も分からなくなってしまうた。

その中でもそれでも何かを求め伸ばした指先が、突如霧散する。

ぱっ、と広がる様は流星群か花火の如き美しさだが、その美しさは文字通り身を損なうのだ。

指が、腕が、足が、消える。消える。

痛みどころか、なにも感じないのが、逆に恐ろしい。

何かを捉えようと腕をばたつかせる。そうする間にも体は、無駄な努力を嘲笑うかのように、不可解な空間の中へ散じていく。吞まれていく。

為す術もなく、四肢が完全に奪われようとした刹那、その腕は伸ばされた。

「全く！ あの方はなんて荒っぽい事をなさる！」

憤りに染まった声と、温かな抱擁。何もかもが定かでない空間の中で、美しい銀色がたなびくのが見える。背中に回された腕が、触れている体が、小刻みに震えているのが分かった。

「ああ、ああ、間に合って良かった」

肉声のその声は、ほんの少し響きが異なっていたけれど。

「こじ開けるぞ」

ほんの少し物言いがそっけなかったけれど。

あの日、自分をすくい上げた声を、聞き誤る筈がなかった。

赤が鋭く揺れるのが見えて、同時に差した一筋の輝き。

見る間に広がる眩さの中で、未来から身を離れた彼女は微笑んだ。いつの間にか戻った手が、きゅ、と握られる。ふわりと全身に温もりが広がった。その感覚に思わず握り返すと、見える口元の笑みが深くなる。

「ありがとうございます……また」

「良いの、私達が出来るのはこのくらいだから」

「返す前に、一つ聞きたい事がある」

彼女の言葉を遮って、彼が口を開いた。厳かに重い響きに、彼女がはっ、と息を呑むのが見える。

「それは」

「黙っている」

追いつがろうとする言葉を切って捨て、彼は手にした剣で光を指し示す。

「あの世界に帰れば、お前は選ばなければならない。それが何かまでは知らんし、知っていたところで言わん。……お前は恐怖を感じているな。戻れば、お前はその恐怖と対峙し、決着を付けねばならぬ。その恐怖と、向き合う覚悟はあるのか？」

「それは……」

未来はぎくりと身を震わせた。相手の顔が見えない事が不安に拍車を掛ける。

「わか……分かり、ません」

無様なほどに声が震える。

彼の得体の知れ無さと、今なお鮮明な恐れと、自分の力への怖れ。他にも様々なモノがどろどろと渦を巻く。

それでも。嗚呼、それでも。

「だけど、私はまだ彼等と一緒に居たいんです。仲良くなりたいて、そう思っただんです」

「その程度で戻るつもりか？ その程度で生きていけるつもりか？」

物静かだからこそ、心の奥底まで覗き込まれているような言葉。鋭く研がれた刃が肌のすぐ上をなぞっていくような、持ち手の心一つで全てが決するような、冷えた感覚。

逃げたい、と思った。

しかし、ここで引いては負けだった。

誰よりも何よりも、自分に対して。

確かに、そちらの方が楽だろう。

最初こそは後悔し、胸の一つも痛むだろうが、いずれ忘れていく。人間とはそういうものだ。

それでも。そちらの方が楽だと知っていても。自分に手を差し伸べた彼等を、無かった事にはしたくはなかった。

手の温もりが、氣遣わしげだがあるがままを受け入れるような眼差しが、そつと背中を押す。

「そうですね、まだこの程度です。私はまだあの世界に行ったばかりで、観光客気分が抜けてない事は白状します。周りの人に本当に恵まれてますしね。……一つ、聞かせてください」

丸く輪を成している光の傍らで、彼は無言で佇んでいる。その沈黙を肯定と取って、未来は尋ねた。

「私が戻った時と戻らない時、どちらが彼等にとって不利益になりますか？」

「どちらとも」

「すごい言葉に、めげずに続ける。」

「もう一つ、聞いても良いですか？」

「質問の多い奴だ」

相変わらず鋭利な声にしかし、質問を否定する響きは感じられなかった。

「私の力は、他の人も持ち得るモノですか？」

その問いに、二人は顔を見合わせる。その表情はやはり、分らなかった。

「お前の恋人、元か。あれも、可能性はあるな」

「……………そうですね」

俺、篠崎好きだよ。

少し照れたように笑う顔が浮かぶ。

忘れていた、忘れようとしていた。穏やかな始まり。初めて見かけた時から気になってた、という言葉にストーカーか！ といつもの調子で叩いて、いつものように返された笑みに何故かまごついた。彼は、ハルとは、同じサークルのメンバーで、結構仲が良かったが、それまでそういう対象としては見た事がなかったのに。

彼との思い出が胸に去来する。

彼等の笑顔と声が脳裏に浮かぶ。

どちらも、もう、捨てられない。

「私、はただ、私の我が侬で、好きな……大切な人達に迷惑をかけるのは、嫌」

「真っ直ぐに顔を上げて二人を見つめ、はっきりと告げた言葉に、彼は呆れたように一息を吐いた。

「まあ良い。お前がその甘さを貰きたいというなら、我等は止めはせん」

ユラユラと揺らぎ、狭まるうとしていた輪の中心に剣を突き刺し、解錠するかのように回した。光が再び安定を見せる。

「疾く帰れ。お前は此処にとって招かれざる者故」

その言葉に合わせたかのように、全身がざわりと波打った。肌がモザイクのように浮き上がったかと思うと、何かに押さえつけられるようにして元に戻っていく。その繰り返し、全身で続く。

その光景にぞっとしながら未来は視線を上げ、彼を見る。剣を引

き、少し向こうを向いた顔の輪郭を隠す赤髪が、光を通して黄金色に見えた。

既視感。

彼女に視線を向ける。それは濃くなった。

何かを言おうとして未来は口を開いたが結局何も言えないまま、彼女に手を引かれて足を踏み出す。

輪の前まで至り、そのまま臆せず一歩足を踏み入れながら、優しい、悲しいほどに優しい響きの声がそつと囁く。

「どうか、あるがままに生きて。それだけが、私達の願いだから。私達に会った事を覚えてはいなくても、どうかそれだけは忘れないで」

手を握る力が少し強くなった気がした。光に遮られて、もう彼女の顔は見えない。

「あなたの軌跡を、君自身が否定してはいけないよ 未来」
最後に変わった口調を不思議に思う間もなく、全てが光に包まれた。

*

ドアベルが鳴った。

常連の客と世間話に花を咲かせていたマスターは顔を上げ、にっこりと微笑む。

「いらつしゃい、晴輝^{はるき}くん」

「……ども」

少し所在なさげな顔で軽く頭を下げると、彼はそのままカウンタ

一席の一つに腰を下ろした。入口から二番目の、定位置。

客との会話を切り上げて、マスターがカウンターの内側に戻ってくる。

「さて、今日はどうする？　いつものを淹れようか？」

「あ……いや、お任せで」

「了解」

マスターがお茶を淹れる間、晴輝と呼ばれた青年は携帯を開いたり閉じたりを無意味に繰り返していた。

その落ち着きのない行為は、湯気の立つティーカップが置かれるまで続けられる。

目の前に置かれたカップにやっと机の上に携帯を置きながら、彼は短く礼を言ってお茶を手を取った。

すつきりとした精悍な容貌だが、栗色の髪と病的なほどに白い肌、浮かぶ表情の柔らかさのせいか、あまり遅くは見えない。良くも悪くも今時の青年だった。

「カモミール……すか？」

かさついた唇を茶湯気で湿らせながら青年がぼつりと問うと、男はにこりと答える。灰色の瞳の奥に、痛みに似た色を隠して。

「そうだよ。君も鼻が利くようになってきたね」

カモミールティーの横に置かれた、クグロフの型で焼いたと思しきふわふわのケーキの皿　生クリームとベリーのソースが掛かっている　を視界に入れ、青年はぱちぱちと瞬きする。そういえば、今店内にいる客の前にも同じものが置かれていた。

「スポンジケーキ？」

「ちょっと違うな。ビスキュイ・ド・サヴォア。フランスのお菓子だよ。ハルくんの口にもきつと合う」

何気なくあだ名で呼んで、くしゃりと髪を掻き回す。

「……俺、生クリーム苦手なんすけど」

少し不満げな彼の言葉に意味深な表情をこぼし、マスターは、ま

あ、食べちゃって。勿体ないから。と笑った。

届けられた報告に、彫像の如く動かなかった“それ”はゆっくりと瞳を開いた。

その内容に満足げに喉の奥を鳴らして、明々と燃える極彩色が少し離れて佇む男を映す。

美しく華麗だが、女性的な華奢さは感ぜられない装飾品で全身を彩りつつ、呑まれない毅然とした姿は、自分より遙かに強大な巨体を前に怯え一つ見せない。

その凜とした姿は、未來達の前で見せていた子供っぽい残酷性からは遠く隔たつて見える。

「して、如何する？」

言葉遣いも硬い。

その問いに“それ”は目を細めただけで、何ら答えはしない。しかし男は、納得のいかないらしい表情を口元に浮かべ即座に消した後、黙って一つ頷いた。

両者の間では、言葉に頼らずとも意思の疎通が可能なのだ。ただ、男はその疎通法を好んではない。

「では、そのようにしよう。あの娘がかの力を顕現させるまでは」
流れるような仕草で身を翻して、“それ”から視線を外した男の背なに、不意に声がかかった。

よく通る、若やいだ声。

「未だに習慣が抜けぬな？ ソウエイル」

ソウエイル、と呼ばれた男の動きが止まる。目もとが完全に覆い隠されているために感情を推し量れる箇所は口もとだけだが、そこもひどく強張っていた。

彼が身に纏った装飾の色無き音の飾りも凍りついて、さらとも音

を立てない。

「まあ、その生真面目さはそなたの美点故、喪われるのは確かに惜しいが」

そう言いはなつて、音もなく顔を映せそうなほどに磨き立てられた床に降り立つた者は、彼の姿をそっくり写し取っていた。

容貌も衣装も装飾品も、何もかもが鏡に映したかのように等しい。無造作に纏った音の飾りさえも。

しかしただ一つ、少し掻き分けられた髪の下から瞳が覗いているのが、唯一にして絶対の相違点であった。

それは、微妙な角度の変化によってがらりと印象を変える、綺羅の瞳。いついかなる時であれ、その真意がどこにあるのか探り取れない万華鏡。

同じ輝きを放っていた、より大きなそれは、現在は堅く閉ざされている。その巨体も生きた者のしなやかさを失い、今は巖の如くそこに在るばかりだ。

色無き飾り以外は音もなく写し鏡の相手に近付いて、鋭く切れ上がった虹彩を中心に極彩に煌めく眼差しが冴えて冷えた色を湛える。壊れた糸繰り人形のように不自然な動きで向き直った男とそっくり同じ形の唇が、いたぶるかのようにつり上がった。

「その生真面目さが、そなたの首を絞める。どちらに転ぼうとな」
残る胼胝たしさえ寸分違わぬ手が目の前の顔に触れる。

形は整っているがどこか無骨な指が髪を掻き分けると、右目を貫く形で無惨に残る傷痕と、仄かに金色こんじきに光る瞳が現れた。

極彩色と金色。

その色ただ一つが、彼等を隔て分ける。

在り方の違い。絶対の違い。近く、しかし決して相容れない存在。

そのまま視線を合わせて顔と顔が近付く。ただ一つの相違点を相互に輝かせながら。

笑みを象ったままの唇が、色を失っているそこを掠める。

ふわりと、清雅でありながら妖艶な香がソウエイルの鼻を侵す。さほど強くもないのに、少し気を抜けば意志が蕩けそうな、強い香りだ。

そのまま吞まれそうになる自分。吞まれるのを是としようとする自分。

それらに必死に鞭打って、彼はさり気なくを装う余裕も無く露骨に距離を取った。感情を反映するかのように、晒された瞳が鋭い光を周囲に撒き散らす。ジャラン、と、装飾が音の飾りを取り戻した。万華鏡の瞳が楽しげに揺らめく。

「知った上で踏み入れたのだ、今さら後悔なぞするものか。私は私のために、あの方々を取り戻す」

強い語調の下に流れているのは、狂気にも似た決意。

遠き日に宣言した時と全く変わらぬ、それでいて何かが歪いびつに歪んだ宣誓だった。

その言葉に満足げに笑いながら、“それ”は一つ頷いた。

「ならば良い。そなたに逃げられては今の世、代わりを見つけるは難しいでな」

困ったものよ、と言葉ほど困ったようには聞こえない響きに鼻で笑って、ソウエイルは再び踵を巡らせる。

「君なれば我が陽の力を剥奪し、別の界より好きに呼ばうも可能であるう？ その力がお有りになるのだから。なあ？ 長よ」

煽るような言葉に、写し鏡の者は……人間達には“名も無きあの方”と呼ばれる存在は、薄く笑っただけだった。今度こそ遠ざかっていく背中に、ふと思い出したように言葉を投げる。

「彼女に、よろしゅうな」

「言われるまでもない。そちらに言われるまでもない」

言葉を重ねる独特な言い回しを残して、その姿は華麗な音を最後に姿を消した。

その場に残った存在は笑みを浮かべたまま霧の如くその姿を眩ませ、消える。

同時に巖が、生ける者のなめらかさを取り戻した。

“それ”は再び緩慢に瞳を開き、また閉ざすと、眠りに落ちるようにその気配を凪いだ。

白を基調とした巨大な建物。その回廊をソウエイルは進んでいく。建物も回廊も、大の大人が四、五人でようやく取り囲めるような巨大な柱が規則的に並ぶ事で支えられて、見るからに重厚な雰囲気です。どちらかと言えば細身の身体など押し潰してしまいたいような偉容を誇っている。

それでも、その偉容が彼を押し潰す事はなく、ただ静かに屹立するばかりだ。

かつてはこうでは無かった、と彼は思いを馳せる。ここに、正当な主在りし時はこの宮は常に光を帯び、まるで生きているかのような躍動感に満ちていた。

それが今はどうだ。かつての精彩など、鮮やかさなど、見る影もない。

彼は、自分が仮初めの、劣化した代替品に過ぎない事を、他の誰よりも承知していた。

世界の調和を辛うじて保つたためだけに存在する、無力な神。世界

より喪われた彼の、彼等の代わりとして回る、不完全な歯車。

その役目を自ら選び、自分に近い者達と袂を別つて。敵対した。それを、悔いてはいない。彼等の王に、先立って宣言してみせたように。

ただ　　そう、これはただの感傷。それ以上でもそれ以下でもない。

ぎりり、と不意に右目が擦れるように痛んだ。

鳴動するように心臓が悲鳴を上げ、全身が震え、まともに立つ事さえおぼつかなくなる。

堪えきれずにソウエイルは柱に縋り、そのままずると冷たい床にくずれ落ちた。

悲鳴を殺し、背を丸め、小さくなって痛みをやり過ごす。痛みにも、それに対する対応にも、もう慣れきっていた。

やがて、どれほどの時間が過ぎたのか、ゆっくりと痛みが引いていく。

荒く息を繰り返しながら、ソウエイルは静かに顔を上げた。髪の下に指を差し入れ、ぐっ、と擦る。湿った髪が顔に貼りついて、再びその右目を空に晒す。

現れたのはやはりぼんやりと輝きを帯びる瞳と、先程は存在しなかったそれを縁取る赤い隈取り　　血だ。

すう、と傷痕をなぞるように朱線が頬を伝い落ちる。その様は、涙によく似ていた。

「……間隔が、短くなっているな」

顔を手で覆って拭えば途端、汗と血で濡れていた髪と肌が元のさりとした感触を取り戻す。何事もなかったかのように。それでもその顔色の悪さは隠しきれない。

きつく唇を引き結ぶとソウエイルは立ち上がり、歩みを速めた。

石造りの巨大な扉が、誰も居ないのに音もなく開いていく。

その先に広がっているのは、美しく清らかな水の流れとその中より出現している多種多様の草木や花々。遠くにぼやりとやっと見て取れる白い霧のような壁の存在が無ければ、これが屋内の光景だとは思えないに違いない。

高い丸天井には幾重にも重ねた濃い青が広がり、細い弓のような白い物がぼかりと浮かんでいる。そしてその白い物は、ぼんやりとした輝きで下を照らし出しているのだ。

そんな朧な光に照らされ、植物に守られるようにして、彼女は目を閉じていた。

美しく、同時に愛らしくもあるあどけない少女の美貌。

ほっそりとした、指を添えただけで手折れそうなたおやかに白い四肢。

無造作に散る銀白色の髪はつややかに長く身の丈を遙かに超え。

一部は水中に垂れてキラキラと、まるで生きているかのように揺らめいていた。

水に足を沈める事もなく、水面を滑るようにソウエイルは獣のしなやかさで少女へと近づく。程なく傍らに立つて、人形のように美しい能面で永の眠りにつくその面差しを見下ろした。近付いてみれば白いその貌が、仄かに銀色の光輪を纏っているのが分かる。

見開かれる事もなくまどろむその瞳。生まれながらに光を持たないその双眸。その片一方に銀光を植えこんだのは、ソウエイルだ。色鮮やかな世界に焦がれていた彼女の憧れを利用し、神の力を植えた。自分と同じ、永遠とも言える時間を押し付けた。調和を崩さないための人柱とした。

押し付けられた光を目に宿し、初めて彼女がソウエイルを映した時の、怒りとも悲しみともつかない表情を、彼は未だに忘れる事が

出来ないでいる。

神という存在は、唯在ればよい。それだけで世界という巨大な器は安定する。

しかし一方で、神の心がひどく乱れたり暴れ狂ったりすれば、器の中で一転嵐が生ずる。

事実、神々の心が今より乱れやすく、衝突の多かった創世の頃は地形が変わり、大陸が裂かれるほどの嵐が起こる事も珍しくなかったそう。主達が何度か、昔語りとして話してくれた。詳しい事は言葉を濁して、説明してはくれなかったけれども。

とあれ、このレファレンティアが安定して存在するためには神々が、世界の根幹に関わる者達が、決して欠く事が出来ない。現在の人間達の何人がそれを理解しているかは定かでないが、それは紛れもない真実なのだ。

故に、神が欠ければこの世界は歪む。レファレンティア ひず

新たに神が現れる際も、その存在が世界に馴染むまでは荒れるが、消えた時の比ではない。

この世界は、未だ不安定なのだ。

だからこそ、もう一柱とて喪うわけにはいかなかった。

せめてこの世界が、神々の一存で滅ぶ事がない程度に安定するまでは。

どれほどの代償を払っても、神の不在は防がねばならぬ。

この身が最早長くない以上、猶予はない。

あの娘の力が、どうしても要るのだ。

ソウエイルがふと手を伸ばした。途端に周囲の空気は殺気立ち、

その指を容赦なく切り刻む。眠りが妨げられる事を厭うかのように、音一つ無い。

ぱくりとそこかしこが裂けた口を開く手を見下ろして、男は一步後ろへ下がった。少女の周囲の空気は警戒を解かないまま、ゆらゆらと陽炎のように揺れている。

無言の威嚇。無音の拒絶。

彼女は未だに彼を許してはいない。この部屋に入るのを拒みはしないが、それ以上は決して踏み込ませない。

慌てず彼は血の一滴も流さないほど鋭く切り裂かれた手の上にもう一方の手を重ね、するりと撫でる。すると、手どころか指輪に刻まれた傷さえも跡形を残さず消え失せる。

その指先が何気なしに首を彩る飾りに伸びて、ぴたと止まった。探るようになぞって、有るべき所に無い感触に、確信する。足らない。

あの時決り取られたか、と、簪と短剣が自らの首元に押し当てられた事を思い出す。愕然と自分を見つめてきた宵闇の瞳を。

今目の前に在る少女といい、彼女といい、自分はずくづく女に疎まれる縁の元に生きている。否、自分の都合で切り捨て、利用しているのだから、縁と称するはあまりに厚かましいか。

そして今度は、異世界より喚ばれたあの娘。怯えながら、それでも真っ直ぐに自分を見据えて来た黒い瞳。

本当に、女とばかりおかしな関係が続くものだ。

くつくつと、愉悦と呼ぶには起伏が少なく、冷笑にしては自嘲の色濃く笑いながらソウエイルは天井を見上げた。

ばかりと浮かんだ白

朔にほど近い上弦の月。

一定の法則から決して外れることなく天上を巡る軌跡をなぞり、満ち欠けを繰り返すその様は、調和が保たれている事を暗黙の内に

明記する。

どれほど自分を疎んでいても、自らの境遇を嘆いても、それでも彼女は永の沈黙の中役割を果たし続けている。

愚直で哀れで、健気な娘。

だから選んだと、選ばれたと、彼女は知っているのだろうか。

白々と輝くそれを見上げ、掌の上で光球を、己の中に宿りし太陽を輝かせながら、彼は長く、その場に立ち尽くしていた。

未来が目覚ますと、見覚えのある銀色と青が目飛び込んできた。

ぼやけているその色彩に、ゆっくりとピントを合わせるように目を瞬かす。やがてその輪郭がはっきりして、硬い表情の青年が浮き彫りとなった。

「……ユリウス？」

やけに痛む喉に咳をしながら、彼女自身も驚くようなしやがれた小さな声が、ようよう絞り出される。やっとはっきりした青ざめて強張っていた顔が、くしゃりと歪む。

そんな子供のような姿でさえ美しいのだから美人は得だ、とぼんやり思う。

「よか……良かった。ごめんなさい、ごめんなさい」

白い頬を伝う雫が、どうしようもなく綺麗だと。

恋情とは違う愛おしさでその頬を拭って、慰めたいと思った。

「はい、はい、診察したいので離れてくださいませー」

場の空気を敢えて壊すように、手を打ちながら第三者の音が割って入る。同時に未来の視界に入ってきた暁色が、彼女を見て笑った。

「おかえりなさい」

何故かその言葉がすんと、と胸に落ちて、未来は黙って頷く。実際、帰ってきたという感覚はあった。

テイシアが寝台の端に腰を下ろし、ぼん、と未来の手に手を置いた。

「さ、まずはこの手を離して」

きょとんと彼女が自分の手を見ると、それは縋りつくようにユリウスの手を握りしめていた。その指先が、普通では有り得ないほど

白くなつていて思わずギョツとするも、強張った指は中々動いてくれない。

ティシアの助力もあつてどうにか外したが、自分の体だというのは思い通りに動かないのが不思議だった。

手以外の全身も、動かそうとすると痛んで、少し身を起こすのが精々だ。あそこまで握りしめていたのは、寝ている間の無意識だったのだろうか。

ともあれ、背もたれに枕を重ねてもらつて、だいぶ楽になる。この体の軋み具合は、風邪で数日寝込んだ後に似ていた。

でも何故だろう。自分はそんなに寝てたんだろうかと首を捻る未来に、脈を取りながらティシアが口を開く。

「三日も目を覚まさなかつたのよ。心配したんだから」

「……へ？」

「それに、一度死にかけたのよ。運が良かったわね」

淡々と紡がれた言葉が一瞬理解出来ず、その後絶句した。

呆然としている未来に気付いているのかいないのか、ティシアは指を彼女の手首に置いたまま軽く目を伏せていた。

その、手。

別になんてこと無いそれが、刹那空に掻き消えたように見えた。

勿論それは錯覚で、実際に手はちゃんとそこにある。

しかし、それが幻覚ではない事を未来は知っていた。自分の手が、体が、為す術もなく消える。

その時感じた恐怖を、まだ生々しく覚えていた。

「もしかして私……帰ろうとしてた？」

ティシアの指に力が籠もつたのが分かる。

「帰る事は、私にとって……死なの？」

ユリウスがはっ、と息を詰めたのが気配で感じられた。

それを知覚で認識しながら、わざと無視をして未来はただ、布団

の上に投げ出されているもう一方の手に意識を集中させる。正しくは、そこに通された金と銀の腕輪に。

「ねえ、教えて。私は、どうなるうとしていたの？」

夢の中で、彼女は自分がその腕輪を身に着けていなかった事を思い出していた。

ユリウスとティシアはしばらく無言だった。緊張が否応なく高まっていくのが分かる。

やがてユリウスが、座っていた椅子の向きをより未来と顔を合わせやすく変えた。そしておもむろに口を開く。

「魂ってさ、どんなモノだと思う？」

どこかとぼけたような物言いが、室内に充満した緊張を一瞬で散らす。未来はちよつと顔を上げ、首を傾げて見せた。

「……無くても生きてるけど、無くてはならないモノ？」

「……えらく抽象的な表現だけど、まあ、間違っちゃいない。君はね、その魂が身体から完全に脱け出た状態だった。それだけなら、問題ないとは言わないけど、本人にその意志があつて、且つこつちが誘導すれば戻ってこられる。でも君はもつと厄介だった」

傷一つ無い綺麗な指がとん、と未来の額をつついた。

「帰ろうとした、とさっき言ったね。全くもってその通りだ」

ユリウスは穏やかな声のまま淀みなく続ける。常の風体の中で、その目だけが微かに赤い。指先は額に当てられたままであった。

「迷い人の中には、故郷恋しさに魂だけで狭間を越えようとする者が珍しくない。魂は普段の状態より感覚が鋭くなるからね、狭間越しに故郷の匂いを嗅ぎ当てるのさ。そして君は、狭間の中に入ってしまった」

「ちなみに狭間って言うのは、世界と世界の間が存在し、隔てている物ね。私達はレファレンディアや地球の他に幾つか世界の存在を把握しているけれど、それらは全て、狭間を挟んで連結するように

連なっているのだそうよ。理論上はね」

最後の一言を皮肉っぽく付け加えながらティシアはふと顔を上げ、片手を上げた。

促され入ってきたのは、未来の知らない顔。まだ少年だ。ティシアの甥だというあの少年より二つ三つほど下だろうか。

紙の束を抱え、ユリウスやティシアと同じ漆黒の、ただしずっと丈の短い軍装に身を包んでいる。

少年はユリウスの側まで来ると、その横に据えられた引きずってきたと思しき机の上に紙束を置く。

その上には今置かれた束とは別の紙が二つ、高低の山を作っていた。内、何かの花を象った折り紙を乗せられた、背の低い方を抱える。

折り紙を机の上に戻す際、その視線がふと未来の方に流れた。

悪意は無いが、真意も見ている者には分からない眼差し。

ユリウスがちら、と振り向くと憧憬と気遣いがない交ぜの表情をしたが、青年が穏やかに目を細めるので、黙って一礼するに留まった。

結局一言も口を利かないまま少年が退室すると、ユリウスは視線を未来に戻す。

「今のは俺の従卒。後でまた来ると思うけど、気にしないで良いよ」

「はあ」

「さて、どこまで話したかな」

相も変わらず指を額に押し当てたまま青年は軽く首を傾いだ。

「私が狭間の事を説明しましたでしょ？」

間髪入れないティシアの言に、そうだったと頷く。

「えっと、私の世界とこつちの世界は狭間を挟んで繋がってるんで……のよね？ で、私はそれを越えて帰ろうとしていたと」

ティシアの碎けてはいるが一応敬語の体を成している言葉につられ、妙ちくりんな言葉になった。

それを笑うでなく、ユリウスはその通り、と話を続ける。

「俺達も体感した事がある訳じゃないからはずきり説明は出来ないけど、これだけは言える。魂だけで狭間を抜ける事は出来ない」

未来の脳裏に、再び消えていく自らの四肢が過ぎった。ぶるり、と震えが来る。あの感覚は、しばらく忘れられそうにない。

「異世界からの迷い人が多い世界柄だから、まあ、色々それに関しての研究や対策は成されている。で、だ。その中で大きな焦点となっている事柄の一つに、魂があるんだよ」

ユリウスがしきりに瞬きしながら滑舌の良い言葉の合間合間に曖昧に唇を震わせる。何やら考えているようだ。どこか宙を見たまま口を開いた。

「迷い人って言うのは、肉体と魂の繋がりがこの世界の人間より弱い。でも、元々その繋がりが弱かった例は少ないんだよ」

「えー……と？」

「あー本題から逸れた。結論だけ言っちゃうね」

思考が結論づかないまま話し出した自分を恥じるような照れ笑いを浮かべ、ユリウスは何か切るような動作をした。

「魂の状態はね、感覚がずっと鋭敏になる代わりに、周囲の影響を受けて変容しやすい。全てが剥き出しなんだ」

そこで一度言葉を切って、青年は短いが深い息を吐く。

「一方狭間は、全てが混沌とした場所だと言われている。ありとあらゆるモノが、法則とか理とか全部無視してごちゃ混ぜの所らしい。だから、そこに個として入り込んだ存在は直ぐさま取り込まれて、元に戻る事はない、というのが定説だね」

未来は手を握りしめた。どこか現実味がなかった恐怖が、言葉という連想を与えられて明確なものになる。

「ああ……なんとなく、分かる」

発した言葉は掠れていた。

小刻みに震える拳を、いつの間にか手首から移動したティシアの

手がそつと包む。見て分かるほど明らかにその全身に力が入り、徐々に抜けた。

「魂だけで狭間に入ったら、存在を食われるのね」

「そうかも知れないね。狭間では身体は、魂の鎧なんだそうだよ」

「魂の、よろい……」

ふとマスターの顔が過ぎった。では、彼は何だったのだろうか？

答えは出なかった。出したくなかった。

意識を切り替えたところで、どことなく焦点の合わない青とかち合う。

「君は、どなたかに守られているね」

未来を見ているはずなのに遠い眼差しが、何かを探している。

「狭間に一度入り込んだ魂を引き戻すなんて、人間には不可能だよ」
どこかを見据えた後視線を戻して何かつぶやくと、ユリウスは据え置いたままだった指で勢いよく未来の額を弾いた。

見事な不意打ち。形容でなく本当に目の前で火花が散った。

「あつっ！」

今までの空気をぶち壊すようなその行動に、未来が目を白黒させる。指弾された箇所がやけに熱い。

「な」

「心配させた罰」

抗議しようとするが、一步先んじた言葉にぐうの音も出ない。びし、と指を突きつけたまま、それに、と青年は続けた。

「どなたかの守りがあると見え、それにずっと頼りっぱなしじゃ人間として情けない。だから、俺達も出来る限りの事はする」

そう言っ指を下ろし、その手で机の上に置かれていた大きめの円板を取ると、未来の前にかざす。鏡だ。

それは少し顔色の悪い娘の顔を映し出し、額に浮かぶ光の模様をその目に映した。鈍く光を発している親指の爪ほどの円と、その中

の編み目のような模様。

「魂が勝手に出て行かないように網を掛けた。これが効果を失わない限り、魂が身体から抜け出す事はない」

ユリウスが告げる内に光は輝きを失い、肌と同化するようにして消えた。

腕輪をはめた方の手をそろりと動かして触れてみる。やはり、つるりとした肌の感触しか指先には感じなかった。

「本当に効くの？ あれ」

「試してみる？ 意図して引き起こすのはすつごく、痛いよ？」

なんとも晴れやかというか清々しいというか、始めて見るイイ笑顔で目の前の手をわきわきさせたユリウスに、冷や汗が滲む。

これはヤバイ。非常にマズイ。笑いながら果てしなく怒っている時の表情だ。

そんな二人を楽しげに眺めるティシアは、未来を助けるどころか、ユリウスに助力する勢いだ。先程まで労るようだった手が今はがちり掴まれていて、逃れようがない。

ぶんぶんと勢いよく首を振って断固拒否を表明すると、どこか残念そうに青年は手の動きを止めた。

子供っぽく唇を尖らせながら向いた青に、胸が衝かれる。表情で巧妙に隠されてはいるが、寂しそうで悲しそうな光。

「勝手にどこかに行っちゃ、駄目だよ？」

見透かされていると感じた。

あの男に感じた恐怖も、自分の中の力への恐れも、それらから逃げだそうとした事も、自分の中で蓋をしようとしていた故郷への郷愁も。

全て、全て。

「……この世界の事まだろくに知らないのに、どこに行けって言う

の

その答えに青年は小さく笑って、その言葉を信じてみよう、と
白い指先で未来の額を撫でた。

ユリウスの言った通り、もう一度来た少年は澄んだ青が涼しげな水差しと揃いのグラスを三つ、それと箱を机に置いて、やはり無言のまま下がった。

「無口な子なの？」

手付きはセクハラくさいが、丁寧に強張った筋を解してくれているティシアに手を委ねながら未来が聞くと、グラスを口元に運んでいたユリウスがちらりと視線を向ける。

「別に。場をよく読むだけだよ。普段の口数が少ないわけじゃない」
淡く黄色がかった飲み物で唇を湿らせ、青年は箱を取り上げた。

同時にティシアが腕の一方のマツサージを終え、たくし上げていた未来の袖を戻す。

先程より格段に動かしやすくなった手に素直に感心しつつ、ユリウスが慎重に差し出したグラスを受け取った。

「ティシアも飲む？」

「いえ、私はこれが終わってからにします」

そう答え、本当に綺麗な手ね、羨ましいわ。などと軽口を叩きながらまたふんわりとした寝着の袖をめくり上げ、肩から肘をさする。少し探るようにその手は動いていたが、やがて指先がある場所できつと沈んだ。

グラスを持った未来の指に僅かに力が入る。痛い、ほどではないが、どうとも言えないぞわりと這い上がる感覚。

「別に飲んでても良いわよ？」

「でも、邪魔じゃないですか？ 動くのって」

手を動かすだけでも結構身体って揺れる、と眉を寄せる未来に、
そんな事、とおかしそうに女は宵闇の瞳を細めた。

「それくらい気にしてるようじゃ、やってらんないわ。それに、そ

の動きがそそるんじゃない」

「ティーシア？」

「はいはい」

一言多い部下を軽く窘めるような声に、やはり軽く答えると、
ティーシアはマッサージを再開させる。

良いとは言われたが、やはりどうも気後れして飲めず、膝の上に
グラスを置いたまま未来はユリウスの方を見た。

二人から視線を外して箱の蓋を開けている、その指。

あの時、髪を結ってくれた時と寸分違わぬ整った形。あの時負っ
た火傷の名残も見えない、その白。

「火傷は……どうしたの？」

口にした後で無遠慮な質問だったかと思っただが、返った言葉は平
静そのものだった。

「治してもらったよ。騎士なんだから、傷の一つや二つ別に気にし
ないのにな」

片方の手をひらひらさせてユリウスは箱から丸い皿とその上に乗
せられた薄紅色の果実を取り出し、どこから取り出したのかナイフ
を入れる。

「傷を治すのも、魔法？」

「普通はね」

ナイフが刺さったままの果実を皿に戻し、書き損じらしい紙で指
を拭う。

「ただ、ちよつと厄介な火傷だね。セレナに治してもらった。だか
ら、痕がない。……変な気分だよ」

最後のグラスがティーシアの手に渡った。いつの間にかマッサージ
は終わっていたらしい。

未来はなんとなく彼女がグラスを傾けるのを見届けてから、恐る
恐る顔に近付けた。初めて見る物を口にするのはいつだって緊張を
伴う。

一口飲んでみると、スポーツドリンクによく似た味がした。漢方に似た独特な苦みはあるが、ベースはそっくりだ。

「あ、びっくりしてる」

目を丸くしている未来にティシアはくすくす笑う。

「どう？ フィオル特製疲労回復薬は」

「え？ あ……驚きました」

その言葉に頷きながら、ティシアはグラスを目の前で軽く揺らした。

「あなたの世界って凄いわねえ。こんな物を作り出すんだもの。これと適度な休息、これで夏場の修練時に倒れる者が減ったのは有り難いわ。まあ、これはまだ改良が必要だってばやいてたけど、あいつにとっては望む所でしょうね」

後半は半ば独り言になりつつ、残りを一息に呷る。そしてそのまま立ち上がった。

「では、私はそろそろ行きますね。部下で遊んできます」

「程々にねー」

その言葉に穏やかならざる笑みで返し、月神殿騎士団の副隊長は右手を心臓の上に当てて礼をすると、キレのある仕草で踵を巡らせた。

颯爽とした背中を追いかけると、ついでに室内を見渡し、ふと未来は気付く。目をぱちぱちとさせた。

「もしかして、違う部屋？」

「うん」

果実を切り分けながらされた肯定はあっさりしている。

「君が寝起きする予定だった部屋は今、全面改装中。直り次第戻れるよ」

生返事を返しながら未来は部屋を見渡した。

寝心地の良い寝台の上から見る限り、どうやら間取りはほぼ同じようだ。

ただ、配置された家具の色合いは暗めで、床に敷かれている絨毯は毛足が短く、黒っぽい色をしている。床に使用されているタイルも白は白だが、心なし明度が下げたようだ。

重厚までは行かないが、落ち着いた雰囲気のある部屋。
総括すればそんな印象だった。

ただ、しかし。

「やっぱり広い」

未来は落ち着きなさげに身動き、所在なさそうに回復薬を嚙る。

「広いの、嫌？」

聞きながらもユリウスは手は休めず、中央にあった大きな種を抉り取って薄皮を剥ぎ、皿に実だけを並べる。甘く芳醇な香りが室内に広がった。

「嫌と言うより、落ち着かない……」

青年は紙で手を拭い、空になって両手で握り込んでいたグラスをそっと取り上げると、代わりに皿を渡す。

華奢な手が皿を掴んだ事を確認し、紙の束を引き寄せる。机の上に無造作に転がされていた万年筆のキャップを外し、一番上の紙書類を手に取った。

「悪いけど、この広さには慣れてもらうしかないな。こういった客室の方が、俺達も駆けつけやすいし守りやすい」

普段通りだがどこか硬い、反論を許さぬ口調だった。

「取りあえず君は俺達かアレクシス達か、どちらかに守られてもらう。あの男と何らかの決着が着くまではね。付きっきりって訳にもいかないから、他に頼む事もあるだろうけど」

「でも、あの男は」

「待った。それ以上は言わせない」

書類に署名して、ぐるりと青い瞳が未来に向いた。

怒ってはいない、かと言って微笑んでもいない。敢えて言うのな

らば無表情。しかしその無は、下から数多の感情を窺わせる。

「今はまだ、君は客だ。客を危険な目に遭わせまいとするのは当然だろうか？」

そこで少し表情を和らげて、ユリウスは言葉を繋いだ。

「君が力を御せるようになれば、状況は変わるかも知れないよ」

「……ずるい言い方。確實じゃないじゃない」

未来は皿に添えられていたフォークをつまんで、目線の高さを持ち上げる。睨むに似た眼光でそれを見つめていたが、やがておもむるに指を離す。

ニュートンの見つけた方式そのままに、繊細な模様が刻まれた銀細工は布団の上に落下した。

「……………」

分かりやすく肩を落として落胆する彼女にユリウスはペンを置き、フォークを手を取った。

「話は聞いてるけど、あの時の君の力は火事場の馬鹿力と同次元だからね？ そう簡単に使いこなせるものじゃないよ」

八等分に切り分けられた果物の一つにフォークを突き刺す。

そして口をフォークに直接付けないようにしながら刺さったそれを啜えた。行儀良く咀嚼し飲み込んでから、また一つにフォークを刺す。

「君の力の事なんだけどね」

未来の口元にくし形に切られたそれを持っていきながらユリウスは切り出す。

不思議そうに開けたその口にすかさず突っ込みながら、目を白黒させる彼女にはお構いなしで続けた。

「俺達は時の力って呼んでる」

また一切れにぐさりと刺して、やっと飲み込んだ相手に突き付ける。喋らせるつもりは無いらしい。果汁が垂れそうになって、すか

さず掌で受け止めた。

「迷い人にだけ、たまに顕現する力なんだ。理由は分からないけど多分、世界を越える、って体験が影響してるんだと思う。時の力を顕現させた人間はみんな、元の世界にいた頃はそんな力は持っていないかったそうだからね」

「どんな力なの？」

「大別するなら、時を止める力と進める力。君が使ったのは止める方だね。半分以上はどちらかの力しか持ってないけど、両方持つてる人間も少なくはないらしい。ただ、どちらかの力の方が弱いという人が大半らしいね。……過去に一人、時を戻す力を持った人も居たそうだけど、詳しくは知らない」

最後の一言でわずかに言いよどみながらも、手付きは滑らかに五つめを未来に食べさせ、フォークを握らせる。そしてユリウスは皿に残った三つの内一つを摘んで食べた。指先に付いた果汁を舐め取る仕草がやけに色っぽい。

「双神宮に一人、時の力の所有者がいる。近々引き合わせるから、詳しい事は彼から聞くと良い」

「迷い人？」

目に毒なその様子からさり気なく視線を逸らす。殺すと決めた恋心だが、うっかりすると揺らぎそうだ。女心とは秋の空。

意識を逸らすついでに確認を兼ねて聞けば、頷きが返る。

「そう。始めて会う同士だね」

「ふーん」

ざくつ、とフォークを入れた。少し力がこもりすぎたか、皿に果汁が飛び散る。

幸い布団や服には飛ばなかったので、密かに安堵しながら口に運ぶ。この類は服などに飛んだら、本当に落ちない。

「ああでも、陛下との面会が先かな。そろそろ即位記念の式典の準備で忙しくおなりだろうし、早い方が良い」

むせた。

派手に咳き込む未来にユリウスは少し目を丸くして、背中をさすつてくれる。

「め、めんか、いつ？」

「迷い人は神子と、その国の最高権力者に面会する決まりがあるんだよ。両者に存在を認知してもらって、戸籍を貰うんだ。あれ？言わなかったっけ？」

そう言えばそんな事もあったと、涙目になりながら未来は思い返す。

ここに来る前、転移陣がある街で聞いた。確かに。

色々な事が立て続けに起こったせいで、完全に頭から吹き飛んでいた。

「て、事はあれ？ あの二人とは？」

「もう済んだだろ？ エアとセレナとは」

「え、あれで良いの?!」

一緒にご飯食べただけ、と絶句する未来に、あれで良いんだよ、とユリウスは笑う。

「あの二人の面会はいつもあんな感じだよ。礼儀作法を守るのは王側の迷い人との面会だけで十分だとさ」

お互い付け入られる隙を減らすため、侮られる事態は避けなければ不味いのだ、と。

その時ばかりは気の重たげな物言いに、未来はフォークを手に考え込んだ。

「つて事は、私が王様に面会する時は礼儀とか作法が必要なのね」

「その通り。話が早いね。それより、早く食べないと真っ茶色になるよ」

「え？ ……うわっ、ほんとだ」

皿の上で茶色く変色し始めている最後の一つを未来は口に入れ、最後だからとゆっくり味わう。先の事を考えると気が重い、今の楽しみを疎かにはしたくなかった。

水気が多くて、香りの割にすっきりと甘いそれは、未来にとって夏の風物詩だ。

熟してまったりとした味わいになった物の方が好みだが、今はこのやや堅めの感触と癖のない甘さが良い。

ごくり、と飲み込んでしみじみ呟く。

「おいしい、この桃」

「それは良かった」

物を美味しく食べられる事と、嬉しそうな笑顔を見れた事に、未来は密かに満足しつつ皿を返した。

3 (前書き)

久しぶりの投稿。

予定では今回で4章終わるはずでしたが、
まだ続きますorz

夜に溶ける濃紺で全身を覆い、それは部屋の隅にわだかまる影の中立ち尽くしていた。

寝るだけにしては些か広すぎる室内の中央に据えられた寝台。そこには、少女と見まごうほどにいとけない印象の女が眠っている。そのいとけなさはいったいどこから来るのか。この国の人間とは骨格さえ異なる華奢な顔や体のつくりか、くるくると変わる感情を隠しきれない真つ直ぐさか。

とりとめのない思考を布の下で声もなく笑って、それは足を踏み出した。

足音を吸い込む絨毯の上を通過し、そのまま寝台の横に立つ。

月は既に地平線の彼方へ没し、星は部屋を照らし出すほどの輝きを持たない。

そんな、闇に沈んだ室内で白く浮かび上がる寝具。その中でうずくまるようにして眠っている、迷い人の娘。

黙したまま寝顔を見下ろしていると、不意にその瞼がぱちりと開いた。そこから覗いた黒は、寝ていたにしては滑らかな動きで自らの横に佇むそれに視線を据える。

強い、と言えるほどでないが明確な意思が感じられる眼差しのまま未来は起き上がり、拍子に目の上に落ちてきた髪をくしゃりと掻き上げた。腕輪が、存在を主張するかのようが高く、鳴る。生じた音に、彼女自身が驚いたように目を丸くした。

そうして、再びまっすぐと向けられた視線に、それは少したじろぐ。何か言つべきかと開いた唇は、わずかに早く彼女の口から漏れた思案する音に動きを止める。

そんな動きを知ってか知らずか、未来はしばらく不明瞭なつばや

きを持って余す。

やがて首を傾げかしげ、先ほどより少しだけ夜の闇から浮き上がって見える姿を上から下まで見取った。

「……変質者さん？」

「違う」

簡潔極まりない否定をため息とともに吐き出し、言葉を躊躇った自分にほんの少し後悔する。同時に、考えなしで発してしまった素の声にひやりとしたが、幸い彼女は気付いていないようだ。

「じゃあ、なんの用？」

どこことなくつまらなげな姿はひどく無防備で、危うい。

「見知らぬ相手にもそんな態度で良いのか？ 足を掬われたらどうする」

今度は意図して低くした声で言えば、彼女はきょとんと目を丸くした。そうしていると、ますます成人している人間とは思えない。これは一つ二つお節介でもやくべきかと考えていると、小さな笑い声が空気を震わせた。

「少なくとも、今のあなたには警戒する要素なんてないもの。あなた、扉を開けて入ってきたでしょう？」

白い指が示したのは、居室へと繋がるただ一つの扉。

そして彼女は、それで十分だという。濃紺の帳に遮られていても分かる、鮮やかな笑顔。

「それだけか？」

「それだけ」

屈託のない笑みに、彼は完全に虚を衝かれる。

「私は男だぞ？」

「それは分かる」

「……いいや」

彼の気配が急に変わり、鋭く何か空を切る音が続いた。まずい、と未来が思うのと同時にその姿が夜陰にまぎれ、見えなくなる。

とつさに布団を蹴り上げて自由を確保しようと試みるが、一瞬早くのしかかられ、寝台に押し付けられる。その時何故か、花のような匂いが辺りに漂った。

肌が粟立つような、鋭利で冷たい感覚が首に押し当てられている。少しでも妙な真似をすれば即座に皮膚と肉を食い破りそうなそれは、華奢で繊細な作りをした短剣だった。

未来の動きを封じているのはそればかりではなく、片方の腕は巻き上げられた布団に取られ、もう一方は相手の短剣を持たない手に押さえ込まれている。下半身も、布団の上から抑え込むことで動きが止められ、彼の膝が鳩尾みそおちを圧迫しているものだから呼吸まで制限されている。

「これでも分かっていると、そう言えるか？」

穏やか、と表現できるほど静かな声と共に、短剣が肌をなぞった。一瞬の間を置いて、ぷつりと血の線が浮かび上がる。

「……普通は、考える暇も与えないものじゃない？」

一時の虚然から立ち直って、布団に巻き込まれた腕を引き抜いた未来は、驚くほど冷静に見えた。そして、本人に自覚があるないは定かでないが、その双眸がほのかに燐光を帯びている。

魔法を用いたときと同じ光。それによって彼女の瞳は黒く輝く光とでも言えそうな状態になっていて、闇の中奇妙にくつきりと浮かび上がっていた。

「……動いちゃだめ」

自由を取り戻した腕が、彼女にのしかかる相手の顔を隠す布に掛かる。彼は、不自然なほどに動かなかった。あるいは動けなかったのか。

布が取り払われた。同時に室内へとこぼれ落ちたのは、銀色。

未来の目が、驚いたように見開かれる。その頬に落ちかかった、艶やかな銀時雨。

「……誰？」

どこか幼い調子の問いかけに、それは僅かにわらったようだった。辺りをぼんやりと照らし出す淡い光に浮かび上がるその顔は、男とも女ともつかない曖昧なもの。無性故の危うい美しさが光源も定かでない光を受けて、幻想的な雰囲気を醸し出していた。

「さあ、誰だろう。私ももう、分からなくなってしまった」

声音を隠さずに呟く。その響きは淡々としているのに、自分を見失った者の悲哀が滲んでいた。

その色は、彼女を見出し、この地まで誘ってきた者の片割れとそっくり同じ。否、声だけではない。その銀の髪も、中性的な面立ちも、何もかもがああ青年と瓜二つ。

が、しかし、当人ではない。雰囲気が、あまりに違っている。彼の青年が夜空で輝く望月であるなら、目の前の彼は同じ月でも輪郭を失った朧月だ。

未来は、彼の輪郭を探り当てようとしてもするかのように白いその顔に指を伸ばす。同時に少し身を乗り出したところで、その眉が痛みを醸められた。

夜の静寂の中にあってもひどく微かな、雨の尖兵が地を叩くに似た音。同時に、彼女の瞳から燐光が嘘のように掻き消える。

一転して動きを見せた彼は彼女の手首を捉えていた手を離し、寝台の横に設えられた小卓の上に乗せられた小箱を開けた。その中から親指の爪ほどの石を一つつまみ出し、やや乱暴な仕草で卓に叩きつける。彼の姿を淡く包んでいた光も霞むほど鮮やかな光が石から溢れ出す。

夜闇に慣れた目にはきつい光を掌に握りこむことで緩和させ、彼はその拳をすばやく未来の首元へと持つていった。

寝具と夜着、そして首筋を汚す赤。傷は幸い浅かったが如何せん場所が悪く、止め処なく血が流れ出している。

眉間に僅かに皺を寄せ、彼は石を掴んでいない方の手を傷口に触れるか触れないかの位置までもって行き、短く呪文を口ずさんだ。

途端、血はゆるゆると止まって傷口の回りの肉が盛り上がり、傷をふさぐ様にうごめき。たちまちの内に、血の跡だけを残してきれいに傷は消えた。彼はまた別の文句を口にしながらゆるりと首筋をなぞる。探るような感触に、未来は思わず背筋を震わせた。

「血が付いていた物を使用するのも嫌だろうとは思うが、今夜は我慢をしてほしい。私は、寝具の類が何処に仕舞ってあるのか知らないからな」

首だけでなく、夜着を初めとした布地からもほぼ完全に血を抜き取ると、彼はそれまでの態度が嘘のようにあっさり寝台から降りた。手にしていた石をランプに入れ、血が乾いてしまった短剣をそのまま鞘に収める。

安堵したような、少し残念なような、なんとも微妙な心地で未来は夜着を軽く引っ張った。そんな彼女に、説教ほどではないが諭すような口調で彼が話しかける。

「あなたはどうかやら、とつさに力を使うことは出来るようだが痛みに弱いようだ。それから、考えなしに動くことは勧めない。今回のように痛い目を見るのは嫌だろう」

「……うん」

冷静を行き過ぎていつそ冷徹な物言いは癪に障らないわけではなかったが実際、真実の一端を射抜いている。反抗する気力も湧き上がらないまま未来は頷いて、今はさらりとした触感の首筋に指を這わせた。

指先に感じる肌は、先ほどまでの様が幻だったかのように血生臭さを感じさせない。それでも、ざくりと肌に食い込んだ刃の冷たさは意識に鮮やかだった。

その痛みがまだ残っているような気がして、未来は執拗に肌を擦

りながら小さくため息を漏らす。確かに、体の動きを封じられていたとはいえあの行動は、あまりよろしくはなかった。

「……だって、発動の仕方なんて知らないもの」

独り言のつもりだったのか声を潜める。そこへ割って入ったのは、明らかに怒りを誘う嘲笑。

「力に目覚めてまだ間もない人間がそれを言うか。ずいぶんと自分を高く見積もったものだな」

「何ですって？」

思わず未来は眉を吊り上げて、寝台の横で佇む青年を睨んだ。布を首へ巻きつけながら、彼は冷ややかに美しく嗤う。

「そうだろう、笑わせないでくれ。対価を払わない者に与えられる力など無い。覚悟を持たなければ、何事も成す事など適わない。対価も覚悟も無い今のあなたに、時が微笑むことは無い」

歌うように言い募るその言葉は、流麗な響きとは裏腹にひどく痛烈な印象で未来の横つ面を張った。

未来は一度目を見開いたかと思うと、ぎりりと唇を噛む。引き結ばれたそこから、反論が飛び出してくることは無かった。

物言いは気に入らないが、彼の言葉があながち間違っていないことを彼女は分かっていた。実際自分は、まだ力に対して怯えがあると、心のどこかでは認めていた。

人は、ある事ない事をでっちあげられるより、正論を言われたときのほうが得てして激昂するものである。それを知り、かつ自らの状況がそうであると考えられる程度には、未来は冷静さを保っていた。

手を握り締めて俯いている未来に青年は意地悪く笑うと、用は済んだとばかりにあっさり踵を巡らせる。数歩歩いて、思い出したように付け加える。

「見下されるだけが嫌なら、どんなに無様でも這い上がれ。嫌いな

相手でも利用するくらいに強かさを見せる。……まあ、その相手も立ち止まりはしないだろうがな」

ひらり、と後ろを振り向かないまま手を振って、彼は部屋を出て行く。途中から足音が聞こえたのは、絨毯が無くなった所為か。

戸の閉まる音がして、未来は部屋に一人となった。しばらくそのままの体勢でいたが、いきなり後ろに倒れこみ、枕に握り締めたままだった拳を数回叩きつける。

馬鹿にされた悔しさや急に一人になった寂しさ……しまいには自分の中でひとまず区切りをつけようとしていた郷愁まで溢れ出して涙がにじみそうになり、目を擦ってこらえた。

今度あの青年に会うことがあったら絶対に見返してやると、明日にでも時の力を持つ者について尋ねてみようかと決意する。馬鹿にされたままで、絶対に終わりたくはない。

(ユリウスにそっくりだから、余計腹立つ)

間抜けな音を立てて拳が枕にめり込み、何故だか一気に脱力した。ついさっきまで殴りつけていた枕を抱きしめると、とても心地が良い。柔らかでありながら程よく反発の返るそれは多分、とても手間暇がかけられたものだろう。

少しだけ自分のした事を後悔しつつ枕を抱きしめる腕に力をこめ、顔を埋める。鼻を近づけて、ほんのかすか香ったのはラベンダーか。

(……ん?)

何かが引つかかるが、それは形になる前に未来の指をすり抜けた。

「まあ、良いか」

目を閉じれば、落ち着いた色合いのガラスで作られたランプから放たれる明かりが、柔らかく瞼を撫でる。

意識が途切れる最後の瞬間、明かりを消すのを忘れたと思いながら、そのまま眠りに落ちた。

「……時の力の所有者に会いたい？」

ティシアが食事の手を休めて首を傾げた。

今日の朝食は、目覚めたばかりの未来を気遣ってか、優しい味付けのミルクのリゾット。ハーブの爽やかな香りが食欲をそそり、具材がたっぷりと使われている割にはあっさり食べきれる一品だ。

出された時、米があるのかとキャツキャした未来は、ティシアとエデナだけが知っている。

落ち着いたら米以外の日本食を探してみるのも良いかも知れないと思いつつ匙を動かしていた未来がふと発した言葉が、冒頭の返答を生んだ。どこか捗々しくない物言いに、未来も浮かぬ表情になる。

「駄目でした？」

「駄目ではないけど、ずいぶん急だと思ってね。何かあったの？」

「……………別に」

やけに長い沈黙は明らかに何かあったことを示唆していたが、ティシアはそ知らぬふりで頷き、リゾットを掬った。

「まあ、いずれ会わせるつもりだったからそこは良いのよ。でも、ちょっと問題ありな相手だね。すぐにとは行かないの。男だしね……念のためちゃん切っておこうかしら」

「は？」

「食卓でそのような発言は好ましくありませんわ、ティシアさん」

エデナがやけににこやかな微笑を浮かべている。が、目が笑っていない。その顔を横目に言葉を反芻し、少し遅れて未来も理解した。「別にそこまでは……。いざというときの対処法は分かっていますし、大丈夫です」

その言葉に、ティシアとエデナが硬直する。その二人に気付かな

いまま未来はのんびりと食事を済ませ、併せて出されていた新鮮な果実を幾つか嬉しそうに摘まんだ。

ベリー類を数粒食べてから、未来はどこか態度がぎくしゃくとしている二人にきよとんとする。

「どうかしました？」

「ううん、別に。随分と行動派、なのねえ」

「そんなもんですか？ まあ、確かに私は故郷ではスカートよりパンツ派だったので、足を振り上げるとかあんまり抵抗ないですけど、未来は自身を見下ろした。」

今日は体を締め付けないタイプのワンピース。爽やかな印象の淡い緑地は、見た目だけでなく肌触りも良好だ。

「そうだったのですか？ では、衣装もそういった物を用意しましたよ、ようか」

気を取り直した風情で食後の紅茶を淹れ始めたエデナに、未来は指先でブルーベリーを転がしながら頷く。

「そう、ですね。数着は、欲しいですね」

「分かりました。では、数日中に仕立屋を……」

「あ、ま「どうせ着るなら、体系に合った物の方がいいわ。それに、仕立屋にきちんと作らせた方が長持ちするし、結果的に得よ？」

未来の言葉を遮ったのはティシアだった。リゾットの最後の一口を口に入れ、果実と共に添えられていたミントを食みつつ立ち上がる。

机をゆっくりと迂回して未来の方へやって来ると、手袋をしていない指でおもむろにその肩をなぞった。見た目には目立たなかった余り布が皺を作りながら一方に寄せられていく。

「体系に合わない服は、存外肩が凝るものよ。特に、体の幅に合わない物」

話すたびにミントの香りを振りまきながらティシアは寄せられた布をひねり上げ、ついでに空けていた親指をグッと無防備な肩に押し当てた。思いがけぬ刺激に、未来は思わず悲鳴を上げる。しばらく

く彼女の指は細い肩を放さなかったが、やがて満足げに頷いた。

「ん、良いわね」

手を離し、軽く身を伸ばす。エデナから差し出された紅茶を受け取り、ティシアは音もなく干し、ソーサーごと机に置く。見るからに無造作な仕草なのに、音がほとんど立たないのが不思議だ。机から手を離す際、朝食の前に投げ出すように置いていた手袋を取っていく。

未来も供された紅茶に口をつける。多めに垂らされたミルクは、やや濃い目に淹れられた茶に良く合った。

エデナが食器を片付ける間にティシアは少し離れた位置にあるソファまで歩いていき、軍服の上着を脱ぎつつ座る。

そこから出るわ出るわ、革の巻きに短剣が数振り、細長い筒、薄い金属の輪……。服一着からよくぞここまで、と呆れを通り越していつそ感心するほど多くの物が、手際よくソファの上に並べられた。ティシアは全て出し終えると、革の巻きをさっと広げ、手袋をはめた指でそこに収められた銀色の細い棒を抜いては検め、また戻すという規則的な動作を手際よく繰り返し返す。それが終わってくるりと巻かれた革が上着に仕舞われると、今度は短剣が、やはり同じ過程を辿った。

未来が紅茶を飲み終えるのとほぼ同時に最後の検めを終え、ティシアは軍服を羽織り、ボタンをはめた。

「さて、と。じゃ、行くわよ。エデナ、日傘出して」

「ううん」

「あら、気が利くじゃない」

何やらポンポンと進んでいく会話に未来が目を白黒させていると、ティシアが恭しく手を差し伸べてきたのでさらに驚いた。

「この無骨者に、しばしお付き合いますか？ お嬢さん」

丁寧な物腰に反して、その顔はどこか悪戯っぽい。それに少し安心して、未来は気になっていた事を聞く。

「外へ行くんですか？」

「ええ、会わせておきたい相手がいるので」

食後の運動がてら少し動きましようという提案に、未来も異論は無い。

出された手に手を乗せ、立ち上がる。立ち上がったので離れようと思つたら、ティシアは手を離してくれず、にこりと笑つて未来の反論を封じ込めると、エデナの持っていた生成りの傘を受け取つて扉へと向かう。

廊下へ出ると、扉の横に立っていた白い装いの若い男が軽く敬礼をしてきた。太陽神殿騎士団の一員か。

その視線が一瞬未来に向いて、直ぐにティシアに戻る。

「ご苦労。食事に行つていいわ」

「はっ……必要とあれば、持ちますが？」

「良いわ、ありがとう」

一方に未来の手を、もう一方に傘を持ったティシアは軽く笑つて傘を持つ手を軽く振つた。

何故だか少し目を蕩かせて頷き二人を見送る彼に背を向けて、ティシアはすたすたと廊下を歩き始める。

「今の人は？」

「寝ず番。これから輪番で回つてく事になるから。……それより、私にはいつまで敬語なのかしら？」

拗ねたような物言いに未来が思わず笑えば、笑い事じゃないわよ、と、高い位置で束ねられた赤毛が踊つた。飾り気の無い髪型。あの日使っていた簪がどうなったのか、未来は知らない。

そんな調子で彼らが歩いているとやがて廊下は途切れ、外へ出た。まだ朝なのにもうずいぶん日差しが強く、まだどこかぼんやりしていた芯が一気に目覚めたような気さえする。しかしその感覚は、

決して悪くはないものだ。

未来が空を見上げて微笑んでいるとティシアはそつと手を離し、彼女が視線を戻すのと同時に傘を広げて差し出してくれる。

「こつちよ」

太陽を浴びて振り返る彼女の顔はまぶしい程で、未来は目を細めてから少し小走りでその後を追いかけて、花がこぞつて咲き乱れる庭園へと入った。

庭園に入り、小道から本道へ出ると、とティシアがここは参拝に来た者にも開放されている庭園なのだと説明した。ちなみに彼女らが入るに使ったのはいわゆる裏口で、通った小道も、植え込みで巧妙に隠されているため、本道を歩く者がその存在に気付くことはほぼ無いのだそうだ。

ティシアは続いて視線を上空に向け、未来も見てみるよう促す。

未来は視線を上げて、細長く広がる白の上に、それまで存在自体知らなかった巨大な円形を見た。

空の青によく映えるその白い円蓋は、自ら光を放っていると錯覚を起こしそうなほどに輝き、今まで気付かなかったのが不思議なほどの存在感だ。一方で悪目立ちしているというわけでもなく、直線で構成された建造物の中に当たり前の顔をして座している。

「あそこは参拝客が祈りを捧げ、神官達が訓おしえを垂れ、時に我らが神子姫が来た者の前に姿を見せる講堂。芸術的にも一見の価値ありねいずれ案内してあげる。……綺麗なところよ」

最後に言葉を付け加えた横顔がいやに淋しげだったが、その影を一瞬の内に収めると、ティシアは未来の居る向きとは逆の方向へ笑いかけた。

先ほどまで未来とティシアの二人だけだったはずの遊歩道に、男が一人佇んでいた。

庭師の服装をしている彼はずっとそこに居たとでもいいたげに、場にじっくりと馴染んでいた。

一体いつ現れたのか、未来にはさっぱり分からなかったのだが。

思わず影があることを確認し、ひっそりと自己嫌悪する。

「おはよう。悪いわね、急に呼び立てて」

そんな未来を知ってか知らずか、ティシアは朗らかに声をかけた。

「そちらの呼び出しにはもう慣れた。今度はどんな難題を吹っかけてくるつもりだ？ 月の副長^{疫病神}」

男は無感動に答えながら横で咲いている花に手を伸ばし、茶色くなってしまった葉を摘む。楽しそうに弾む笑いが応じた。

「やあね、そんなに褒めないですよ。私のお願いくらい、あんたには朝飯前でしょう？ 一人の群集」

「その呼び方は止せ。なんの嫌がらせだ」

そう言う彼の厚手の前掛けから取り出されたのは、黒々とした鋼鉄の鋏。目の前にかざし、一度ぱちんと鳴らす。その音が、やけに響いた。

「褒めているのよ」

「そちらの酔狂に付き合っていたらこちらの身が危うい」

色々疑問、突っ込みどころ満載な応酬に、未来は完全に置いてけぼりだった。

（今、月の副長って言葉の印象の上に疫病神って見えた。というか、ティシアさんって一体。いや、その前にそもそもこの人誰……?!）

日傘でこころ変わる表情を隠しながら悶々としていると、ぱちん、ぱちんと虫に食われた葉、萎れた花を裁ち落としながら男がらりと話題を変えた。

「して何用だ？ わざわざ呼び出して碌な内容でなかったら帰るぞ」「我らが姫から承諾を頂いていても？」

鋏の動きが止まる。男の視線がティシアにじろりと向いた。焦がしたキャラメルに似た肌以外はこれといった癖のない容貌の中で、そこだけが猛禽のように鋭かった。

ティシアが悪びれない表情で近寄り、懐から封筒を一つ取り出す。何かの植物を抽象化したらしき模様を散らした、どこか上品な趣の物だ。

胡乱な目つきでそれを受け取り、くるりと返す。

「確かに姫からだ」

表情を変えないまま鋏を前掛けのポケットに入れ、封を切った。中に入っていた紙に視線を走らせ、読み終わると同時に火を放つ。掌の上で自然に生じた物ではない炎に焼き尽くされる紙片が、一瞬青白い光を放った。

「聞こう」

ため息混じりに吐き出された言葉と共に、その視線がティシアの後ろに立っている未来へと向けられる。

思わず身を硬くした未来に向けられた視線は、思いの外優しい。むしろ憐れみか同情か。何にせよ、悪意は感じられなかった。ただ、ティシアに戻るとその視線は途端に険を帯びたのだが。

そんな男の様子も何処吹く風で、ティシアは未来を手招く。そしてそれぞれ向かい合ったところで傘を下ろそうとした未来を制した。「日焼けしてシミ出来ちゃうから。東屋でもあれば良いんだけど、あいにくこの辺りには無いしね」

良い化粧品があるから後でね、と付け加え、さて、と男に向き直る。

「えっと、ヤネツドだっけ？」

「ここではローホだ」

「そう。ミク、こっちはヤネツドよ。名前を幾つも持つてる男でね。ヤネツドも本名じゃないけど、よく使ってるの。……こっちはミク。あんたも聞いているでしょ、“名も無きあの方”の気配持ち。時の力の所有者」

聞いておきながらスルーして、ティシアが二人にそれぞれ互いを紹介する。未来が曖昧に頷いたのとは対照的に、複数の名を持つらしきヤネツドという男は表情一つ変えない。

ティシアが咳払いをし、やや表情を改める。宵闇の青を彷彿とさせる双眸が、星の如く煌いた。感情を悟らせない静かな表情も様になる女だ。

「私達もなるべく付いていたいとは思うけれど、これから仕事上、全員が外さざるを得ない状況が必ず出てくるわ。だから、今の内に話付けておきたいのよ」

王宮合同の大規模な討伐時なんか団の片方ごっそり抜けるし。と、未来には意味の分からない事を言いながらティシアは頭を振る。

やがて言い訳とも愚痴ともつかぬ呟きを切ると、ティシアはヤネツドを真っ直ぐに見据えた。軽く腕を組む。

「あんたに頼みたいのは、私達が側に居ない時の保険 要はこの娘の護衛よ」

不本意だと顔にしつかりと書きながら、仕方ないと知った様子で、彼女は滑らかに言い上げる。

「……つまり、この人も私と一緒に行動したりするの？」

どこか気の重たげな未来の問いかけに、ティシアの返事は意外なものだった。

「いいえ、必ずしもそうではないわ。だってミク、誰かとずっと一緒に居る事、慣れてないでしょ？ 特に対男で。これ神殿お抱えの隠密部隊の隊長だから、非常時にしか会わないわよ。普段は存在忘れるくらい勢いでも全く問題なし。完全に自由の身とは行かないけど、まあ、そこは我慢してちょうだい」

未来はぼかんとしてティシアの顔を穴が開くくらいに見つめる。

「……知ってたの？」

「これでもミクより長く生きているのよ。それくらい分かるわ」

普通の人は、見られ続けることに慣れてないものだしね。とどこかほろ苦い微笑で続ける彼女には、見られ続けることで生じた苦い記憶でもあるのだろうか。

その表情のまま、彼女は言葉を選ぶような風情を見せながらまた

口を開く。

「だからね、ゆっくりで良いから、肩の力を抜くことを覚えて。でないと潰れてしまう。……人ってね、弱くは無だけれど、自分が考えているほど強くも無いのよ」

その笑顔はひどく優しく柔らかく　そして深い苦しみと哀しみで裏打ちされていた。

未来が我に返ったとき、ティシアとヤネツドは顔を突き合わせて、小声で何やら話していた。

近付いてみてもひどく早口で、何を言っているのかはよく分からない。ただ、両者の間で話がまとまっていつている事は、表情からなんとなく察せられた。

交渉用の仮面を貼りつけたティシアの顔は涼しげだが、禁欲的な立襟まできっちり留められた軍装は、色も相まってひどく窮屈そうだ。

会話に割って入るのも躊躇われて、未来がしばらく横で見ていると、やがて話がまとまったのか、両者頷きながら会話を止める。

ちらと未来を見やったティシアが、いつものように笑いながら口を開いた。

「話付いたわ。ごめんね、暑かったでしょう。本当は顔合わせくらいで済ますつもりだけど、予想以上に穿った話になっちゃってね」
手袋をはめた手が未来の上気した頬に伸ばされる。手袋越しに触れるか触れないかで離れた指先は、肌に触れる空気よりも熱かった。

ヤネツドはそんな二人からついと視線を逸らすと花壇の傍に屈みこみ、剪定鋏でまたぱちんぱちんとやり始める。本当に用事が終わったのかと未来が思っていると、彼は再び立ち上がり、鋏を片手に握ったまま近寄ってきた。

ぎょっとして立ちすくんでいると、男は鋏を持っていないほうの手を未来に向かって差し出す。

その手に握られているのは八重咲きの、菊に似た白い花。見覚えはあるが、名前が思い出せない。

未来が二重の意味できよんとすると、彼は心なし目を細めてま

た少し腕を伸ばした。くれるということらしい。そつと受け取ると、一つ頷いて男は身を翻し、現れたときと同じく幻のように姿を消した。

「さあ、戻るわよ。そのジニア、早く活けないとね」

襟のホックに留まらず釦もいくつか外し、ついでに腕も捲り上げながらティシアが来た方向に向きを変える。その背中を、未来は思わず呼び止めた。

振り返った彼女に、自分から声をかけつつ言葉を探しあぐねて、未来はいつたん俯く。

先ほどの言葉でジニアという名だと知った花が、頷くように揺れた。それに背中を押され、未来は持っていた日傘をティシアに向かって差し出す。意図を察して断ろうとした相手に先んじて、傘の柄を押しつける。

「後は戻るだけ……なんでしょ？ 私にとっては数日振りの外、なんだもの。少しくらい陽に当たりたいわ。いいでしょう？」

ティシアが驚いたように目を瞬かせた。

その顔を、なんとなく恥ずかしくて直視できず、未来はそっぽを向いて横からすり抜けた。初めて敬語でない口を聞いたのも、顔を見られない一因だった。

（やっちゃった。超恥ずかしい！ なにこれ、なにこの羞恥プレイ！）

うわあああ、と内心慌てふためきつつ、そそくさと植木を掻き分けて小道へと入っていく背中を見て、ティシアは小さく吹き出した。

この書庫の静寂は、いつだって好ましい。本のページを一枚繰って、ユリウスはうつすらと笑った。

その瞳は文字を追っているが、その耳は静かにされている説明に

傾けられていた。報告をする声は高すぎも低すぎも大きすぎも小さすぎもせず、場の空気を乱さない。

やがて流れるようだった言葉が切れると読んでいた本から視線を上げ、ユリウスは微笑を湛えたまま一つ頷いた。

印象が薄いわけでは決していないが、どことなく淡い雰囲気の色合いには、柔らかな表情が良く似合う。一方で、戦いの最中、銀系の隙間から相手の間隙を見定める冴えた面差しも悪くはない。

その相反する要素の源はやはり、意思をよくよく反映する双眸か。状況によってがらりと印象を変えるその眼差しは今、淡くけづる春の空に似ている。

「ただでさえ多忙だというのに悪いね。仕事を増やして」
「いいえ」

少し離れて佇んでいる男は静かに頭を振る。

その装いは侍従の物。しかしその顔は、未来やティシアと向かい合っていた、ヤネツド、あるいはローホという男と同じものだ。ただ、先ほどはよく陽に焼けているように見えた肌は、今は病的でない程度に白い。

「それで、隠蔽工作の方はどう？」

「どうにか進んでいます。ですがどうやら何人か国外に連れられたようです。申し訳ありません」

あまり感情の伺えない声だったが、最後の謝罪には誠意が感じられた。そこでちょうど章終わりまで読み進め、ユリウスは本を閉じる。拍子に頬へと落ちた髪を、鬱陶しげに手袋をした指で払った。中途半端な長さのため、まとまりきらないのだ。

「なら、精々彼等がその情報に踊らされるよう状況を仕向けなければね」

鼻で笑いながら青年が立ち、椅子を押し戻す。その手に持たれた本の表紙をちらと見て、男は目を細めた。

「結界学ですか」

「真面目に勉強しようかと思ってね」

機嫌が良い時の猫に似た声を立てながら、本と本との隙間にその一冊を戻す。此処の本は一冊一冊が希少品なので、借りる事が出来ない。

「いざというときに結界の補填くらい出来ないんじゃない、口先だけの人間になってしまう」

口調は軽いが、先ほどまで麗らかな目だった目は鬼気迫って見えるほどに真剣そのものだ。こういつた時の瞳は、よく研がれた上等な玉鋼に似ている。

そう言った後で、青年はふと逸る自分に呆れたように苦笑を漏らした。同時に、知らず詰めていたらしい息を吐き出す。

「……らしくないねえ」

どこか苦い調子で呟いて銀の青年は、おっとそろそろ追加の書類が届く頃だと早足に書庫 入室出来る者が限られる第二図書館を後にする。

律動的な足音は少しずつ離れて、やがて静かに消えた。

あまりに鮮やかな個性に去られ、常より暗く、色褪せたような空気の漂う書庫内で、男はしばらく黙然と佇んでいたが、やがてついと視線を上げた。

人の気配、正しくは人が発する熱に反応して点灯する仕組みのランプ以外に明かりの存在しない此処は、地下だ。オーク材の木目が美しい天井が心なし低く見えるのは、気のせいか。

そんなオークの、頭上の辺りにある継ぎ目を猛禽の眼まなこがじろ、と睨む。

「何をしている」

音沙汰ない。しかし男が踵を合わすように鳴らすと、慌てたよう

に天井が僅かな軋みを立てて一枚持ち上がり、そこから顔が一つ覗いた。逆さまにぶら下がっているのは短く髪を切りそろえた、まだ若い少年……にしか見えない少女の上半身。

「標的に警告は伝えてきました。返事ありますが、聞きますか？」

「聞こう」

「面倒事は嫌だ。だそうです」

似ていない少女の物真似と、その時の彼の表情が手に取るように思い浮かんで、男は僅かに口元を歪めた。

「却下だと伝える。ほぼ野放しだった今までの状況こそ異常だった」と

「ええっ……………はい、分かりました」

思わず嫌そうな声を上げ、しかし男に黙って睨まれたため、少女は亀のように首を縮める。

「後でこちらが直接出向く。それよりそちらは何故正規の入り口から入ってこない？」

向いた矛先に、少女はますます身を縮めた。しかし沈黙という選択肢は彼女の中で初めから存在しないようで、やがて渋々と口を開く。

「……………苦手なんですよう。ここの管理人さん」

情けなく眉を寄せる彼女に、男はやれやれと目を細める。

彼が統括する隠密部隊には、此処の管理者たる老人を苦手とする者が少なからず居る。

任務上、物事を中庸の立場で見る事に慣れた彼らをしてそうなのだ。能力は確かだが偏屈で気難しいと評判の第二書庫の主は実際、人と関わる事が少なく、双神宮の人間の大多数から敬遠されていた。

男の常人より鋭利な聴覚が、ふと一人分の足音を捉える。やがて続く、一つの仰々しい咳払い。少女の肩がびくりと跳ねた。

「あっ、えーと、私失礼しますっ！」

少女の上半身が天井の上に隠れ、静謐な書庫の空気を一拳に騒が

しいものへ変えながら持ち上がっていた板が元の位置へと戻った。

隠密にあるまじき騒々しさでオーク材の上、本来の天井である石材との間に設けられた空間を走り抜けていく音に、隠密部隊の長であり、少女の師でもある男は大きく嘆息する。

いつもどこか不機嫌そうな表情の老人は、相変わらずの顰め面で天井を見上げ、頭部に巻きつけられた、古びてはいるが美しい模様が縫い取られた布を節くれの目立つ指でそつと撫でる。書庫が騒がしい時、咳払いと並んで彼がいつもしている仕草だ。

「申し訳ない。部下が粗相をした」

そう言っている端から、何かに躓いたらしい派手な音が響き渡る。一度芯から鍛え直すべきかと半ば以上本気で考えつつ、男はこめかみを押さえてまたため息を吐いたのだった。

一方その頃、未来とティシアは連れ立って部屋へ戻る途中、巻紙を幾つも抱えたフィオルと出くわしていた。

「あら、大荷物」

「結びの間からの帰りなんだ」

ティシアの言葉に答えながら紙を持ち直す。重さはさほどでないようだが、嵩張って見るからに持ちにくそうだ。

「戻るなら、方向逆よ?」

「ユリウス殿が見たいって言うんで、渡して帰ろうと思ってな」

「ああ、なるほど。……皮肉よね、自分が作った道具が使えないなんて」

皮肉っているというより、ティシアには珍しく同情の響きがこもった言葉だった。

「魔力はあるのに使用適性が全く認められないなんて、嫌にならない? ここでの仕事」

そんな言葉に、フィオルは少し笑った。

「まあ、確かに不便さを感じることはあるが、逆だな。あれも、行く行くは使用者の魔力を注ぎ込まなくても使用可能にしてやるさ」

一種の反骨精神とでも言うのか、どうも諦めるという言葉とは無縁らしいフィオルに、未来は目から鱗が落ちるような心地だった。ただの人の良い男では無いらしい。

「にしても、一人で行くの？ 従卒くらい連れて来れば良かったのに」

「ああ、そうだな。遠回りだったから念頭にも入れていなかった」
今思い当たったとも言いたげな、否、実際そうであるう物言いに、ティシアが呆れ返った。

「そこは呼びつけるところでしょ。分かってる？ あんた副隊長よ。まあまあ偉いの。そんな立場の人間が、まだ受け持ったばかりの従卒だからって扱いに困ってるようじゃ駄目じゃない。……ああもうっ！ なんで私がこんならしくない説教してるわけ?!」

しまいには怒り出したティシアに、フィオルは傾きかけた片方を持ち直しながら目を細める。

「従卒を連れて回らないのはお前もだろう」

「何か言った?」

「別に」

短く答えながら、もう一方も揺すり上げる。どうやら持ちにくいだけでなく、安定感にも乏しいようだ。

未来は視線を落とした。その手には、先ほど庭園で渡されたジニア。

その花卉はまだまだピンとして力強かったが、運ぶのを手伝ったら萎れてしまいかもしれない。真意は定かでないが、悪意からではない貰い物を早々に駄目にしてしまうのは、未来のプライドが許さない。駄目にするにしても、相応の対応を取ってから、というのが持論だ。

しかし、フィオルの抱えた荷物も気になる。ほぼ両脇一杯に抱えている状況では、「持つ」以外の行動をとることは難しいだろう。どうしたものかと考え込んだ彼女を見かね、ティシアがつかつかとフィオルへ歩み寄った。

「ん？」

「少し遠回りになるけど良い？ 花活けたいの」

そのまま、フィオルの返事を待たないままその片脇から紙束を掻っ攫った。言葉と行動が全くもって逆方向に突っ走っている。

フィオルは荷物の一方を奪われて目を丸くしているが、言葉と行動の矛盾については全く言及していない。矛盾に気付いていないのか、慣れていいのか、判断に悩むところだ。

ティシアは奪った半分をさらに二つに分割し、片方を未来に渡す。

突然の彼女の行動にきよとしたのは未来もフィオルも同じだが、合点した様子を見せたのはフィオルの方が早かった。

「ありがとう、お嬢さん。実は少し悩んでいたんですよ、まさか膝で扉を叩くわけにもいきませんしね」

「日常生活でのおつむは案外馬鹿よね」

「お前は相変わらず口が悪いよな。だから嫁きおく……ってえ」

ティシアの足が目にも止まらぬ速さでフィオルの鳩尾あたりに食い込んだ。

速度からしてかなりの勢いも付いていたはずなのだが、フィオルは短く呻いてたたらを踏んだくらいでどうともない。

あからさまに舌打ちしながらティシアは振り上げた足を戻し、腕に抱えた紙束を持ち直してさっさと歩き始めた。

瞬時には理解しがたい出来事に未来がぼかんとしていると、フィオルが苦笑しながら話しかける。

「行きましようか。花を、部屋で活けるのでしょうか？」

「あ……、はい。……あつ、あの、体、大丈夫ですか？」

「ありがと。これでも体は丈夫ですしあれの足癖の悪さには慣れてますので、平気ですよ」

早く行きましょう、置いて行かれます。と柔らかく告げる声。

丈夫とか慣れてるとかそういう問題ではないだろうと内心つつこみつっ、未来は東と花と気を持ち直し、二人が居なければ確実に迷子となっていたらう廊下を歩き始めた。

「結びの間って、何ですか？」

僅かに半歩ほど前を歩くフィオルに聞いてみれば、視線すら動かさずとも事は足りるのに、わざわざ首を巡らせながら男は答える。歩調といい、こういったところが、優しい男だと思う。

「この双神宮に、結界が張られていることは知っていますか？」

「はい」

いつも人好きのする穏やかな物腰は、今も変わることなく未来の心に安心感を与える。そういえば今朝も、灯りが点いたままだったので消しておいたとやんわり笑ってティシアと変わったフィオルだった。

「結界については軽く説明済んでるわ。此処に来た日に、言われる前に気付いたのだもの」

歩みを先ほどまでより少し緩めたティシアが振り向かないまま言え、フィオルは僅かに驚愕の声を漏らす。

「大抵の迷い人は双神宮に目を取られて、結界までは気付かない場合が多いんですがね」

「あーでも、代わりにあの丸屋根……講堂の方は今日始めて存在を知りました」

少しはにかんだ未来に、フィオルは微笑ましげに目を細めた。

「ああ、話が逸れましたね。結びの間というのは、双神宮を覆う結界の術式が展開されている所ですよ。先日の襲撃の一件で、結界が

磐石でないことが分かり、今は新しい術式の構成で大わらわなんです」

これは新術式の試作品なんですよ、と紙を顎で示しながら続けたフィオルに、未来は驚いて腕に抱えた物を見下ろした。

フィオルが一つ引き抜いて広げて見せてくれた紙には、丸やら三角やらの図形を幾つも組み合わせ、なんとも独創的　ぶつちやけこの世界の言葉の読めない未来にも下手だと分かる文字だか模様だかがそこかしこに書き込まれている。ミミズがのたくったような、という形容はこの世界の文字にも当てはまるらしい。

ただ、少し決まり悪げにフィオルが弁解したところによると、この惨状は、下書きである事に加え、携わっている者達はほとんど不眠不休で作業しているからこんな事になっているのであって、普段はもう少しマシなのだそうだ。

「ところでフィオルさん、そろそろ止めにしませんか？」

未来が小首を傾げて見せた。特別美人というわけではないが、小綺麗な感じにまとまった顔立ちは可愛らしいという形容が似合う。きよとりと首を傾けている今など余計にそうだ。

「なにをです？」

穏やかに尋ねる青年に、未来は緊張から思わず顔を紅潮させる。

「その……敬語。テイシアさんとも無しって事になりましたし……ね？」

自らで蒔いた種とはいえやはり気恥ずかしいのか、テイシアへの声かけは半ば誤魔化しが混じっていた。もともと未来は年上に敬語を使わないという事態に慣れていない。

「ええ、そうね。可愛かったわよ。顔真っ赤にして。……今みたいだね」

最後だけややドスのきいた声でテイシアが振り向き、フィオルを釘を刺すように睨んだ。直ったように見えたが、やはりまだどこもなく機嫌が悪い。

「そうか」

「着いたわよ」

睨まれるのもどこ吹く風でフィオルが顎に手を当て頷くのとティシアが立ち止まったのは、ほぼ同時。

扉を開けたティシアに促され、未来だけ部屋に入る。その際にエデナに渡してと日傘も持たされた。

室内に入ると、埃があるとも思えない家具を払っていたエデナが顔を上げ、ふわりと微笑む。

「またどこかへお出かけですか？」

両腕で抱えた複数の巻紙に視線を止めるエデナに、未来は照れたように笑う。

「はい、ちょっとフィオルさんのお手伝いで、ユリウスのところにこれを届けに行くんです」

「そうですか。では、日傘はお預かりしましょう。兵舎へは渡り回廊が付いていますから」

羽箒を手近付いてきたエデナが、傘の柄を引っ掛けた未来の手に握られた花に上品に首を傾げた。

「どなたかからの贈り物ですか？」

優しい眼差しに、鋭いものが浮かんだ。

「あ、ええと、ヤネツド……あれ、ローホ、だったかな？ うん、そういう名前の人からもらったんです」

拳げられた名前に彼女の目から途端に鋭利さが抜け落ち、元の柔和さを取り戻す。

「ああ、あの人ですか。彼は見込んだ人には花を贈るんです。きっと気に入られたんですね」

踵を返して、壁に据えつけられている棚から一輪挿しの花瓶と鉢、そして小さな器を出してくる。それらを手近な机に置くと、エデナは未来を手招いた。

近寄った彼女の手からジニアを受け取り、いつの間にか水を張った器に茎を浸ける。そして鋏を手にし、水の中で斜めに切った。

やはり水で満たされた一輪挿しに花を挿し、それで完了だ。

「これで数日は大丈夫かと思えます」

「ありがとうございます」

「いいえ。ああ、傘を預かるのを忘れていました」

そこで日傘を腕から外し、微笑を浮かべて未来を開いたままの扉まで送った。廊下で何やら話し込んでいた二人に、上品だが遠慮は少ない様子で二言三言言付ける。

そして三人が廊下を歩き始めると、その姿が見えなくなるまですっと見送り、そして自分の仕事へと戻った。

双神宮の本宮は、上から俯瞰するとちょうど鳥が翼を広げている形に似ている。

実際は他にも多くの建築物が存在しているが、王宮と遜色ない広さを有する敷地に細長く伸びているそれに、一番初めに目が行くのだ。

陽と月の二柱の神を描いた話の中に鳥を主に据えたものは無い事から、古くから疑問の絶えない形だが、双神宮が今の形になった時の神子が、この形について異論を述べた事は無いと言う。恐らく鳥が役目を持った話もかつてはあったが、失われたのだろう。

全体に細長く伸びる建物は胴体。

講堂は勢いよく天空を振り仰ぐ頭部。

左右に広がる二つの棟は双翼。

そして、講堂へ繋がる斜線状の回廊は尾羽。

意図していると考えなければ違和感があるほど、本宮は丁寧に鳥を模していた。

ちなみに未来達が入る時に使用したのは立ち位置的には非公式なもので、お忍びで双神宮を訪れる者達の為に設けられたものだ。こちらは胴体部分に直結している。

月神殿騎士団と太陽神殿騎士団の兵舎はこの中では双翼の部分に当たり、東西に伸びていることから、東翼・西翼とも渾名されていた。東が太陽で、西が月に当たる。

講堂と同じか、やや奥まって位置するこれらの手前までが、参拝客が自由に回れる範囲であり、同時に双神宮の公の部分と私的な空間を隔てる境界だ。

即ち、外は兵舎、内は講堂が　前者は騎士、後者は神官に置き換えられる　双神宮において境界線を引く重要な役割を担っている。

どちらが欠けても双神宮は成り立たず、両者の立場は平等であることを認識させるかのように。

そして、引かれた境界を無断に超えようとする者は、神子姫に仕える騎士、あるいは神官の手によって遮られることが、此处での暗黙の了解事であった。

未来達三人は西翼へと繋がる回廊を渡り、二階建ての細長い建物へ入る。

扉を潜ったその先にはややこぢんまりとしているが手の行き届いたホールがあり、二階へ続く階段がある。階段の左右にはそれぞれ廊下が、奥へと続いている。

テイシアが先導して、階段を上がる。階段から直接続いている廊下には扉が規則的に向かい合っており、そのまま奥へと伸びていた。二階は隊長格が執務を取る区画になっている、とテイシアが歩きながら未来に説明し、驚くほど足音を立てずに廊下を進んでいく。音を立てないのはフィオルも同じで、廊下には未来の立てる足音だけが軽く響いていた。

廊下も奥まり、やがて未来達の正面に壁の代わりに大きな観音開きの扉が現れる。テイシアがそれを軽く叩くと、返ったのは未来が知っている声よりも硬質な誰何すいかの響き。それにテイシアが答え、気負う様子もなく取っ手に手を掛けた。

扉が開け放たれると、意外に涼しい空気が入室者の頬を撫でる。巻紙を抱えて未来が部屋を見渡すと、二つある窓の内、僅かに開いた窓辺に、子供の頭ほどの大きさの結晶が置かれているのが見えた。

淡く薄く水色を帯び、透き通ったそれはまるで、無造作に切り出された氷のようだ。レースのカーテンがゆらりゆらりとはためく度、ひんやりとした風が室内に流れ込む。

未来はふと、アレクシスがくれた飴の袋を思い出した。

開けた時、始めに感じた冷気。その原因は、小さな水色の破片。氷水晶だった。それと、今窓辺に置かれているもの。大きさは違うが、どうやら同じ物質らしい。

こういう事にも使えるのかと感心交じりに納得していると、くすりと小さな笑い声が空気を震わせた。

「おやおや、こんなむさ苦しい所には似つかわしくない花が一輪」万年筆を置き、席を立つ銀髪の青年。胸の前でゆるく編まれた髪を結ぶ紐に通された紫色の石が動きに合わせて微かに揺れる。

むさ苦しいとは言うが、未来達が通ってきた兵舎内は確かに合理性に則った殺風景さはあれど、よく手入れされており、見苦しい印象はなかった。

ユリウスの執務室らしいこの部屋もよく気が行き届いているし、長い年月を経なければ出せない光沢の机もどっしりとした雰囲気だ。未来達が使った扉と、室内にもう一つある扉のそれぞれ脇に活けられた、清楚で上品な白薔薇と華やかだが落ち着いた色合いの赤薔薇の束は、誰の手によるものか。室内全体に漂う古めかしさからくる重厚さを、さり気なく和らげている。

「三人とも、わざわざありがとう。でも、もう少しゆっくりでも良かったのに。そうだ、お茶でも飲んでいく？」

「お構いなく。すぐに戻ります。ああでも、お嬢さんはゆっくりして行くかな？」

「あ……ううん。私もすぐ戻る。仕事の邪魔、しちゃったみたいだし」

どこかぎこちないが敬語の取れたやり取りに、青年の青い瞳が興味深げに瞬いた。銀色の呼び鈴へと伸ばした指がそっと戻される。思案している様子だった口が、歌うように割って入った。

「別に忙しいって程じゃないけど」

「馬鹿を言わないでください。皺寄せがそちらに行っているでしょう」

「まあね。でも繁忙期ほどじゃないし、精々二日か三日の事だ。二人分の仕事くらいどうって事ない」

そんな上司と同僚のやり取りに、ふとにやりと笑ったのはティシアだ。

「あら、初耳。鬼の霍乱ね。後でからかいに行つてやるうかしら」
「だからお前には言わなかったんだ。頼むから止せ。うちの隊長の機嫌最悪になるから」

ひどく楽しげなティシアと本気で止めているフィオル、そしてユリウスの言葉から類推して、未来は一つの結論を弾き出した。ハツと顔を青ざめさせる。

「アレクシスさん、怪我でもしたの?!」

四人の隊長副隊長の内、目覚めてから未来が未だに顔を合わせていないのはアレクシスただ一人。彼らの言動からしてさして事態は深刻ではないのだろうか、未来の意識はそこまで及んでいない。

「ああ、大丈夫だよ。一人でげん……魔物討伐行つてその足で帰つてきて、報告書書いた後疲労で倒れただけだから。帰ってきたのが君の起きる前で、倒れた後に君の目が覚めたから、完全にすれ違ひだったね」

今はもう目覚めてるから大丈夫だよ、と締め括ったユリウスが執務机を離れ、未来達が持つてきた紙の束から一つを取り上げて広げ

る。術式の試作品は、向かい合って置かれたソファの間に据えつけられた、低めの卓の上に山積み状態なのだ。

「魔物つて、この世界に居るの?」

「居るよ。昨日、狭間について説明したね。この世界の魔物は、その狭間から這い出して来るものだ。俺達は幻魔と呼んでいる」

「幻魔……幻想の、魔物」

知らず口をついた言葉に未来は眉を寄せる。どうしてそんな形容が出たのか、自分でもよく分からない。しかしその表情は、抱えた巻紙に遮られて他の三人の目には触れなかった。

ユリウスは紙の山を崩しながら続ける。

「幻魔は、本来なら存在しない姿形のモノ。この世界の在り方を歪める可能性があるモノ」

詩を誦^{そら}んじるような響きで呟いて、一つ間をおいて今度は専門書を朗読するような固い口調で話し始めた。

「現れた所から大きく移動することは無く、そして、存在するだけで世界を蝕む。生態も一定しない謎の多い生き物だけれど、そこだけは共通しているんだよ」

「……王宮合同の討伐つて、幻魔の討伐?」

庭園でテイシアがぼやいていた事を聞けば、ユリウスは器用に片方の肩だけひよいと持ち上げて見せた。

「半分当たり。残り半分は国中を回ったり、かな。エルドラドの治安を守る示威行動も兼ねているから」

「しい?」

「要は警告だよ。楽しんで美味い汁を吸おうと考える輩は絶えないからね。変な気を起こさないように、って事。定期的に巡回もさせるけど、それだけじゃ決定的な押しが足りないからさ」

何やら億劫げにため息を漏らし、ユリウスは紙を巻く。

そうしたところで、まるで狙いすましたように扉を叩く音が室内に飛び込んだ。

「お入り、アーシェ」

ユリウスが声をかけると、入ってきたのは一人の子供。未来が目覚めた日、顔を見せた少年だった。アーシエと言うのか。その彼は、今日も書類の束を抱えている。

三人を見て驚いたように見開かれた瞳は子供らしく見えたのだが、彼らに小さく一礼をした後にはもう大人びたすまし顔に戻っていた。腕を伸ばしたユリウスへと近付き、恭しく書類を渡す。

手袋に包まれた指がざっとそれをめくっている間、飴玉のように柔らかい色を呈した瞳が何故か、ちらとティシアを睨んだようだった。

間もなくユリウスが束を返せば、彼は慣れた様子で執務机の上に置かれた二つのトレイの内、何も入っていない方にそっと置く。そのトレイの外にも何枚か、書類が散らばるようにして置かれていた。

それをきっかけに、未来は、用が済めば退室するつもりだった自分を思い出し、短く言葉をかけて身を翻した。するとアーシエがどこか微笑ましさを残る仕草で扉に飛びつき、開けてくれる。よく気をつく少年だ。

未来の後に続こうとしたティシアの背に、声がかかった。

「ああティシア、君の部屋にも追加の書類あるよ。昼までに提出よろしく」

どことなく意地の悪い響きにティシアは大げさに肩をすくめる。

が、不満は口にしない。仕方ない、といった感じが。

「困ったわね。フィオル、暇？」

「悪いがこれからもう一つ用事があるんでな。後にしてくれ」

「あ、そう」

当てが外れたとばかりに眉を顰め、彼女にしては珍しく歯切れの悪い口調で未来に話しかける。

「悪いんだけど、ここで待つか私の執務室に来るか、選んでくれるかしら？　これが迎えに来るまで」

これ、とフィオルを示しながら提示された二択は、これまたティシアらしくない。そもそもフィオルを待つ時点で、らしくない。

「おやおや、男二人に女性一人なんて、狼の群れに子羊を放り込むようなものじゃないか。私は生憎、その鉄壁の理性ほど狼を飼いならしてはいないのでね。それに」

執務机の前に座ったユリウスが、鋭いとも称せる眼差しでティシアを射た。そのきつさに、向けられた当人ではない未来とアーシエですら軽く息を呑む。

「君は、一人にすると碌でもない行動を取る節があるから」

一見、彼女の自由奔放さを咎めるような言葉は、未来にどこか違和感を覚えさせた。

同時に、ため息が空気を震わせる。

もはや音の域を過ぎて声に近い大きさと饒舌な響きは、室内で渦巻く思惑すら一刀両断しかねない勢いで、違和感を疑惑に育てかねない強引さを伴っていた。

ふるり、と馬の尾のように赤毛が揺れる。半眼となった黒瞳がうつそりと上司である青年を見やった。

「群れから逃がして、獣の巣に放り込むつもりですか？」

「まさか」

にこりと上品に笑った顔が、曲者だ。逆らう気力さえ根こそぎ奪い去っていくような、むしろ逆らう方が間違っていると思わせるような辺りが。

またため息を、ただし今度は諦めが多分に入り混じったものを吐いて、ティシアは未来に向き直る。

「ですって。じゃあ、行きましようか」

「サボるようだったら遠慮なくしばき倒して良いからね」

「ええっ?!」

振り向いて見たユリウスの表情は、本気が戯言か、判断の付かな

いものだった。

軽い調子で会話を繰り広げる三人に小さく頬笑んで、フィオルは敢えて退室の言葉を告げないまま一人部屋を後にする。

敬礼で白い背中を廊下へと送り出してくれた少年が室内に顔を戻すと、途端に彼は顔に浮かべていた笑みを打ち消し、能面のような無表情になった。

普段ですらガラスじみている色彩の瞳から、さらに人間味が削げ落ちる。

容貌そのものはさして際立ったものでないだけに、あらゆる干渉を拒絶するような眼差しがやけに目立つのだ。

規則的な歩調で歩き出したフィオルは幾度かその身に纏った白と対になる黒とすれ違いながら、一度も立ち止まらずに神殿へと繋がる回廊へと出る。

回廊を全く変わらぬ足取りで進む彼は、決して振り返ることなく翼を渡つて、そのまま胴体へと吸い込まれるようにして消えた。

少し遡って隊長執務室。

面白おかしく会話を翻弄していたユリウスの視線がふと、僅かに笑って何も言わず部屋を出て行くフィオルへ流れる。

周囲に悟られない程度にその姿を追いかけ、目にふと意味ありげな光をよぎらせたが、悟られない内に沈めた。人知れず手を握り締め、ひとときわ晴れやかな笑みをふりまく。

「じゃ、テイシアの監視よろしく」

「うん」

「……………」
すっかりその気になった未来を片や満面の笑顔、片や苦虫を噛み潰したような苦り顔で見ながら、月神殿騎士団の頭二人は思い思いに言葉を吐き出した。

「じゃ、行こうか。テイシアさん」

「……恨みますよ、隊長」

「はいはい、それなら恨む暇もないほど仕事増やそうか？ そうだな、一人でこのラニードの幻魔討伐とか……」

長い裾を揺らして机に戻り、書類の一枚を手にして意地の悪そうな笑みを浮かべたユリウスに、テイシアがあからさまに顔を歪めた。そんな様子を一頻り楽しそうに眺めてから、ユリウスは冗談だよ、と書類を置く。

「さあ、行った行った。君にとって今の時間は宝石より貴重だよ」

俺は十二時までしか書類受け付けないからね、と壁際で重厚な存在感を主張する振り子時計を指し示す。三人の視線がそこに注がれる中、長針が一つ時を刻んで、鐘が鳴り始めた。

一つ、二つ、三つ……ちょうど十打って、止まる。くるっと身を翻したテイシアの背に、ユリウスの転がるような笑い声が重なった。

足早に部屋を出て行く背中を追いかけ、ふわりとワンピースを揺らそうとした未来の動きがふと止まり、氷水晶が置かれていない方の窓へと視線がゆっくりと動く。その先には、執務机に近付いて拳を置きながら椅子を引く青年の横顔。

その端正な容貌に、明らかに何かを堪えるような硬い色。心なしか頬も白いを通り越して、青ざめてすらいるように見える。

しかし、視線に気付いた青い双眸が持ち上がった時にはそれはもう感じられなくなって、いつもと同じ柔らかな表情が未来を見た。しかし、一度気付いてしまえば繕いを探し当てるのは決して不可能ではないのだ。

「よろしく頼むよ」

「うん。……そっちも、疲れたならちゃんと休んでね。顔色、あんまり良くないよ」

彼女の言葉に、青年はほんの少し目を瞠る。しかし、あまり大きな行動ではなかった。その動きは未来まで届かない。

部屋を出て行く彼女の背が静かに閉ざされた扉の向こうに消え、ユリウスはそこで脱力したように椅子に座り込んだ。

脱力。否、保っていた糸が切れたのだ。

優雅に見えてその実精一杯な力で万年筆に伸ばした指は、拾い上げるのと前後して主の命令に背いた。

硬い音を立てて机に転がる黒塗りのペンからインクが漏れ出し、広がる。

広がるインクにも、その先に置かれた書類にも対処できないまま、半ば開かれた拳を小刻みに震わせながら、ユリウスは両の手を、あの日火傷を負った部分を庇うように自らの胸元へ寄せる。

軽い足音がして、インクが染みを作る前に書類が取り払われた。

そして、インクの広がりを防ぐためか上からハンカチが被せられる。

「悪いね。少し、火傷の部分が痛んだ」

穏やかで淡々とした声は、必要以上の心配を必要としていなかった。

未だ震えが止まらない両手を、少年はまるで自分の事のように苦しげに見つめる。感情に乏しい顔の中で、潤んだ飴色だけがひどく雄弁だ。しかし彼は主人の意を汲み、胸に湧きかえる感情と言葉を押し殺す事を選んだ。

「……分かりました。なにか、所望されるものはありますか？」

まだ声変わりが済んでいない少年の静かな声に、ユリウスは少し強ばった微笑を向ける。

「そうだな、お茶が欲しい。その棚にスミレの蜂蜜があるだろう？ それを入れて」

「冷たいままでよろしいのですか？」

「うん」

そう言った主に従卒は黙って答礼し、グラスに小さな容器から取り出した氷を一欠け入れる。そして、両手で持った陶器製の水差しから注いだ茶に蜂蜜を垂らした。

その茶の入った水差しと氷を入れた容器は、窓辺に置かれた氷水晶と同じ材質から成っており、中身をよく冷やす。

だから温くならないし、溶けない。ただしずっと持っているると凍傷を起こすので、周囲は熱を通さない特殊な陶器で覆われている。

一方グラスはガラスで作られた普通の物で、放置すれば温くなる。だから氷が必要とされるのだ。

閑話休題。盆にグラス、コースターを乗せ、零さないよう気を付けつつ素早く近寄った従卒に、月神殿騎士団を統括する青年は先ほどよりはだいぶ和らいだ顔を向ける。

「大事ありませんか？」

「心配性だね、お前は。治った後も傷のあった部分が痛むというのは珍しい事じゃないさ。まあ、近々陽の神子姫にお話を伺いに行こうかとは思っているけれどね。私の傷について最もご存知なのはあなたの方であることだし」

何気なくを装って手袋を外しハンカチを取ると、ため息を漏らす。「悪かったね。妹が縫った物だったのだろう？」

淡い色合いの布地も、どこことなく不器用な形が微笑ましい花の縫い取りも、すっかり青黒く染まってしまっている。

「いいえ、書類が汚れなかったので、良いのです」

普段ペンを転がしてある皿の上に乗せられたそれを摘み上げようとして、皿ごと受け取らされた彼の言葉は淡々としていたが、その瞼はどこか悲しそうだった。

それを見ながらユリウスは茶で唇を湿らせる。そうしている間に少年は一度部屋を出ていった。

それを咎めもせず青年はグラスを置き、書き損じの書類を数枚費やして机や万年筆に飛び散ったインクをなるべく拭き取る。

やがて戻ってきたアーシエが差し出した濡れ布巾で残ったインクも丁寧に拭い、布を返したユリウスはふと思いついたように抽斗ひきだしから無地の紙を取り出した。そしてそこになにやら書き付ける。

「ちよつと彼女付きの女官……ユードリア殿にしばらくミク嬢をお預かりすると言ってきてくれないか。昼過ぎには帰すともね。後この紙、食堂へ届けてきて」

四つ折りにされた紙を受け取ったアーシエが一礼して部屋を後にすると、ユリウスは綺麗になった机の上で再び書類の決裁を始めた。

未来が部屋を出ると、少し先に出ていたティシアが壁にもたれて待っていた。

指先で灰色の物を摘まんでいたが、未来が出てくると同時に手を握り締めて隠したので、未来には手を握ったくらいしか分からない。「お待たせ」

そう言っただけで笑った彼女に軽く笑い返し、ティシアはすりと壁を離れる。そのまま数歩歩き、等間隔に向かい合って並ぶ扉の最も手前で足を止めると、未来を促した。

その数秒にも満たない間に掌へ隠した何かを、なんでもない様子で軍服に潜めさせたのだが、その手並みは観客が居ないのが惜しくなるような鮮やかさだった。

未来が近寄ると、さて、とティシアは固く閉ざされている扉に向き直る。観音開きではなく、使われている木板は一枚だが、造り自体は隊長のそれと遜色ない。よく磨かれた飴色の表面に、月の模様が彫りこまれていた。

「月神殿騎士団だから月？」

「まあね。でも、一応他にも意味があるのよ」

ティシアが刻まれた月を意味ありげになぞる。未来もつられて見つめると、一見望月のようだが、よく見れば明らかに欠けていた。

一方ユリウスの執務部屋の扉に刻まれた月は、どこも欠ける所ない円まかなる姿。ティシアの指はさらに向かいの扉を指す。一見両者は同じものに見えるが、欠けている部分が反対だった。

そこまで確認して、未来の中でなんとなく考えがまとまり始める。

「これ、月の満ち欠けを意味してるの？」

「そう。隊長の部屋は望月。これを終点、あるいは起点として順に少しずつ満ちてきたり欠けていったりするの。太陽神殿騎士団の方

は日輪を意味する線の数だったかしら……と、ちよつとこれから騒がしくなるけど、許してね」

ティシアが何やら指を踊らせるとパチン、とよく熟れた豆が弾けるような威勢の良い音がした。

その音に未来が驚いている間に彼女はさつさと扉を開ける。フイー、ただいまー、などという、呑気この上ない言葉付きで。

その時だった。

何かが物凄い勢いで未来たちの横を通り過ぎ、かと思えば粉々に弾け飛ぶ。ぶわっ、と廊下を自然のものではない突風が吹き抜けた。何が起こったのやら見当も付かず、また、先ほどの音による驚愕からも立ち直れていなかった未来が、恐々と扉の向こうに視線を移す。

窓から差し込む光を背中から受けて立っていたのは、申し分のない美少女だった。

ふわふわの飴色の髪に、きらきらと輝く同色の瞳。

肌は白いが不健康な色合いではなく、炎を帯びたように上気した頬が澀^{はっぴ}とした印象を与える。

恐らく十五にもなっていないだろう。今はまだ可愛らしいという表現が似合うが、数年後には相当の美女になっているに違いない。

そんな未来の美人は既に片鱗を見せている柳眉を逆立て、ティシアをきつと睨み据えながらわなわなと薄紅色の唇を震わせる。

「あああああなたという人は！ また私をこの部屋に閉じ込めて！ これで何回目です！」

「人聞きが悪いわねえ、まだ五回か六回じゃない。それに、用は言いつけているでしょう？」

「これでちょうど十回目です！ その仕事が終わっても、部屋の外に出られないよう扉に術式を仕掛けているのはどこのどなたですか

！
怒鳴つていても鈴が転がるような可憐な声でまくし立てる彼女を右から左に、ティシアは未来を手招いて先に部屋へ入れた。途端に少女はびたりと動きを止める。

呆気に取りられているらしい彼女を尻目にティシアも扉に手を掛け、ふと廊下へ顔の向きを変えた。扉を細く開けてこちらの状況を伺っている何対もの視線に、ふっ、と微笑を湛える。

それは、無垢な少女の邪気のない微笑を完璧に象っていたが、その目が、万年氷の芯の如き透明さと冷徹さを映した宵闇が、完全にその表情を裏切っていた。

常にどこか艶イロを感じさせる厚めの唇が、笑みの形のままゆっくりと開かれる。

音無き口曰く、「良いご身分ね」と。

凍りついたかのように硬直した扉に美しくも冷たい一瞥を残し、ティシアは何事もなかったかのように扉を閉める。そして未来へと向けた表情は、いつものものにこやかなものに変わっていた。

「適当に……そうね、そのソファにでも座つてて」

「あ、はい」

ユリウスの執務室にあった物とほとんど変わらない配置の、布張りのソファに未来は座る。目の前の卓には繊細なレースのクロスが掛けられ、中央に飾られた小さい花瓶には布で作られた造花が数本差されてあった。

如何にも女性らしい心配りがされた机の、もう一方のソファの側には、見るからに難しそうな分厚い本が数冊重ねられている。

未来はどこか落ち着きなげに室内を見渡す。

ユリウスの執務室より少し狭いか。そういえば窓も扉も一つだけ

だ。

では、ユリウスの部屋にあった出入り口とは別のもう一つの扉は何だったのだろう。

そんな事を考えながら不躰にはならない程度に部屋を観察していた未来は、どこか億劫そうな言葉に宙に舞い上がっていた視線を落とす。

「それより、客人に飲み物も出さないの？　フィアラ・エウカリス」
執務机に座り、トレイの一方に山となっている書類を見るからに
渋々手に取ったテイシアの言に、少女　フィアラはやっと反応を
見せる。他者の存在をようやく意識に入れたと言う方が正しいか。
一度動きを取り戻したと思いきや、それきりずっと何やら口の中で
呟いていたのだから。

「とうとう双神宮外の人間にも手を出したんですか。しかも隊長より年下に興味はないと言っておきながら……」

「人聞きの悪い事を言うわね。彼女は正真正銘、客よ。この世界のそれに」

テイシアは書類を読みながら万年筆をくるりと回し、キャップが付いたままのペン先をぶつぶつ言いながら水差しを手にした少女に向けた。

「彼女、ミクは二十歳よ」

「大体あなたは どうして そうも節操がな……え？」

目をぱちんと見開いて再度動きを止めたかと思うと、淡い色の瞳が二人を交互に見やる。

「迷い人……は確かにそうですが、え、二十歳？　私より九つも上？」

そんな反応に、未来は苦笑を浮かべるのが精一杯だった。こんな反応はまだ二度目だが、既に慣れつつある自分が悲しい。

そんなことなく乾いた心境でいた彼女は、少女がふと漏らした発言にふと我に返った。

（ここなっつもうえ？　いやいや、このつ……九つ?!　十一？

！)

未来はまじまじとフィアラという名の少女を見つめた。

十五にはなっていないとは感じていたが、まさか十代によく足を乗せたばかりだとは思ってもよらなかった。呆然としていた未来はだから、

「私が飲むのと同じ物を出して」

「なっ、それは……あまりに、」

「だからよ」

と言う、不穏な響きを含んだ会話を完全に聞き落としていた。

(ユリウスの時も思ったけど、こっちの世界の人間って総じて年が掴みにくいよね。大人びてるっていうか。やっぱり人種の差？

……あ、なんかシヨックかも)

こちらの世界の人間には実感が沸かないだろう問題に、人知れずシヨックを受けていた未来の前に琥珀色の茶に氷を落としたグラスと、淡い黄色の果物の皮に砂糖をまぶした茶請けが置かれる。

彼女がそれに手を伸ばすのを横目で見て、ティシアは書類検めに戻った。紙面を睨みつつ、せっせと万年筆を動かす。

それが結構な速度なので、一度はきちんと読んでいるのか未来は危惧したのだが、彼女はある一枚で眉間の距離を狭めた後、万年筆にインクを足して紙を裏返すと怒涛の勢いで何やら書き連ね、決済待ちと決済済みのトレイのどちらにも入れずに脇へと避けた。

そんな事が不規則に数回あったので、どうやら真面目に目を通していているらしい。

未来は心の中で密かにティシアに謝りながら上品に香る茶に口を付け　そして、砂糖漬けが茶請けにされていた理由を知った。

フィオルは、普段ならば決して踏み入らない領域に足を進めていた。正しくは踏み入らなくなっていた、か。

ユリウスやアレクシスが双神宮仕えとなるより前、アンテーゼと呼ばれた青年もまだ年端も行かない少年であった頃、彼は職務上、当たり前そこに出入りしていた。

中央神殿　陽と月という異なる神に仕える者達が一所に存在する双神宮には幾つも派閥がある。その中で最も根幹に当たる太陽神殿と月神殿に現在、目立った派閥争いはない。寧ろ良好と言えるだろう。

しかしそれでも、互いに踏み込まれない一線というのは存在するもので。

フィオルが今足を踏み入れているのは、月神殿の領域。それも、踏みこめる者がごく限られる最奥部に当たっていた。

双神宮の「胴体」には、「胸」と称される部分がある。

建物の最も先端、鳥がこれでもかと胸を張っているように見えなくもない箇所だ。内部構造で説明すると、廊下が突き当たりで裂けて左右に分かれ、その終着地点にそれぞれ一つずつ部屋があるという寸法になる。

その二つの部屋は史書に見る限り、双神宮が創建された代の陽と月の神子が始めて彼らの神と相對した、正にその場所に当たるのだという。その頃までは、神々が人間の前に直接姿を現す事は少なからずあったのだ。

そして地理的には簡単に行き来できるその部屋が、あるいはその間に横たわる廊下が、神殿に仕える者達にとって最も分厚い線だった。

この十四年、全く変わっていない廊下を進んでいた彼の前に、やがて一つの扉が姿を現す。

やはり変化はないその扉は、白樺の木材と銀を組み合わせで清楚かつ繊細でありながら莊嚴に作られている。

白と蒼の天鷲絨ヒロードが張り巡らされたその前に立つのは、黒衣を纏った年配の騎士とまだ年若い女官だ。騎士は表情を変えないまま目だけに穏やかな光を浮かべて敬礼を、女官は隠しきれない恐怖と嫌悪で頬を細かに痙攣させながら礼をする

娘の態度は、フィオルの心にもはや波風一つ立てない。恐怖の理由も、嫌悪の理由も、今更傷つくにはあまりに長く共存し続けた。

対照的な二人に淡々と挨拶して、彼は扉を振り仰ぐ。

講堂の大きさに霞みがちだが、双神宮全体も実はそれなりの高さがある。場所によっては二階、三階の階層を作れるほどに。

その高さと大きさを等しくする、巨大な扉。

惜しみなく用いられた天鷲絨には銀糸で、複雑精緻な模様が縫い取られている。これは最上級の守護の術式で、歴史上、戦乱や内乱度の過ぎた派閥争いの中で幾度となく破壊が試みられたが、尽く失敗した代物なのだそうだ。

フィオルが耳に付けたピアスを一回弾くと、そこに刻まれた開錠の術式が輝きを点し、それに呼応するように守護の術式も光を放ち始める。

弾いた指を扉に触れさせれば光はいよいよ増して、巨大な扉は音もなく開き、訪問者を静かに招き入れた。

「遅い」

入れる者が限られた扉が完全に閉ざされると同時に、いやに刺々しい感情を含んだ一声がフィオルに投げつけられる。

誰何なき無礼ではなく、遅参したことを咎める言葉に、フィオルは無言で頭を垂れた。それを向けられた相手は靴で石畳の床を一度叩き、振り向く。

「昔はそうではなかったのに」

責め苛む口調に反して、顔に滲んでいるのは仕方がないとでも言いたげな諦めの色。それにはまるで気付かぬ振りでフィオルは静かに答えた。

「私は、陽神子の命に従い、その願いを叶える存在ですから」

恭しいが悪びれる様子のない口調に、理不尽とも言える言葉を吐いていた唇が閉ざされる。白い面おもてにはほろ苦い微笑が宿った。

「……分かつているわ。もう、昔ではないのですもの」

瘦身を覆い隠すドレスの裾を引いて微動だにしない男に近付き、手袋に覆われた手が三つ編みにされた髪を掬う。そしてそのままどこか幼い仕草で軽く引っ張った。

「あなたが三つ編みにするようになったのは、私に髪を引っ張られて引き抜かれた後だったわね」

「あれは、痛かった。本気で禿げるかと思いました」

しみじみと感情の滲む答えに小さく笑い髪から手を離れた月神子は、ふわりと身を翻す。

その姿はしゃなり、と部屋を巡り、やがて部屋の中央に築かれた祭壇へと近づく。祭壇と言っても、巨人が手遊びで石板を重ねたような、飾り気の無い質素なものだ。

見事な彫刻、装飾の施された壁や天井とは比べるまでも無い。

しかし、月神殿の本殿は 其処なのだ。

祭壇の前で跪き、頭カブを垂れている後姿を見つめながら、フィオルは祭壇に隠れるようにして蹲り、声を殺して泣いていた幼子を思い出す。

肩に顔を押し付けた子供を泣き止むまで抱いているのが、男の重要な役目だった。

「お前なんかきらい。だいつきらい！ さつさと陽の宮へでもどこへでもいってしまえ！」

まだまだ甘えたい盛りだったであろうに、既に悲しいほどに分別のついた瞳をしていた子供が始めて炸裂させた癩癩は、あまりに寂しいものだった。

嫌い、とわめき散らす小さな体の全身から行かないでと叫びながら、その小さな拳はフィオルを部屋から追い出した。

昨日の事のように思い出せる出来事を脳裏に過ぎらせながら、フィオルはその頃に比べると驚くほど成長した後姿をぼんやり見つめる。月神子が持つ能力の中で最もよく知られる、あらゆる境目を越えて物事を識る越境の力は、視る対象によってはひどく精神力と体力を削る。

特に著しいのは、未来と心を覗こうとする場合だ。まだ力の制御が不完全だった頃は、ふとした折に暴発させて周りの人間の心を掻き回し、当人も高熱を出して寝込むことが日常茶飯事だった。

力を使いこなせるようになった今でも、無理をすれば倒れてしまう。女としては平均的な身長のティシアより高い背に反比例して肉が薄いのは、その所為もあった。

現・太陽神殿騎士団副隊長である男は、神殿仕えを始めてじき十六年になるが、その間ずっと太陽神殿所属だったわけでない。二年ほど月神殿に属していた時期があった。これには、三歳にして月神子となったエアリエルがやけに懐いて離したがらず、期限付きで移籍していたという背景がある。

しかし十四年前、現・陽神子であるセレスティーナが次期神子として双神宮へ上がるのを機に太陽神殿に籍を戻し、今へ到るといっ少し変わった経歴の持ち主だった。

本殿へ、特別な認可を経ずとも入室を許されるのは各神殿騎士団の隊長と副隊長、神官長と、第一位階の神官の筆頭を初めとする数人だけだ。

彼らは皆、己が仕える神子より与えられた開錠の術式を身体の何処かに施しているが、フィオルのように二人の神子から許しを与えられている者は居なかった。彼が他の者と異なる点はまだあるが、最も分かりやすい違いはそれだ。

変わった経歴と稀な資格を有する男は祭壇以外何も無い室内を落ち着いた足取りで進み、俯いたままの月神子の後ろへそっと立つ。

その距離さえも絶妙で、下世話な勘繰りを起こさせない程度には遠く、いざという時には盾となりえる程度には近かった。

床石を見下ろしていた銀色の双眸が振り向き、促すようにゆっくりと細められる。

「そろそろ、呼びつけた訳をお聞かせ願えませんか。昨夜といい、あなたの為さる事は私には図りかねます」

主君に対しての礼節は辛うじて保たれているが直截な物言いに、部屋の主はことりと首を傾げながらゆっくりと膝を上げた。

「分からない？ …… ああ、私はそんなにも計算高い人間に見えるのかしら。だとしたらなんて恥知らずな。恥ずかしい、いっそ消え

てしまいたいわ」

嘆かわしげに頭を振り、均衡を崩してよろめいた瘦身がフィオルへとしなだれかかる。

悲しげに潤んだ眼差し。長い睫毛の影が頬に落ち、憂いを帯びた白皙の美貌。そのつもりがなくとも思わず見惚れて憂いを取り払いたくなるような、か弱い風情に満ちている。

しかし、フィオルにとっては見慣れた、子供のおねだりに過ぎない。

「戯れは止して下さい。私にその気はありません」

男はあっさり腕を掴む織手を引き剥がし、慣れた様子で距離を取る。虚を衝かれたように見開かれた瞳に心が痛まないわけではなかったが、ここで揺れては相手の思う壺だ。

やがて月神子は、腰にベルトのように巻いた薄手の布の間から取り出した扇で顔を隠し、細くため息を漏らす。香木を削って作られた扇から、仄かに良い香りが漂った。

どこか拗ねたような色を含んだ言葉が、香木の間から匂い立つように響く。

「では、あなたにとって私はどんな存在かしら？」

「……不敬を承知で申し上げるなら、手を焼かせる弟、です」

間はあるが迷いのないその答えに、月神子 エアリエルは何ともいえない表情を浮かべた。怒るべきか嗜めるべきか、あるいは苦笑して紛らわせるかそれとも。感情が千々に乱れて、その顔を覆っている。

やがて、扇が音を立てて閉じられた。思いの外鋭い音がフィオルの身を叩く。

「彼女には言ったのか？」

その声は、神子姫のものではなかった。ユリウスと同じく、透明

な響きを孕んでいるが女にしては低い 否、明らかに男のそれ。

未来に刃を向け、嘲笑った青年と同じものだった。扇の先をかつて懐いた男に突きつけるその表情は罪を糾弾するに似た烈しさで、丹念に施された化粧が一種の凄味を添え、爛と輝く眼差しを後押ししている。

空気さえ悲鳴を上げそうな緊迫した空間の中で、フィオルは涼しい表情を保ったまま、ガラスじみた瞳を燃え立つ銀色に真っ直ぐと据えた。

「いいえ」

短く否定して、男は足を踏み出す。

扇を握った手をそつと下ろさせ、ひび割れた神子姫の仮面から覗く、激情に駆られたこどもとそつと視線を合わせた。片方の手袋を外し、頬を軽く撫でる。はっと見開かれた瞳に、理性が、もしくはそれに似た何かが宿った。

「お前が望まないのに、俺がどうして告げよう。「神子姫」であるうとする理由を知っている俺が」

厳しく、それでいて兄のような情愛に満ちた言葉を押し殺したように低い、静かな声で紡ぎ、手が離れる。男が触れていた頬に指を添え、熱の引いた双眸が泣きそうに揺れた。

「ずるい。だからお前はずるい。私を、一番に優先などしないでください……………」

扇を開き、顔を隠す。

数秒後、口元を隠す程度にまで下げられた扇の向こうの美貌は、神子姫の仮面を完全に修復していた。

「月神子の名に於いて、太陽神殿騎士団副隊長、フィオル・アインマールに命じます。異邦人、ミク・シノザキを庇護し、生きていくるように導きなさい」

その声も、やや低めではあるが美しく澄んだ女のものに戻っている。膝を折り、同じく騎士の立場に立ち戻った男が一拍置いて朗と答えた。

「承りましょう。しかし、血で交わした忠誠が先に立つ以上、その血に通じる者の願いが優先される事は、お忘れなきよう」

騎士として凜と自らの忠誠に胸を張った答えに、月の神子姫は硬くうなづく。そのまごうことなき忠誠が何故自分に捧げられないのかと、自問する時期も自分本位な怒りをぶつける時期も疾うに過ぎた。

「それは血の盟約の理。承知しています」

「それでは」

絹で覆われた手を、わきまえた丁寧さで騎士は取って唇を押し当て、立ち上がる。頭一つ以上小さい月神子を見下ろし、からかい混じりの微笑を浮かべた。

「私は魔法が使いません。関心がありなら、ひそかに守る事もあなたには可能でしょう」

明らかに含みがある物言いに、月神子は形の良い眉を片方だけ器用に持ち上げ、羽虫を払うように手を振る。退室するようという無言の合図だ。

フィオルは最後にもう一度深く礼をして、月神殿の本殿を退室した。

外で待っていた二人に用が済んだことを短く告げ、フィオルは一人廊下を進む。

やがて、二つの通路が交わる広間にも似た空間に出ると足を止め、軽く息を吐いた。そしてまた歩き出そうとして、はっとしたように太陽神殿の本殿に通じる廊下へ向き直る。

廊下の向こうで揺れたのは、白と天の色を併せた軍服だった。

見る見るフィオルへと近付いた太陽神殿騎士団の長は、どこか気まずげな顔をしている副隊長を無表情に見やる。一人だった。

「月神子に呼ばれたか」

他意が含まれていない事は分かっているが、フィオルにとってはやや複雑な確認だ。月神子 エリエルとの友好関係は周知の事実だが、あまり公にしたい類でもない。

「ああ。……体はもう良いのか？」

「問題ない」

抑揚に乏しい声で返すと、アレクシスは一部の隙も無く着込んだ軍服を翻す。ぶれない姿勢と常と変わらない顔色で言葉に偽りがなかったことを確かめ、フィオルも黙ってその後ろに随った。

会話はないがごく当たり前にしっくりと馴染んだ二人の姿に変化が生じたのは、幾つめかの角を折れた頃だった。フィオルが眉を寄せて、少し先に行く背中にも声をかけるまで、そう時間は置かれぬ。「少し聞きたい事があるんだが」

すれ違った神官と互いに礼を交わした後、やや潜めた声で問いかけた言葉に、アレクシスからの返答はない。それを了承と取って、男は刻一刻と自分の想像に当て嵌まりつつある見通しを躊躇いがちに口にする。本来なら敬語で話しかけねばならないところだが、アレクシス本人が敬語は使うなと命令までしたので、公の場以外での彼らの会話はざくばらんとしたものだ。

「行き先、月神殿騎士団兵舎か？」

「他にこの方角で俺が行く所があると思うか？」

ここでただ「ない」と返すのも芸が無いと思い、フィオルはしばらく押し黙った。アレクシスは何も言わない。

二人は黙ったまま廊下を進んでいく。騎士も神官も黒を主体とした衣装を纏っている月神殿側の中で、白を主体とした二人の装いはひどく浮いていた。二人とも群を抜いて長身のため、余計目立つ。

やがて兵舎に通じる回廊の付近まで来た所で、二人は一人の騎士と鉢合わせする。フィオルと同じくらいに見える彼は、太陽神殿騎士団の首位と次位に位置する二人に敬礼をした後、丁寧に話しかけた。

「日輪を守護される方々、少しお時間を頂いてよろしいですか？」
アレクシスとフィオルは顔を見合わせ、アレクシスがふい、と顎をしゃくる。

「いえ、お気になさらず。月神殿騎士団の兵舎に用があるのは私も同じですから」

その言葉が終わるか終わらないかの内にアレクシスはフィオルから視線を外し、黒衣の騎士に視点を置いた。

「月光を守護する者、私が居ては貴殿は話しにくかるう。……アインマール」

「は」
「供はこれで良い」

その言葉にフィオルは一瞬物言いたげな色を目に過ぎらせたが、反論はしなかった。

「御意」

礼を崩さないでいる、自分より僅かに背の高い男に何やら耳打ちし、鋭い衣擦れの音を立ててアレクシスは二人に背を向けた。騎士として理想的な姿勢で立ち去る様子を見送り、その姿が見えなくなるとフィオルはどこか寂しそうに敬礼を解く。

恋人につれなくされた乙女さながらの様子に、残ったもう一人が呆れたような顔つきになり、苛立ちまぎれに髪をかき回す。

「お前なあ、過保護も大概にしるよ。そらお前にとってあの御二方は赤ん坊の頃から見守ってきた相手だろうが、その相手だっていつまでも守られ続けるような子供じゃねーんだ」

先ほどまでの丁寧な態度はどこに行ったと目を剥かれそうな乱雑な口調と仕草で、月神殿騎士団で小隊を一つ預かっている男は吐き捨てる。他隊の副隊長に対しての態度では到底無いが、フィオルは

気にする様子もなく、何やら思い悩む風情で重苦しいため息を漏らした。

「それは、分かってる。だが、あの二人に何かあれば、俺はキルテイス様に申し訳が立たない」

「たく、真面目だな。いつか過労死しても知らねーぞ」

呆れたように言い放って男はつき出した指先をフィオルの鼻先に据え、じっとその顔を見上げる。男はどちらかと言えば小柄で、フィオルの胸の少し上辺りに頭が来る。ティシアより少し高いぐらいだ。彼が主君と仰ぐ月の神子姫よりも低い。

「何があつたかまでは聞かねえが、今からこつちに顔出すんなら、笑え。いつも通り。気にしている人間、結構居んだよ」

その言葉は暗に、フィオルがユリウスの執務室を去った後のことを告げている。フィオルは失笑した。笑うところじゃないと男の目が険を纏う。

「いや、悪い意味じゃない。俺は、幸せ者だと思つてな」
目を細めて穏やかに、本当に嬉しそうに告げるフィオルに、男はそつと指を下ろした。口の中で何やら呟くが、言葉として形を成すほどではない。

やがて、遠くから喧騒が近付く。その気配に一つ舌を打って、男は思考を切り替えたようだった。乱雑な態度に、尊大さが加わった。「予想外に時間食つちまった。俺の優雅な昼食計画がパーじゃねーか。今度奢れよ。お前の金で」

全くもって理不尽甚だしい。しかしそんな要求にも、フィオルは苦笑して見せる。この友人の遠慮のない態度に潜んだ不器用な気遣いに、何度救われたか分からない。

「なら、一週間後にでも来い。材料を用意しておくから」

「野郎と二人つきり……ゾツとしねーな。ま、お前の料理に免じて招かれてやるよ」

ひらりと手を振って、尊大さを保ったまま立ち去る男に背を向け

て、フィオルは再び歩き出す。

その行く先は、西翼・月神殿兵舎

。

ひたすら甘い、そこはかとなく上品な酸味もある砂糖漬けをちまちま齧りながら、未来はちびちびと柔らかな色合いと香りに反して驚くほど苦い茶を消費していた。目下、他にする事も思いつかないし、動き回るのも迷惑になるだけだ。

いずれ動き回れることが保障された以上、それを撤回されるような行動を未来は取るつもりは無い。

監視が付く件に関しては、諦めた。世の中、真つ当なことですら通らないことが多いのに、見返りもなしに我俣を聞いてもらおうなど図々しいというものだ。

我俣。未来はふと動きを止める。

琥珀色の水面に映りこんだ顔は自分のものなのに、狡猾で計算高そうな表情をしている気がして、吐き気が込み上げた。

砂糖漬けを大きく噛み取って勢いよくグラスを傾け、吐き気ごと無理矢理飲みくです。甘くて苦い、ひどい味がしたが、映った顔に感じた嫌悪よりはマシだ。

(私は……あんな顔をしていた?)

愕然として、未来はまだ少し波立っているグラスを見下ろす。日本人として年相応の顔は、波で揺らいでいても分かるほどに強張っていた。

(諦めて、我俣を聞いてもらうなんて図々しくて……そして、そして?)

その後、自分だったら何を考えた? あるいは、表面下で何を思っていた?

そこを覗き込む勇氣は、未来には無かった。

何やらどつと疲れて、グラスと砂糖漬けを置き、未来はそのままソファに沈み込む。体がやけに重かった。そういえば昨夜もあまり寝たという気がしない。

(少しだけなら、良いかな)

そう思う間もあらばこそ。未来の意識はそこで広がった睡魔に絡め取られて、まどろみに沈んだ。

夢だ。

そうはつきり認識して、その光景を見ていた。

(死にたいか?)

(……しぬ?)

(このままでは、そうなるぞ)

雪がしんしんと降り積もる、どこか現実感を欠いた風景の中、男が二人向かい合っていた。

一人は真っ白な雪化粧をした地面の上に真っ赤な花弁を 血を散らして横たわり、もがき苦しんだのか、引つ掻いたような跡が赤で彩られて長々と周囲に残されている。やはり血に染まった長い髪を川のように引いて、ガラス球のように美しいが虚ろな、光を宿さない瞳が、地面に頭を預けたままぼんやりと相手を映していた。声を発さなければ死体と見間違えるほどに生気がない。

もう一人は、白い世界の中で濡れたように黒い衣装を纏い、赤に染まった男を見下ろしている。その黒衣は、恐らく軍装なのだろう。ベルトから剣が下がっている。白と黒。対極なのに何故か、その意匠は太陽神殿騎士団の制服を彷彿とさせた。

まだ少年の輪郭を残す姿はそれでいて弱々しくはなく、揺るぎな

い力強さを秘めている。黒に近い髪の下から覗く、濃い色の深く澄みわたった瞳は、凪いでいるのどこか苛烈な光を帯びていた。

（死にたいか？）

黒を纏った男がもう一度訊いた。赤に塗れた男は答ええない。

（死にたいのなら、何処へかと去って一人で死ね。其処は俺の家の入口だ）

荒げるでもない声は、だからこそ本気だと知れた。白を足元で散らし、黒の男は数歩、赤の男へと近付く。

（生きたいか？）

質問が変わった。虚ろな瞳が、僅かに揺らめく。

（……わからない。自分には、なにもない）

くぐもっている訳ではないのに、言葉が聞き取りにくい。それは抑揚が、感情が、その声から全く脱け落ちているからだ。感情が完全に死に絶えているその響きには、一方で底知れぬ絶望と恐怖が隣り合っていた。

（ならば、お前に役目をやるうか？ 何も持たざる者）

何故か急に楽しげな響きが滲んだ声に、横たわっていた男が少し顔の角度を上向ける。気のせいかと思えるほどほんの少しいたが、それまで動きが皆無に等しかった男が始めて取った自発的な行動だ。（何も持っていないのならちようど良い。俺の宝を全身全霊で以って守れるというものだ。どうだ？ やるか？）

疑問の形は取っているが、それはもはや確認に近い。しかし、不思議と反発感を抱かせない懐っこさというか、魅力があった。

微かに目を大きくした男がやがて、やはり小さく頷くと、相手は途端に鮮やかな微笑を湛える。それは、雪が降りしきる中であつてもぱつと目を引く。男をこう形容するのは些か微妙だが、咲きほころび始めた大輪の薔薇のような華があった。

（契約成立だな。これでお前は俺のものだ）

その言葉とともに差し伸べられた手に戸惑っているような、爪の中まで赤く染まった手を厭う様子もなく掴み取ると、生気が見て取れるようになった顔を真つ直ぐ見据える。華やかな笑みを浮かべてはいるが、瞳は真剣そのものだ。その強い輝きに、透明だが、どこか人形の無機質さがある双眸がゆっくりと瞬いた。

（俺は、厳しいぞ？ 心しておけ。……お前、名は覚えているか？ いないか。では、まずはお前の名前を考えなければな。ああ、俺はキルティスだ）

動きがおぼつかない、自分よりかなり長身の体を支えながら立ち上がらせ、名乗った男は自らの歩いてきた足跡が残る方へ数度口笛を鳴らす。そして、口の中で何やら呟くと、二人の姿は嘘のように掻き消える。

後に残った血の赤と足跡を覆い隠すように、雪は静かに降り続いていった。

*

未来ははっ、と目を覚ます。ついでに勢い余って跳ね起きたので目眩を起こし、くらくらとそのままソファに逆戻りだ。

思い返すまでもなく恥ずかしい姿なので、未来はブランケットを顔の辺りまで持ち上げ、言葉にならない呻きを漏らす。

「おはよう、よく寝てたわね」

そんな情けない姿を見て見ぬ振りをしてくれているらしいティシアのいつも通りの物言いにも顔を上げられず、未来は熱を上げたまま下がらない頬を隠した。

顔を隠すことで一息吐き、未来は薄暗くなった視界の中、夢で見

ていた情景をゆっくりと思い描く。

雪が降りしきる真つ白な空間の中でくつきりと浮かび上がる、黒と赤で彩られた二人の男。そして彼らの間で取り交わされた一つの契約。

黒の男の宝を、あの赤に塗れた男はそれこそ命を賭して守るのだろう。

そんな未来をありありと思い浮かべられる、ひどく厳肅で美しい夢だった。

未来には、何故か分かっていた。

あれが、この世界のどこかで現実に起きた出来事なのだということが。

同時に、あの日、双神宮へ侵入した男とティシアに見た光景も、また実際に起こった出来事であることを確信した。

そして、忘れていた。

未来の持つ時の力に言及した際、ユリウスが僅かに覗かせた意味ありげな様子を。

彼女が自らの力について深く考えるようになるのは、まだ先の話

今回は何故言葉が分かったのか、前回は何故音が無かったのか。

違いを判断するにはあまりに分かっている事が少ないが、どちらでも感じた痛いほどの決意は胸に突き刺さるようだった。

と、そこで感じた小さな気配に、未来はブランケットを掴んだままソファを飛び降りる。驚く二人も目に入らない様子でよるめきながら扉に駆け寄り、勢いよく開け放つ。

その先には、虚を衝かれたように足を止めた白い姿があった。

「わっと、とと……ああ！」

未来もあんまりに近くに居た相手に驚き、思わずつんめってしま
う。そしてそのまま勢いよく床へ倒れこんだ。

(うわぁ、これ絶対痛い)

石造りの床に場違いなほど呑気なことを考えながら、ぎゅっと目
を瞑る。驚くほどゆっくりと倒れこんでいくのを感じていたが、何
故か身体が動かない。

ドサリ、と軽い音が廊下に響いた。

思ったよりずっと弱い痛みと、床に倒れたにしては暖かい触感に
未来がゆっくりと目を開けると、白と空色が視界に飛び込んでくる。
そのままそろそろと顔を上げれば、記憶にあるものと全く変わりが
ない無表情が彼女を見下ろしていた。

「あー、ごめん。ありがとう、ごさいます」

ほぼ全体重が掛かっているのにびくともしない身体に手を置いて
立ち上がり、未来は誤魔化すように照れ笑う。

アレクシスは無言で未来を見下ろし、そのままおもむろに腰を折
った。床に落ちていたブランケットを拾い、軽く払うと彼女に押し
付ける。

「気を付ける」

それだけを言っただけでまた歩き出した彼は、そのまま望月が模された
扉を開けて入っていった。

扉の閉まる音に我に返った未来は、久しぶりの再会がこれか、と
思わないでもなかったが、そういえば、アレクシスは最初からあ
んな感じだったと思えば、必要なこと以外は話さないし、喋らない。
別に恋仲というわけでもなし、倒れるのを防いで、ブランケットを
拾ってくれただけ親切だろう。

うん、そうだと考え直し、未来が身を翻そうしたところで、いき
なり腹の奥までびりびりするような音が轟いた。

重い物を思いきり地面に叩きつけ、物と地面に揃ってヒビを入れていそうな、あるいは物は粉々になっていそうな、鈍くも重い音。びくつと身を縮こまらせ、未来はブランケットを抱きしめながらそろそろと音がした方を見る。

月神殿騎士団隊長の執務室だった。

それを最後に、うんともすんとも音を立てない部屋。

それが余計に不気味というか不安を煽り、動けないまま未来はコリウスの執務室を凝視していた。

「ああ、またやってるな」

背後から前触れもなく聞こえた、ほんの少し困ったような言葉に、未来は驚きましたといわんばかりに肩を跳ねさせる。が、聞き覚えのある声にゆっくり振り向くと、やわらかく苦笑している鳶色の髪の毛の姿があった。

「フィオル、さん」

「今しがた、うちの隊長が来ただろう」

こくりと頷いた娘に、太陽神殿騎士団の副隊長は穏やかな様子で続ける。

「なに、あまり心配する事もない。一時間もすれば術も解けて、出てくるだろうさ」

「術？」

「空間をずらして、現実世界には影響を与えないようにする……ん？」

言葉の途中で、フィオルが驚いたように目を見開く。

同時に、空気が一度大きく揺れ　そのままゆっくりと風いだ。揺れる前と風いだ後は、どちらも静かなのに何処か違っていているようだった。

少しして望月の扉が開き、入ってきた時とほとんど変わらない出で立ちでアレクシスが出てくる。

未来とフィオルの横を通り過ぎる際に一度足を止め、視線だけを二人に向けた。

「目が覚めるまで寝かせておけ」

ユリウスの事だと直ぐに分かった。

それきり口を噤んで、彼は再び廊下を歩いていく。その時、僅かに漂った、鉄の 血の匂い。

はっ、と遠ざかっていく背中を見やった未来の目に、彼女らの視界からさりげなく隠していた服の袖が真っ赤に染まっている様子が映る。

「アレクシスさっ」

声を上げようとした彼女を無言で制し、フィオルはその姿が見えなくなるまでずっと黙ったままだった。

「心配はない。あれはもう、血だけだ」

一部だけが赤く染まった白い後姿が完全に見えなくなると、フィオルは手を下ろしてティシアの執務室へと身を振り向けた。

やけにきっぱり断言する口調に対し、未来の何故分かるのだ、という反論に、彼は指を床に示す。ティシアと軽妙なやり取りを繰り返しているのを右から左に流しながら、未来はじつと床を観察する。

綺麗なものだった。シミ一つない。

……シミ一つ？

そこで未来は気付く。遠目に見てもそうと分かる出血量だった。

二の腕の辺りから袖口まで広がっていた血の面積から見ても、小さい傷では到底無いだろう。

血みどろの悲惨な傷とはあまり縁の無い生活を送ってきた未来も、

傷を負ったときの最低限の対処法くらいは心得ている。

小学生だか中学生だかの頃、彫刻刀で指を切ったことがあるが、小さい傷だったのに心臓より高い所に傷口を持っていかなければ本当に血が止まらなかった。後知っているのは、一般的な圧迫する止血法くらいか。

しかしアレクシスは、見た限り腕を高いところで固定も、圧迫をしている様子も無かった。あれでは普通、血は止まらない。なのに、床が全く汚れていなかった。

未来の抱いた疑問に気付いたのか、フィオルがまだアレクシスの去った方向を見やりながら口を開く。

「ユリウス殿が治癒呪文を唱えたんだろう。あの二人が手合わせして傷を負う事は少なくなつたが、皆無じゃない。……あゝして血の跡だけ残して双神宮を歩くのを見るのも、もう慣れたな」

後半の言葉には、慣れたくなかつた、という感情がひしひしと滲んでいる。まだあまりフィオルを知らない未来にもそうと分かる、明確な口調だった。

（弟を相手にしてるような感じなのかな。見た感じ四歳か五歳は離れてそうだし）

一人納得して、未来は美味しそうな匂いにつられるようにティシアの部屋へと戻っていった。

未来を誘った良い匂いは、いつの間にか配膳されていたトレイに並べられた食事から香ってくるものだった。

渦巻き型に焼かれたパンにカップに注がれた透明なスープ、飴色の液体が絡んだ肉と野菜の炒め物と赤みの強いオレンジに似た果物というメニユーが、向かい合って二つ並んでいる。空の茶器と、小さなポットも添えられていた。

「わあ、美味しそう。食べていいの？」

「勿論。そのために用意されたものだしね」

一番多かつた時に比べて三分の一ほどまでに書類を減らしたテイシアが、自分の目の前に置かれたトレイを引き寄せる。彼女の物は他の二つと違い、フランスパンに似た皮の硬そうなパンにレタス、ハム、チーズなどを挟んだサンドイッチとスープという品目だ。

遅れて入ってきたフィオルは、フィアラが立ち上がるうとするのを制し、そのまま壁にもたれた。人をもてなす事を主点においた構造の部屋ではないので、座れる所はさほど多くないのだ。

「……席、空けようか？」

「気にしなくて良い。この国では、妙齡の女性が同席できる男性は家族か恋人に限られているんでな」

軽く笑ったフィオルがそれに、と続ける。

「そこに居るこわーい女の人にちくちくいたぶられるのはご免こうむりたいし、な」

おどけたような物言いに思わず笑って未来はパンを四つに割る。

「欠けを食べて、ふと気付いたようにまた顔を上げる。」

「ご飯食べた？」

「ああ、問題ない。……ゆっくりで構わないぞ。急いでいるわけでもないしな」

さり気なく視線を逸らしているのは気遣いだろうか。

とあれ、その言葉に甘えて、未来は食事を終えたのだった。

「神子姫からの提案なんだが」

三人が食事を済ませ、苦くも渋くもない茶を喫していたところで、フィオルがずっと傍観していた女三人の会話に割って入った。

そのタイミングも、一つの話題がひと段落した僅かな間を絶妙に衝いていて、未来が思わず上手いと感じたほどだ。

「字の読み書きや礼儀作法、一般常識といった事を明日から始めようと思う」

その言葉に、未来が一つうなずく。彼女の前の席ではフィアラが本を開いており、それを先ほどちょっと断って覗いたのだが、全く読めずにしょんぼり引き下がっていた。

「それで、な。何か、他にやりたい事はあるか？」

「え？」

言葉の意味を掴みかねて、未来は首を傾いだ。

「何か食べたいとか、何をしたいとか、些細なことで良い。あるか？」

「外に出たいっていうのは……ダメ、だよな。やっぱり」

向けられる表情に言いたいところを察して、未来はそれ以上の言葉を引つ込める。

「じゃあ、ね。せめて、双神宮の中を自由に歩けるようになりたいな。どうしても入っちゃ駄目、って所は別に良いから」

話を聞く限り、ちょっとした街並みの規模を有するという双神宮だ。見て回るに不足はない。

「だからね、哀れむような顔はしないで。私だって、いつまでも籠かこの鳥で居たくはないもの」

その眼差しは、真摯であった。

もしかしたら、その気になれば一生双神宮の外に出ずに過ごすことも可能かもしれない。けれど、それを望むには、未来は好奇心が強いほうだったし、抑える所は知っているが、プライドだってあるのだ。ずっと守られるだけは、性に合わない。

「何をしたいかは、この世界を知ってからでなくちやどうにも言えないわ。だから、まず私は、この世界を知りたい」

その言葉の裏には、何かに一心に打ち込むことで、琥珀色の水面に映り込んだあの狡猾な表情を封じ込めたいという打算が存在していたが、一方で世界を知りたいというのも、紛れもない本心だった。

地球に、日本に、故郷に帰れないという寂しさと諦めの裏返しかもしれない。

だからこそ彼女は、知ること執着した。その先にある苦難を、頭のひどく冷静な部分で予感しながら。

彼女の本気を悟ったらしい二人の男女は、合わせたわけではないが揃って息を漏らす。

「……早く、あの男と引き合わせるか？」

「そうね。伝えておく」

未来にはよく分からないことを言い交わす。そしてティシアは頬杖をつき、フィオルはあらぬ方向を見やった。

間に置かれた未来は、なぜか知らないが気が進まない様子の二人に、完全に打つ手を見失って黙りこくる。

そんな奇妙な三棘みは、本を読みつつ、主に女二人の間で取り交わされていた会話に時々冴え渡るようなツツコミを入れていたフィアラによって終焉を迎えた。

本に頬を挟み、音を立てて閉じる。それで三人の意識を刹那、自らに向けさせると、形のよい眦をきゅっと吊り上げて、まずティシ

アを見た。

「もう一時です。そろそろ執務を再開してください。そこにある物が済めば、今日はもう執務は結構です。お忘れではないと思いますか……」

「五時から鍛錬でしょう。覚えているわ」

「なら、結構」

淡々と頷いて、少女は席を立った。未来とフィオルに軽く礼をする。

「申し訳ありません。という事ですので、お引取り願えますか？」

そろそろ、そこに居ます色魔のなけなしの自制が限界なので」

「聞こえてるんだけど」

「聞こえるように言いましたから」

主人に対して全く遠慮のないフィアラの、従卒の態度は、主従として理想的かと言えば違うが、お互いに言いたいことを言える関係というのは、人間関係としては優良かもしれない。

「鍛錬、ね。見学しても良い？」

「汗臭いだけで面白くもないわよ」

「……いや、その色魔が鍛錬を担当するなら、面白いものが見られるかもな。ただ最も、些か教育にはよろしくないが」

どこか楽しげに含み笑いするフィオルに、未来の興味が俄然そそられた。

「え？ なになに？ どんなの？ ……あ、でも、フィオルさんも仕事があるよね」

勢いのままで聞いて、相手にも仕事があることを思い出し、明らかに落ちた声のトーンに、フィオルは笑って答える。

「愉快的な月神殿副隊長と下僕のお遊戯の時間だ。まあ確かに今日は都合がつかないが、いずれな」

どんな集団だと突っ込みたくなるようなフレーズだが、怖いもの見たさで覗いてみたくなるような危険な誘引力も孕んでいる。

未来の脳裏に、一瞬、高笑いしながら屈強な男達をビシバシと鞭でしばくテイシアの姿が浮かんで消えた。

「……変なこと考えてない？」

「別に」

につこりと笑ってそらとぼけた未来は、変なところで肝が据わっていた。

フィオルに連れられてテイシアの部屋を後にした未来は、階段を下りたところで、屯していた騎士達と出くわす。

礼をした後、敬語だが砕けた態度で話しかけてくる彼らににこやかに応じていたフィオルは、会話が一段楽したところで未来を手招いた。

「お前達も多少は聞いているだろう？ 俺達が守護を仰せつかった時の力を持つ迷い人だ」

「始めまして。しのぎ……未来・篠崎といます。ユリウスさ……あなた達の隊長達には、お世話になってます」

はにかみながら挨拶した彼女の控えめな態度は、騎士達には好感触のようだった。

一瞬ざわつと色めき立ったと思えば、彼女にあれやこれやと言葉をかける者が続出する。曰く、困ったことがあったら頼って下さいとか、うちの副隊長に嫌な事をされたら遠慮なく言って下さいとか、そんな他愛もないことだ。その、遠慮はないが根っからの悪意は感じられない言葉遣いからして、自隊の隊長格とも関係は良好のようだ。

しかし如何せん、賑々しい通り越して騒がしい。

未来がちよつと困り始めたころ、横に立っていたフィオルが一步

前へ進み出る。すう、と息を吸い込んだのが分かった。

「全員、気を付け！」

雷のように響き渡った号令に騎士達のお喋りが止み、そのまま一糸乱れぬ動きで姿勢を正す。その一種圧巻な行動に未来がぽかんとしている、声を普段の大きさに戻したフィオルがいつもの調子で騎士達に話しかける。

「そんな次から次へと話しかけても、彼女が困るだろう。また追々な。……さて、そろそろ休憩も終わりだ。全員取りあえず仕事へ戻れ」

その言葉に特別不満が噴出することもなく、騎士達は未来に思い思いの言葉を残して、方々へと散っていった。

「やれやれ手のかかる」

「でも、嫌いじゃないでしょ？」

「……まあな」

呆れた態度を装いながらもどこか優しい眼差しで苦笑して、フィオルは再び未来を連れて歩き出した。

「それにしても、ずいぶん仲が良いんだね。同じ双神宮勤めでも、違う部署なのに」

相変わらず歩調を合わせて歩いてくれるフィオルの横を歩きながら、未来はなんとなく尋ねる。

「ん？ ああ、俺は一時……初めは月神殿預かりになっていたからな。その頃同期だった奴との付き合いから発展して、な。それにうちの隊長達とユリウス殿等が幼馴染みだから、今じゃ団合同で鍛錬とか、調練者をシャツフルして訓練をつけるとか、珍しくないな」

「ふうん。……幼馴染み、か」

会話の途中で出てきた思わぬ単語に小さく呟けば、フィオルは耳ざとくそれを聞きつける。

「気になるか？」

この問いが、少しでもからかう色を含んでいれば、未来はがんとして首を横に振っただろう。しかし、フィオルの言葉に感じられたのは純粹な疑問の念だけだった。

「少し」

素直に頷いた未来に、フィオルはあつさりと答えてくれる。

「ユリウス殿等の父君、うちの隊長達の兄君が従兄弟で親友の間柄だったからな。その関連で縁がある」

「ユリウスのお父さんと、アレクシスさんのお兄さん？ 親友は分らないでもないけど、ずいぶん年の離れた従兄弟だね？」

「いや。その二人の年の差は、二つだ」

思わぬ返しに、未来は目を丸くする。足も止まったので、フィオルも自然歩みを止めた。

「え？ つて事、は」

「うちの隊長達と、その兄君の方が離れている。……十七年な」

「十七……」

どこか遠くを見ているような様子で紡がれた言葉に、未来は絶句する。そこまで年の離れた兄弟は周囲に居ない。それではもはや親子ではないか。

未来も兄とは年が離れているが、それでも八つ違いだ。十分兄妹の範疇に収まる。

そんな考えを知ってか知らずか、フィオルは焦がれるようできて穏やかな、どこか寂しげな光を瞳に宿す。未来には明確な形容が思いつかなかつたのだが、それはいわゆる憧憬と追憶と呼ばれる類の感情だった。

「年が離れておいでだったからか、まるで親子のようだったな。あの溺愛ぶりは親馬鹿もいいところだった。……いや、あれはもう単なる馬鹿親だったか」

言葉は随分な内容だが、瞳に映った光はずっと変わらず、否、ほとんどん寂しげな様子を増していく。今にも泣き出しそうな光を湛え

ているのに、その瞳が熱を帯びることも揺らぐこともなく。
ただ、ずっと変わらさず口元に湛えられたままの笑みが悲しくて切なくて。彼がうしなつたであろうものの大きさが分かる気がした。

ふと、いつも自分をからかつては子供っぽく笑っていた兄が、一度だけひどく似た表情をしていたことを思い出す。

その記憶は、未だに自分の中でも痛みを伴うものであったから、それ以上は思い出さないよう抑えこむに努めた。

未来の中で半ば諦めたつもりだった故郷への郷愁が湧いて募る。

(ああ、私達つて、きつと立場が似てるんだ)

郷愁と共にぽかりと胸中に浮かんだ言葉は、きつと遠く外れてはいない。

あんなにも哀しい表情は、かけがえのないものを本当にうしなつた経験のない自分には多分、出来ないが、大切な存在にもう二度と会えないという点はきつと、共通している。

「好き、だつたんだね」

その言葉に、フィオルは少し目を見開き、そのまま細めた。哀しげな色に、それ以外の感情が一匙溶ける。

「……そうだな。あの方は俺に世界を与えてくださった、かけがえのない方だから」

透き通つた微笑は穏やかで優しいのに、何故だろう、先ほどまでの表情より未来の心の琴線を複雑にかき鳴らす。そして、その音の輪で郷愁も揺らして伸び上がり、目の奥に熱を灯した。

震える息を吐いて少し俯いた未来の耳に、躊躇いの空気が触れる。その延長上で、ひそやかに衣擦れの音が流れて、辛うじて分かる軽い感触がその頭に落ちた。

規則的にぼん、ぼん、と慰めるような柔らかさで触れる手は、目の前に居る男のもの。

泣き出す直前のような熱を帯びた未来の瞳がふっと上がると、彼は途端に湯気が立ち上る薬缶にでも触れたように手を引っ込める。ガラス球のように透明な瞳が揺れながら未来を見たかと思うと、逃げないように逸らされた。

「……………つ、すまなかった」

優しい感触をもたらした手を戒めるようにきつく硬く握り締めて、フィオルは鋭く身を翻す。

彼の心中の混乱を示すかのように、先ほどまでとは打って変わった大股の早足を、慌てて未来は追いかけた。

未来に割り当てられた部屋の近くまで来て、フィオルは急に立ち止まる。突然だったので、未来はそのまま激突しそうになったが、首根っこ辺りの服を掴まれて辛うじて体勢を立て直す。

扱いの雑さに荒い息の元不満を零しかけるが、その言葉を遮るように低く呟かれたのは、それを上回る不満だった。

「このいざつてときの仕事の速さ、もっと上手く活用できないのかよ」

フィオルは未来から手を離す。

「急がせて悪かったな。部屋に入るか」

「うん」

未来の息が整うのを待つて、再びゆっくりとした歩調でフィオルは歩き出す。

どこか他人行儀に映るその背中がとても遠くて、未来は我知らず顔を歪め、伸ばしかけた指をぎゅっと握り締めた。

部屋に入ると、エデナがにっこりと笑って二人を迎えてくれる。凜としつつも優しい物腰に、未来の顔も少し和らいだ。

「おかえりなさいませ」

「うん、ただいま」

部屋を出る前と全く変わらない態度にどこか安堵しながら答えていると、急に扉を叩く音が耳に飛び込んでくる。

次いで、知らない男の声が入室の可否を問うてきた。

誰かが訪ねてくるという話は聞いていないが、フィオルもエデナもさして驚いた様子がないことから、未来は少し警戒しながらも入室を許可した。

入ってきたのは、やはり見知らぬ男だった。時々見る機会のある侍従の制服を着ているので、やはり侍従なのだろう。

色合いも作りも大人しい容貌をした顔が、感情のうかがえない静かな微笑みを浮かべた。

「お初にお目にかかります、地球よりおいでの方。ジョセ・グレーズと申します」

そう言つて、一つ礼をする。エデナのものとして変わらないのに、何か違う気がした。

悪い意味ではない。動きは堂に入っている感じで無駄がなく、とても洗練されているようだ。では、何が違うのかと思っていたら、男が次に発した言葉で思考が途切れる。

「さる方のご指示で、不肖の身ながらあなたに時の力の教授をする事となりました。以降、よろしくお願いいたします」

「……え？」

思わぬ発言に、未来は目を瞬かせた。内容を咀嚼し、まじまじと

相手を見つめる。

「じゃあ、あなたが双神宮にもう一人居ると言う、時の力の所有者……迷い人、ですか？」

「はい。ご覧になりますか？」

あつさり言うので反射的に頷くと、男 ジョセは懐から何か取り出し、ぽいつと未来に投げて寄越す。きれいに弧を描いて飛んでくるそれに思わず手を出したところで、ジョセの眼光がにわかになくなり同時に、それは空中で動かなくなった。

未来の目の前で宙に静止しているのは、薔薇のような形をした花の髪飾り。

ただ、普通の薔薇とは違って、外側の花弁は白なのに内側に行くにつれて赤みがかかり、最も色の濃い中央部は見事な真紅をしている。

「そのまま、動かないください」

一歩踏み出しかけた未来をそう制止して、ジョセはふっと視線を緩める。途端に髪飾りは再び宙を舞って、そのまま図ったように差し出された手の上に納まった。

「一時、その髪飾りに流れる時を止めました。納得いただけましたでしょうか……ああ、それは差し上げます。自由に使用してください」

穏やかだが、どこか有無を言わせない口調に押されて、未来は一つ頷く。ジョセは笑顔のまま淡々と、自分の意図を進めた。

「今日は挨拶だけでも、と思いましたが伺いましたので、これで失礼します。恐らく、あなた付きになるかと思しますので、以後よろしくお願いします」

「あ……うん。じゃなくて、はい、分かりました。じゃあ、これからよろしくお願いします？」

混乱や戸惑いがごっちゃになってか、色々文法がめちゃくちゃな未来にも我関せずで、彼は結びの句を紡ぎ出す。

「それでは、失礼します」

一度も笑みを崩さないまま、やはりエデナとはどこか印象の違う一礼を残してジョセは退室していった。

扉が閉まり、ほつと息を抜こうとして、横に佇んでいるエデナが発している冷気に未来はぎくりとする。

「あの男……相変わらず……あの、……がっ」

なにやらぶつぶつと呟いているが、所々聞こえない。しかし、その佇まいだけで彼女が静かな怒りに駆られていることは明らかであった。

「えーっと、エデナさん？」

冷や汗をかきつつ未来が声をかければ、彼女ははつとしたように微笑を取り繕う。継ぎ目の全く見当たらない上品さは、流石というほかない完璧さだ。

「ああ、申し訳ありません。少々取り乱しました。あの者を傍に寄せるのは私としては決してお奨めはしないのですが、致し方ありませんね」

穏やかだがどこか棘のある物言いは、ジョセ・グレースというらしいあの男をエデナが好いていないことが察せられた。実際未来も、彼の態度にはどこか壁を感じた。

にこやかだが、それ以上を踏み込ませない警戒、だろうか。先ほどフィオルが作った距離とは別種の、どこかぴりぴりとした隔意だった。

ソファに座らせられ、髪飾りを陽にかざしつつ見ていた未来に、それまで天井をじっと見ていたフィオルが歩み寄ってくる。さりげなく、しかし確実に取られた距離が、未来の心を僅かに締めた。それに気づかぬ様子で淡い青緑の瞳が、彼女の手の中にある髪飾りに落とされる。

「守りの髪飾りだな。その花が全て真紅に染まるまで、身に着けた

者を攻撃から守る護符だが……。少し、見せてもらって良いか？」
「どうぞ」

未来の手から髪飾りを取り上げる、その時も、フィオルの指が彼女に触れることは無かった。

ひどく冷徹な研究者の眼差しで、未来と同じように髪飾りをかざし見ていたフィオルはやがて、軽くため息を吐く。

「俺はユードリアとは違った理由で同意見でな。あまり近づかない方が良いとは思う」

髪飾りの留め具を外しながら、フィオルは少し言葉を探すような素振りを見せた。

「だが……。まあ、せつかく貰ったんだ。活用しない手はない。道具に罪はないんだからな」

邪魔にならないようまとめられた未来のまとめ髪に、そっと金具を差し込む。

触れそうなほどに近づいて、それでも決して触れることのない温もりから、ふわりといつだったか香った淡い匂いが漂って、何故か懐かしさ呼び起こす。

未来が目を伏せるのと同時に、かちり、と小さな音を立てて花が留められた。

「似合うな」

笑みを含んだ声に未来が目を開けると、優しげな眼差しで見つめてくるフィオルと視線が会う。初めて会ったときの屈託のないものではないが、瞳に浮かんでいる温かさは変わらない。

「……そういう態度取っていると、女の人に誤解されるよ」

「そういうものか？」

「うん、私みたいに」

未来は真面目な顔を作って言い放ち、小首を傾げたまま微妙な表情になった男を、一気に破顔して笑い飛ばす。

その笑顔に、ほんの少し無理が混ざっているのを、彼が気付かな

ければ良いと思った。

剣にこびり付いた血を携帯していた水筒の水で落とし、アレクシスは剣を目の高さへと持ち上げた。月は既に天に無く、灯りを持たないために星明かりのみが頼りだ。

脂のせいで濁って見える刃に目立った毀れがない事を確かめ、彼は剣を鞘に収める。剣帯より吊るした鞘に入っているもう一振りについては、既に確認が済んでいた。

その身なりは、太陽神殿騎士団の制服ではなく、未来を迎えに来た時のような旅人の装いだ。所々に黒っぽい染みが飛んでいるが、怪我を負った様子はない。

青年の視線の先には、荒れ果てて見る影も無くなった大地と、事切れて自らの血の海に沈んでいる巨躯。

体躯は、獅子に似ている。しかし、その大きさと巨躯の半分ほどを覆う鱗がまずおかしい。胴の半ば辺りから生じた鱗は後ろ足を完全に覆い、そのまま巨大な爬虫類のそれに近い尾を形成している。

その尾は、振り回すだけで地面を抉り、そこから鋭く伸びる棘から滴った雫は触れた先から草木を枯らした。

そして胴体から切り落とされ、それだけでは飽きたらずほぼ完全に潰された頭部。もはやそこがどんな形をして動いていたのか知る術はないが、バラバラに散らばった肉片に残された皮膚、生えている毛、粉々に砕けた棒状の物は、獅子のそれとは似ても似つかない。

普通であれば見る機会もない、そもそも生まれてくるはずがない異形のモノ。

狭間と称される、世界の隙間より這い出してくるその生き物を、いつしか人々は幻魔と呼び、恐れるようになった。

それらはただ存在するだけで土地を穢し、その牙が、爪が掠るだけで生き物を蝕む、毒に満ちた存在。

アレクシスの唇がゆっくりと開かれる。赤い瞳が、鮮烈な輝きを帯びた。

フランマ
「炎よ」

とても慎重に発音された一言は、真言と呼ばれる魔法言語である。空気に潜む精素に働きかけ、作用する事で魔法を形づくる、見えざる術式だ。

彼の言葉が終わるか終わらないかの内に、幻魔を中心に火の手が上がる。燃え上がると同時に見る見る周囲を呑みこんでいくそれに押されるように、アレクシスは身を翻す。その行く先を勢いが増した炎が覆ったが、彼が足を進めることに勢いが退いて道を開けた。

大きく抉れ、あるいは隆起し裂けた足場の悪い地面　元はなだらかな丘陵の続く長閑な場所だったというのに、今や炎にも包まれて見る影もない　を、更地を行くように歩き、やがて青年は弱々しいながらも緑が残っている場所まで至る。炎はその手前でそれ以上広がることもなく留まっていた。

そこには、男が数人待っていて、一人を除き全員がアレクシスを一礼して迎える。目礼に留めた一人は、裾はそれなりに長いが旅装用の神官服を纏った壮年の男だ。

「太陽神殿騎士団隊長、アレクシス・ヴァロパイヴァ。これにて全ての幻魔討伐を完了しました」

「承りました。太陽神殿神官第一位階三位、イスフェニア・ライネン。引き継いで浄化を執り行います」

無表情に告げるアレクシスの一方で、柔らかな表情でイスフェニアは答える。

その態度は、エルドラドでも高位の神職者とは思えないほど穏や

かで丁寧なものだ。その裏に、いざとなれば手段を選ばない腹黒さはあっても、神々に、神子に対しての忠誠は揺らぐことは無い。

四年前、前国王の崩御に伴って王宮に吹き荒れた王位継承の嵐の余波で、双神宮もまた密かに揺らいだ。その頃の双神宮は王宮と癒着していて、表沙汰にはならなかったが、受けた影響は相当だった。アレクシスやユリウスは直接関わらなかったが、その揺らぎを利用して長らく蟠っていた泥を突き崩し、膿んだ傷口に大規模な外科手術を施した二人の神子に、彼が、彼等が、ずっと付き従っていた事は知っている。その忠誠心が真実であることも。

自身の片割れに対しての忠誠を知っているアレクシスらは、だからこそ彼らには敬意を払っていた。それは、かつての教官であり、今は王都から遠くメスサに居るアーロンに向けるものとは異なる。

アーロンに対しては敬愛やら親愛やらが強い反面あまり心配を掛けたくないという思いがあるが、彼らに対しては戦友のような信頼感が重きを成す。だからこそ、互いにかなり無茶なことを平気で言い合い、けしかけていた。この幻魔討伐も、その一環だ。

双神宮の襲撃から三日。

未来が倒れたその日の内に幻魔討伐に発ったアレクシスは、約二日間をほぼ全て国内に湧いた幻魔討伐に費やしていた。

これは、アレクシスに限らず太陽神殿、月神殿、王宮の騎士や魔法士も多く駆り出された大規模な掃討作戦である。

あの顔を隠した男の襲撃の後、まるで図ったように幻魔がエルドラドの各地に湧いて出た。先ほどの幻魔が、アレクシスが担当した地域の最後の一頭だ。

他の地域も終了の目処が立ち始め、まだ予断は許さないが、事態は沈静化しつつある。

「不幸中の幸いとも申しましようか。湧いた幻魔の大半が第四階層であった事は」

「まだ、油断は出来ません」

「そうですね。これだけで済めば良いのですが。いくら浄化したといえど、土地の豊かさが全て、直ぐ元の姿に、とは参りませんから」
痛ましげに目を伏せた男の言葉にアレクシスは無言で頷き、夜を灼く炎を見上げた。

幻魔には、今のところ四つの階層が確認されている。ただし階層といっても人間が勝手に定義を決めたもので、幻魔がそうだと言った訳ではない。

最も下位に当たる第四位、あるいは第四階層と称される、二種類の生き物が組み合わさった、人間より少し大きい程度の幻魔でさえ、一夜にして山を禿山にしたり村を一つ滅ぼせる力を持つ。そして幻魔は、死して尚、毒に満ちた亡骸と大地と大気に染み込んだ瘴気でこの世界を蝕むのだ。
それを防ぐには亡骸を完全に燃やし尽くし、侵された部分を完全に浄化するほかない。

つまり、倒すにしても、その後の処理にしても、厄介な存在だった。

「では、後は頼みます」

やがて視線を戻し、アレクシスは歩を進める。地面に描かれた術式の中に入り、線や模様を踏まないようにしつつ中央に立った。

「よろしいですか？」

横に立っていた魔法士の疑問にゆるく瞼を伏せながら肯くと、数秒後、アレクシスの姿は光に包まれ、消えた。

次にアレクシスが目を開けたとき、その身は既に遠く運ばれ、双神宮の近くに立ち並ぶ建物の一つの中にある術式の上だった。

双神宮内部へは転移魔法が使えないので、早く戻りたい時はこのような手段が取られる。無論非公式な物だが、一応王と宰相個人からの認証は得ている。公に知られた場合は双神宮側が全ての責任を負って対応する、という条件付きだが。

部屋を出ると、廊下で待っていた一人の男が礼をして、そのままアレクシスを湯殿へと誘った。

この男は双神宮の隠密部隊の一員で、普段はこうして街に住み、情報収集を行っているのだ。

湯殿は、一般的な家屋をそのまま使用しているのであまり広さはない。しかし、浴槽に満ちた湯は毒や瘴気を中和する効果がある薬草の成分が溶け込んだ特殊な物で、双神宮から直接引かれている。ここを使用する幻魔討伐帰りの騎士は多い。

備えられた浴槽にはろくに浸からないまま湯浴みを終えて浴室を出ると、幻魔の血が飛んだ服は既になく、代わりの装束が用意されていた。似たような旅装束だが、夜中とはいえまさか騎士団の制服を着るわけにも行かない。

手早く袖を通し、共に用意されていた長い布を頭に巻きつけ、髪をほとんど覆い隠す。アレクシスの容貌は太陽神殿騎士団隊長とし

てよく知られているから、あまり正体を知られたくない時はこうして髪を隠すのだ。

時間に余裕があるときなどは染めることもあるが、これから双神宮へ戻るだけなのでそんな手間の掛かることはしない。もっと楽な方法だとメスサに入った時のようにフードを深く被る、という手段もあるが、この時期は蒸れるのであまり好きではない。

剣を取って腰に差し、身なりを整えると、そのままアレクシスは外へと出る。男には出くわさなかったし、声もかけない。必要以上に互いに関わりを持たないのが鉄則だ。

真夜中を疾うに回った時間帯の街並みは、しんと静まり返っている。寝ぼけたのか鳥の音が遠くで聞こえた以外は、本当に静かだ。

アレクシスは黙って空を見上げる。月は疾うに地平線の彼方へ沈み、昼間に蓄えた日光で煌々と光る光蓄石を入れた街路灯も今は辛うじて周囲が把握できる程度の明るさなので、星がよく見えた。

彼は星座などにはとんと詳しくないから、本当にただ夜空を眺めているだけだ。

やがておもむろに視線を地上に落とし、アレクシスは薄暗い街路をわき目も振らず双神宮へと戻っていった。

門番をしていた騎士達に声を掛けて門を少し開けてもらい、アレクシスがまず向かったのは、愛馬　シャーエル（うまや）が繋がれている厩（うまや）だ。

一つしかない馬房の中へ入って膝を落とすと、眠っていたはずの黒馬は途端に耳を動かして大きな目を開き、首をすり寄せる。

服を食むように咬む頭を優しく撫でながら、アレクシスは目元を僅かに緩ませた。純粹な親愛表現は、強張り動かし方を忘れかけたような顔の筋肉でさえ和らげる効果があるらしい。

あの幻魔と対峙した時のことを思い出す。アレクシスが最後に相手にしたのは、三種類の生き物を合わせたような第三位の幻魔だ。大きさはゆうにアレクシスの数倍。頭部は、額にねじくれた角を頂き、荒々しく歯を剥き出しにした馬の顔をしていた。

気に食わなかった。自分にこうして親愛を向けてくれる存在と、同じ種族を模っていたのが。同じ、黒い毛並みをしていたのが。額から生えた角が、正面から見ると星にも見えたのが。

一々、癪に障った。

稚気だと思う。しかし感情が、いとも容易く理性を凌駕した。

そして気付けばそんな頭部を、原型を留めないほどに打ち砕いていた。

ずいぶん荒っぽい使い方をした自覚はあるのに剣に目立った毀れがなかったから、無意識の内に魔力を流し込んで、強度を上げてあったのかもしれない。そういえば振るった時に見た刃は血以外の赤さを宿していた。

「戻ったぞ」

その言葉に、黒馬は小さく嘶いた。

絞られた照明の下、照らされた顔が異様に白く見えた。彼女の肌は、これほど白くはなかった。こんな、静脈の青が透けて見える白

さではなかった。

もつと滑らかで、柔らかな色合いを帯びた。そう、まるで象牙のように優しい色をしていたはずだ。指で触れてみれば、死者と勘違いを起こしそうなほどに冷たい。細く小さい微かな呼吸が無ければ、ユリウスでさえ自信を無くしそうなほどに。

魂が脱けるという事態は、こつも当事者を死に近付けるものなのか。

噛み締めた奥歯が軋むのを感じながら、ユリウスは寝台の傍に引き寄せた椅子に腰掛ける。その表情も冴えない。

ただでさえ白い顔はどこか不健康な様相を呈して普段の白磁器に似た艶を失し、目の下にはうつすらと疲労の跡が残る。まだ、見ればすぐ分かるほど明確なものではないが、それも時間の問題であろう。

「フアブラ・フェクトゥ・チェイクンタ・ロード・トドゥ・ミノス」
「魂の緒よ、汝が主への道標を示せ」

疲れきつた嘆息交じりの真言を吐きつつ手袋を外した手を伸ばせば、指先が淡く発光し、呪文の呼びかけに呼応するように拡散する。そして、娘の額から伸びる糸を人の目に浮かび上がらせた。

その糸は、この状況になってから常に閉ざされないようつつかえ棒がされた窓から外へと抜けて、そのまま夜の闇に溶けている。燐光を纏った指を糸に添わせながらユリウスはじつと目を伏せていたが、やがて浮かかない顔色のまま手を下ろし、椅子の背にもたれかけた。

脛の上に押し当てられた手が、小刻みに震える。ゆるく閉ざされていた唇が、歪む。

そこから低く漏れた呻き声が甲高い哄笑になって、そして最後には小さな嗚咽となった。嘲笑の形で固まったままの口元の横を、透

明な雫が零れ落ちていく。

「分かつているはずじゃないか」

ぼつんと響いた言葉は、ぞっとするほど平坦なものだった。止め処なく溢れる涙で濡れた頬を拭いもしないまま、青年は勢いよく身を起こす。嗤っているのか泣いているのか、はたまたそれらはただの残骸で何も感じてはいないのか、全く読み取れない表情で、昏々と眠り続ける娘の顔を見下ろした。

寝台の上を両の腕が彷徨い、そのまま、吸い寄せられるように晒された首へと掛かる。

このまま力を込めれば、彼女の息を容易く止められる。そして脱けた魂は帰る身体を永遠に喪う。そして自分達は彼女から解放される。もしかしたらあの男ももう仕掛けてこないかもしれない。そうすれば元通り全てが元通りそして日常が……。

違う!!!

冷水を頭から被せられたように青年は動きを止めた。

白く細い喉にまさに食い込もうとしていた指も止まったかと思うと、我に返ったように震え出す。全身に広がった震えを、深く息を吐きながら寝台の上で拳を作り、ゆっくりと鎮めていく。

「……私は、ここまでずるくて弱い人間だったのか」

乾いた声が、まだ震えている拳に落ちる。何も知らずに眠り続けている娘を見て、青年はひどく顔を強張らせた。

「望まないまま奪われて、望まないまま押し付けられて。……そして、最後の抛り所さえも、私は」

全く戻る気配のない魂に業を煮やして、どうせ戻ってこないのだと勝手に決めつけて、厄介事から逃げたくて、器を奪いかけた。その行為は、騎士として以前に人として許されざるものだ。最悪の逃げだ。

衝動に支配され、行動に移そうとした自分がとても卑怯で矮小な存在に思えて、青年は低く自嘲を漏らすと、椅子に腰を下ろした。

まるで罰とでも言うかのように未来から視線を逸らさず、ユリウスは青い瞳を魔法の行使で淡く光らせながら指先で糸を手繰るような動作を続けていた。

それは微かな気配と共に一人の人物が傍に立った時も途切れることなく続く。

「おかえり。帰るのは朝かと思っていただけ……気になったの？ 彼女が」

どこかからかい混じりの問いかけに答えず、アレクシスはいつもの無表情でユリウスの横に佇んでいた。その彼から独特な、それでいて不快ではない薬草の香りに混じって、そこはかとなく既の匂いがする。決して良い匂いとは呼べないが、ユリウスたちにとっては馴染んだ、落ち着く匂いの一つだ。

「ああ、そろそろシャーエルに会いに行かないと拗ねるなあ」
くすりと笑っていた顔が、ふと張り詰めたものになって未来の顔に据えられる。アレクシスと共に見守る先で、硬く閉ざされていた瞳がゆっくりと開かれていく。

そして完全に開かれた瞳には、生気が全く感じられなかった。

固唾を呑んでいる彼らが全く見えていない様子で瞳は空ろに天井を見上げていたが、やがてぽつりと一言だけ呟く。瞳と同じく、生気の全くない声で。

「かえりたい」と。

そのただの一言で、再び未来の瞳は閉ざされる。同時に、絶えず動かされ続けていたユリウスの指が、何かに弾き飛ばされた。

「嘘！」

血相を変えたユリウスが未来の額から伸びる糸を浮かび上がらせ、ぐっと手繰る。ぴんと伸びていた糸がさして間を置かずくたりとなつて、やがて手繰り寄せられた糸の先は、ぷつぷつと途切れて先が無くなっていた。

予想はしていたが当たって欲しくなかったという顔付きで、ユリウスは青ざめたまま口を開いた。

フアンラ・フェクトゥスアウディエンティア
「魂の緒よ、我が声に耳を傾けよ」

途切れた未来の糸から、ユリウスの声に応えるようにふわふわと更に細い糸が伸びる。

そして新たに呪文の呼びかけをしようとしたところで、ユリウスの唇から堪えきれず呻きがこぼれた。

糸を浮かび上がらせている光が、途切れた断面から伸びる細い糸が、見る見るうちに薄く幽かになっていく。魔法の効果が切れようとしているのだ。

らしからぬ舌打ちを打ったユリウスの糸を持たない手を、アレクシスが取ったのはその時だった。

「使え」

茫、と魔力を帯びて光を灯した赤い瞳。ユリウスのやや華奢な手を掴んだ手から、大量の光が溢れる。

夜を灼きつくさんとする勢いの、眩い輝き。制御を得手としない所有者の為、すぐに周囲に拡散しようとする力を吸い上げながら、ユリウスはきつく眉間に皺を寄せ、糸を掴んだ手を振り上げた。

今にも消えかけていた糸が火を放ったように輝きを取り戻し、細い糸が縊り集まりながら窓の外へと伸びていく。

始めは糸が灼き切れてしまうのではないかと危惧を覚えるほど強かった光はやがて、目が痛くならない程度までゆっくりと明度を下げた。

魔法が完成したことを確認して、ユリウスは糸を空中に手放して手を膝に置き、軍服の布地を巻き込んで握りこんだ。

「ッ……きつつい」

「口から直接移しても良いが？」

どこか荒い呼吸の下、苦々しげに吐き捨てられた台詞に、アレクシスはやはり表情に変化を浮かべず、しれっとした口を利いた。その躊躇いも悪びれも感じられない口調に、ユリウスはぎろりと高い位置にある赤い瞳を睨む。

「君の冗談は冗談に聞こえない」

ぎゅつと眉間に皺を寄せ、不本意だと顔に大きく記しながら、ユリウスはそれでもその手を振り払わない。

分かっているのだ、今の自身の魔力と精神力では魂の緒を補完するだけでも難しい。不安定な集中力を補うため、魔力を余分に注ぎ込んで魔法の規模その物を巨大化させたので、魔力消費はなおのこ
と激しい。

そして自分はこれから、どこかへ飛び去った魂を探し出し、連れ帰るために自らも魂を飛ばす。こちらも魔力を使うのだ。

先ほどまで使っていた探索魔法も、精神的な疲労が強い繊細な魔力の扱いを必要とするもので、地味に魔力も精神力も削り取られる。そんな探索の魔法を毎日長時間にわたって使っていたから、現在のユリウスの魔力は半分以下に落ちていた。よく眠れば回復するのだが未来が倒れてから深く眠れずにしたため、削れる一方なのだ。

だから、密度が濃く、何度となく受け入れても御すまでが難しいアレクシスの魔力を少々受け取っている。やむを得ない状況だったといえ、受け取らないほうがマシだったと思うほど拒絶反応に近い苦しみを味わった始めの頃に比べれば余程慣れたが、それでも出来れば遠慮したい類のそれを。

やがてアレクシスの手を払い、身の内で渦巻く異質な魔力を手懐

けるため、ユリウスは深く息を吐きながら瞳を閉ざした。やつれた風情もあって、その様子はどこか艶めいている。

常に優しげながらも凜とした表情を湛える美貌が覗かせた一面は、いっそ煽情的ですらあったが、横に立つ男は全く興味がないようだった。

やがて心持ち俯いていた貌が持ち上がった。そこに浮かぶのはやつれを感じさせぬ決意。その中でうつすらと上気した頬は、魔力を手懐けるために生じた熱か。

「じゃ、行ってくる。陽が明けるまでには戻るよ」

瞳を開けないまま一つ笑って、青年の魂は眩しくも優しい刹那の緒を引きながら飛び立って行った。

部屋に一人残った彼は、顔色をますます死の青白さに近付けていく娘に僅かに眉をひそめ、明かりを落とした。

室内に覆ったのは真夜中の青みがかつた黒ではなく、青の強い紺色。夏の夜は短い。

ぐらりと揺らいだ体を椅子の背を掴んで支えながら、彼は白い光の糸が伸びる額に滲んだ汗を袖に吸わせる。

そして、椅子に手を掛けたまま、ゆっくりとその長身は床にくずれ落ちた。

刻一刻と明るくなっていく夜に臍ほそを噛みながら、ユリウスは魂の手で未来の魂の緒たまのおを掴んで飛び回っていた。

僅かにでもおかしいと感じた所は全て回った。しかしどこにも彼女は居ない。

息が存在するはずもない魂の状態で、浅くなる息を錯覚しながらユリウスは東の空を仰いだ。といっても、向きで方角を知ったわけではない。地平線がうつすらと紅を帯びているのだ。もう朝は間近まで来ている。

時間がない、と気持ちばかりが逸る。

これではいけない、と息の錯覚を深くし、もう一度意識を研ぎ澄ます。見落としているところがないか、変化はないか。素早く、しかし舐めるような丹念さで探った。

世界全てを探そうとでも言うかのような勢いで、意識を大気に散らしていた。

だから、密やかに耽々とにじり寄って来るそれに、直前まで気付かなかった。

気付いた時には、遅かった。抗う間もなく取りつかれ、煙のように姿を持たないそれが魂を絡め取る。

そこから、叩き込まれるようにして流れ込む。

切り裂かれるような愛で撫でるような、吸い付くような引き摺ら

れるような、慈しむような疎むような……、悉く相反する、それは激情　妄執の塊であった。

逃れようともがけばもがくほどそれは拘束を強め、魂を侵す妄執を大きくする。

隙を探して這いずり回り、取り込もうと蠢く感覚が、波濤の如く途切れることなく押し寄せるコエが、剥き出しの魂を容赦なく蹂躪し、疲弊させた。ユリウスと未来、二人の魂の緒が、侵食を受けているように見る見る細っていく。切れたら、自分の意思では還れない。

しかも今の状況では、魂の緒が切れれば還るところか自己を保っているかすら怪しい。魂の尾は、正しく命綱だった。必死に魔力で覆いを掛ける。

だから、魂本体への注意が僅かに逸れた。

「　　ッ！　！」

魂に、綻びが生じる。上を這いずっていた気配が、小さな穴に潜りこんで入り口広げようと食い破ってくる。

所謂痛みは感じないが、先ほどまでとは比べ物にならないコエ、こえ、声。

先ほどまでは分からなかった内容が、今は明確に分かる。

どうしてどうしてどうしてどうして憎い恨めしいどうしてどうしてどうしてどうして帰れない還れないどうしてどうしてどうしてどうして戻りたい戻りたくないどうしてどうしてどうして嫌だ消えたくない嫌だどうしてどうしてどうして望んでいない願っていないどうしてどうしてどうしてウシテドウシテ……

一つではない複数の声が激しく魂を揺さぶり、一言毎に食い込んでくる。抵抗を押し潰し、嘲笑うように、じりじりと確実に浸食してくる。

そして不意に、ユリウスはわめき散らすばかりだった声達が、次第に明晰なものに変わりつつあることに気付いた。

ウシテドウシテドウシテアア、オイシソウ、ジヨウとう、たましい、これなら、嗚呼、これなら戻れる。前の奴は奪われた、力も奪われた。補填する。上乘せ出来る。お前の魂私に寄越せ。我々と一つとなってこの世界に復讐を！！

声のうねりが、更に大きく強いものへ変わった。理性を伴わせた狂気という、更に恐ろしいものへと。

明確な像を結ばなかった姿の中に、無数の頭部が浮かび上がる。人も獣も老いも若きも男も女も区別無く、大きく口を開けて叫んでいる。

そして、そのものの背後で、大気が突如、ぱっくりと割れた。色も形も変わっていないのに、そこだけ空気が全く違っている。そこから溢れ出す何かは、色も形もないのに、何故かどろりと動いて近付いてくるのが分かる。

やけに近付くのが早いと思い、気付いた。引き寄せられている。

ぞつとしながら、それでもただ諦めるのはもう嫌で、青年は、魂の奥底から一気に引きずり出した魔力をありつたけ、声を張り上げながら放出した。怯んだのか、拘束が僅かに緩む。

拘束を引き千切り、死に物狂いで逃れる。辛うじて残した魂の緒を握り締めたまま。自身の魂と身体を繋ぐ糸は、切らしてしまった。

『やってくれるじゃないか！』

その声に、重なるは咆哮。再び伸びたその手を、辛うじて逃れる。言葉は勇ましかれど、ユリウスに余力はほとんどない。

不意を衝かれて猛り狂ったその攻撃をどうにか避けながら隙をうかがっていた所で、事態は足早に新たな幕を上げた。

その動きが、いきなり止まる。

ユリウスは信じられないものを見るような心地で、煙のような姿から突き出す刃の切っ先を見た。

鮮やかな真紅の刃に光が生じ、噴き出す。血が溢れ出しているよ
うな、あるいは炎で燃やし尽くしているような、赤い光が見る間にそれを覆い隠した。

赤で覆われた中で生じた声にならない断末魔が徐々に小さくなり、光が無造作にほどけていく。その先にはもう、無数の顔も煙に似た姿もない。未だ隠されているわけではなく、もう本当に、なくなっている。

そして変わりに、不思議な門のような光の輪が生じていた。

次から次へと生じた、自分の知識では計りきれない出来事に、ユリウスはもはや驚かず、いやに冷静な観察眼を注ぐ。

輪の奥からは、先ほど引き寄せて来たあの得体の知れない気配を薄く感じていたが、光の輪は門のような姿をしているがその気配は完全に通さない仕様となっているらしい。近付いてくる様子はなかった。

怖いもの知らずでもいうか。

不気味な気配を塞いでいるとはいえ、やはり得体の知れないそれにユリウスは近付き、しげしげと眺める。フィオルや魔法士達が見れば、さぞ嬉々として調べたがりそうな不思議で強力な形式だが、生憎ユリウスには先立つ知識も後行く興味もない。見知らぬ物を目にした子供のような一時の関心で、じっと見つめる。

そうしていると、やがて門がゆらゆらと揺らぎ始めた。同時に、再び先ほどと同じ真紅の剣先が現れる。

それでもやはり、驚かない。その事に自分でも感覚が麻痺しているのかと思いつつ、一方で一抹の疑問も覚えながら、ユリウスは切っ先がぐるりと回るのを目で追って、どんどん光が強くなるので後ろへと距離を取った。

光の中から現れたのは二つの影と、少し遅れてもう一つ。遅れて出てきた一人が、手を振るって門を消している間に、先に現れた影の一方が小首を傾げてユリウスを見やった。

「……生き魂？」

直接心に語りかけるような響きは魂特有のもので、ユリウスは彼らもまた魂だけの存在なのだを知る。しかし、彼らは三人とも糸を持ってはおらず、即ち死者か、それに近い存在であることを青年に知らしめた。

そこに居ることも、言葉が聞こえるのも真実なのに、どこか現実味が薄く、薄い布を隔てたように姿がぼやけるのは、彼らが行き場を無くした死者だからだと、ユリウスは書で読んで知っていた。

先に出てきた二人の内、一人は声を掛けてきた者に寄りかかるようにして立っていた。

一人だけ存在が鮮やかで、まだ完全に死者となっていない姿は脱力していて、明らかに意識がない。何ともなしにその顔を見て、ユリウスははっとした。

「ミク?!」

思わず駆け寄ると、彼らは何も言わずに娘を青年に託す。細い、本当に細くなってしまった糸を震える手で額に近づけると、すう、と吸い込まれる。

心なし白かった肌が、見る見る本来のほんのりと赤みを帯びた象

牙色に近付くのを確かめ、ユリウスはやつと安堵した。

『……ごめんね』

震える声で頬を撫で、温もりはないが確かな感触に泣きそうになるのを耐える。くたりと力無い手を握り締めた青年に、先ほど話しかけてきたものとは別の声が掛かった。

『お前は どうする』

顔を上げれば、門を閉ざした者が佇んでいる。こうして直接向かい合ってみると、振りかぶるような高圧さではないが、どこことなく凄みを感じさせる相手だ。知らず、ユリウスは身を震わせた。その佇まいは、歴戦の戦士を前にした武者震いに似ている。

『この様では、自力では還れませんので。彼女を身体に戻した後、返魂の術を使用できる術者が帰ってくるのを待ちます』

未来を腕に抱きながら、自分より高い技量を持つと一目で感じさせる相手に敬意を表わす。しかし頭は垂れず凜と顔を上げる青年に彼は 姿がばやけても、性別まで曖昧になるわけではない 考えこむように手を口元へやった。

『お前の対は、頼らんのか』

暗に自分のことを知っていると問いかけても、ユリウスは動じないままさりりと答える。

『彼の力はこういった繊細な事象には向かない。少なくとも彼にその気はない。それに、私は嫌です。彼の力に縋るのは、例えそれで自分が命を落としても、もう望みません。それでは、駄目なのです』
そこで一度ユリウスは目を伏せる。

『……それでは、私は与えられるばかりだ』

ただ与えられるのを、守られるのを良しとしない、誇り高くも脆い一途な決意。ひしひしと伝わる頑固さに彼は密かに嘆息して、そのままユリウスの前に膝を折った。

『そう感じているのは、お前だけでもなかるうが』

意味深な言葉を吐きながら手を伸ばす。前髪を掻き分ける。一瞬

ユリウスは身じろいだが、逃れることはない。

『道を開く。疾く戻れ。再度狭間に入り込まれば、我らとてもう追えぬ』

その言葉にユリウスは一瞬青を見開いた。

『あなたは、どなたですか？』

人間ではないのかと疑問を含ませた問いかけに、彼は僅かに笑ったようだった。あらわになったユリウスの額にふわりと指を乗せる。『不甲斐ない、ただの死者だ』

指が引かれると、そこからすう、と糸が、魂の緒が伸びていった。意識を研げ。耳を澄ませ。迎えはすぐ其処まで来ているぞ』

その言葉が終わると同時に、淡くなつた紺色に光が飛び散つた。夜が明けたのだ。

地平線の彼方から赤々と煌く朝日が、彼らを照らし出す。

曖昧な姿が陽の光を背に受けて燃え上がるように染まつて、ユリウスは思わず目を細める。まるで、太陽を従えているかのようだ。

容貌はやはり、はつきりとはしなかったが、そんな事は些細に感じるほど、彼に惹かれていた自分を悟つた。魂の身には無いはずの鼓動が跳ねた気がして、ユリウスは未来の手を掴んでいない方の手を知らず伸ばし、彼の頬の辺りに触れていた。

やはり見た目通り、どこかおぼつかない感触だったが、その幽かな感触を忘れまいと必死に指先に神経を尖らせる。

彼は何も言わないまま、その指を受け入れていた。何故だかひどく悲しそうに見えて、ユリウスは少し口を開く。

『……』

躊躇いがちに何かを口にしようとしたところで、突然、魂の緒がぐい、と後ろへと引かれる。その性急さにユリウスは危うく未来を抱えたまま身を反転させ、引いた者の腕の中へと引っ張り込まれた。

ぱつと顔を上げれば、その先には朝日に金髪をまばゆく染め、赤

瞳を炯々とさせて、アレクシスが居た。

彼もまた、身体を脱した魂であることを示す魂の緒が、額から伸びている。全身から明らかな敵意を滲ませながら、それでも慇懃に彼は口を開く。

『あなた方のご厚意には感謝するが、俺の半身を誘惑しないでいただきたい』

『なっ』

こういった術は苦手なはずが突然現れたアレクシスにただでさえ驚いているのに、その口から飛び出した発言に、ユリウスは完全に絶句した。一方、ユリウスが伸ばした腕を痛めないようにか、するりと下がって動きが滞らないようにした相手は、どこか楽しげでさえある。

『取られるのが嫌ならば、首輪でも付けておくが良い』

『力で縛り付ける愚行など、御免被る』

その答えに鋭く笑い、彼は次の瞬間にその手に剣を構かまえていた。

アレクシスの鼻先に突きつけられた真紅の刃を、一体いつ抜き放ったのか。鐔の辺りに巻きつけられた華奢な銀鎖以外は飾り気のない無骨な、それでいて力強い優雅さを相反させず共有する、長大な一振りを。

『ならば見届けてやろう。お前の生き様を。覚えておくが良い。』

今の心に反した時、この剣はお前を貫き、魂すら残さず焼き尽くす』

戯れ言と片付けるにはあまりに強い声の調子で歌うようにアレクシスに告げ、彼は剣を引いた。

彼らに背を向け、彼は見せつけるように剣を携えたまま、背後に従えていた太陽の光の中へと溶けて行く。

そしてその姿が完全に消えるのを待たず、アレクシスは未来を抱いたユリウスを掻き抱いたまま魂の緒を手繰り戻った。

ユリウスが椅子の上ではっと気付いた時、陽は既に高く上がっていた。

魂の時、決して離さなかった手は今も繋がっている。

座って寝ていただけにしてはぎしぎしと軋む全身を叱咤しながら未来の顔を覗き込み、その頬に触れた。　温かい。

その額から魂の緒が伸びていないことを確かめ、ユリウスはやつと表情を少し緩めた。

離さないよう絡めて握っていた手をそつと外そうとして、しかしそれが切れる事がなかった。それまでは全く反応を示さなかった未来の手が去り行く手に追い縋り、そのままぎゅっと、きつく握り締めただけからだ。

未来の手は、ユリウスの掌と指をまとめて握りこんだため、全く動かさなくなってしまう。また、振り払うのも何か嫌で、必然的にユリウスは大きく動けなくなったのだが、嫌そうな顔は全くしない。

それどころか、規則的に聞こえてくる健やかな寝息を聞き、穏やかな寝顔を見下ろしながら、ユリウスは目許に浮かんだ雫をそつと拭った。

その時、不意に扉が叩かれる。

返答を待たずして入ってきたのはティシアと、次いでエデナ。エデナは見るからに安堵し、ティシアはにやりと笑って見せた。

「おかえりなさいませ。お二方」

「彼女におかえりを言うのは、彼女の目が覚めてからにしておくれ」
ひらりと手を振ったユリウスに、得たりと月神殿騎士団の副隊長は頷く。

「それでは、おかえりなさいませ。隊長」

「うん、ただいま。今は何時かな？」

見える範囲に時計はない。テイシアが答えた。

「そろそろ十二時になります。それと、目覚めたばかりのところ恐縮ですが、目を通していただきたい書類があるのですが……」

続いた言葉にエデナはぎょっとしたようだったが、ユリウスはさして驚いた様子がない。

「そんなに？ 分かった。悪いけど持ってきて。これじゃあ動けないから」

「承知しました」

律動的に礼をし、赤い髪が翻る。朝日を思わせるその色合いを自然と目で追っている自分に、ユリウスは思わず苦笑した。

彼女が部屋を出た後、エデナが話しかけてくる。

「よろしいのですか？ 本当に、離魂の魔法を用いてお目覚めになられたばかりなのに」

「大丈夫だよ。本当に無理はしていない。自分でも不思議なくらい気分が良いんだ。それに、本当に体調が悪いときは、テイシアだつて無理に仕事を押し付けてはこないよ。……結構量アレクシスに回してるらしいけどね」

くすくすと笑ってから、青年は紅茶と軽く摘める物を所望し、エデナもそれを受けて部屋を後にした。

部屋に意識を持った人間一人になって、ユリウスは自分が引き合いに出したアレクシスのことを思い出す。形のよい額にぎゅっと皺が寄った。

「人に一言も言わず勝手に帰ったなあいつ。今度会ったら文句言つてやる。好き放題勝手に言い募ってくれてまあ」

そんな調子でぶつぶつと不平を垂れていると、再び扉が叩かれた。テイシア達だろうと軽く声を掛け、扉を開けてきた相手にユリウ

スは驚く。入ってきたのはフィオルだったのだ。しかも書類を抱えている。

「どうしたの。君が」

ユリウスの前に机を持ってきてくれたフィオルが、困ったように頬を掻いた。

「申し訳ありません。うちの隊長が突然倒れまして、書類が滞りました。申し訳ないですが、こちらだけでも署名をお願いして構いませんか？」

その言葉に、ユリウスは動きを止める。

「倒れた？」

そこに潜んだ微細な感情に、フィオルは気付いたのかどうか。机の位置を微妙に調整し、書類をユリウスの目の前に置く。

「医師に見てもらった結果、どうやら肉体疲労に魔力の急激な消費が重なったそうです。命に別状はありませんが、今は完全に眠っています」

「……そう」

言葉少なに答えてユリウスは書類を手に取り、それきりアレクシスの話題には触れなかった。

ユリウスに魔力を受け渡した事で、使い慣れない魔法を何度となく行使して溜まっていた疲労が頂点に達した。

胸郭の中で不規則に暴れまわる心臓に手を置きながら、アレクシスは椅子の背に額を押し当てる。

ほとんど眠ることも休むこともせず幻魔討伐に明け暮れたことで、ざわめく魔力を抑え込む体力がかなり消耗しているのを感じていた。こうなることを見通しに加えなかった自分の愚かさには心底呆れる。

否、あるいは。

心臓の痛みとは別の所から来たため息を吐いて、アレクシスはぼんやりと光を放ち絡み合う二本の魂の緒を見上げた。

元を辿らなくともユリウスの魂の緒がどちらか、アレクシスには分かっていった。それくらい、ずっと共に過ごしてきた。

片割れのセレスティーナよりも、今は副隊長として傍にいるフィオルよりも、父親のようだった兄よりも、幼い頃に亡くなった母よりも、碌に家へ戻らない息子の勝手を許している父よりも。ずっと、誰よりも傍にいた。

セレスティーナがアレクシスとよりエアリエルと共に過ごした時間の方が長いように、二対の双子は自分の片割れではない方に引き寄せられた。

この世界は、神々を始めとする人知を超越した存在が人の心に重く座する一方で、科学的な根拠に基づいた法則も深く根付いている。国によってその程度は左右されるが、本来なら相克しそうな類の真理を二つ内在させているのがこの世界、レファレンディアだ。

科学的な根拠から、アレクシスは月が太陽の光を反射して光っている事は知っていた。

しかし一方で、神を知る心でその太陽もまた、月が無ければ均衡を欠くとも思っていた。

一方に寄りかかるばかりでなく、互いに足りない所を補い合う。神話に語られる、共に過ごす時間は短くとも仲睦まじい二柱の神の様子は、夫婦の理想の一つに掲げられていた。

月と太陽になぞらえるなど、おこがましいとは知っていた。

神々の地上の子である神子を双子の対として生まれ落ちたからこそ、アレクシス達は自分達が影である事を承知していた。

それでもアレクシスには、月と太陽しか例える術を知らなかった。自分と、同じく影の役割を担うユリウスの関係には、それしか言葉を思いつけなかった。

白々としてくる夜を眺めながら、アレクシスは次第に焦燥に駆られてくる自分に気付いた。

明確な不安や疑念が湧いたわけではない。ただ、何やら落ち着かない。

その焦燥に決定打を叩きつけたのは、限界まで張り詰めた弓弦が負荷に耐えきれずに切れるに似た、高い悲鳴を思わせる音。

ぱつと顔を上げれば、絡み合っていた糸がどんどん光を褪せさせていく光景。そしてその内の一本が完全に消えて見えなくなっていく様子。頭が真っ白になった。

一瞬我を忘れかけて、しかし、何時であれ状況を把握する為の冷静さは残せという兄の言葉に従い、アレクシスは呼吸を整えて落ち着こうとする。

消えた糸は一方。もう一方は、弱々しいながらも辛うじて光を保っている。

見えるということは、ユリウスの魔法は継続されているのだ。ただ、あまり余裕はないのだろう。何しろ、自分の魂の緒を切るくらいだ。

椅子の背を掴んだ手に力を込めながらアレクシスは立ち上がり、意識を越えて戦慄く指先を堅く瞼を落とした白い頬に触れる。ぞっとするほど冷たかった。

「何があつた」

その言葉は虚しく消える。

アレクシスは自らの手を見下ろした。

傷つけるための術しか知らない手。

ただ存在するだけで相手を威圧する密度を持った魔力を、攻撃に転化させる術しか覚えてこなかった。そちらのほうが楽だったから。

魔力が、変わってしまった。

その言葉を聞いたのは、確か、四年ほど前だったろうか。先代の国王が突如崩御し、後継が定まらないままに王宮が荒れていた頃だ。震えていた銀の髪がさらりと揺れ、俯いていた顔が見える。髪の間から覗く青い瞳が、その時は濁って見えた。

変わっていく。変わってしまう。俺は、僕は、私は、私はもう、今までの通りには行かない。

声を殺して泣く細い肢体を抱きしめてやることさえ出来ず、ただ見下ろしていたあの日の自分。

ごめん。あの日の約束、守れない。君は騎士で、俺は魔法師。その約束、叶わない。

「ごめん、ごめんとひたすら繰り返す姿に。

そうじゃないと。お前と共に往けるのなら、それがどんな形であれ本望だと、何故、言えなかったのだらう。

空はさらに白んで、ほんのりと赤みが差ししてくる。

いつの間にか随分と時間が過ぎてしまったかと齒噛みしたところで、アレクシスは部屋に「在る」気配に気付いた。

「おはよう、ご機嫌はいかが？」

窓辺に佇む、一人の影。

しなやかで力強く、夜空に浮かぶ月のように凜とした、一方で昼間のぼんやりとした月のように儂い 死者。

音もなく近付いてくる彼女はアレクシスの前に立つと、小さく首を傾げた。

「戻ってくるのを待つ？」

意図を計りかねて、アレクシスは目を瞬かせる。

「魂を他者の手に委ねて、器に戻るのを待つ？」

付け加えられた言葉に、漸く理解した。

頭では理解している。自分では返魂の術式は編めない。身体を離れた魂を引き戻すことは、他者が行うしかない。

しかし、嫌だった。分かっているても、ユリウスの魂に他者が触れることを想像するだけで気が狂いそうだった。

その感情を読み取ったのか、彼女は自らの手を差し伸べた。

「手伝ってあげる。行くと良いわ」

その提案は、ひどく魅力的であった。アレクシスがゆっくりと伸ばした手をそっと握り返し、彼女は小さく笑ったようだった。

冷たく、どこか感覚の朧な手はそれでも優しく心地が良い。

そのまま身体がすう、と軽くなり、アレクシスは自分がどうなっ

ているのかも定かでないまま、鎖から放たれた獣のように外へと一気に駆け出した。

かけて、駆けて、翔けて。ぼんやりと淡い糸だけを目印に、アレクシスは空を無我夢中で飛んでいた。

ユリウスの元へ飛んだところで、魂と身体を繋ぎ合わせる魂の緒をどうするのか。アレクシスには手立てがない。しかし、それについて今、考えてしまえば立ち止まってしまう。何かかけがえの無いものをうしなってしまう。

だから、アレクシスはただ、糸を、未来のものである魂の緒を頼りに疾りつつけた。

遠くで何かがちらつと光る。

その光は見る見る強くなって、アレクシスの横を目でも追いきれない速度で抜けた。

後に残ったのは、新たな糸。寄り添う糸に光を分け与えるように輝いている。

引っ掛かりが落ち、彼は猛然と明るくなった空を、相手を求めて駆け抜けた。

探し求めた相手を見つけたとき、その手が自分でない男へ伸ばされているのはひどく腹立たしい。その光景が夢のように美しい朝日を背景にしているとなれば、ますます苛立たしい。

アレクシスは考える間もあらばこそ、伸びていた魂の緒を鷲掴んでその目の前の男に手を触れていたユリウスを腕の中へと抱きこんでいた。この際、自分もユリウスではない女の手を取ったというこ

とは完全に柵に上げている。

ユリウスが腕に抱く娘に考慮し、力任せに掻き抱かないのが最後に残った冷静の欠片だ。

『あなた方のご厚意には感謝するが、俺の半身を誘惑しないでいただきたい』

腕の中でぎよっとしたらしいユリウスは知らぬ様子で、アレクシスは楽しげに見える男を睨みつける。

首輪でも付けると嘯く相手に切り返せば、途端男の様子に鋭利な物が混ざったのをアレクシスは感じ取った。

突きつけられた真紅。

その向こうの顔は布で遮られたように判然としないのに、自分と同じ色をした眼差しが向けられているのは分かる。刃の切っ先より、その眼差しの鋭さの方が背中を冷たくした。

しかしそれでも、目は決して逸らさない。

『ならば見届けてやろう。お前の生き様を。覚えておくが良い。

今の心に反した時、この剣はお前を貫き、魂すら残さず焼き尽くす』

どくりと何かが波打ち、息苦しい。喉と言わず全身に何かを詰め込まれたかのような。剣を引かれても、その息苦しさは変わらない。

何かを目の前の男がしたのは察せられたが、証拠はない。あった所で、この男は傲然とそれを受け入れさせるだろう。太陽の如く燦然と光輝を纏って、その眩まはさでただ一つの道筋みちすぢ以外を眩くらませて。

そして男はそのまま背を向けて、太陽の光の中立ち去っていく。

その後姿を最後まで見届けるつもりはない。

刹那、息苦しさが転じた痛みを奥歯で噛み殺し、アレクシスは腕に感じる確かな感触だけを頼りに、身を翻した。

目を覚ませば、レースのカーテン越しに差し込む強い光に目を焼かれる。ひどく強張った指先を椅子の背から離そうとすれば視界が揺れ、まともに立っていられない。全身が酷く軋む。

離魂の術とはこうも肉体に負担を掛けるのかと思いつながら、眩暈が収まるのを待つ。

やがて少し落ち着いたようで、ゆっくりと踏み出す足はそれでもどこか宙を踏むような危うさだったが、アレクシスは椅子に手を戻すことなく、歩き出した。

ユリウスの方も未来の方も振り返らず部屋を後にして、そのまま太陽神殿の宿舎へと戻っていった。

宿舎の、執務室とはささやかな扉を隔てて繋がっている私室に入り、アレクシスは身に帯びていた服を脱いだ。

皺一つなくよく手入れされている寝台の上に置かれた、丁寧に折り畳まれた軍服を取り、袖を通す。長旅用の飾り気のない靴をさりげなく金の留め金を用いた軍靴に履き替え、髪を覆い隠していた布を外せば、旅人の若者ではなく、太陽神殿騎士団隊長が現れた。ただし、剣は持たない。

普段、使う機会など数える程度だがいつもよく磨き上げられている姿見に全身を映し、アレクシスはおかしい部分がないか確かめる。やや顔色が悪いが、それ以外は別段普段と変わらないように見える。

だろう。本当は、足に力を込めなければ無様に座り込んでしまいたくなるほど疲れ果てていた。

「あ」

背後からした声に振り返ると、半ば開き放しの執務室へ通じる扉から少年が一人顔を覗かせている。丈の短い白い軍服。アレクシスの従卒だった。

「お戻りでしたか」

その言葉にアレクシスは向き直る。

「今、戻った」

「はい。おかえりなさいませ」

一礼し、顔を上げた少年に先に報告書を書く旨を伝え、アレクシスはそのまま執務机に座ると、取り出した紙に規定どおりの定型で始めた報告を記し始めた。

数枚にわたる報告書を書き終え、アレクシスはようやく横に置かれていた茶を手に取る。

従卒の少年が、アレクシスより先に帰還していた騎士達の報告書と共に運んできてくれた茶は、ポットの中身共々すっかり冷めてしまっていた。

不味くはないが香りがすっかり飛んだ茶を無表情で啜りつつ、アレクシスは報告書を手繰り寄せる。

数枚に目を通し、不備がない事を確認し、そこで本格的にぐらぐらとおぼつかなくなり始めた視界に、とうとう万年筆を置いた。

何もしなくても震える指先、霞む視界に、アレクシスは瞼を下ろし、眉間にきつく皺を寄せる。

目を閉じたまま席を立った。足に力を入れ、意識を研ぎ澄まし、脳裏に注意深く部屋の構造を描き出す。

歩き出したところで扉の開く音がする。そちらを向かないままア

レクシスは探り、私室への扉に手を掛けた。

「先に休む。食事はその後で良い。三時間で起こせ」

「はい」

扉を確実に閉め、アレクシスは変わらない足取りのまま寝台へと近づく。そしてそのままの姿勢で、靴も脱がずに倒れ込んだ。

薄く開いた視線の先に、ベルトから吊られたままの双剣が映る。

それに辛うじて片腕を伸ばし、引き寄せた。細いが深い息を漏らし、そつと目を閉じる。

意識の隅で聞こえた、乱暴に扉を開け放つ音と、普段は希薄な存在感の足音がガツガツと床を蹴りつけて近づく気配に、お前のせいで扉の寿命が縮む、と、呟いたのだろうか。

アレクシスの意識は抑えに抑えて荒く高くなった波に浚われて、深く沈む。

沈み、落ちていく視界の端に、忌々しいほど鮮烈で痛烈な赤が閃いた気がした。

「寝着を無造作に着崩し、アレクシスは私室の窓辺に腰をかけ、一方の膝を縦に折り曲げた姿勢で外を眺めていた。開け放たれた窓から夜風が金糸の髪を揺らしている。」

「お風邪を召されます」

どこか硬い調子で投げられた幼い声音に、アレクシスは答えず視線をふいと上へ向けた。

「月が沈んだ」

抑揚の乏しい声はいつも通りながら、その鋭利な横顔には普段は無い翳がある。

「月は、沈んだ」

もう一度言った赤い眼差しが、ほんの少しだけ色が濃くなっているようだ、少年はふと思った。

どう言葉をかけるべきか考えあぐねていた彼は、微かな気配と共に現れた人物に助けを求めようと視線を向ける。男はひどく明度の高い瞳を細めて見せ、足を踏み出す。

普段はほとんど音を立てない靴先が、やけに硬質な響きで打ち鳴らされた。

「同じ月をもう一度見ることはもう出来ないが、いつまでもそうしているのなら夜になる度に一服盛るぞ。明日も月を見たいなら、さつさと横になれ」

普段は僅かでも人の目があれば敬語を用いてくるフィオルの呆れ交じりの物言いに、アレクシスはつと目を眇める。

「今夜、休めば良いのか？」

「……明日は一日休め。執務も、鍛錬もだ」

その答えに青年は軽く口を曲げて窓を閉ざす。どこか不満そうだが口には出さず、そのまま床へと下り、敷物の上を滑るようにして

歩く。

朝から晩、ほぼ一日を死んだように眠り続けていたとはとても思えない、しゃんとした動きだった。

寝台へと上がって掛け布を引き寄せ、そのまま目を伏せたアレクシスに、フィオルは未来の部屋の番に行く旨を伝える。何も答えない青年にそれを咎めるような言葉は吐かず、男は一礼して身を翻した。

その身が執務室へ通じる扉をくぐろうとしたとき、低い声がかかる。

「何か、言っていたか？」

「あの方が、私に何か言うと思ったのか？ 聞きたいなら、直接赴け」

「あれは、俺を詰る」

変わらないように聞こえる言葉に、僅かに混じった困惑の響き。フィオルが渋い顔で振向くと、部屋の主自ら灯りを落とした室内で、扉の後ろから差し込むカンテラの灯りに照らされ、金糸だけが寝台に埋もれて見えた。

そのまま扉を閉め、カンテラを拾うと従卒の少年を引き連れてフィオルは廊下へ出た。

燦然と煌く太陽を模した二枚造りの扉を閉めると同時に、彼はしかめっ面を覆い隠して低く呻く。

気分でも悪くしたのかと少年が見上げると、男は顔のほぼ全体を覆い隠していた手を口元まで下ろす。笑っていた。

彼はしばし、声をひそめて笑っていたが、やがてそつと手を下ろして歩き出す。それでも口元や目元には笑いの痕跡が見て取れたのだが。

灯りがことごとく落とされて暗い廊下を言葉の無いまま先導して歩き、階段を下りるとフィオルはカンテラを少年に渡した。

カンテラの中では、衝撃を受ければ発光するよう魔法をかけた石の端石を数粒入れた小さな金籠が揺れている。石が、互いや金属に触れてからころと鳴って光を増した。

「気をつけてお戻り。灯りは明日返しに来てくれれば良いよ。おやすみ」

「おやすみなさいませ」

笑っていた理由については行儀の良い口の少なさで問わず、危ない足取りで兵舎を後にする背中を見送り、少年も自分の部屋に戻ろうと踵を巡らせた。

ふつと感じた風の流れる気配に、アレクシスは静かに目を覚ます。研ぎ澄まされた感覚は眠っていても健在で、僅かな変化も逃すことは無い。深く眠っているときはその限りでないが、この数年は深く眠る機会の方が希だった。

夜明けが近いのか薄明るい室内に視線を泳がせれば、窓の向こうで紅色が一瞬過ぎった気がした。咄嗟に視線を戻すが、そこにはもう何もない。

寝台に身を戻し、眠りすぎたためか痛みを催した頭を軽く押さえながら横を向く。

寝台の横に設置された小卓の、ランプの下にそつと忍ばせて置かれた四つ折りの紙を認めてその動きがふと止まるが、アレクシスはそのまま腕を伸ばしてそれを広げる。そこに記された内容に、眉間に皺が寄った。

掛け布を乱雑に払いのけ、アレクシスは寝台の上で無造作に座る。頭痛は、いずこかに吹き飛んでいた。

「だから、好かん」

小卓の引き出しからやや深めの白磁の小皿を取り出し、紙を縦に横に破り裂きながら放り入れる。そして、共に取り出しておいたマツチを擦って火をつけた。

じわじわと燃える紙片。月と太陽を象徴化して重ね合わせた、この国ではともすれば不敬とも取られかねない印が燃え尽きるのを確かめ、アレクシスは寝台から立ち上がった。

昨日夜を眺めていた窓を、そして今しがた紅が横切った窓に手を掛け、勢いよく開け放つ。ほとんど軋みを立てずに開かれた窓から吹き込んできた明け方の爽風を胸に吸い込んで、青年はゆっくりと目を開けた。

遠く張り巡らされた塀に遮られて見られないが、夜明けを示す赤い光が四方に散っている。

赤は、決して嫌いな色ではないが、どうにも好かない相手が両者ともその色を帯びており、その時ばかりはアレクシスの目にはやや忌々しく映った。

やがて、煌々と輝く太陽が塀の後ろからその姿を現す。その途端、アレクシスは胸元から湧き上がるような痛みを覚え、ぐらりとその身体が揺らいだ。

前か、後ろか。前に倒れれば、流石に転落はしないだろうが窓縁にぶつかるであろうし、後ろは、じゅうたんを敷かれてあるといえ、床だ。

決断は一瞬。窓縁を掴むことで漸く踏み止まり、開いた手で胸を押さえると、その唇から堪えきれずといった風に低い呻きが漏れた。

あの男に背を向けたときの痛みによく似ている。

内から切り裂かれるような痛みが、離魂の術の後遺症でないことは、アレクシスも察していた。経験していないことを断じるのは普段ならばあり得ないが、理性よりさらに深いところで本能が叫んでいた。そしてその叫びは、必ず正しい結果を彼にもたらす。

腕だけで支えていた身体が窓の下の壁を滑り、床へとくずれ落ちる。自重を支えきれずにずり落ちた手を見下ろすと、擦れたように赤い掌の上で、形にならない光が閃いた。

一度目を見開いた後、アレクシスは口元に淡く、しかし明らかかな嘲笑を刷く。

汗が滲み、上気した頬が青白く変じたように思えるほど冷たく怜悯な表情からは、人間らしさが完全に欠落している。普段の無表情が、それでも時として柔らかな情動を溢すのとは、全く対極に位置していた。

「……何が望みだ」

嘲り混じりの問いかけは答えの無いままに空気に消え、青年は酷薄にせせら笑う。そして彼はおもむろに常の無表情を顔に浮かべ、立ち上がった。

痛みはまだ心臓に早鐘を打たせていたが、寝台ではなく衣装棚へと向けて伸ばされた足運びは、見事なまでに昨夜、窓から寝台までを歩いたときと同じであった。

従卒の少年が朝の挨拶に来て扉を開けたとき、剣を腰に帯びない以外は完全に装いを整えた主に目を瞠る。

そして困ったように眉を寄せながら「今日はお休みになるように言われましたのに」、と言う。その言葉に「装いまで病人でいると言われていない」と切り返し、アレクシスは少年が抱えていた湯の

張った盥に薄手の布を浸し、絞って顔を拭った。

回廊を、一人分の影が歩いていった。

普段でもほとんど音を立てない足取りをさらに密やかなものにし、気配も淡くしているので、ちらっと見ただけではそこを人が歩いているなど気付きもしないだろう。

影が、ふと足を止めた。

回廊を支え、また彩つてもいる規則的な柱。影のいる所から数本先の柱から、もう一つの人影が現れる。

ゆっくりと近付いてくるもう一つは、一步毎に石畳を鳴らしながらやって来る。差し込む朝の光に照らされて、その銀の髪が明けの色を吸い込んで柔らかく輝いた。

しかし、その髪に覆われた顔に浮かぶ一对の青は、決して優しくはない。

「やあ、おはよう。君にしてはやけに早起きだね」

常と変わらない、穏やかな響き。穏やかな微笑。しかしその穏やかさを裏切る鋭さが言葉と瞳にはあった。

「おはようございます。私だって、時々は早起きをして散歩をしたい時もありますよ」

感情の読めない、あでやかな笑みを浮かべた女に、ユリウスはふうん、と気のなさげな声を返す。

次に踏み出した足は、音を立てなかった。

回廊に、金属の噛み合う音が響き渡る。

「ふうん」

先ほどと全く同じ声を吐いて、ユリウスはつう、と唇の端をもたげた。

その手には、逆手に持たれた剣。相手の横より、背中から回りこむようにした腕から相手の首筋へと伸びている。

それを防ぐのは、鈍く黒光りする鉄扇。使い込まれていることを示す無数の古傷の下、うっすらと線の残る模様が朝の光に浮かびながら剣の腹を止めていた。

「あまり、フィアラを困らせるんじゃないよ」

やがて、ユリウスがおもむろに剣を引き、肩に置く。ゆっくりと、気配だけを後に引いて女の後ろをすり抜け、二人はようやく同じ方向を向いて立った。

柔らかく赤みを帯びた銀と、暁に似た紅が吹き抜けた風に巻き上げられる。その中で銀が、ゆらりと靡いて流れた。

「君を斬るのは骨が折れそうだから、あまり面倒は起こさないでくれよ」

止まない風に乗るようにその言葉は女の元へと届く。

女は、ティシアは、鉄扇を首元から外し、口元に添えてその表情は定かではない。

そしてそのままユリウスは、回廊の彼方へと姿を消した。

「……あなたがたに迷惑を掛けたいわけではないのです。例え、この行動があなたがたの意思に背くものであったとしても」

ティシアはそろりと鉄扇をなぞる。古傷と、錆びを防ぐためにかけてきた研ぎに遮られ、最早ほとんど分からなくなってしまう刻み模様。そして、ユリウスによって新たに付けられた迷いのない一

線の傷。

「あれの傷はあなたを蝕む。治してもそれは表面だけのこと。そして、終いには……」

艶やかな紅を引かれた口をぎりりと噛んで、彼女は鉄扇を閉じる。両手できつく握りしめて重ねられた鉄の短冊が上げた軋みは、辺りには響かず床に落ちた。

両手の動きを止めた痛みは、ひどく不気味なものだった。血管の中に針を通してそこから何か注ぎ込まれるに似て、痛みより先に気味の悪さが来た。

動けなくなるほどの痛みは消えたが、疼きはずっと続いている。自分が自分でなくなっていくようなその感覚は、とても、気持ちが悪い。

それを振り払うかのように書類に万年筆を走らせていたユリウスの手は、叩く音もなく開け放たれた扉にびたりと止まる。

赤と青が交錯する。交わった視線を逸らす事をどちらも許さないまま、ユリウスは万年筆の蓋を閉め、アレクシスは扉を閉めた。

ユリウスは万年筆を置いた手をそろりと脇に置かれた剣へと動かす。

対するアレクシスは、見たところ武器を帯びていないが、押し寄せる殺気　ではなく戦意は感じていた。

しかし、幾度となく向かい合ったユリウスをして、今回はいつ仕掛けてくるのか全く読めない。

いつ頃からか結ぶようになって、空間と時間をずらす結界の術式をユリウスはほほ唇だけで口ずさむ。

その術式がもう少して終わるといふところで、ユリウスは不意に横へと身を流し、執務機の脇に置かれた小卓の柱を掴み、振りかぶる。上に掛けられたレースのクロスと茶の入った水差し、氷の入った器が、万有引力の法則に則ってゆっくりと傾いていった。

それらが床に届くより早く投げる。驚嘆すべき速度で迫るアレクシスの手元で赤い光が浮かび、伸び上がるのが見えた。

真つ二つに叩き斬られた小卓が落ちる。水差しらと共に、けたたましく耳障りな短い旋律を奏で上げると同時に、術式は完成した。

部屋の空気がざあ……と色褪せ、時を止める。

カーテンも書類も飾られた薔薇も、そよとも動かない。

動くのは、鮮やかなのは、対峙する二人だけ。

剣を鞘から払ったユリウスが、小卓の向こうに佇むアレクシスを見て目を見開いた。

正しくは、彼が手に持つそれを見て。

「その、剣」

刃先から光が零れ落ちる。真紅の刃を自らの前で構えた唇が、ほんの小さく酷薄な色を帯びたようだった。

その色をユリウスが見止めるより早く、魂の姿で二人が出会ったあの男が握っていた剣をアレクシスが傾ける。

がくんと一瞬、その身が倒れこんだように見えた。その一息で間近に迫った赤にユリウスは避けきれないと判断すると、瞬時に魔力を少量練った。

「爆ぜよ！」
エルブレイオ

二人の間を遮るように弾ける爆音。ごく小規模だが威力はそれなりにある光弾を、アレクシスから距離を取りながらユリウスは立て続けに生み出し、次々と炸裂させながら体勢を整える。

この程度ではアレクシスに傷一つ付けられないことは知っている。しかも今は、どんな力を持っているのか分からない不確定要因の剣もある。

能力付与エンバスを我が身と剣に付与しながら、ユリウスは一時的に上げた筋力と反射速度でアレクシスに切り掛かった。

押しかけた理由は分からないにせよ、この茶番を終わらせねば話にならない。それに、言いたいこと聞きたいことは山とあるのだ。

間合いを詰めてきたのに気付き、大剣がまだ炸裂していなかった光弾を二つ三つまとめて薙ぎ払った。

視界を灼く閃光に意識を掻き乱すことなく冷徹に振られた二振り
の剣は、示し合わせたようにぶつかり合う。

光が失せて、剣を完全に拮抗させた二人が室内に浮かび上がる。苛ついたような様子で青い双眸の眺が吊り上がって苛烈な光を帯びる。

「何の用だよ。好き勝手に喋り散らした拳句、何も言わずにぶつ倒れて俺に仕事を押し付けた我が半身よ」

未来だけでなく大半の者が、聞けば耳を疑うだろう粗野な物言い
で、ユリウスが吐き捨てる。爛々と怒気を瞳にみなぎらせる姿を見て、アレクシスはひどく優雅に見える仕草で赤い瞳を細めた。

「俺は、お前を止めに来ただけ」

交差した剣が、ぎちりと音を立てる。大剣から絶えることなく零れ落ちる光がユリウスの剣を伝った。鏢まで落ちていったそれが水泡のように弾けて、手袋をしていない手に細かな粒子となって降り注ぐ。

途端、鋭利だった青い瞳が、虚を衝かれたように丸くなった。ずっと自身を悩ませていた疼きが嘘のように無くなったのだ。

「抑えこんでいられるのは一時。その間に回復しておけ」

そんな様子を尻目に、アレクシスは袂を探り、小さな小瓶を取り出す。掌に収まるほどの大きさの、口と底の部分が細く、腹の部分にかけてなめらかに丸くなっていく小洒落た作りの中で、どろりとした形容し難い液体が揺れていた。

「……それは？」

「よく眠れるぞ」

「……いやだ。それ、フィオルの一番不味い奴だろう」

ただつこそのままの調子でユリウスが唇を尖らせる。その表情に、先ほどまでの戦闘意識剥き出しの感情は感じられない。驚くべき轉身の早さだが、その気まぐれともいえる様子をアレクシスは気にした風情は無い。無感動に淡々と言葉を紡ぐ。

「その分よく効く」

「今飲めと？」

「……………」

無言は、完全なる肯定であった。

「やだよ。今日の分の執務まだ終わってないんだ。君のせいだ」

フィオルが一度決めた以上、今日は君に執務をやらせることは無いだろう、とため息混じりに呟いて、ユリウスは眉を寄せた。

「真面目だな」

「父の影響でね。やれることはその日の内に済ませたい性質クチなのさ」
だから、とアレクシスの剣を弾き、ユリウスは剣を構えなおす。
息を吸うように意識が切り替わり、空気が再び張り詰める。

「飲ませたいなら本気で来なよ。君には色々腹に据えかねている事があるんだ。大人しく飲むと思うなよ」

同時に、再びユリウスが切り込んだ。

結末は、意外に呆気なかった。

アレクシスが振り下ろした剣がユリウスの軍服を引き裂くのと、ユリウスがアレクシスの腕に深々と剣を突き通したのはほぼ同時。

普段ならば避けるか、かすり傷で済ませるような攻撃に対する相手の失態にユリウスが一瞬戸惑った、その刹那の間にアレクシスは傷が広がるのも構わずその瘦身を床に引き倒した。

「君、やっぱりまだ本調子で無いじゃないか。……それとも、あの剣のせい？」

今度こそ完全に戦意を削がれた声でユリウスは少し上にあるアレクシスの顔を見やる。引き倒されはしたが拘束はされていないので、逃れようと思えば出来たが、敢えてそれをしなかった。

ユリウスを引き倒すと同時に放り投げられた大剣は、アレクシスの指が完全に離れると同時に幻のように薄れて、彼の身に溶けるように消えていた。

当の彼はユリウスの言葉を聞いているのかいないのか。

黒地の軍服の下に着込んでいた薄手のシャツをめくり、その下から覗く皮製の胸当てに視線を走らせている。露になった白くて細い喉から滑らかに線を描く肩は、人形のように滑らかで硬質な雰囲気がある。

その視線が胸当てに深く入った切り口で止まって、同時に彼は全身の動きも止めた。

その瞳に浮かぶ色は、見慣れない傷にうるたえ、顔を真っ青にする騎士見習いよりもさらに質が悪い。

その色を見るたびに、やるせなくなる。腹立たしくなる。彼に、そして何より自分自身に。

(こんな身体で無ければッ！)

何度も何度も口で、それ以上に心で叫んだ言葉を今回も内心で吐き捨てながら、意識の片隅でひゅっ、と鳴った悲鳴にも似た喉の音を聞いた。

途端、現実に戻ったユリウスの双眸がつう、と顰められ、舌打ちする。

「のいてよ。重いんだから」

軽く掛かっていただけのアレクシスの手を払い落とし、シャツと軍服を掻き寄せながら、つっけんどんにユリウスは自らが突き立てた剣を持ち直す。放置されていた傷は白い袖のほぼ全体を朱に染め、布が吸いきれなくなった血が床に池を成し、今なお広がり続けている。

腕に打ち込まれた剣を一息に引き抜き、同時にユリウスは癒しを意味する真言を完璧な抑揚で放った。池は、それ以上は広がらない。剣が貫通した袖からちらちらと覗く肌は再生されたばかりで、生まれたての赤子の肌にも似た桃色をしている。

癒しの文句の響きに乗せて結界も解くと、アレクシスの傍で凝っていた血の池は風景を挿げ替えたように消え失せ、二人をふわりと風が掠めた。

現実の世界から切り離された刹那の世界は、いつも現し世に残すものは限られている。

そして現世に残ったのは、彼らの肌に直接触れている血染めの剣と袖。

剣を握り締めたままユリウスは離れようとしたアレクシスの袂に指を差し入れ、一瞬で小瓶を摘み取った。胡散臭そうに目の前で液

体を揺らす。

「剣を清めたら、寝る」

小瓶を押し込んだのは、胸当ての下にきつく巻き付けられた幅広の綿布。

ユリウスはアレクシスに背を向け、剣をそつと床へ置くと軍服から腕を抜いた。

剣を振るために過不足なく筋肉がついた、しかし全体のつくりがどこか華奢な白い腕が、皮の胸当てを外す。それを両手で持ち、ユリウスはどうしたものかと首を傾ぐ。

胸当ては繋がってはいるが、ざくりと入った切り口は相当危ういところまで行っている。

一度切って繋ぎ直すか、それともいつそ新調するか、とぶつぶつ思案していたユリウスに、影が掛かった。

「……まあ、どっちにしたってそろそろ大きさは合わなくなってきたし。暇なときで良いや付き合ってよ、料金は君持ちで」

表情も目線の高さも変えないままの独り言めいた声はどこか普段と違っていて。

氷水晶だけになった水差しを接客用の丈の低い机の、紙山の隣に置き、真つ二つになった小卓を寄せる動きをふと止めたアレクシスを、青い瞳がやっと見上げる。

先ほどまでの戦意が前面に出たものではない。しかし、どこか緊張感のある視線を交わしながら、二人は姿勢を少し変える。

拍子に、ユリウスの肩から黒地の軍服がずれて、腕と肩の狭間で止まった。

アレクシスの視界にはつきりと映った、危うく肩に引つかかった軍服の下。

胸を苦しめるように巻かれた布の、ちょうど喉の真下にあたる場

所。

そこに、男ならばありえない、双球の谷間が。まるみをおびた女の胸があった。

「……隠せ」

「ん？ ああ」

胸当てを床に置くとユリウスはシャツを寄せ、剣を手繰り寄せる。どうやっても視線が合わない赤い瞳に、その口端がひどく愉しそうに吊り上がった。

「何処で誰が見ているか分からないからねえ」

「……」

くつりと喉で笑いながら立ち上がり、私室へと向かいながらひらりと白い手をひらめかせた。

「それじゃ、おやすみ」

小さな音を立てて扉が閉まり、アレクシスはため息混じりに手を口に当てる。

「……お前だろう。面倒に巻き込まれるのは」

口から手を外し、はあ、と今度は明らかなため息を漏らすと、胸当てを執務用の椅子の上に隠すように置き、さらに椅子を机の中へ押し入れた。

立ったまま書類にざっと視線を通し、手を付けられていない数枚に、ユリウスをそっくり真似た、流れるような書体で署名し、決済済みのトレイに入れる。ずっと傍にいたから、互いに筆跡はよく知っている。

そう、よく知っている。

しかし、知っていてもそれによって行動を起こすかどうかは別なのだ。

本物のユリウスの筆跡をなぞり、アレクシスは苛立ちとも悲しみとも、はたまた喜びともつかない曖昧な感情の片鱗を瞳に浮かべる。そして次の瞬間には、全てを振り切る様な勢いで歩き出す。

閉じた扉に振り返りたくなる衝動を理性で抑えこんで、未来の横で足を止める。彼女と、その近くに立つフィオル。珍しい、とちらと思った。

にこやかに笑いながら、本当に懐に入れた相手であれ必要以上に近づくことのない男が、出会って間もない娘の傍に居る。

「目が覚めるまで寝かせておけ」

真円を描いた黒曜の瞳。吸い込まれそうな深さと、くるくると変わる感情を内在するその色を、面白いと思う。

何かが変わる予感がしていた。

あるいは、何も変わらないかもしれない。

あるいは、もっと悪い方に転がるかもしれない。

現時点では、神に通じる者に付け狙われている以上、悪い方に転がる率のほうが高いようにも思われる。

しかし、ずっと停滞していた何か動き出す可能性が、今日の前に居る。

自分と彼女のちょうど中間に立つこの娘が、異世界より神々の王によって招き入れられた存在が、何を成すのか。

全く全てが未知数で、だからこそ面白い。

彼らの横をすり抜けながら、アレクシスは再び歩き始める。背後で慌てたような高い声を右から左に流しながら、廊下と階段を歩き

過ぎて、兵舎の外へと出る。

顔を上げれば、燦然と煌く太陽が目に焼きつく。

朝はあんなにも忌々しく思えたそれが、ほんの少しだけ、趣を変えているような気がした。

「陛下との面会の日が決まったわ」

セレスティーナが真珠のついた珊瑚製の小さな王駒を指先で振りながら告げた。かつん、と小さな音を立ててそれが升目に置かれる。「いつ？」

短く尋ねてから未来は、セレスティーナが手にしていたのと同じ形状の、ただし黄色の手駒を手にとって盤上に置く。

「明日」

セレスティーナに代わって簡潔な答えを返したのはエアリエルで、青い陣地から駒を出し、頬に落ちかかる髪を優美な仕草で耳に掛けた。

ちらりと覗いた白い首筋から、半分ほどに満ちた月の形の模様が見える。月神子の証でもあるというそれは、日毎に、空に浮かぶ月と同じく、満ち欠けを繰り返しているのだという。

ただ、元々丈夫でない体質らしく、エアリエルは常に丈の長い装いをしており、首元にある印は本当に、ちらりとしか見えないのだが。

神子はそれぞれ、身体のどこかに彼等の神が司る証を持っている。エアリエルはそれが首筋に存在した。セレスティーナは腰の辺りにあるそうだが、今のところ未来は見えていない。ただ、ふわりとした装いの下から光がぼんやりと透けて見え、そこにあるのだとは聞いた。

「明日？ ずいぶん急ね」

避けようのない事に不満を言ってもしょうがないと、半ば開き直りの境地に達していた未来の答えは冷静だ。

目が覚めて数日。作法や文字の練習をする以外は、未来は暇を持

て余っていた。街に出る、という話も立ち消えとなっていたし、双神宮の中を目的もなくふらふらするのも気が引ける。

暇になるのは、いわば必然だった。

それを見かねてか、手の空いている時は誰彼となく単純な盤戯をして遊んでくれるようになっていた。

今の相手は、この双神宮の主二人。

昼食を共に摂った後、なんとなく流れ込んだ。

場所は中庭に面した遊技場。氷水晶が部屋の隅に置かれていて、程よく涼しい。

開け放たれた窓からは、庭に咲き乱れる花々の華やかな芳香が広がり、三人しかいないのが勿体ないほど心地よい午後だった。

「ミク、次よ」

セレスティーナに促され、未来は盤上に意識を戻した。

六芒星型の盤上の六つの頂点は、赤・青・黄の塗料が陣地を示す色としてきつちりと塗り分けられている。頂点以外は白い。

遊び方は単純で、王を含む十五騎の手駒で白い道の上を進め、出発地点の陣地から新たな陣中へ、すべての駒をより早く移動させることが出来れば終局というものだ。手駒と陣地は同色、三人用の遊戯である。

セレスティーナは赤を陣地に持ち、手駒は珊瑚の兵。王駒には桃色がかつた真珠の冠がついている。エアリエルは青で手駒は瑠璃の兵、王には青玉の冠がついていた。

ちなみに未来は黄色で手駒は雪花石膏の兵、王には黄玉の冠が嵌められた物で、セレスティーナらの駒とは敵同士であることを示している。

この二人との遊びは専らこういった指し事の類だが、エアリエルはこれらが憎らしいほどに強い。まるで駒の歩みを予見しているかのような快進撃だ。

策士に徹しきれないまま負けを重ねているセレスティーナも、未来が負けん気を起こしてどうにか一勝と粘るのに、根気よく付き合ってくれていた。

蜂蜜と檸檬の果汁を氷で溶き伸ばした飲み物を、ガラスの鳥の付いたマドラーでかき混ぜ、セレスティーナはこの上なく上品に一口飲んだ。

挨拶諸々の作法はどうにか合格を貰ったが、その非の打ち所のない仕草は、どれだけ練習しても身に付きそうにない。未来なら邪魔つけにするだけならまだしも破きそうな、ベールを幾重にも重ねた袖も何気なく捌いている。

「明日王宮に付き添ってくれるのは、ティシアとフィオルなのでしよう？　なら、大丈夫よ。副隊長なだけあって、さり気ない補佐が得意な二人だもの。上司の嫌がる事に先回りする事も容易くするのだから」

エアリエルが口を挟んできた。長い指で駒をつまむ。無造作極まらない動きだが、その仕草もやはり美しく整っている。

「それに、内々に、という要望は叶えられるそうだから、度を過ぎず緊張する事もないと思うわ」

青い駒が黄色の駒を乗り越え、自分の陣地に一番乗りを果たした。三つの陣地の中でも一番である。

面白く無さそうに眉を寄せてから、未来も一足遅れて乗り越えられた物とは別の駒を陣地入りさせた。次の道筋を目算しながら前髪を軽くいじる。この数日で目算が上手くなったのは、多分気のせいではない。

エデナが整えてくれたので後ろ髪には下手に触れない。横髪を三つ編みにハーファップの体を成した髪は、ユリウスが貸してくれた

ままの飾り紐でまとめられている。

「負けず嫌いね、ミクは。こういうのは適当で良いのに」

少し唇を歪めて見せながら、エアリエルはほわりとまだ湯気の立つお茶を取り上げた。この月神子が、夏場のこの時期でも冷たい物を口にするのを見た事がない。

「……ところで今、一つ聞きたいことが話から生じてしまったけど、どうすればいい？」

「なに？」

エアリエルはきよとんと首を傾げた。

「ユリウスとアレクシスさ……って、王宮に苦手意識でもあるの？」
その疑問に、傾いた細面が明らかにしまった、という表情になる。普段無表情のアレクシスよりさらに感情の読みづらい相手にしては珍しい。

「ミクって、たまに結構鋭いわよね。あの二人には言わないでくれる？」

「ここに、駒を置いてくれるならね」

明らかに負けへ転がる升の目を示すと、エアリエルはしぶしぶそちらに瑠璃の兵隊を後退させた。

セレスティーナの赤い勢力が活路を見出し、嬉々として盤面を進む。どうやらこちらは口を出すつもりはないらしい。

銀の瞳がちよつと助力を請うような流し目を投げたのを、金の瞳は見返しもしなかった。

肩に掛かったケープを直しながら息を吐いて駒を一つ、薬にも毒にもならない方へと振る。

「二人とも王城に身内がいるの。しかも揃って陛下に近いね。理由はそればかりじゃないけど、そうね、敢えて言うならユリウスは彼に会うのが苦手みたい。半ば押し切って神殿仕えを決めて、以来帰ってないからあまり顔を合わせたくないのかもね」

何気なく発せられた言葉にまた二人の絆の端を見せられ、胸の奥が尖って皮膚の裏をちくりと刺す。その小さな痛みも、この数日ですっかり馴染みとなっていた。

「アレクシスの方はもう少し入り組んでいるのよね、セレナ？」

さり気なくを装って佳人は感情の読めない笑みを湛え、片割れに水を向ける。手入れの行き届いた珊瑚色の指先がマドラーを離し、グラスの縁に当たって高い音がした。

どこか神経質なその音にそろりと未来が視線を動かそうとしたところで、机の下を風が吹く。

同時に何か硬い物が床に当たったような音がしたが、何も落ちた様子はない。セレスティーナの瞳が刹那険をおびるがその影はすぐに隠され、ドレスの下でヒールがくぐもった音を立てた。

「あ、えつと……ごめんね？」

「ミクは悪くないわ。気にしないで」

どうやら自分のふとした疑問が、セレスティーナにとっては楽しくない事態を招いたか、思い出させたかたらしい。

それを気にした未来に、セレスティーナは頭を振った。そのまだどこか尖っている視線は、表情を変えないまま茶器を傾ける片割れに据えられたまま。

「本当に、質タチが悪いのだから」

「でも、より詳しく知っているのはそちらじゃない。私は視てしか識らないもの」

「記憶は、改竄されるものだわ」

短くそう言って、彼女は透明な金の眼差しを曇らせた。泣いているという錯覚を感じさせるほど重たげな瞳。

しかし、次に上げられた瞳は濡れてはいなかった。

ただ、とても哀しい色をしている。

「王宮には優しい思い出が多すぎる、だそうよ」

その言葉は、彼女の意見も反映しているのだらうと未来は思った。

決着は結局着かないままその場はやがてお開きとなり、エアリエルとセレスティーナは迎えに来た神官に連れられて部屋を出て行った。エアリエルは日課の瞑想、セレスティーナは参拝者との面会なのだという。

そして未来も、迎えに来たティシアに連れられて遊技場を後にした。

未だに見分けがつかず、一人だったら途端に迷子になりそうな廊下を二人で歩く。

あまり広々と豪華なのは落ち着かないと泣き落とし、第二図書館に近い、一先ずの居室とした二番目にあてがわれた部屋へ向かいながら、未来はティシアが持っている布の包みに興味津々だった。

大きさは腕で抱えて少し余るくらいか。これでもかどぐるぐる布で巻かれていて、何が包まれているのか全く分からない。

その布には何か書かれているが、模様、ではないようだ。

聞いてみても、部屋についてのお楽しみと笑うばかりで、ティシアは答えてくれない。

何だろうと未来が考えている内に部屋に着いたが、彼女は気付かないまま行き過ぎようとして、ティシアに襟元を掴まえられて引き戻された。

「……れ？」

未来はきよとんと首を傾げる。

「行き過ぎ」

「あ、ごめ……うぎゃっ！」

襟を掴んでいた指がすうっと背中をなぞり、未来は大きく悲鳴を上げた。

「色気のないわねえ」

ティシアは毛を逆立てた猫さながらに警戒している彼女を呆れたように見て、まあ、だからこそ躰甲斐のあるんだけど、とぼそりと不穏な言葉を吐く。

そして、いつそ胡散臭いほどのにこやかな笑みを浮かべて、未来を部屋に手招いた。

警戒を解かないまま未来がじりじりと部屋に入ると、ティシアは窓際のほうに置かれた机の上で、鼻歌交じりに荷物を解いていた。

エデナは少し用事があるとかで今は留守にしており、部屋には真正銘二人きり。

本気なのかそうでないのか、定かでない手の出し方をするティシアへの信頼がどうにも揺らぎがちの未来は、少し距離を取って近づく。鼻歌を歌っている割に複雑に手を踊らせながらティシアが少しずつ布を剥いでいき、やがて現われ始めた中身に、未来の目がゆっくりと丸くなっていった。

丁寧に折り畳まれたキャミソールとカットソー。

ベルトにチュチュスカート、オーバーニー。

そしてその横には、リュックにもショルダーにもなって重宝するキャラメル色の鞆。

どれもこれも、とても見覚えのある。

「……………私、の？」

信じられないと掠れる声にティシアはただ微笑んだ。

ふらりと未来は近付き、震える指を伸ばす。その先に触れたのは、覚えのある感触。

肌触りを気に入っていたカットソー、レギンスにするか最後まで

迷ったオーバーニー、それなりに使い込んで鞆のそこかしこに刻まれた細かい傷。

それら二つに添えられるようにして三つ並んだ包みの内、最も小さい、どこか不恰好な形の巾着に似た袋を開けてみる。

中には華奢な作りの腕時計とヘアゴム、シュシュに木製のクロスを通した組み紐のネックレス。

ネックレスを摘み上げて、苦笑した。クロスに初めに通されていた革紐が切れて、変わりにとハルがくれたのがこの組み紐だった。

鮮やかな赤を中心に用いながら、全体に落ち着いた雰囲気のその紐は、付き合う少し前、始めて貰った物だ。

あの日、互いに別れを切り出すつもりであったというのに、我ながら未練がましいといふかなんというか。

どれもこれもひどく懐かしい、そして今は果てしなく遠くなってしまう故郷の香りを纏っている。

微笑みたいのか自嘲したいのか、笑いたいのか泣きたいのか。

複雑にもつれた感情の糸口を探しあぐねて、未来は眉を寄せたままそつと唇を歪めた。その表情は、先ほどの苦笑の名残か、どこか笑っているように見えた。

2 (前書き)

久しぶりな更新です。
お待たせして実に見ません。

この世界に来たとき身に着けていたであろう品を一つ一つ丁寧に確かめていた未来が、三つの包みの内、最も大きなもの　中からいものの中身は下着類だった　に手を伸ばしたとき、ティシアが不意に口を開いた。

「初めに言っておくわね。その靴、私達ではもうどうにも手が付けようのないの」

「どういうことかと首をひねる未来に、とりあえず開けてみて、とティシアは言う。

布を取り去って、納得が行った。

ダークブラウンのフェイクレザーで、交差するタイプのストラップで足を固定するミュールの、靴底がべろりと完全に乖離している。加えて、それなりに太いヒールが片方、ぼっきり折れていた。折れた先は、布をいくら振っても見つからなかった。

「一体いつ何がどうなっただろう、全く身に覚えが無いが、ここまで来ると確かにもう駄目だろう。ヒールが折れているのは決定的だ。」

「明日は、今履いてるのとその服で王宮に行くわよ」

その言葉に、え、と未来は鞆に手を伸ばしかけた腕を止める。

「異世界の者は故郷の世界の装束を帯びて拝謁するのが習いなの。本当に異世界の者である事を照明する……まあ、風習みたいなものね。本当は我らの姫との面会の時もその規定は適用されるけど、あの時はちよつと訳有り、持ち物は全部預からせてもらってたわ」
「返すのが遅くなって悪かったわね、と、未来の持ち物を包んでいた布を慎重に畳みながらティシアが言う。

「あずかる？」

「汚れていたから」

「……ああ」

端的な答え。それに得心したらしき未来に、ティシアは畳んだ布をそつと抱えて我知れず唇を噛んだ。

本当は、どれもこれも“名も無きあの方”の残り香が濃厚に移っていて。

そのままに置いておけば厄介なことになるのは目に見えていて。

だから、完全に残り香を落とすまで彼女から隔離した。彼女自身も、眠っている間に特別な香油を擦り込ませて、完全に匂いを落とすしてあった。

それでも、彼は来たけれど。

懸念に見せた、ひどく下劣な打算。

神々の長が残り香を撒き散らす者の正体を隠し手中に納め続けんとする、権力闘争の色の濃い、低俗で陰湿な駆け引きの一環。

(それだけではないけれど)

いっそそれだけであれば、ここまで後ろめたい思いを抱くことは無かっただろうか？

「ティシアさん？」

「何でもないわ」

いつも通りに笑って、しかしいつも通りに手は出せずにティシアは喉をなぞって、それ以上の言葉を封じ込めた。

未来は最後に鞆を取り、中を見る。財布に手帳、音楽プレイヤーと作りのしつかりしたヘッドフォン、ライム色のカバーのかかったスマートフォンと日焼け防止の二の腕まで隠す手袋など、入れる場所は決めてあるが雑多に入り混じった物達を一つ一つ取り出していた動きが、スマートフォンを取って止まる。

どうやっても電源が入らないことは納得が行く。もう随分日が過ぎてしまったから。しかし未来が気になったのはそこではない。

きれい過ぎるのだ。

スマートフォンだから、画面を指で操作する。汚れが気になったときは拭くが、最後に触った時、そろそろ拭こうかと思っただ記憶がある。その時にちょうど待ち合わせていた相手が来て、鞆に放り込んで、それっきり。

だから、記憶が正しければ指の跡が残っているはずなのに、まるで新品のようだ。心なしか、カバーもきれいになっている気がする。そこではた、と思い当たる節があり、未来は鞆の中を引っ掻き回す。

「……あれ？ 無い」

「どうしたの？」

鞆を逆さに引っくり返しかねない勢いで何かを探していた未来は、ティシアを見ないまましきりに首を傾げている。

「充電器が無いの。おっかしいなあ」

小さなケースに入れた替えの電池を置き、未来はまだこそごとと鞆をあさっている。

「充電器？」

「持ち歩ける充電器にアダプタ付けてスマホでも充電できるようにした奴なんだけど……あれー？」

その未来の言葉に、ピシッとティシアの動作が止まった。

「……あだぶたって、黒くて四角くて銀色の出っ張りがある?」
「うん」

鞆の中身を全て確認し、無いと知ってもまだ諦めきれないらしい未来を見ながら、ティシアは内心冷や汗ものだった。

(あの、馬鹿共ッ!)

研究者には、幼子の好奇心を残したままで長じた者が多い。むしろ、そうでない者の方が少ないだろう。

それは別段構わない。

彼らが好奇心の赴くまま自力で、あるいは迷い人達の話聞きあれこれ工夫して作り上げる品々は、人々の暮らしを少しずつ楽にしているのだから。

大きい子供。

そんな形容がとても合う彼らは、未来が持つて来た珍しい物に夢中になった。

地球の匂いと神々の長の残り香を落とし、その上で完全に気配を攪拌して周囲に馴染ませる術式を描いた布を用意するといった必要な役目はきちんと果たしたし、ティシア自身興味をそそられて横から見ていたのも事実だから、あまり強くも言えない。

いじくり回すなら未来に返す日までには全て元のように整え、関心を収めるようにと強く言い含めて出てきた日の事を思い出す。

自ら課した忙しさにかまけ、また大きな子供であっても約束は守るだろうと高を括っていたこともあって、よく確かめなかった自分の落ち度だ。そういえば取りに言った時、何やら落ち着きの無い空気が流れていたような気もする。

つまり、そういうことだ。

ティシアは頭を抱えなくなるのを堪えて、なんと説明したのかと考えあぐねる。

勝手に自分の持ち物を触られたと知れば、大抵の者は良い心地などしないだろう。年頃の娘であれば尚更だ。

初めに偽ったのなら、それを最後まで貫き通す。

それはティシアの中で信念にも似た行動基準だったが、いつもならすらすらと口を衝いて出る軽口が、そのときは枯渇したようだった。

自分が成した行為の結果であればいくらでもだまくらかすし、他者の行為であつても前々から知っていて、且つ必要があれば詐るが、こついつた不意打ちはやや苦手だ。

うつかりどこかで落としたかな、と少し悲しげな物言いにそうではないと告げるのは簡単だが、その後をどう繋げるか思い至れないまま布を抱えていたティシアの耳の端に、ふと足音が一つ引つかかる。

早い、子供が駆けるに似た早さの、しかしもつと重たい音の響き。それが、飛ぶような速度で近付いてくるのだ。

何か火急の報せかとも思ったが、どうも違うらしい。

その音は次第に個々の間隔がゆっくりになり、やがて未来の部屋の前で止まる。次いで、扉を叩く音。

その音に未来はびっくりしたように顔を上げ、首を傾げる。

「誰？」

「フィオルだけれど、入っても良いか？」

「え、うん。どうぞ」

未来の問いかけに返ったのは、つい先ほどまで走っていたとはとても信じられない、いつも通りの声だった。

ティシアはそれが面白くない。きつと入ってきた顔も、上気一つしていないのだろう。

ティシアの想像の通り、入ってきたフィオルは息一つ乱してはいなかった。そんな彼はティシアが目に入らない様子で真っ直ぐ未来に近付き、手にしていた物を差し出した。

白い手袋に包まれた掌の上に乗っているのは、電池が二本入った充電器と、それに繋がった黒い四角のアダプタ。

「鞆から、うっかり落としてな。壊してしまった。少し不恰好で悪いんだが」

見た限りでは別に変わった様子の無いそれを取り上げて引っくり返し、そこで未来はフィオルの言葉の意味を知った。

本来なら黒く塗装されているアダプタの裏側が、白みがかつた銀色に覆われている。どこことなく不器用な形の銀色に、苦勞の跡がしのばれた。

それに視線を落としたまま何も言わない未来を、怒っていると思っただのか、フィオルがひどく決まり悪げに眉を寄せる。額の長さより短めに切り揃えられた前髪のため、眉だけでなく表情の動きがよく見て取れた。

「恐らく性能は問題ないと思うが、その、構造が分からなかったから一度分解した。そしたら今度は上手くはまらなくて、その、だな……」

言葉を連ねるたびにドツボにはまっていくのが手に取るように分かるような、どんどん尻すぼんでいく物言いに、青いのか赤いのか

定かでない顔色。

「だから板を、割って」

「ねえ」

俯いたまま突如フィオルの言葉を遮った声は、冷静であるように思われた。その未来の手には、いつの間にかスマートフォンも握られている。

「これも、触ったよね？」

辛うじて疑問の体は取っているが、ほぼ確信している物言い。そのままゆっくりともたげられる頭部に、思わず回れ右をして逃げ出したくなる衝動を殺す。

そこに浮かんだ表情を想像するのが、フィオルにはとても恐ろしく思えた。

詰られることは、別に構わない。自分達は、自分は、彼女の信頼を裏切るような真似をしたのだから。

恐ろしいのは、嫌われることだった。

出会ってまだ間もないが、嫌われたくはなかった。さり気なくどころか明らかに線を引いている自分が言えた義理ではないが、優しい顔が負に歪むのを見るのは嫌だった。

しかし、ここで嘘を吐いて看過されれば、決定的な亀裂になりかねない。

それならば、いつそ。

「……触った」

手を下ろし、フィオルは微妙に逸らしていた視線を移し、見上げ

てくる瞳を見返した。テイシアとよく似た色の瞳は、常の柔らかさを完全に削いでおり感情による動きは無い反面、黒曜石に似た鋭利さを突出させていた。

感情が無ければ、テイシアよりも硬質な雰囲気をしているんだなと、場違いにもフィオルは思う。同時に、普段鮮やかに揺れ動く感情の豊かさにも、気付かされた。

そんなことを考えている間にもその口は、一方でこの場に及んでもなお論理的に動き続けている思考から成る言葉を紡ぎ出していた。「初めて見る物だったから、興味深く弄くり回した。……勝手に悪かった」

敢えて頭を垂れず、真っ直ぐ視線を合わせてくる淡い色の眼差しに、未来はゆっくりと黒曜石を瞬かせる。

そのままぱたぱたと、能面に近い表情で手招く。その手に握られていたはずの充電器は、スマートフォンと共に机の上に置かれている。

フィオルが不思議そうに腰を曲げると、その分近くなった距離でさらに未来が手を動かす。彼女自身は動くつもりはないようだ。後ろめたさもあって、フィオルは招かれるまま片足を少し後ろに引き、また腰を屈めた。

正しく高さが等しくなった視線で、未来は黒曜石をすうと眇めた。手招きをしていた手をフィオルの顔へと近づける。

フィオルははっとして後退ろうとしたが、未来の斜め後ろからジト目で睨んでくるテイシアの無言の圧力に屈し、近づく手を、まるで裁きでも受けるような心地で待ち受けた。

軽い音がして、フィオルの額に同程度の痛みが走る。

痛みはたいしたことはなかったが、驚きで額を押さえたフィオルに、目の前の相手 指弾を食らわせた未来はからりと笑ってみせ

た。

「これと、後は明日が無事に過ごせたら、ご破算にする」

目を丸くしていたフィオルは、分かった？ と聞いてくる未来にやや唾然としつつ頷く。視界の隅で面白くなさそうな顔を見せたテイスシアについては、無視することにした。

「責めない、のか？」

「壊されるよりはマシだし」

本気なのか達観しているのか判別しがたい物言いに思わずフィオルは絶句し、その後、顔を手で半ば隠しながら嘆息する。

「甘すぎやしないか？」

「異世界に来たって腹括った時点で諦めた。……で？ 気は済んだの？」

「あ、ああ。まあ」

しもろもどろなフィオルに、未来はわざとらしく眉を吊り上げ、指をつきつけて見せた。びくりとして泳ぎそうになったガラス玉を、黒曜石が逃げるなど縫いとめる。

そしてそのまま、未来は重々しく口を開いた。

「二度目はないから」

「……心しておく」

また額を弾かれると思ったか、どことなく表情の硬いフィオルにもう良いよと姿勢を直させ、未来は堪えきれずといった様子でまた笑った。

久しぶりに袖を通した故郷の服はどことなく懐かしくて。知らない匂いはしたけれど嫌な匂いじゃなくて。

懐かしさと、未知の感覚。

そんな二つになんだか、自然と笑いがこぼれた。

テイシアから貰った化粧水を肌に馴染ませ、未来は鞆の中に入っていた化粧ポーチを取り出した。

「最近肌の調子いいから、ファンデとかは軽めで良いかな」
ポーチから化粧をするときに使う小さめの鏡を取り出し、そのまま取り落とす。カシャンと軽い音を立てて、鏡面を覆う蓋の付いた鏡が絨毯に転がった。

凍りついたように、未来の動きが止まる。見開かれた漆黒の瞳が、しばらく呆然と、中途半端に開いた状態である鏡を映す。

そのしばらくが、数秒だったのか数分だったのか。
ともあれ、我に返って未来は再び鏡に指を伸ばした。また落とす。
今度は、落とした原因ははっきりと分かっていった。

未来の指が震えていたのだ。

小刻みに、かたかたと一所に定まらない手。それを見下ろして、未来は怒りたいのと泣きたいのがほぼ半々に入り混じった風に顔を歪める。

「緊張してる？ バカじゃないの？ しょうがない、って分かってるじゃないのよ」

その声は、どちらかと言えば怒りの方の秤の方が重かった。それは行動にも表れて、苛むように自分の手を握りこみ、強引に震えを抑えると、そのままぱつと鏡を掴む。

「偉い人に会うんだからあまりけばはしくはなく。……よし」

そして未来は、何かに挑むようなきつめの表情で、化粧を施し始めた。

仕上げに明るい色の口紅を筆で差して、既にまとめてあった髪に乱れがないか確かめる。そして未来は手早くポーチに化粧道具を詰めて鞆に仕舞うと、立ち上がった。

そのまま床 寝台の下に引かれた手触りの良い絨毯の上を歩き、その縁にそつと置かれている靴を履く。寝ている間以外はずっと靴を履いて過ごすという、地球で言う西洋風のライフスタイルはどうも苦手な未来だった。

寝室を出ると、ティシアとフィオルが向かい合うと称するにはやや対角線上に座りあって、エデナが供したと思しき茶を飲んでいた。三人がほぼ同時に未来に気付き、三者三様の表情を顔に浮かべる。エデナはどこか興味深げに。
ティシアはひどく愉しげに。
フィオルは、何故か不機嫌そうだった。

「それが故郷の召し物ですか？」

「うん。まあ、外出用だけどね」

近付いてきたエデナに手にしていた鞆を託し、未来はスカートの裾を軽く引っ張った。

「外出用？ それか？」

信じ難いらしい口調でつつかえるように聞いてくるフィオルに、
未来はきよとんとした。

「そうだけど？」

「そうだけどってそんな丈のみじかつ……、……そうか」

とても「そうか」とは思っていないだろう様子でそれ以上の言葉を引つ込めると、フィオルはいやに苦い表情を隠すように茶を啜る。鳶色の髪は今日も丁寧な三つ編みに編み込まれていたが、それを束ねるのはいつもの革紐ではなく、赤金色あかがねの髪留めだった。

そんな彼は軍装だったが、普段の装いよりもどこか煌びやかな身なりと、金の房が下がる白いマントに、格式ばったものを感じる。それはティシアも同じ事で、こちらは黒いマントから銀の房が垂れていた。

髪をきりりと結い上げ、どこもかしこもフィオルとは対照的なティシアは表情さえも彼と対極で、この上なく楽しそうだった。

「動きやすそうでいいわね」

「うん、楽だよ。でも、この時期だけだね。冷えるし」

「冷えは女の大敵だものね。それにしても、フィオルじゃないけれど、確かに少し短いわねえ」

「え？ そう？」

膝丈ほどのスカートを摘んで、未来は目を丸くする。

「私の故郷ではもうちよつと短いのも珍しくなかったけど」

これぐらい、と太ももの真ん中辺りを示した未来の指に、フィオルが派手な音を立ててむせた。

茶が気管にでも入ったらしい。

先ほどとは一つ顔触れの異なる三者の、一部生暖かい視線に見守られてしばらくむせていたが、やがてそっぽを向いて立ち上がる。への字に引き結ばれた口元が、どこか幼い。

「……馬車の準備が出来たか見てくる」

早口に言い捨てて、フィオルは部屋を後に 逃げ出した。

やや大きな音を立てて扉が閉まるのと、弾けるような笑いが室内を跳ね飛ぶのは、ほぼ同時。

反響した笑声にびくりとした未来とエデナが声の方を見れば、この夏場に息苦しげな立襟の留め金を外して、ティシアが笑い転げていた。

「ちょ、悪いったら！」

未来の制止にもぞんざいに手を振っただけで、ティシアは背もたれに寄りかかり、涙が滲むまでひとしきり笑い続けたのだった。

「あー、笑った笑った」

本当に遠慮なく笑ったティシアは目尻の涙を拭いながら、まだ少し残っていた茶で掠れた喉を湿らせる。

気付けばティシアの向かいの席を勧められ、魔法のように用意された新しい茶器に茶を注がれた未来はきゅっと眉を寄せた。気分を晴れやかにする爽やかな芳香も、その時ばかりは顰められた眉間を解せないまま宙に立ち消える。

「悪いよ。絶対、外のフィオルさんに聞こえてたって」

「良いのよそれで」

「は?!」

襟の留め金をはめ直し、ティシアは空になった茶器の縁を無造作に指でなぞった。

「あいつ、存外大事に育てられてきたから、打たれ弱い部分あんのよ」

だから打たれても打たれても出てくる芽を育てなけりゃいけない、と告げる表情には、思いつめるような重さはないが冗談に変えるほどの軽さも浮かんではいない。いつも飄然とした笑みを浮かべていることが多い彼女にしては珍しい。

「あなたの場合は半分面白がっているでしょう」

「違うわよ。真剣に、遊んでいるのよ」

「なお悪いです」

その表情のままエデナとそんな会話を繰り返した後、ティシアは茶のおかわりを要求して、にべなく断られていた。

入りにくい。わけではないが、互いに勝手を知った者同士のテンポが良い応酬を、未来はやけに熱く感じる茶器を両手で包みながら黙って聞いていた。茶に少し口を付けたが、今は口紅をしている事を思い出し、それ以上は飲まない。

（そういえば朝食も、いつもの半分も食べられなかったっけ。単に昨日寝るのが遅かったから食欲無いただけかと思ってたけど）

自覚はなかったが、既にその時から緊張していたかと慄然としつつ、未来は話の始点がもはや見当もつかないほど脱線した二人の会話を右から左に聞いている。

「やっぱりトウル・アイン・トウル菓子店の秋の一押しは林檎のタルトでしょ」

「いいえ、桃のケーキです」

カスタードが、クリームがと議論を戦わせる二人のやり取りは永遠に続くように思われた。

しかし、未来が見事なタイミングで横槍を入れて、味見という名目で両方口にする段取りをつけ、三人の賑やかなやり取りとなりかけたところで、普段通りの表情を取り繕ったフィオルが戻り、お開きとなったのだった。

「馬車の準備が出来た。最寄りの出入り口に回してあるから、さっさと行くぞ」

いつも通りの、しかしどこかぶっきらぼうな調子でフィオルが告

げ、さつさと身を翻す。それでも、扉を開けたまま待つてくれた彼に短く礼を言つて、未來は扉から手を離れたその背中を追いかける。

閉まりかけた扉を慌てるでもなく押さえて、ティシアもいつもの笑みで少し先を行く二人の後に続いた。

用意されていた馬車は、以前乗ったものより豪華な箱馬車で、揃いの馬具と鈴の装身具を付けた六頭の馬に引かれていた。全体に白で統一されており、太陽の下、光って見えるほどに眩しい。

言葉少なに三人が乗り込むと、馬車は滑るように走り出した。

未來は、少しずつ速度を早めながら、それでも驚くほど静かな走行と共に後ろへと飛んでいく景色を眺める。

窓も嵌め込み式で閉じられた空間であるというのに、馬車の中は空気の特有の澱みもなく、外からの日差し以外は驚くほど快適だった。

白く乱立する建物の横を通り過ぎ、鳥のさざめく森の小道を抜け、馬車はどんどん進んでいく。ティシアがあれこれと説明するのをどこか遠くに聞いていると、視界が突然真っ白に染まった。

短く息を呑んで目を覆いかけた未來は、数秒の後、その白が双神宮の鳥の尾羽を模した回廊へと続く、長大な路と、王宮ほどではないがそれなりに高さのある城壁によるものだと気付く。

そして馬車はそのまま、城壁の方へゆっくりと向きを変えながら進んで行った。

次第に近づく巨大な白亜の壁と門。その上に、点のような影を見出したのは偶然だった。

未来なら危なくて上がる気にはとてもなれない塀の上に、危うい様子もなく腰掛けて足をぶらつかせている黒衣と、その横に大股で佇む白衣。ひらり、と黒衣の人間が手を振った。ゆるやかに吹く風に踊る銀色。

未来が目を丸くしている間もその二つの影はどんどんその輪郭を明らかにし、やがて顔が辛うじて確認できるほどに近くなる。

ユリウスとアレクシスだった。

啞然としている未来に気付いているのか、ユリウスが笑ったようだ。何となく面白くなって未来が顔をしかめると、青年はさらにおかしげに笑いこけて壁から転げ落ちそうになる。

未来は思わず小さな悲鳴を漏らして身を乗り出し、拍子で窓に思いきり額を激突させた。

痛いのと、背後から感じる呆れと心配が入り混じった二つの視線に、二重の意味で涙目になりながら二人の方を見れば、ユリウスはアレクシスに首根っこを掴まれて、どうにか壁の上に留まっていた。アレクシスに掴み留められた状態で、なおユリウスは笑っていた。ようだが、不意にその腕が未来の方へと差し伸べられる。

包みこむように広げられた両腕が、ゆっくりと動く。細かい仕草などは見取れないが、何らかの意図が感じられる所作だった。情景のシニールさが無ければ、完全に心奪われていそうな、優雅ともいえる動き。

それまで印象の薄かった青い瞳が、勃然とその存在をあからさまにする。その視線に縫いとめられたように動きを止めた未来に向かって、青年は豊かな微笑を顔に湛えた。

ゆるゆるとしかし絶え間なく動いていた腕の、その指先の小さな

動きでさえ、今の未来には目で追える。

指先が、最後の動きを宙に描いて、髪を彩る飾り紐の真珠が小さく鳴った。

と同時に未来の視界がさあつと暗がりに入れられ、二人の青年の姿も消える。

疑問を感じる間もあらばこそ。行く先からまた光に包まれて、未来は急激な変化についていけない目を瞬かせた。

後ろを振り返れば、大きな門がぱっくりと口を開けている。

同化するに近い形で城壁に組み込まれている門。その中を通り抜けたのだと彼女が気付いた頃には、もう城壁は後ろへ遠ざかっている。

再び点に変わりつつある二つの影を、未来は馬車が道を折れて完全に視界から消えるまで、ずっと見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2952n/>

暁の月 宵の太陽

2011年12月31日23時52分発行